

---

# 邪神アベレージ

---

北瀬野ゆなき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

邪神アベレージ

### 【Nコード】

N0537CM

### 【作者名】

北瀬野ゆなき

### 【あらすじ】

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花、そして目を合わせれば恐怖の大王。

絶世の美少女の素質を持ちながらも、その目付きと気配から周囲に恐怖される少女が異世界に強制転移。

特典として願いを叶えてくれるという言葉に彼女は願う。「目と気配を普通にして」

唯一の弱点を克服し完璧となった（筈だった）少女の思い通りには

いかない異世界生活。

魔法あり、ダンジョンあり、勇者や魔王（候補）も巻き込んだのフ  
アンタジーコメディー。

しかし彼女は呪われていた。

【宝島社様より書籍化し三巻まで発売中です】

## 01：些細な願い

自分の容姿で最も好きな部分は髪だ。

日本人として平均的な黒髪だけど、手入れは欠かしていないし櫛の通りも滑らかだ。

烏の濡れ羽色なんて表現だって強ち誇張表現ではないと密かに自慢に思っている。

なら逆に自分の容姿で最も嫌いな部分はと聞かれたら、即答で目だと返す。

数少ない友人からは全体的に美少女なのにその目付きが全てを台無しにしているとよく言われた。

だけど思う

「その目が気に入ったんだ。

この世のありとあらゆる負を呑み込んだようなその澱んだ目がね」

そこまで言われる程酷くない……多分。

光源が1つも無い真っ暗な空間にもかかわらずハッキリと姿が見える長い黒髪の少年。

絶世の美少年、と言いたところだが私と同じ いや、私以上に酷い目をしている。

気が付いたら私はこの空間に居て、そこに姿を現した彼に「君に

は異世界に行って貰うよ」と一方的に宣告された。

「……嫌」

「君の意見は聞いていないよ」

「こんにやろつ。」

内心で青筋を立てるが、私の表情は変わらない。

我ながらあまり好きではない無表情っぷりだが、今は有難い。

見るからに普通じゃない相手に真っ向から喧嘩を売るのはあまりにリスクが高い。

明らかに尋常ではない空間で「異世界に行って貰う」ときた、目の前の少年は神様とかの類とでもいっつもりだろうか。

それにしても、分からない。

「なんで私？」

「その目が気に入ったんだ。」

この世のありとあらゆる負を呑み込んだようなその澱んだ目がね」

そこまで言われる程酷くない。

それと、お前が言うな。

青筋が1つ増える、但し心の中で。

「それにしても、僕と直接相対して正気で居られるなんてね。」

流星に僕が見込んだだけのことはある」

正気じゃなくなる可能性もあったのか。

さり気無く危機一髪だったらしい。

「まあ、こちらの都合で行って貰うわけだし、少しは優遇してあげるよ。」

身体能力と魔法の力、アイテムボックスはデフォルトとして、  
あと何か1つ、希望を叶えてあげる」

身体能力は兎も角として、「魔法」に「アイテムボックス」？  
一体私は何処に放り込まれるんだ。  
それに、いきなり希望とか言われても

「何でもいいよ？」

例えば、胸を大きくしてくれとか」

私が貧乳だと申すか……否定は出来ないけど余計な御世話だ。  
正直心を揺さぶられる部分が無きにしても非ずだが、ここで頷いた  
ら色々と負けな気がする。

それに両親から貰った身を変えてくれと願うのも親不孝というも  
のだ。

「じゃあ、何も望まないのかな」

「目と気配を『普通』にして」

え？ 両親から貰った身はいいのかって？

それはそれ、これはこれだ。

胸が小さくても得する部分が無いだけで害は無いが、目付きと気  
配は実害があるのだ。

幼い時から私はその目付きと気配のせいで周囲から無意味に怖れ  
られてきた。

何をしたわけでもないのに私と目が合うと誰もが目を逸らす。  
不良で有名な先輩も私が近付くと脱兎の如く逃げ出す。

ヤクザっぽいパンチパーマの人に土下座されたことすらある。

「『普通』？」

「特別じゃなくていい、せめて『平均的』にして欲しい」  
「ふん、まあいいや。」

その願い、聞き届けたよ。

それじゃ、行ってらっしゃい」

その声と共に、目の前の少年から周囲の闇を塗り潰す程の漆黒の  
気配が放たれる。

身体がその気配に包まれると、意識が遠退いていくのを感じた。

ああ、今更だけど出来ればもう一つ。

せめて、服を寄越せ。

## 02：平均的な結果

気が付いたらそこは森の中だった。

鬱蒼と茂る樹木や草花、木の葉の合間から差し込む光で昼間であることは分かるが、それでも薄暗い空間。

うつ伏せに倒れた状態で顔だけ上げて周囲を観察していた私は、周りに誰も居ないことを確認して立ち上がる。

身体の前面に付いてしまった砂利や葉を手で払って落とす。

あの神様（仮）、結局服をくれなかった。

仮にも乙女を裸で放り出すか、普通。

漫画や小説で異世界に飛ばされる話は数多いが、ここまで酷い扱いは聞いたことがない。

こんな格好では街にも入れないし、迂闊に街道も歩けない。

と言うか、ここが森の中で本当に良かった。

取り合えず誰も居ないとしてもせめて何か身体を隠す物を、と思うが今の私は明らかに何1つ持ち物が無い。

周囲を見渡しても、身体を隠せそうな大きめな葉すら見当らない。途方に暮れながら、あの神様（仮）が与えると言っていたものを思い返す。

確か、私が望んだもの以外に身体能力と魔法の力、アイテムボックス……アイテムボックス？

ゲームでよくある倉庫の様な能力だとすれば、その中に何か入っていないか。

しかし、使い方が分からない。

取り合えず……



「アイテムボックス」

試しに唱えてみると、半透明のディスプレイが目の前に浮かび上がってきた。

ショートダガー	x 1
皮のローブ	x 1

おお、中身があった。

明らかに初期装備っぽい名前だけど、それはこの際どうでもいい。喉から手が出るほど欲しかった服がここにある。

どうにかして取り出したい。

ディスプレイのその部分に触れようとするが、見えているだけで触れなかった。

どうやらタッチパネルのような操作は出来ないみたいだ。

取り合えずローブ出ろくと念じてみると、私の影から濃い茶色のローブがヌツと出てきた。

って、この影がアイテムボックスなのか。

何か物凄く悪者っぽい仕様に見えるが、取り合えずそれは置いておいて出てきたローブを着こむ。

安物っぽいザラザラとした感触だし、中は相変わらず裸なのでスースーする。

しかし、一先ず身体を隠せたことでホッと一息吐くことが出来た………心の中で。

落ち着く事が出来たため、目の前に表示されているディスプレイを検証してみる。

ローブを取り出したことで中身はショートダガーだけとなってい

る。

試しに足元の石を拾い、仕舞うことを意識しながら影の上に落とす。

石は影にヌルッと飲み込まれ、ディスプレイには『ただの石×1』が追加された。

「……………」

次にアイテムボックスを閉じることを意識するとディスプレイがフツと消滅した。

その状態で石を取り出すことを念じてみると、影から石が姿を現した。

再び石を仕舞うことを考えると、石はそのまま影に沈んでいった。ふむ、どうやらディスプレイは開かなくても中身が分かっていた。は出し入れが出来るみたいだ。

何が起こるか分からないため、ショートダガーを取り出して右手に持つことにした。

ここまでのことから察するに、どうもゲームのようなシステムがある世界らしい。

だとしたら……

「ステータス」

予想的中、先程とは異なるディスプレイが浮かび上がった。

名前：アンリ

種族：人族

性別：女

年齢：17

職業：魔導士

レベル：1

称号：邪神の御子

魔力値：3031504

スキル：邪神オーラ（Lv.5）

悪威の魔眼（Lv.5）

加護付与（Lv.7）

状態異常耐性（Lv.6）

闇魔法（Lv.6）

アイテムボックス（Lv.4）

装備：ショートダガー

皮のローブ

突っ込み処が多過ぎて何処から突っ込んでいいか悩むが、まず一  
つ言いたい。

私の名前は安里<sup>アサ</sup>だ。

いや違う、間違えた。

それは名字だ、名前じゃない。

勝手に改竄された名前を何とかしようとディスプレイのその部分  
に触れようとするが、先程のアイテムボックス同様に触れなかった。  
変われ〜と念じても一向にそのまま。

しばらく試行錯誤したがどうにもならず、私は諦めて他の項目に  
目を向けた。

種族や性別、年齢はいい、レベルだって特に何もしていないから

1で当然だ。

勝手に魔導士なんて職業にされているけど、私は自分のことを肉  
体派とは思っていないのでこれも別にいい。

しかし、この魔力値とやらは数値がおかしい。

いや、平均値が分からないから確かなことは言えないが、数值的  
に明らかに普通ではないように思える。

しかしそれ以上に気になるものがある。

「邪神の御子？」

何で私にそんな禍々しい称号が付いているのか。

心当たりは私をこの世界に放り込んだあの神様（仮）くらいしか  
ない。

邪神だったのか、あれ。

まあ、あの私以上に澱んだ目といいどう見ても聖なる存在には見  
えなかったので、そう言われれば納得感はある。

称号のところを目を向けていると、その部分がクローズアップさ  
れ補足説明が表示された。

<邪神の御子>

邪神によって生み出された闇の祝福を受けた御子

こんな厨二設定を私に与えて何がしたいんだ、あの邪神。

さて、現実逃避はこれくらいにしてそろそろ問題の部分に目を向けよう。

スキル欄にある「邪神オーラ」と「悪威の魔眼」。  
オーラは気配、魔眼は目と考えれば、私が希望として挙げたものと対応しているのが分かる。

しかし、私は『普通』にしてくれと頼んだ筈だ。

それが何故こうなる、納得がいかない。

スキル欄に目を向けて、補足説明を表示する。

<邪神オーラ>

邪神の放つ悍ましい気配。

気配を放つだけで物理的な効果は無いが、効果範囲内に居る者に恐怖を与える。

Lv.5は平均的な邪神のレベルであり、ドラゴンが裸足で逃げ出す程度の効果。

なお、魔物と比べて人間は感覚が劣る為、効果が低くなる。

分類：常時発動 オンオフ：不可 ハイロウ：不可

但し、所持者の精神状態によって効果が増減する

<悪威の魔眼>

目を合わせた者に対して恐怖を与える魔眼。

Lv.5は平均的な邪神のレベルであり、魔王が土下座して命乞いする程度の効果。

分類：常時発動 オンオフ：不可 ハイロウ：不可

但し、所持者の精神状態によって効果が増減する

Lv.5は平均的な邪神のレベルであり  
平均的な邪神  
平均的

って、誰が『邪神基準で』普通にしろと言った！

これ詰んでないか。

明らかに前の世界に居た時よりも悪化している。

正直、鏡を見るのが怖い。

これまでだつて周囲から遠巻きにされてきたことを考えると、今後まともに過ごせそうにない。

手と膝を地面に突いて落ち込む……心の中で。

しばらく落ち込んだ後、気を取り直して残りのスキルに目を向ける。

あの邪神はいつか殴ると心に誓ったが。

<加護付与>

触れたものに対して邪神の加護を与える。

魔力付与の上位スキルであり、魔力付与が一時的なのに対して加護付与は永続的。

対象の生物・非生物は問わないが、生物に与える場合は対象が受け入れることを必要とする。

Lv.7は中級神レベル。

分類：常時発動    オンオフ：不可    ハイロウ：可

意識的に行使すれば瞬時に付与されるが、常時発動による無意識の付与は一時間触れ続ける必要がある。

<状態異常耐性>

毒や混乱等の状態異常に対して高い抵抗力を有する。

Lv・6は魔王クラスの攻撃であつても無効にする。

<闇魔法>

大いなる闇の力を源として行使する魔法の体系。

攻撃や相手の能力を減衰させる系統に優れている。

時間帯によつて効果が増減し、夜間に最も威力を発揮する。

Lv・6は大魔王レベル。

<アイテムボックス>

大量の容量を持つ格納庫。

中に入れられる物は非生物に限定される。

なお、アイテムボックスの中に格納している物に対しては加護付与は当たらない。

Lv・4の容量は家1軒程度。

アイテムボックスは良いが、それ以外は禍々しいことこの上ない。

状態異常耐性は一見まともだが……どうもこのラインナップだとボス属性に見えて仕方ない。

加護と言うのがいまいちイメージ出来ないが、邪神の加護など碌なものではないだろう。

改めて自分のステータスを眺めて思う……何このラスボス臭。

『皮のローブに加護を付与しました』

？

何処からか唐突に声が聞こえてきた次の瞬間、私の身が闇に包まれた。

いや、正確には私ではなく私が身に着けていたローブに、だ。闇が吸い込まれるように晴れると、そこには濃い茶色のローブではなく高級感漂う漆黒のローブがあった。

加えてローブの下にワンピースまで……流石に下着は無いが。

先程の声から推測すると、これが加護付与スキルの影響なのだろうか。

スキルの説明では無意識の場合は1時間程触れ続ける必要があると書かれていた。

時計が無いので正確な時間は分からないが、革のローブをアイテムボックスから取り出してからそれくらい経っている。

なにせよ、有難い。

おかげで裸にローブという変質者スタイルから、まだまともな格好になった。

碌なものではないなんて思っでごめんなさ

『ショートダガーに加護を付与しました』

ローブの時と同じ様に右手に持っていたダガーに闇が集まる。闇が晴れた時、そこには禍々しい漆黒の短刀があった。



装備：悪鬼の短刀 「New」  
邪神の黒衣 「New」

<悪鬼の短刀> 「New」  
鋼鉄の鎧すら紙の様に切り裂く凄まじい切れ味を持った短刀。  
追加効果として毒、麻痺、混乱、睡眠、詠唱不可、即死。  
呪われていて装備を外せない。

<邪神の黒衣> 「New」  
最上位の邪神官に与えられるローブ  
4属性無効、闇属性吸収、光属性耐性を持つ上に物理防御能力も  
高い。

但し、装備中は回復魔法でダメージを受ける。  
呪われていて装備を外せない。

やっぱり碌でもなかった。

### 03…よくある出来事

森の中を全身真っ黒の不審な少女が無言で歩いている……私だけだ。

色々としょックなことがあったが、考えても仕方ない為まずは動くことにした。

今は兎にも角にも人里に辿り着きたい。

先程確認したスキルを見る限りあまり良い思いは出来無さそうだが、それでもこのままでは餓死一択となってしまうため他に道は無い。

スキル説明に書かれていた『人間には効果が薄い』という言葉に賭けてみるしかない。

なお、懸念していた短刀とロープの呪いだが、装備から外せないというのは「手放しても一定時間で戻ってくる」とことと「他の物を装備しようとしても弾かれる」という代物だった。

試しに短刀をアイテムボックスに仕舞って見たところ、仕舞うこと自体は出来た。

しかし、30分程経つと勝手に飛び出してきて右手に納まる。

また、外している間に木刀サイズの木の枝を持ったところ、今度は時間を待たずに短刀が飛び出して私の手から木の枝を叩き落とされた。

……ヤキモチ焼いたみたいでちょっと可愛いと行ってしまった。

なお、武器にならないような短い枝は持って大丈夫だった。

流石に誰も見ていないとはいえ脱ぐ気にはなれなかったのでロープの方は実験していないが、おそらく似たようなものだろう。

しかし、そうだとすると私は他の服を着れないことになる。

お洒落を楽しむ趣味はないが、着た切り雀は嫌だな。  
呪いを解く方法があることを切に祈ろう。

靴が無い為に裸足のまま歩かざるを得ない。

最初は地面の石や木の枝で血塗れになるのではないかと恐る恐る歩いたが、不思議と痛みは無かった。

邪神の言っていた身体能力は運動能力だけではなくて身体の頑丈さなども含んでいるのかも知れない。

自分の身体が知らぬ間に人間のものではなくなっているかも知れないと思ひ恐怖が湧くが、今は考えないようにする。

それにしても視界が悪い。

鬱蒼と茂った樹木で死角だらけだ。

表情には出ないが、内心は樹の影から突然獣が襲い掛かってくるのではないかとビクビクしている。

いや、ただの獣ならまだ良いかも知れない。

この世界のファンタジー感からして魔物なんかが出てくる可能性も十分あり得る。

当てもなく彷徨う少女をいつの間にか取り囲むオークやゴブリンの群れ。

哀れ薄倅の美少女は慰み物に……うん、ないな。

我ながらあり得ない妄想をしてしまった。

今の私にそんなヒロイン展開があるなら、元の世界でも色恋沙汰があっただっておかしくなかった。

しかし実際には恋人など出来る気配もなく、勝手に忠誠を誓った舎弟が増えるばかり。

うん、改めて考えてもないな。

スキルから考えても、オークやゴブリンに傳かれる光景しか想像

出来ない。

そんな心に突き刺さるイベントはこなしたくないのです、さっさと森から出るようにしよう。

心持ち急ぎ足で森の中を進んでいくと、唐突に樹が途切れた。

20メートル程の間を空けて樹木が姿を見せている。

舗装はされていないが街道なのだろう、左右に伸びた道は平らに均されており土には多数の轍や蹄、足跡が残っている。

そして、右側には馬車が停まって……停まってる？

森の中の道でわざわざ停まっていることに疑問を感じてよく見ると、馬車の周りには明らかに堅気ではない男達が10人程、それぞれの手に剣やこん棒を持って取り囲んでいる。

って、もしかしてあの馬車、盗賊に襲われている？

よりもよって私が森から出てきたこの時この場所です？

何でこんなベタな場面に私が遭遇しなきゃならないんだ、まさかあの邪神が何か仕組んでいるのか。

色々と不審な点が多いが、取り合えず今はどうするか考えなければ。

取り合えず選択肢としては3つ

割って入る

(1) 正義感の強いアンリちゃんは義憤に駆られて馬車を助けに

(2) 長いものには巻かれるアンリちゃんは盗賊に取り入って一

緒に馬車を襲う

(3) 事なかれ主義のアンリちゃんは見なかったことにしてこの場を離れる

いつの間にか改竄された名前を使ってしまっていた……ちなみに選択は勿論(3)一択。

え？　ここは(1)を選ぶ場面じゃないのだった？

冗談ではない、私は戦うなんて真っ平御免だ。

骨の髄まで文化系の私にそういう体育会系のノリを求めないで欲しい。

それに、あんなケダモノの群れの前にこのこ出ていくなんて、狼の群れに飛び込む羊みたいなもの。

同じ理由で(2)も却下、そもそも流石に盗賊に加担する程外道でもない。

(3)でも外道？　いやいや、レベル1の虚弱少女に10人以上の盗賊と戦えと言う方が外道だろう。

馬車の中の人　お姫様が商人辺りだろうか　には悪いが、運が悪かったと諦めて私を巻き込まないでくれ。

私は盗賊や馬車の人に気付かれないようにそろそろと森の中に戻ろうとする。

定番ではこう言う時に木の枝を踏んで音を鳴らして気を引いてしまつものだが、私はそんなミスはしない。

馬車の方向に目を向けながらも足元に気を付けて……げ、目が合った。

「ひっ!？」

馬車を取り囲む盗賊の中で一番後ろ、つまり私に一番近い場所に居た男が私の方を見て悲鳴を上げる。

って、おい。

「な、なんだ？」

「お、女？ いや……」

連鎖的に他の男達が私の方を向いては後ずさる。

「いや」ってなんだ、これでも一応生物学上は女であることは確かだぞ。

「……………」

「……………」

30メートル程の距離を置いて、私と盗賊達は無言で向かい合う。張り詰めたような沈黙が周囲を満たす。

「……………」

沈黙に耐えかねて、私は思わず何でも良いから喋ろうと口を開く。しかし、その瞬間に破裂するように緊張感が弾けた。

「うわああああ……………!!!」

「た、助けてくれ……………!!!」

「ま、待ってくれ!」

途端に盗賊達は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

私はその後ろ姿を多々呆然と見遣っていた。

ハッと気付くと盗賊達の姿は既に消えており、そこには馬車だけ

が佇んでいた。

いや、気付かなかったがよく見ると馬車の傍に1人だけ残っている男が居る。

盗賊の逃げ遅れかと思ったが、先程見た盗賊達と異なりまともな格好をしている。

恐らくは彼がこの馬車の持ち主で、盗賊に襲われていたところなのだろう。

間一髪といったところだが、殺されずに済んだようだ。

計らずも私が助けたような形になってしまったが、どうしたものか。

先程の盗賊達の反応を見る限り、人間にもしつかりとスキルが発揮されていることは間違いない。

となると、この男からも恐れられる可能性が高い。

これ以上心を抉られるのは正直勘弁願いたい、しかし友好的に接触出来るかも知れないこの機会を逃すのは惜しい。

そう、何もせずに勝手に盗賊達が逃げただけだが、彼からすれば私は命の恩人と言っていい筈だ。

友好的に話し掛ければきっと大丈夫、そう思って私は男の方に近付いていく。

おっと、下手に刺激しない様に短刀はアイテムボックスに仕舞っておこう。

後は友好的に接触するためには笑顔が重要だ、スマイルスマイル。

しかし、私が必死に笑顔を作ると、元々青褪めていた男の顔色が目に見えて悪くなった。

何か失敗した？

首を傾げる私に向かって手に持っていた革袋を投げ付けき……へぶっ!?

「お、お助け……！！！」

革袋には金属製の何かが入っていたらしく、固くて重いものが私の顔面にぶち当たる。

突然の仕打ちに混乱している間に、男は慌ただしく御者台に飛び乗って馬に手綱を引き、馬車を走らせた。

馬車は滑るように走り出し、あっという間に森の道を進み、やがて姿を消した。

私は顔面から手元に落ちてきた革袋を抱えたまま、その場に立ち尽くした。

……………痛い。



## 04：人心地

盗賊とその被害者の両方に逃げられると言う心を決るイベントを受けてしばらく立ち尽くした私だが、気を取り直して先程投げ付けられて私の顔面を強打してくれた革袋の中身を確かめてみた。

先程の痛みを伴う経験から予測していた通り、そこには金銀の貨幣が詰まっていた。

この世界の貨幣価値が分からないが結構な量があり、そこそこの大金ではないかと思う。

……その分痛かったけど。

中身を詳しく数えてみると、金貨が5枚、銀貨が48枚、銅貨が114枚入っていた。

こんな重い物を顔面にぶつけられてよく無事だったな、私。

おそらくだが、先程の馬車の持ち主はこのお金で盗賊に命乞いでもしているところだったのだろう。

そこに私が現れて、咄嗟に手に持っていたものをよく確認せずに投げ付けてきた……改めて思い出すとちょっと腹が立ってきたな。

意図的ではないとは言え命の恩人に向かって物を投げ付けて逃げ出したわけだから、私のこの怒りは正当なものだ。

よって、このお金は慰謝料として貰っておこう。

返す機会も無さそうだし。

そう結論付けて、銀貨と銅貨を何枚かずつローブのポケットに入れ、残りは革袋ごとアイテムボックスに放り込んだ。

さて、これからどうしたものか。

先程の反応を見る限り、街に辿り着けたとしても受け入れて貰え

る可能性は低いと思う。

恐れて逃げられるならまだマシで、下手をすれば攻撃されてしま  
うかも知れない。

しかし、このまま人里に近付かないで生活するのは無理だ。

私はサバイバル技術など持っていないし、飯に持っていたとして  
も異世界では役に立つか疑問だ。

結局、生きていく為には何とか街に行かないといけない。

何とか厄介なスキルを抑えられないものか……。

いや、待てよ？

先程の盗賊や馬車の持ち主は私と目を合わせてから怯えた様子を  
見せていた。

つまり怖がられたのは魔眼による効果であり、気配だけならそこ  
まで影響は無かったと言うことではないか。

つついセットで考えていたが、人間に対して効果が低いと書か  
れていたのは邪神オーラに関してだけで、悪威の魔眼についてはそ  
の限りではない。

邪神オーラがそこまで問題とならず悪威の魔眼だけが問題になり  
得るのだとしたら、まだ対処法はある。

魔眼は目を合わせる事が条件なのだから、目を合わせない様に  
していれば効果は発揮されない。

幸いにしてローブにはフードも付いている為、目元まで隠して目  
を合わせないようにすれば、気配でちょっと不気味に思われる程度  
で済む……といいな。

希望的観測が多分に混ざっているのは否定出来ないが、選択肢が  
無い以上は当初の予定通り街を探すことにする。

差し当たってここからどちらに向かうかだが

「……………こっちにしよう」

先程の馬車が逃げた方向、ではなくその逆を目指すことにする。  
馬車が来た方向と向かった方向のそれぞれに人里はあると思うが  
どちらが近いかは分からない。

確率は均等に2分の1。

それなら、仮に馬車の持ち主と再会した場合、どう転んでもトラ  
ブルにしかなりそうにないので逆方向に行こう。

そうして私は再び歩き出した。

時計が無いので正確には分からないが、2時間程歩いたところで  
森は途切れ草原が広がっていた。

以前の私ならとつくに疲労で動けなくなっている筈だが、身体能  
力強化の影響か汗一つ掻いていない。

街道は草原を突っ切るように伸びており、その向こうに遠目だが  
街が見えた。

周囲を壁で囲われた、そこそこ大きな街のようだ。

見えている距離とは言え、あそこまでだと更に1時間程度歩く必  
要があるだろう。

私は草原を見渡して危険そうな生き物が居ないことを確認すると、  
街に向かった。

街に近付くと街道の先に門と入口に併設された小さな建物、そし  
て門の前に並ぶ数人の人や馬車が見えてきた。

私は並んでいる列の後ろに静かに加わると、耳を澄ませて情報収  
集に努める。

この世界の常識を知らない私にとって、街に入る為の手続きも分からないからだ。

馬車に乗った商人達は門を護る衛兵にカードを見せ、馬車の荷台のチェックを受けて通っている。

徒歩の者達は商人達と同じようにカードを見せる者も居れば、銀貨を払って木の札を受け取っている者も居る。

おそらく、あのカードは身分証のようなものだろう。

しかし、持っていない者も居るようだが、その場合は銀貨1枚を支払えば通れるみたいだ。

こんなザルな仕組みで良いのか気になるが、私にとっては好都合だ。

私はローブのポケットに入れた銀貨を握り締めながら、順番が回ってくるのを待った。

「次の者……1人か？」

「ええ」

順番が回ってきたので、私は衛兵の前まで歩み出る。

内心では心臓がバクバク言っているが、表には出さない。

幸いフードで目元まで隠して目を合わせないようにしているお陰で、怯えられてはいない様だ。

「女か。身分証を持っているか？」

「持っていない」

「ならば保証金を払って貰い、仮身分証を発行する。

保証金は銀貨1枚だ」

通行料じゃなくて保証金だったのか。

出る時には返してくれるのかな。

私はローブのポケットから銀貨を取り出すと、彼に手渡す。

「確かに預かった。

保証金は街を出る際に仮身分証と引き換えて返却する。

街の中で正式な身分証を取得しても仮身分証は捨てないようにしろ」

「分かった……正式な身分証はどうすれば取得出来る？」

「田舎の村からでも出てきたのか？」

手っ取り早いのは冒険者ギルドで登録して冒険者カードを取得することだな。

後は教会や商人ギルドもあるが、前者は街の住人が入信者でないと駄目だ。

後者の商人ギルドは商人しか入れないからお前さんの場合は関係ないだろう」

まあ、どう見ても私は商人には見えないだろう。

目が合わせられないのでどんな顔しているか分からないけど、この衛兵さんは結構親切だ。

冒険者ギルドに教会に商人ギルド、取り合えず街にこれだけの施設があることは分かった。

「さて、これが仮身分証だ。

無くさないようにしろよ」

「ええ」

差し出された木の札をロープのポケットに仕舞うと、私は門をくぐった。

街は概ね円状になっており、私が通ってきた門から伸びる大通りが中央広場を超えて反対側の門まで繋がっている。

方角が不明だったが、周囲を歩く人の言葉からすると私が入ってきたのが東門で、他に西門と南門があるらしい。

北側には門は無く、この街 リーメルというそうだとを治める領主の屋敷がある。

今私が歩いている通りと中央広場で垂直に交わっている通りがこの街のメインとなる通りの様だ。

大通りには露店や商店が立ち並んでおり、住居は大半の場合大通りから少し奥に入ったところにあるのだろう。

私は歩きながら露店や商店の様子を窺い、貨幣価値などを確かめる。

露店の商品には値札は無く、値段は店主に聞かないと分からないようだ。

逆に商店には木で作られた値札が置かれている。

拳大の果物が2つで銅貨1枚。

パンが1個で銅貨1枚から2枚。

街を歩く人が来ている様なワンピースタイプの服が銅貨15枚。

1メートル程のロングソードが銀貨1枚と銅貨50枚。

盾は木製が銅貨50枚、青銅製が銀貨1枚のところをおまけで銅貨90枚。

どうやら銅貨100枚で銀貨1枚と同じ価値のようだ。

今のところ、金貨は使われている場面を見ていないのでどれくらいの価値かは分からない。

おそらく店先に出ているのは安い品で、金貨を使う様な高価な商品は店の奥にあるのだろう。

食品だけ見れば銅貨1枚で100円くらいの価値に思えるが、色々物価が違っているので安易に換算して考えない方が良さそう。

私は貨幣価値の調査を切り上げ、今何よりも優先して買わなければいけないものを買う為に服屋に入った。

ショートガードルタイプの下着が1着銅貨6枚。

ベビードールに似た下着が1着銅貨10枚。

ヒールの高くない靴が1足銅貨9枚

下着を3枚ずつと靴でしめて銅貨57枚、銀貨で支払ったら銅貨43枚のお釣りを渡された。

ブラジャーなんて無かった。

一応私自身の名誉の為に言っておくと、無かったのはサイズではなく、そう言った種類の下着自体だ。

店の中に吊るされているビスチェタイプの下着は見なかったことにしておく。

こんなところで下着を着るわけにはいかなないので、もう少しの辛抱だとスースーする感覚を我慢して靴だけ履く。

「はいてない」と「はいてなかったことがバレる」と、どちらがマシか……難題だけど私はバレない方を選ぶ。

服屋から外に出ると大分日も落ちてきており、綺麗な夕焼けが街を照らしている。

辺りのお店は店仕舞いを始めているところもあり、人々は家路に就いている。

どうも夜が早い街のようだ。

考えてみれば街灯もない街では日が落ちれば暗闇になる。

夜の間に営業しているのは酒場やちょっといかがわしいお店くらいなのだろう。

これは早いところ、寝床を確保しないといけない。

私はそう決めると宿屋を探して大通りを歩き出した。

看板の絵を頼りに探したところ、何軒かの宿屋が見つかった。

1階が酒場で2階が宿屋になっているところが多いらしく、ベッドの絵とジヨッキの絵の看板は大抵並んで掲げられていた。

その中の1軒……を選ばずに、敢えて酒場が併設されていない宿屋を選んで中に入る。

いや、酒場とかどうもトラブルの匂いがするし。

「おや、お客さんかい。

いらっしやい、ここは宿屋だよ」

扉を開けた私に向かって、40歳くらいに見えるおばさんが話しかけてきた。

そう言えば、今まであまり気にしてなかったけれど何故言葉が通じるのだろう。

「1泊幾ら？」

「1泊銀貨1枚、食事は朝食が銅貨5枚で夕食が銅貨10枚、お湯はたらい一杯で銅貨5枚だよ」

お湯？

ああ、お風呂の代わりか。

入浴という習慣は一般的ではないのかな。

ちよっとシヨック。

「5泊、食事とお湯もお願い」

私はそう言つと銀貨6枚を手渡す。

「はいよ、部屋は2階の突き当りの右側だ。

これが鍵だよ。



「すぐに食事にするかい？」

「ええ、出来るのなら」

「よしきた、すぐに準備するから好きな席で待ってな」

私は木製のプレートが付いた鍵を受け取ると、横合いに設けられている食堂の席に着いて食事が出てくるのを待った。

食事を終わるとお湯の入ったたらいを受け取って、階段を上がって指定された部屋に向かう。

ちなみに、夕食はパンと野菜のたっぷり入ったシチュー、デザートに果物。

素朴だけど美味しかった。

貰った鍵で扉を開けると、ベッドと一組のテーブルセットが置いてある6畳くらいの広さの部屋だった。

私は部屋に入って鍵を閉めるとお湯の入ったたらいを床に置き、ベッドに仰向けに倒れ込む。

木目が剥き出しになった天井が視界に入り、見慣れぬその光景にここが異世界であることを実感する。

心細さで思わず涙で視界が滲む……ことはなかったが、内心が不安で一杯なのは事実。

際限なく落ち込んでいってしまいそうだったので、そのまま眠ってしまいそうなところから何とか身を起こし、鍵が掛かっていることを再確認した上で着ていたローブとワンピースを脱いでベッドへと置く。

たらいと一緒に受け取った布をお湯に漬けてから絞り、髪から順番に上半身、下半身と拭いて清めていく。

大分さっぱりしたところで、買ったばかりの下着を履き、ベッドに脱ぎ捨ててあったワンピースを着こむ。

これから寝るのだからローブは着なくても大丈夫だろう。布団が薄くてちよつと寒いので上から掛けておくけど。

まだ日が落ちたばかりの時間だが、色々あって疲れていたせいか瞼が重い。どうせすることもないのでさっさと寝てしまおうと、私はベッドに潜り込んだ。

## 05：聖なる場所

差し込む光に意識が浮上する。

「どうやら今日は目覚まし時計に叩き起こされる前に目が醒めたようだ。」

折角気分良く起きられたのにけたたましい音は聞きたくない為、鳴る前に目覚まし時計を止める為に寝ころんだまま手を伸ばす。

枕の横のいつもの場所に置かれている筈の目覚まし時計を手探りで探すと固いものが手に触れた。

私はそこに対して上から掴むようにして目覚まし時計のボタンを押そうとし……その途端親指の付け根に走った痛みに飛び起きた。

「つつ！？」

痛みの走る右手を見ると、親指の付け根辺りに縦に傷が走っておりそこから血が滲み出ていた。

突然の事に混乱して先程手を伸ばしたところに目をやると、そこには目覚まし時計の代わりに禍々しい漆黒のナイフが転がっていた。私は混乱しながら周囲を見回して、そこが自分の部屋で無い事を思い出す。

木造の6畳程の部屋にシンプルなテーブルセット、そして部屋に不釣り合いな漆黒の天蓋付きベッド。

「そうだ、異世界に放り込まれて宿屋に辿り着いたんだっただ。」

「ん？」

「おかしい、何か違和感がある。」

「いや、異世界と言う時点で違和感とかそういうレベルではない程の差があるのだが、それを抜きにしても昨夜と光景が違うような……」

…。  
私は黒い布団の上で見え難い漆黒のローブを手繰り寄せながら、  
寝起きで上手く働かない頭を必死に動かそうとする。

つて、黒い？

そうだ、違和感はこのベッドと布団だ。

昨日寝た時は質素な木製のベッドに白いシートと布団だった筈。  
それがいつの間にか真っ黒な天蓋付きベッドに……まさか誘拐さ  
れた？

いやでも、部屋は昨日寝た部屋と一緒にようだし。

状況が飲み込めない私の視界に先程のナイフが入る。

先程は何故このナイフがここにあるのかと思ったが、よく考えれ  
ば呪いの所為かと理解出来た。

アイテムボックスに仕舞っていたが、装備から外せない呪いによ  
り寝ている間に飛び出してきたのだらう。

つてことは毎晩こうなるのか、今回は掠り傷で済んだけど何とか  
しないとその内大怪我しそうだ。

私は傷口を舐めながら、今後のことを考えて頭を抱える。

ナイフについて思い出したことでベッドについても何が起こった  
のか理解出来た。

眠っている間に加護付与スキルが発動したのだらう。

その時にナイフやローブの時に聞こえた声が聞こえたのかも知れ  
ないが、生憎眠っていた私は聞き逃したみたいだ。

つまるところ

「やつちやつた」

スキルのせいで宿屋のベッドを魔改造してしまったらしい。

これ、弁償しないといけないんだらうか。

豪華になったってことで許して貰えないかな。

朝一からのトラブルにげんなりしながらも、私はローブを羽織って靴を履いた。

後で考えることにしよう。

朝食を頂いてから宿屋から外に出る。

宿屋のおばさんに今日行きたいところの大まかな場所は聞いたので、後は歩いて探すことにする。

目的地は2つ、冒険者ギルドと教会だ。

冒険者ギルドでは登録を行ってギルドカードを習得したい。積極的に冒険する気などないが、身分証が無いと色々と困る場面がありそうだし、お金を稼ぐ手段も確立したい。

教会に行く目的は解呪のためだ。

朝のトラブルでも感じたが、やはりこのローブとナイフの呪いはさっさと解いておきたい。

解呪＝教会という連想はゲームの影響を多分に受けていることは自覚しているが、他に心当たりが存在しない以上は当たってみるしかない。

呪いが実在する以上は解く方法もあると思うし、仮に教会で出来ないとしても困っていることを相談すれば対処法を教えてくださいるだろう。

迷える子羊に救いの手を。

教会の方が若干宿屋から近いらしいので、まずは教会に向かう。

泊まった宿屋は街の西側にあったが教会は北側の領主の屋敷の手

前、冒険者ギルドは東門の近くにあるらしい。

中央広場を左に曲がり、東西を分断する大通りを北に向かって歩く。

しばらく行くと、正面に大きな屋敷が見えてきた。

おそらくあれがこの街の領主の屋敷なのだろう。

だとすると、その手前にある尖塔が特徴的な建物が教会か。

勝手なイメージで教会＝十字架だと思っていたが、よく考えればそれは元の世界のキリスト教に限定された話であって、この世界の教会に十字架は無い。

入口近くまで歩いていくと、開け放たれた扉の奥に聖堂と呼ぶのが相応しい厳かな部屋が見えた。

長椅子が立ち並ぶ奥に教壇があり、神父と思しき人が説法を行っている。

その奥には神々しい女神像が鎮座しており、人々は椅子に座りながらその像に向かって祈りを捧げている。

うん、ここが教会で間違いない。

それにとっても清浄な空気で、解呪も期待出来そうだ。

私は軽くなつた足取りで教会の入り口に向かいその扉をくぐ……  
みぎゃっ!?

扉をくぐるうとした瞬間、私はそこにあつた見えない壁に正面から激突した。

顔面に受けた衝撃に蹠踉めくように一步下がった私の前で、空間に罅が入っていた。

なんなんだ、これ。

不思議に思つて恐る恐る指で突いてみると、そこから罅が広がつていきパンツという軽い音と共に教会を包んでいた何かが弾けて消えた。

「あ」

これはもしかしてあれか、結界とかなのだろうか。  
聖なる力で施された外敵を退けるための結界……っていやいや、  
何でそれで私が弾かれるのか。

しかも突いただけであっさり壊れたし。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

ふと見ると、教会の中の全員が私の方を見て凍りついたように固まっている。

さっきの結界が割れる音の中にも響いていたらしく、私の一挙一動に視線が集中している。

え〜と、私のせいである可能性は無きにしても非ずレベルだと思うけど、傍から見れば明らかに私が結界を破壊したように見えたであろうことは理解出来た。

かくなる上は

「……………戦略的撤退」

私は必死に笑顔を作って小首を傾げると、そのままそくさとその場を後にした。

後ろで上がった悲鳴なんて聞こえない聞こえない。

結界にぶつかった時にフードが外れていたことに気付いたのは中央広場まで戻ってきた後だった。

慌ててフードを被り、広場沿いのカフェで一息吐くことにした。

注文した紅茶を啜りながら、先程の出来事について考える。

教会に聖なる護りが掛けられているというのはありそうな話だけど、どうして私が弾かれなきゃいけないのか。

私は人間であって悪魔とかじゃない……って『邪神の御子』の称号の所為かあ!?

うん、他に思い当たる節は無いし、多分間違いないな。

この称号持つてると人外扱いされるのか、いい迷惑だ。

やっぱりあの邪神は一度殴りたい。

この有り様じゃ当分教会には近付かない方が良さそうだ。

フード無しで顔を見られてしまったし、目も合わせてしまったから魔眼の影響でろくなことにならない。

解呪も当分は諦めるしかなさそうだ。

私は紅茶を飲みながら深く溜息を吐いた。



## 06：お約束

ギイと言う音を立てて開く扉をくぐり、冒険者ギルドの中に入る。入口から見て左側には掲示板があり、依頼のものであろう紙が何枚も貼り出されている。

右側には丸テーブルが幾つか並んでおり、パーティを組んでいるであろう冒険者が何人か談笑している。

そして正面にはカウンタがあり、若い女性の受付スタッフが冒険者に対応していた。

カウンタには受付で話している人以外の後ろに2人程並んでおり、私はその後ろへと並ぶことにした。

やがて順番が回ってきたので、私はカウンタへの足を進めた。

「冒険者ギルドへようこそ、本日はどのようなご用事でしょうか」

「冒険者登録をしたい」

「承知致しました。」

登録料に銀貨1枚必要となりますが宜しいでしょうか」

私は頷くとローブのポケットから銀貨を1枚取り出し、受付嬢へと渡した。

「それではこちらのカードに手を被せて下さい」

受付嬢はそう言うと、一枚の無地のカードを取り出してカウンタに載せる。

私は言われた通りにカードの上に右手の掌を合わせるように被せる。

そのまま一分程置くとカードから光が放たれる。

「はい、もういいですよ」

そう言われてカードから手を離すと、先程まで無地だった筈のカードに文字が浮かび上がっている。

どうやら、私のステータスの一部が書かれているようだ。

名前：アンリ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：17  
職業：魔導士  
レベル：1

い、一部で良かった。

これで称号やらスキルが記述されていたら大騒ぎになっていたかも知れない。

「カードの記載内容を転記させて頂きま」

「おいおい、こんな小娘が冒険者志願だと？」

世も末だぜ」

受付嬢のお姉さんの言葉を遮って、横合いから声が掛けられた。反射的にそちらの方を向くと、先程まで丸テーブルで談笑していた冒険者のうちの1人が立ち上がり、こちらへと近付いてくる。

2メートル近くはあるつかという巨漢で、髭だらけのむさ苦しい強面だ。

これはまさか……チートな主人公に対する絡みイベント？

「おいおい、ガルツ。

また新人に絡んでんのかよ」

「毎度毎度飽きねえな」

って、いつもの事なのか。

私だからか思ったのは自意識過剰だったようだ、顔から火が出  
そうな程はずかしい。

「おら、何とか言ったらどうなんだ。

いつまでも顔隠して黙りこくってんじゃねえ」

そういうと絡んできた熊男　ガルツは私のフードを手で払った。

「!?!」

私の目を直視したガルツはその状態で驚愕と恐怖の表情で硬直す  
る。

幸いにして、彼の巨体で隠されていて他の人間は魔眼の影響を受  
けてはいないらしい。

次の瞬間、下から何かが飛び出して私の右手に収まる。

「ヒツ!?!」

見るとそこには昨日から見慣れた禍々しい漆黒の短刀があった。

どうやら手放しておける時間を過ぎてしまったらしい。

武器を構えたように見える私にガルツは悲鳴を上げて尻餅を突く。  
そのまま私から離れるように後ずさる。

私はその様子を見ながら際どいところでフードを被り直して目を  
隠した。

「おい、どうした!？」

後ろのテーブル席に座っていた仲間達が異常に気付いたのかガルトツに駆け寄って肩に手を置く。

「!？ うおおおおあああー！！！！！」

「ガツ!？ 何しやがる!！」

肩に手を置かれたガルトツは振り返ると、恐怖の雄叫びを上げて殴り掛かる。

狂乱するガルトツに仲間以外の冒険者も取り押さえに掛かるが、ガルトツはそれを振り払い扉から外に飛び出していく。

外から悲鳴や怒声が聞こえてくるけど、ええと、私の所為じゃないよね。

無かったことにして振り向くと、受付嬢のお姉さんはカードを手に持った状態で固まっていた。

「写さないの？」

「へ？ あ、済みません。

すぐに写します!！」

カードの記述が名簿のようなものに書き写される。

「と、登録完了しました。

あの、さっきガルトツさんに何をしたんですか？」

「別に、何も」

カードを受け取りながら、そっけなく返す。

実際私は何もしていないから不可抗力なんだけど、お姉さんは納

得していないみたいだ。

呪いの短刀が掠って混乱の状態異常が付与されたのだとしても、私が攻撃したわけではないし。

「ええと、依頼についての説明は要りますか？」

「お願い」

納得はしていないまでも突っ込むと良い事が無いと思われたのか、誤魔化すように話題を変えろお姉さん。

私としてもその方が有難いので乗っておく。

「左手の掲示板に貼られているのが依頼の紙です。

受けたい依頼の用紙を剥がして冒険者カードと一緒に受付まで持って来て下さい。

依頼を達成した場合はその証明と冒険者カードを提示して貰うことで報酬をお渡しします。

依頼には期限があるものもありますので、気を付けて下さい。

期限を過ぎた場合は依頼失敗となり、罰則金を支払って貰うことになります」

ふむ、ここまでは普通だ。

ただ、依頼の紙には依頼内容と報酬、期限しか書かれていない。

そう言えば、冒険者カードにもランクのようなものは書かれていなかったな。

「受けられる依頼のランク分けとかは？」

「ありません、基本的にどの依頼でも受けられます。

あまりに無理がある場合は忠告させて頂きますが、強制ではありません」

つまりは自己責任ということか。

「依頼には主に3種類あります。討伐、採集、護衛の3つです。」

それぞれの説明は必要ですか？」

「それは大丈夫」

流石にそれくらいは言葉で大体分かる。

「説明は以上です。」

早速依頼を受けますか？」

私は頷くと掲示板から目を付けていた依頼を剥がしてきて冒険者カードと一緒にカウンタへと載せる。

「ええと、薬草の採集依頼ですね。」

最低数が5枚で銅貨30枚ですが、それ以上に集めて貰っても構いません。」

これはギルドからの常設依頼ですので、期限はありません」

1枚当たり銅貨6枚か。」

多分店での買値と売値の間の金額なのだろう。」

え？ 討伐依頼を受けないのだった？」

怖いからヤダ。」

「何処で集めて頂いても構いませんが、東の森に群生地がありますのでそこが一番確実です」

「分かった」

冒険者カードを受け取ると振り返る。

私の動向を窺っていた冒険者達が一斉に目を逸らす。

何これイジメ？

このままここに居ても良いことは無さそうなので、私は冒険者ギルドを後にした。

昼食用のサンドウィッチを露店で買い、東門から街の外に出る。

昨日街に入る時に受け取った仮身分証を返し、保証金を返して貰う。

一時間程歩いて森まで行き、薬草を10枚集めた辺りで日が落ちてきたので街へと戻った。

珍しく何のトラブルも起きず、魔物に襲われることもなく過ごせた。だが、それが異常であることに気付くのは大分後になってからだった。

## 07：転職？

この世界に放り込まれてから3日が経過した。

初日は街に辿り着くので精一杯、2日目と3日目は冒険者ギルドの採集依頼をこなしてお金を稼いだ。

冒険者歴2日にして早くも悟った事実が1つある。

採集依頼だけでは生活が出来ません。

登録した日は教会に行ったりなんかしていたため薬草採集だけで終わってしまったが、翌日は時間があった為に2つの依頼を受けた。得られた報酬はギリギリ銀貨1枚、今泊まっている宿屋で1泊すると消えてしまう。

食事代も含めれば完全に赤字だ。

今は初日に遭遇した商人からの礼金　ということにしておくがあるためすぐに生活に困ることはないが、収入を支出が上回っている以上は時間の問題だ。

駆け出しで討伐依頼に手を出していない者は私以外にも居る筈だが、そういう人達はどうかやって生活しているのか。

疑問に思っただギルドの受付のお姉さんにそれとなく聞いてみたところ、そう言った人達はこの街の住人で宿代が不要な者だったり、複数人で雑魚寝の格安宿で生活しているらしい。

要するに、私の生活レベルが収入とマッチしていないだけということだ。

だったら生活レベルを落とせと言われるかも知れないが、仮にも現代人としてはそれも厳しいものがある。

正直、現在の宿だって私から見れば生活レベルとしては高いとは



実感出来ないレベルなのだ。

それに仮にも乙女としては男女関係無しの雑魚寝には抵抗がある、私を襲うような男が居るかはこの際置いておく。

そうすると、残るのは収入アップしかない。

採集依頼ではどう頑張ってもこれ以上の収入アップは難しいことは分かったので、後は討伐依頼か護衛依頼を受けるしかない。

どちらも気乗りしないのだが、どちらかを選ぶのなら討伐依頼となる。

護衛依頼は依頼人と直接にコミュニケーションを取る必要があるため、接客業の出来ない私には明らかに向いていない。

それに、旅路の途中でうっかり目を合わせてしまつて大騒ぎになることが目に見えている。

そもそも、顔を隠したまま護衛なんて受け入れて貰えないだろうし。

討伐依頼は指定された魔物を討伐し、特定の部位を持ち帰ると言うものだ。

討伐依頼が出される魔物は何らかの害を及ぼしたものの、あるいは及ぼす危険性があるものだ。

依頼者は被害を受けたものか冒険者ギルドや商人ギルド、あるいは領主などがなることが多いようだ。

増え過ぎると厄介なゴブリンの討伐依頼はギルドの常設依頼として出されている。

討伐と言うからには相手を殺さなければならぬが、ハッキリ言うて私には荷が重い。

虫も殺したことがない……とまでは言わないが、これまでの人生の中で自覚しながら生き物を殺した経験など無い。

現代人であれば皆似たようなものだと思う。

正直、いきなり討伐依頼を受けるのは勇気が要る行為だし、パニックを起こして抵抗出来ないまま逆に殺されてしまう恐れもある。

そんな私が聞き付けたのが、リーメルの街の南にあるという初心者ダンジョンだ。

ダンジョンとは主に洞窟の形を取った迷宮で、中には無数の魔物や罠、そして財宝が眠っている。

活性化しているダンジョンにはダンジョンマスターによって支配されているが、この初心者ダンジョンは既にダンジョンマスターが討伐され冒険者ギルドの管轄になっているらしい。

元々出来たばかりの時に討伐が行われたため階層も3階層と短く、スライムやコボルトと言った低レベルの魔物が無限に湧いて出る為、討伐依頼初心者の訓練用設備として利用されているそうだ。

なお初心者ダンジョンと言うのは冒険者達による通称らしいが、誰も正式な名前は覚えていないとのことだ。

勿論、冒険者ギルドの管轄とは言え放たれているのは本物の魔物であり、命の危険が全く無いわけではない。

しかし、出没する魔物が限定されている初心者ダンジョンは実際の討伐依頼よりは安全度が高く、訓練には打ってつけな場所と言える。

討伐依頼を受ける勇気が湧かない私は、一先ず初心者ダンジョンで訓練してみることにした。

これで駄目なら、収入アップも他の方法を模索する必要がある。

南門から歩いて2時間弱のところ、湖畔の横にそのダンジョンは

口を開けていた。

「関係者以外の立ち入りを禁ず 冒険者ギルド・リーメル支部」の立て札を横目に、私は恐る恐るダンジョンの入り口へと足を進める。冒険者ギルドの管轄とは言え内部を改装していたわけでもなく、岩肌そのものが剥き出しとなった洞窟だった。

私は短刀を右手に持ちながら、慎重に探索を開始する。そう言えば、迷路は左手を壁に付いてひたすら壁沿いに進むと多少迷ってもいずれはゴールに辿り着けると聞いたことがある。迷うかも知れないし、少なくとも魔物が出て来るまではそうしていよう。

洞窟の中を歩いておよそ1時間が経過しただろうか、私は襲い掛かる凶悪な魔物達を鎧袖一触に斬り捨てながら探索を………していなかった。

いや、洞窟を歩いて1時間近く経っているにもかかわらず、何故かこれまで一度も魔物に襲われていないのだ。

それどころか、姿も見掛けない。

こんなものなのだろうかと思うが、すぐにその考えを否定する。

これは明らかに不自然だ、これでは冒険者ギルドの訓練施設として成り立たないだろう。

これ以上無駄に歩き回っても仕方ないので、足を止めて休憩がてらに考えてみることにする。

実は薄々原因が分かっているのだが、それを認めたくない。

それを認めてしまうと、今後に大きな差し障りが出てくるのだ。

とは言え、いつまでも現実逃避していても仕方ないのも事実。

勇気を出して現実と向き合う必要があるだろう。

……邪神オーラのスキルの所為だよね、これ。

魔眼よりも人間に対して効果が薄いので忘れていたが、「人間に対して効果が薄い」と言うのは逆説的に言えば「人間以外に対しては高い効果を発揮する」と言うことだ。

ドラゴンですら裸足で逃げ出す気配にスライムやコボルトが怯えないわけがない。

このダンジョンの1階層はぐるっと一周出来るようになっていたため、私から常に逃げるように移動しているのだとすれば遭遇しないことも理解出来る。

そういえば、最初に放り込まれた森でも街の周りの草原でも採集依頼で訪れた場所でも一度たりとも魔物に襲われたことがないが、今にして思えばこれも不自然だった。

邪神オーラのせいで知らぬ内に魔物に逃げられていたのだろう。

魔物から襲われないということ自体はいいことなのだが、それは同時に討伐依頼を達成出来ないことを意味する。

元々討伐依頼は基本的に人間を襲う魔物に対して出される為、相手が尻尾を巻いて逃げることは想定外だろう。

それこそ、袋小路の洞窟に巣食っているような相手以外は討伐に出向いても遠目に逃げられてしまっただけだが、そんな都合のいい依頼は滅多にあるとは思えない。

……詰んだ。

採集依頼は報酬が低く、討伐依頼や護衛依頼は受けられないとなると、収入アップは難しい。

やはり生活レベルを落とすしかないのか……。

『ダンジョン「湖畔の洞窟」のダンジョンコアに加護を付与しまし

た

ん？

『ダンジョン「湖畔の洞窟」を制圧しました』

『称号「ダンジョンマスター」を獲得しました』

『スキル「ダンジョンクリエイト」を取得しました』

『ダンジョンマスターの属性によりダンジョンの基本構造が変更されます』

『ダンジョンの名称を「邪神の聖域」に変更しました』

ちよつとマテ。

いや、お願い。待って下さい。

突然のことに呆気にとられる私の前で周囲の光景が一変する。手を伸ばせば届きそうだった天井は数メートルの高さになり、横幅も遙かに広大になる。

岩肌が剥き出しだった壁は黒いレンガ造りの壁になり、点々と設置されていた松明は禍々しい燭台へと変わり不気味な紫色の光を灯している。

辺りには不気味な濃い緑の霧のようなものが漂い、地獄の底から響くような怨念の音が轟く。

コボルトの1匹も居なかった筈の場所には無数の死霊やゴーレムが闊歩する。

うん、先程までの初心者ダンジョンから見事にラストダンジョンっぽい雰囲気が変わっていた。

魔物が襲って来ないことや先程の声からして大体想像が付いたが、念の為に確認してみる。

「ステータス」

名前：アンリ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：17  
職業：魔導士  
レベル：1  
称号：邪神の御子、ダンジョンマスター 「New」  
魔力値：3031504  
スキル：邪神オーラ（Lv.5）  
悪威の魔眼（Lv.5）  
加護付与（Lv.7）  
状態異常耐性（Lv.6）  
闇魔法（Lv.6）  
アイテムボックス（Lv.4）  
ダンジョンクリエイト（Lv.1） 「New」  
装備：悪鬼の短刀  
邪神の黒衣  
墮落のベビードール  
淫魔のスキヤンティ  
闇のパンプス

うん、残念ながら聞き間違いじゃなかったみたいだ。  
称号とスキルが増えている。

私、ダンジョンマスターになっちゃいました。

<ダンジョンマスター>

ダンジョンを支配する支配者。

ダンジョンコアを用いてダンジョンを管理し侵入者を駆逐する

<ダンジョンクリエイト>

ダンジョンマスターの基礎スキル。

支配するダンジョンの拡張や整備を行う。

使用にはダンジョンコアが必要。

LV・は支配するダンジョンの階層によって決まる。

LV・1は1〜5階層。

先程聞こえた『声』や説明を見る限り、ダンジョンにはダンジョンコアというものがあり、それを通してダンジョンを支配するのがダンジョンマスターなのだろう。

そして、初心者ダンジョンはダンジョンマスターこそ討伐されたが、ダンジョンコアはそのままだったか、あるいは何らかの理由で再生していたのだろう。

つまり、いつからかは分からないが、ダンジョンマスターが空席でダンジョンコアさえ手に入れば支配出来てしまう状態になっており、私の加護付与スキルのせいでダンジョン越しにダンジョンコアを掌握してしまったと……そんなんありか。

拙い、非常に拙い。

際限なくダンジョンを成長させ得るダンジョンマスターは討伐対象らしいから、これがバレると私も命を狙われることになる。

そして、初心者ダンジョンだった筈の場所がこんな風になっていれば、異変はすぐに察せられてしまう。

かくなる上は

「なかつたことにしよう」

うん、よく考えればこのダンジョンの異変が公になっても、私は何食わぬ顔で街で暮らして居ればいい。

他人に見えるものなのかも実験していないが、人にステータス画面を見せて称号やスキルを見られない限り、私がダンジョンマスターであることなど分かる筈も無いのだから。



## 08：お引越

こんにちは、アンリです。

唐突ですが……宿屋から追い出されました。

正確に言うと当初の5泊から宿泊延長することを断られた形だ。

自分でも気付いていなかったのだが、宿屋のおばさんが酷く怯えていたので何処かでうっかり目を合わせてしまったのだろう。

そのうちそんなことになるのではないかと思っていたけれど、ここまで早い段階で追い出されるのは想定外だ。

叩き出されるのではなく「お願いだから出てってくれ」と懇願されるのは心に突き刺さった、結構落ち込んでる。

代わりの宿屋を探すべきかも知れないけど、ショックが大きくてその意志が湧かない。

それにある意味においては丁度良かったのかも知れない。

収入と支出のバランスが釣り合っていないという問題は解決していない為、本気で何とかすることを考えるためのいい切っ掛けだったとも言える。

そうとでも思わないとやってられないだけだ。

以前も使った中央広場のカフェで紅茶を頼んで一息吐きながら、方策を考える。

検討の方向性は2つだ。

1つ目の方策は別の収入源を確保すること、2つ目は支出の大半を占める「住」の問題を何とかすること。

前者の収入源については冒険者ギルドに登録する際にも考えたのだが、困難だったために諦めた経緯がある。

性格的にもスキルのにも接客業には壊滅的に向いていないし、技

術があるわけでもないから生産職も不可能。

私が入入を得ようとしたら冒険者くらいしか道が存在しないのだ。加護付与を使った錬金術 安物を買って加護付与を行ってから売り払う も考えてみたが、付与した武具や衣服は呪われた代物になる比率が高い為、まず売れないし、仮に売れたとしても非常に目立つ行為になるためトラブルが付き纏うだろう。

後者の住居についても難しく、手持ちの金貨5枚では家を買えるだけの金額ではないし、借家も宿屋と同じように追い出されるリスクがあるため落ち付けない。

そもそも周囲に人が居る環境で定住する場合、絶対に目を合わせないように始終気を遣っている必要が発生するので最初から無理がある。

理想的なのは「周りに人が居ない住処」で、「借家ではなく私の持ち家」、加えて「そこそこの生活環境が整っている」こと。

欲を言えば、「お金を稼ぐ手段」が一緒に付いてきてくれたりするとベストだ。

「そんな都合のいい場所……」

あるわけがないと言いたいところだが、実は手段を選ばなくてよいら存在するから困っている。

主義を取るか実益を取るか……そんな天秤が掛けられた時点で既に私の心は傾いていたのだろう。

背に腹は代えられないのだ。

ん？ 武士は食わねど高楊枝？

私は武士じゃないから問題ない。

考えを纏めた私は食糧を買い込むために商店へと足を向けた。

3時間後、大量の食糧をアイテムボックスに詰め込んで、私は先日のダンジョンへと来ていた。

主義を捻じ曲げて実益を取った選択、ダンジョンに住むために。

「周りに人が居ない住処」……街から徒歩で2時間、周囲に住む酔狂な人間は居ない

「借家ではなく私の持ち家」……私がダンジョンマスターだし

「そこそこの生活環境が整っている」……今は整っていないけど、増築も改装も好き勝手に出来る

「お金を稼ぐ手段」が一緒に付いてきてくれる……多分お金を持ったカモが今後幾らでもやってくる

デメリットは平穩が阻害されることと私の良心が痛むことだが、前者はダンジョンの強化を行うことで、後者は最悪の場合でも死人を出さないようにすることを私の中のルールとすることで折り合いを付けたい。

私はそうやって心を決めると、ダンジョンへと入っていった。

ダンジョンマスターの能力は「何となくこういうことは出来そう」という微妙に曖昧な感覚で把握出来た。

例えば、ダンジョンはダンジョンマスターの支配領域と言うことでダンジョンマスターはダンジョン内に限定して好きな場所に移動出来るし、自身がダンジョン内に居る時限定のようだが、ダンジョン内のあらゆる場所を見聞きすることが出来る。

私は転移を使用してダンジョンコアのある部屋へと移動した。

6畳くらいの小部屋に50センチ程の蒼いクリスタルが浮かんでいる。

これがダンジョンコアなのだろう。

私はダンジョンコアに手を当てながら呟く。

「ダンジョンステータス」

名称：邪神の聖域

属性：闇・死・瘴気

階層：3

魔力値：1532

私自身のステータスもそうだが、ダンジョンのステータスも禍々しいことこの上ない。

名称と属性は見なかったことにして、残りの項目に目を向ける。階層の3は初心者ダンジョンのものをそのまま引き継いだのだろう。

色々の基本構造は変わっているが、階層は変わらないと言うことらしい。

魔力値はダンジョンコアに蓄積されている魔力の残量のように、これを用いてダンジョンの拡張や整備を行うみたいだ。

ダンジョンコアに魔力を蓄積する方法は2つ、ダンジョンマスター自身が魔力を注入するか、ダンジョン内で侵入者が死亡した場合にその者の魔力が取り込まれるようだ。

ダンジョンコアは貯金箱のような役目も果たしており、ダンジョンマスターは日々コアに魔力を蓄積することで自身のキャパシティ以上の魔力を使用出来る。

例えば、ダンジョンマスターの平均的な魔力値は1〜2万で、ダンジョンの階層を増やすには100万が必要になるため、そのままでは永遠にダンジョンの階層を増やすことが出来ないが、ダンジヨ

ンコアに溜めていけば自身のキャパシティに関係なくダンジョンの階層に行き出来るため、日々1万ずつ溜めていけば単純計算で100日毎に1階層増やせる。

しかし実際には自身の魔力を全て蓄積するわけにもいかないだろうし、他の事に魔力を使用するためだろうからそんな単純にはいかず、階層の追加はもっと長いスパンで行うことになる。

ダンジョンコアからそれらの情報を読み取った私は内心で苦笑する。

やっぱり魔力値300万は異常だったみたいだ。

一晩寝れば大体魔力は回復するので1日3階層、100日で300階層作ることが出来ることになる。

いや、そんなに階層増やしても管理出来なくなるだろうからやらないけど。

うーん、魔力に何か単位を付けたいな。ポイントで良いか。

取り合えず300万ポイントをダンジョンコアに注ぎ込み、そこから200万ポイントを使って階層を2つ追加する。

ダンジョンコアがある階層は自動で最奥になるらしく、現在居る階層が第5階層になり新たに第3階層と第4階層が追加された。

第3階層と第4階層はオーソドックスな迷宮にするが、第5階層は残りの100万ポイントを使用して根本から改装する。

幾つかの部屋に分けて寝室、居間、台所、浴場、トイレ、倉庫、そしてダンジョンコアを安置する執務室を作成する。

ついでに魔力による疑似太陽を作成して昼夜の区別を設定。

窓の外からではなく屋内に直接光が発生するのは違和感があるが、その内慣れるだろう。

後は少々広めの部屋に屋内菜園を作成……収穫は当分先だろうけど。

好き勝手に改装したせいであつと言う間に100万ポイントを使い切ってしまったが、取り合えず居住区として最低限の体裁は整っ

ただろう。

最後にダンジョン内に棲息する全ての魔物に対して侵入者への迎撃を指示するが、その際に殺さずに気絶させることを厳命しておく。普通の魔物だと不満が溜まったり本能で命令を無視する可能性があるが、このダンジョンに棲息している魔物は自我のない非生物のものばかりなので、命令には絶対に従うだろう。

魔力を大量に使用したせいで眠いが、何とか気力で堪えて浴場へと向かう。

久々の入浴の機会、堪能するまでは寝落ちするわけにはいかない。数日振りのお風呂はとても沁み渡り、私は湯に浸かりながら寝てしまった。

## 09：はじめてのおかいもの

冒険者改めダンジョンマスターのアンリです。

お風呂に浸かったまま寝てしまい風邪を引くかと思ったが、健常なままだった。

ただ問題があるとすると、寝落ちした間に呪いが発動したらしく短刀を持ちローブを着た状態でお湯に浸かっていたことだ。

着替えられないので濡れ鼠状態で過ごす羽目に……。

まあ、外を歩いて居ればいずれ乾くだろうけど、下着まで濡れるので気持ち悪い。

私は30分以上入浴することも出来ないのか。

気を取り直してアイテムボックスから出した食糧で簡単に朝食を済ませて入口へと転移する。

ダンジョンを出て街へと向かう。

割り切ってダンジョンマスターになることを決めたことにより『住』の問題は解消した。

呪いのせいで着替えられないので、『衣』についても心配するだけ無駄だ。

残るは『食』の問題、昨日大量に買い込んだし屋内菜園で栽培もするが、買い込んだ分は減る一方だし、屋内菜園の収穫は当分先だ。仮に収穫が出来るようになったとして、ベジタリアンではないので野菜のみで生活するのは厳しい。

となると、定期的に街に出て買い物をする必要が出てくるわけだが……ここで問題が1つ、いつまで私が街に出入り出来るかという

点だ。

教会や冒険者ギルドの件で一部の人間からは既に疑惑の目を向けられているだろうし、ダンジョンの変貌が知れ渡ればそのタイミングから結びつけて考える人間が出て来ても不思議じゃない。

そう考えると、いずれ街への出入りは厳しくなると思っておいた方が良さそうだ。

街に出入りが出来なくなると考えると代わりに買物を頼める相手が欲しいのだが、生憎と頼める人が居ない。

ぼっち言っな、自覚している。

人を雇うにも信用して任せられるような相手が居ないため、残った手段は1つしか思い浮かばなかった。

私は冒険者カードを見せて街に入ると、奴隷商へと足を運んだ。

この世界には奴隷制度があるということを知ったのは街に着いてすぐのことだった。

奴隷と言うと非合法で後ろ暗いイメージがあったが、比較的大通りに近い場所で普通に店が構えられており驚いたことは記憶に新しい。

周囲の人の話から集めた推測交じりの情報では、この世界の奴隷は4つに分類されるらしい。

罪を犯して身分を落とされる刑罰としての奴隷である犯罪奴隷、敗戦国の捕虜が落とされる戦争奴隷、借金の形として奴隷に落とされる借金奴隷、そして奴隷の両親から生まれた出身奴隷の4つだ。

奴隷身分となる理由は様々だが、彼らは一様に人間として認められず金銭を持って売り買いされる。



奴隷は契約によって主人となったものに絶対服従である。

魔法が存在するこの世界において絶対服従とはあるべき論やルールの話ではなく強制的に命令に従わされることを意味する。

仮に「自害しろ」と命じられれば、どんなに拒絶しようとしても身体が勝手に動いて自殺するのだ。

奴隷は所有物の扱いであり、主人はどのように扱ったとしても罰せられることは無い。

基本的に高価であるために気分によって殺されることはあまり無いとは思うが、それとて絶対ではない。

若い女性の奴隷が最も高く、次いで体格の良い男性が高い。

現代日本に生まれた私としては抵抗がある奴隷制度だが、絶対に裏切らない人手としては最適と言える。

「いらつしゃいませ。」

本日は奴隷をお買い求めでしょうか」

店に入ると小ざつぱりした男性が開口一番で質問してきた。

どうやら彼がこの店の店主のようだが、奴隷商と言葉で勝手にイメージしていた小太りの男とは大分異なるので少々戸惑った。

私が頷くと、店内に幾つか設けられているテーブルの内の一つへと案内される。

正面に店主が座り商談が始まる。

「当店ではあらゆる種類の奴隷をご用意しております。

お求めの奴隷はどのようなものでしょうか」

「10代前半で性別は女性……それから、死に掛け」

私の挙げた要望に店主は一瞬固まるとこちらを凝視してきた。目を合わせるわけにもいかないため、私はフードで目を隠したまま無言で返す。

間違いなく3つ目の条件に対しての反応だろうが、こんな条件を挙げたのにも勿論ちゃんとした理由がある。

1つは価格、年上を顎で使うのは気が引けるし異性と寝食を共にするのは勇気が要る為に10代前半の女性にしたいのだが、そうすると手持ちの金貨5枚では足りない可能性がある。

病や怪我で先が長くない者なら10代前半の女性でも大分値が下がるであろうことを見込んでいる。

そもそもそんな者が売られているのかとも思ったが、一応需要はあるらしい……強い魔物に対する生きた盾や魔導の実験材料としてだが。

2つ目の理由としては、仮にここで奴隷を買って買物や身の回りの世話を任せるとして、その奴隷は私に怯えないかと言う問題がある。

秘密保持の観点から私と一緒にダンジョンに住んで貰う必要があるが、同じ場所に住んでいて一度も目を合わせずに過ごすと言うのは無理があるだろう。

主に絶対服従の奴隷とは言え命令に逆らえないだけなので、縛れるのはあくまで行動だけだ。

「私に対して怯えるな」と命令したところで、怯える素振りが出来なくなるだけで恐怖そのものが無くなるわけではないだろう。

対応策として1つ思い付いたことがあるのだが、その為には一時的にでも私を受け入れて貰う必要がある。

死に掛けて藁にも縋るような者でないと、前提条件は満たせない。

「勿論、そういった奴隷も数は少ないですが居ります。

地下までご足労頂く形になりますが、宜しいですか」

店主の言葉に頷いて返すと、私は彼の後に続いて店の奥へと入っていった。

通常の奴隷であれば要望に沿う者を店主が選んで連れてくるようだが、私のような要望をした場合は連れてくることが出来ないため、そのような形になるのだろう。

狭い階段を降りると、松明に照らされて鉄格子によって遮られた牢屋が浮かび上がる。

牢屋の中には数人の女性が居た。

格好は一様に一糸纏わぬ裸だが、粗末な藁布団の上に寝転んでいる者も居れば、石壁に背を凭れて座り込んでいる者も居る。

「お客様のご要望ですと、この辺りとなります。」

お目に留まった者が居ればご説明致しますが……」

私は此方に向けて話し掛けてきた店主の言葉を遮る形で彼の横に並び、彼に顔が見えない角度でフードを外して牢屋の中の女性達を見回した。

反応は3つに分かれた。

身震いをして目を逸らす者、反応が無く虚空を見詰めたまま動かぬ者、そして1人だけだが弱弱しいながらも私の方へと視線を向けて動かさない者。

私は1人だけ異なる反応を見せた者の近くまで足を進め、鉄格子越しに見据える。

その少女は鉄格子のすぐ傍に石壁に背を凭れ掛けながら力無く座り込んでいた。

伸ばしっ放しの金色の髪は汚れでくすんでおり、あばらが浮き出て手足は痩せ細り、今にも息を引き取りそうに見えた。

健康であればさぞかし可愛らしいものであつたらう顔も、頬がこ

けて見る影もない。

しかし、彼女はそんな死に掛けた様子を晒しながらもこちらを認識し、その蒼い瞳を向けている。

「彼女は？」

「名前はテナ、年齢は14歳です。

このリーメルから少し離れたところにある村出身の借金奴隷なのですが、連れてくる旅の途中で死病を発病しましておそらく余命は残り一ヶ月ほどと見ています」

本人の前で告げられる残酷な言葉に、テナは身を震わせる。

しかし、それは同時に彼女が未だ命を諦めていないことの証左でもある。

自分の命が直に尽きることを理解しながら、それでも生きることが諦められずに縋る縁を渴望している。

「私ならもしかすると貴女を助けられるかも知れない」

私が投げ掛けた言葉に、こちらを見るテナの蒼い目に動揺が浮かぶ。

彼女は私と目を合わせているが、私を怖れている様子は見えない。おそらくは、スキルの与える恐怖を凌駕する死への恐怖に日々侵されているために危機感が麻痺しているのだろう。

「証拠はないけれど信じて受け入れられるなら、この手を取って」

私は鉄格子の前に手を差し出す。

テナはしばらく無言で私の顔と差し出した手を見ていたが、やがておずおずと手を差し出して私の手に合わせた。

「幾ら？」

「銀貨5枚となります」

私の非力な力でさえ砕けてしまいそうな彼女の細い手を軽く握りながら、後ろに立つ店主に尋ねるとそんな答えが返ってきた。

瀕死とはいえ人にその値段が高いのか低いのか私には分からないが、彼女の器量であれば健康であればおそらく100倍の値段が付いただろう。

店主は私の行動や発言に色々と疑問を感じているだろうが、プロ意識からか尋ねては来なかった。

「分かった。」

適当な服を着せてあげて欲しい、上乘せが必要なら支払う」

「いえ、奴隷用の簡素なものであればサービスさせて頂きます」

彼は下働きの頑強そうな男を呼び寄せると、牢を開けさせてテナを抱え上げて外へと連れ出させた。

「身体を洗い服を着せてからお渡し致します。」

その間にお手続きをさせて頂きますので、先程の席までどうぞ」

そう促す店主に続いて、私は地下牢を後にした。

店内に戻った私は席に着くと、彼の差し出した契約書に必要事項を記載して銀貨5枚を支払う。

「確かに頂戴致しました。」

最後に奴隷登録を行い、手続き完了となります」

そう言つと、丁度テナが先程の男に抱えられたまま連れて来られた。

貫頭衣とでも呼ぶべき布に頭を通す穴を開けただけの簡易な服を着せられている。

帯すらないので、横から見れば彼女の幼い裸身が覗けてしまう。

身体を洗われたらしくその金髪も大分色を取り戻しているが、それでも全身から漂う死の気配が彼女の魅力を押し殺していた。

床の上に横たえられた彼女の首には先程まではしていなかった首輪が嵌められている。

「彼女の首輪に手を触れて下さい」

店主の言葉に従つて席を立ち、テナの首に嵌められた首輪に手を伸ばす。

石に見えるよく分からない素材で作られた首輪が接ぎ目がなく、付け外しが出来ないように見えた。

しばらく触れていると、首輪が光を放った。

これは、冒険者カードと同じような仕組み？

『テナを隷属させました』

加護付与をした時やダンジョンマスターになった時と同じように、何処からか声が聞こえた。

「これで彼女はお客様の奴隷となりましたので、命令には絶対服従となります。」

彼女は歩ける状態ではないため、宜しければ馬車を呼びますか？  
「要らない、背負つてく」

そう言つと私は動揺する店主や下男、そしてテナの声を無視して彼女の腕を掴んで背中へと背負う。

彼女は降りようと身を擦つていたが、やがて諦めたのか静かになつた。

店を出る私に店主がどのような表情を向けていたかは定かではない。

彼女は軽かつた。

確か年齢は14歳と言つていたから私より3つ下だが、栄養不足なのか年齢よりも小柄で私よりも頭1つか2つは小さい。

加えてあばらが浮き出るくらいに痩せたその身体は力の無い私でも軽々と背負えてしまう程度の重さしかなく、何だかその軽さが悲しかった。

とは言え、幾ら軽いとは言え流石にここからダンジョンまで背負つて歩くのは私も彼女も厳しいだろう。

私は店を出ると路地裏に入って少し進み、周囲に誰も居ない場所を見付けると彼女を地面に下ろした。

地面に座り込んで傍に立つ私を縦るように見上げるテナに対して私は彼女から1歩離れた場所に立つてフードを外す。

「貴女は私を信じると誓つた」

「……はい」

初めて彼女の口から言葉が漏れる。

その返答を聞きながら、私は彼女の額に指を突き付ける。

「その言葉が真実なら、受け入れて」

そう言っていると私は初めて自分の意志でスキルを行使する。

「加護付与」

『テナに加護を付与しました』

『奴隷の服に加護を付与しました』

その言葉と共に闇が集まりテナを包み込む。

闇が晴れた時、テナの姿は一変していた。

汚れを除いてもくすんでいた金色の髪は眩く輝き、こけていた頬や肉の無い胴や手足もふつくらとした少女特有の柔らかさを取り戻す。

私が指を突き付けていた額にはアルファベットの「S」を横に倒したような黒い紋様が浮き上がり、蒼かった瞳は真紅に変わった。

格好も貫頭衣という共通はあるが古代の巫女の格好を黒くしたような紋様と装飾の施されたものへと変貌していた。

何よりも今にも死にそうだった雰囲気が消え、本来の美少女の輝きを取り戻している。

うん、どうやら上手くいったみたい。

邪神とは言え「神」の加護、初期装備をラストダンジョンに置かれていたような強力な装備に変えてしまう反則的なスキルだ。

死病であっても瞬時に癒すくらいの力はあると予想していた。

服まで一緒に変えてしまったのはちょっと予想外だが、呪われていたら……ごめん。

「え……あ……」



テナは呆然として言葉も出せずに変貌した自分の手や服を見詰めていた。

そうしている内に呼吸をするだけでも走っていた激痛が今は全く無くなって病の気配が消えていることに気付くと、紅く変わってしまった両目からボロボロと涙を零し始めた。

突き付けたままだった私の手に縋りながら何度も感謝の言葉を繰り返すテナの姿に、私は彼女の命と人生を自分の都合で捻じ曲げた罪悪感を見せないように飲み込んだ。

しばらく泣き続けた後に泣き止んだテナは、自身の行動を振り返って青褪めた。

私の顔を窺うようにこちらを見るテナの様子に、私は彼女が健康に戻っても私に恐れを抱いている様子が無いことに密かに安堵する。加護付与の所為で私の気配や魔眼に耐性が出来ているのだろうか。

「立って」

「は、はいっ！」

そこまで強く言ったつもりはないのだが、テナは弾かれるように立ち上がると直立不動になり私の次の言葉を待つ。

スキルによる恐怖はないようだが、極度の緊張が感じられる。

「貴女には私の住処に住んで身の回りの家事と買い物をして欲しい」  
「……え？」

？ 何故疑問に思ったような反応をされたんだろう？

「不服？」

「め、滅相ありません！」

ただその……それだけでいいんですか？」

ああ、成程。

確かにさつき私が頼んだようなことは普通は使用人を募集して雇えば済むのだから、わざわざ奴隷を買ってやらせるようなことじゃない。

奴隷は使用人に出来ないことややりたがらないことを無理矢理やらせるために居る。

ただ、他に頼みたいことは特にないのだから仕方ない。

主人が男なら夜の仕事に加わっていたらすが、私は女だから関係ない。

「それだけでいい。

ただ、街から離れたところに住んでるから、買い物は結構大変」  
「分かりました」

住んでる場所に首を傾げているテナだが、まさかダンジョンに住んでいるとは思っていないんだろうな。

説明するのが難しいから、もう直接見て貰うことにしよう。

私は彼女用の靴と下着を買ったと、冒険者ギルドでテナに登録させてから街を出た。

## 10：引き籠もり生活開始

奴隷少女のテナと暮らし始めて4日が経過した。

初日は色々と驚いてばかりだった彼女も、漸く慣れてきたようだ。慣れたと言うよりも理不尽なことや規格外なことに思考を放棄しただけかも知れないが。

村では母親の手伝いをしていたと言う彼女は一通りの家事をこなせるらしく、私が出来ない料理や掃除を完全に任せきりにしている。いや、一応言っておくと私に料理や掃除をする能力が無いわけではない。

ただ、私が料理をする為に包丁を持つと短刀に叩き落とされ、エプロンを着ようとするとローブに弾かれる。

身の周りだけでも自分で掃除するかと持った箒すらも駄目、箒は武器扱いらしい。

ちなみに、洗濯については私が着替えられないので自分の分だけしてもらっている。

幸いと言うべきか、私の服はどうも加護付与の発動こそ最初の時だけが着ていると一定時間で状態復元されるらしく、汚れや草臥れは残らないようだ。

テナは奴隷だが、今のところ私が彼女に主人として命令したのは「私の不利益となる行動をしない」ということだけだ。

彼女の病気を癒して命を助けた私に対して絶対的な忠誠を抱いたらしく、わざわざ命令を行使しなくても懸命に働いてくれている。

私は彼女の働きぶりを横目に眺めながら「ステータス」と唱える。

名前：アンリ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：17  
職業：魔導士  
レベル：1  
称号：邪神の御子、ダンジョンマスター  
魔力値：3031504  
スキル：邪神オーラ（Lv.5）  
悪威の魔眼（Lv.5）  
加護付与（Lv.7）  
状態異常耐性（Lv.6）  
闇魔法（Lv.6）  
アイテムボックス（Lv.4）  
ダンジョンクリエイト（Lv.2）  
装備：悪鬼の短刀  
邪神の黒衣  
墮落のベビードール  
淫魔のスキヤンティ  
闇のパンプス  
眷属：テナ

新たに「眷属欄」が追加されてテナの名前が記載されている。  
テナに確認してみたが、このステータス画面は私しか見ることは出来ないらしく、テナが私のステータスを見ることは出来なかった。  
また、テナに「ステータス」と唱えさせてみたが、何も見えないらしい。

私がステータス画面のテナの名前に注視すると、彼女のステータスが新たに表示される。

テナ自身はステータス画面を表示させることが出来ないが、私の奴隷となった所為か加護付与の所為かは不明なものの、彼女のステータスは私のステータスの一部と見做されるようで、私は彼女のステータスを見ることが出来た。

名前：テナ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：14  
職業：魔導士  
レベル：3  
称号：奴隷、邪神の使徒  
魔力値：60532  
スキル：状態異常耐性（Lv・4）  
闇魔法（Lv・4）  
装備：邪神の巫女服  
従属：アンリ

称号の「奴隷」は仕方ないとして、「邪神の使徒」は加護付与のせいだろうな。

魔力値は6万ポイント程だが、ダンジョンマスターの平均的な魔力値が1〜2万であることを考えると、人の領域を超えている数値だろう。

今となつては加護付与前の彼女の魔力値は不明だが、彼女自身に魔法を使える認識はなかったそうなので、この数値は加護付与によって齎されたものと推測出来る。実は本人も自覚していなかった天性の魔法の才能が……という可能性もゼロではないが、まあほぼ間違いない加護付与のせいだろう。スキルについても、私の持つスキルと同じ系統があることだし。

装備の「邪神の巫女服」は加護付与によって変貌した貫頭衣のこ

とだが、それ以外に装備欄に記載が無いのは別に下着や靴を着せていないわけではなく、どうも防御力の無い普通の衣服は装備品扱いされないらしい。別に私がノーパンを強制しているわけではない。

靴や下着を買い与えた時にテナは非常に恐縮して遠慮していたが、私の精神的安定の為に強引に着させた。通常奴隷にそんな物を与え、主人は居ないと言う話だったが、全裸に巫女服なんて倒錯的な格好で傍に居られたら私が落ち着かない。

なお、邪神の巫女服は特に呪われているわけでは無いらしく、テナは普通に着替えることが出来た……差別だ。

「テナ」

「はい、アンリ様」

私の前にティーカップを用意するテナに呼び掛けると、テナは即座に答えを返してくる。ちなみに、最初は「ご主人様」と呼ばれたが、落ち着かないので名前で呼んで貰うように変えて貰った。様付けも要らないと言ったのだが、そこは譲れない一線らしく強硬に抵抗されてしまったため諦めた。

背後に控えようとするテナに自分の分のお茶を用意して対面に座るように言う。テナは私と同席することに戸惑って辞そうとするが、話があると何とか納得させる。村育ちの善なのに、どうしてこんなに従属スキルが高いのか不思議で仕方無い。

「家族に会いたい？」

いきなり切り込むように投げた私の質問に、予想外だったのかテナが硬直する。

借金奴隷であるテナは、リーメルの街から少し離れた村から借金のかたとして奴隷商に引き渡されたと聞いている。家族から無理矢理引き離された彼女からしてみれば村に帰りたいのではないだろうかと思ひ、彼女がどう考えているかを聞いてみることにした。

私としては彼女が居ないと色々困るから出て行かれるのは避けたいが、ちよつとした里帰りぐらいなら別に構わないので、彼女が望むなら認めるつもりだ。今後長い付き合いになりそうなので、不満を溜めないように配慮しようと思ったのだ。

「会いたくないと言えば嘘になります」

「それなら」

「でも、正直どんな顔で会えばいいのか分かりません。

多分、家族の方も一緒だと思います」

まあ、それはそうか。

お金の為に売った家族とお金の為に売られた少女、やむにやまれずだったとしても複雑なのは当然だ。

「分かった。

気持ちの整理が付いて会いたくなったら言つて。

数日なら構わない」

「あ、ありがとうございます！」

涙目だったが、テナの笑顔はとても魅力的だった。

さて、共に暮らすテナのためにもダンジョンの防衛力強化は最優

先事項だ。4日の間にダンジョンはまた少し改装を進めており、毎日1階層ずつ増やしたので現在は9階層までである。際限なく増やすつもりはないが、安全を確保出来るだけの難攻不落なダンジョンにしたいため、30階層くらいまでは増やすつもりだ。

自分自身で戦うことは考えたくないが、いざという時のため念のために魔力値100万ポイントは残し、一日当たり200万ポイントをダンジョンの強化に費やす。100万ポイントは階層追加に使っているため、改装や強化に使用出来るのは一日当たり100万ポイント。

初日は居住区の部屋を増やしたり家具の設置に費やした。テナ用の部屋も必要だ。必要最低限のベッドやテーブルくらいしかなかった居住区だが、漸く住居の体裁が整ってきた。少なくとも、浴場がある時点で街の宿屋よりも生活環境としては上だが。

2日目は各層に転移陣を設置した。

ダンジョンマスターである私自身はダンジョン内を自由に移動できるのだが、テナはそうはいかない。彼女には街に買い物に行つて貰ったりするため、入口まで楽に移動出来るように手段を整える必要があつた。幸いにして予め登録された魔力の持ち主しか使用出来ないように設定出来た為、侵入者に使われることは無い。

なお、居住区以外の各層の転移陣は入口への一方通行のものと居住区への非生物専用の2つを設置している。前者は斃れた侵入者にお帰り願う時に、後者は気絶した侵入者からの強奪品を送る為に使用される。

3日目は出現する魔物の追加を実施。

元々レイスと黒鋼ゴーレムが徘徊していたが、新たにスケルトンロードとカオスエレメンタルを追加した。前から順番に物理攻撃が効かない上に強力な魔法を使う死霊、全長3メートルの鋼鉄の塊の



人形、大剣を軽々と振り回す骨、光属性を除くあらゆる属性を吸収する瘴気の塊だ。

勿論、新たに追加された魔物達にも殺人は禁止しておいた。どちらも非生物なので命令には絶対従ってくれる。

4日目は各層に対して罠を設置した。

人死にを出さない方針なので、当然即死するような危険な罠は設置していない。トラバサミ、落とし穴、麻痺ガス、睡眠ガス、個人転移陣などがメインになる。ちなみに、最後のが一番えげつない。小型の陣なので転移先は同階層内限定だが、パーティからいきなり1人だけ別の場所に飛ばされるのだ。転移先で孤立したところを魔物に囲まれたらひとたまりもないだろう。

そして本日階層を増やすことによりダンジョンは10階層まで成長した。10階層というキリの良い数字なので、9階層から降りた先にある部屋に居住区への入り口を守るボスを配置することにした。無限に出没する魔物では無く、1体きりの魔物を生み出したり喚び出したりしてボスとするのだ。

100万ポイントを1体の魔物を生み出すために全て費やして、ノーライフキングを配置する。豪華なローブを羽織り王冠を頭に抱いた骸骨状の魔物が姿を見せる。全身から濃密な死の気配を醸し出すその威容はまさにアンデッドの王者の名に相応しい。

折角なので端数のポイントを使用して彼に相応しい玉座をボス部屋に追加で設置することにした。

……これで居住区の入りを隠し扉にしておけば、ここまで辿り着く猛者が居ても彼がこのダンジョンの主だと勘違いしてくれるかも知れない。

さて、これで漸くダンジョンとしての体裁が整った。勿論まだまだ強化はするつもりだが、現時点でもある程度は侵入者に対応出来

るだるじ。

## 11：注文の少ない迷宮

ダンジョン運営を始めて8日目、とうとう初めて侵入者が訪れた。階層追加によって12階層に移動した居住区で食後のお茶を堪能している私の耳に、侵入者があつた事を示すアラームが響き渡つたのだ。なお、ノーライフキングは10階層に配置したままだ。居住区を守るボスとして配置したが、今後も階層を追加していくことを考えると10階層というキリの良い階層に中ボスとして君臨して貰つた方が良いかと思つた為だ。ちなみに、中ボスは居ても大ボスは居ない。いや、私戦う気ないし。

ノーライフキングには10階層から11階層に降りる階段の前に必ず通らねばいけないボス部屋を作りそこで構えて貰っている。

なお、簡単にボスに挑まれても味気ないので、RPGでよく見るような同じ階層内から石板を集めて正しい配置にするとボス部屋に入れる謎解きを用意してみた。10階層の最奥にある台座に太陽と月と星の3種類の石板を嵌め込むと壁が開きボス部屋に入れる仕組みだ。ご丁寧に台座には「不死者の玉座に挑む者よ、正しき星辰を揃えよ」のメッセージ付き。最早謎解きでは無くなっている気もするが、様式美というものだろう。

さて、10階層の件はいいとして今回の侵入者について見なければいけない。私はテナが淹れてくれた紅茶のカップを持ったまま執務室に移動する。

執務室には椅子と小テーブル、そして台座のみが置いてあり、台座の上にはダンジョンコアが安置されている。私は椅子に腰掛けると、ダンジョンコアに手を翳して侵入者の様子を映し出すように念

じる。ウィンドウが開きダンジョン内の映像が映し出される。1階層を映したそれには2人の冒険者らしき男が映っており、目を向けると彼らのステータスが表示された。

名前：ルフリー  
種族：人族  
性別：男  
年齢：25  
職業：剣士  
レベル：14  
称号：なし

名前：ベネト  
種族：人族  
性別：男  
年齢：16  
職業：剣士  
レベル：4  
称号：なし

ダンジョン内で私とテナ以外の人物にあつたことが無かつた為今まで知らなかつたが、ダンジョンコアを通せばダンジョンの侵入者のステータスも見れるようだ。但し、自分やテナのステータスと異なりスキルや装備などは見れなかつた。

それにしても、コンビにしては随分と年齢やレベルの差があるように思える。ルフリーの方は金属製の鎧を着ているのに対して、ベネトの男は革製の軽装鎧を装備している。2人ともロングソードを手に持っているが、ベネトの持つそれよりルフリーの持つ剣の方が格段に業物の雰囲気放っている。年齢などだけではなく、装備の面でも差があることが見て取れた。年長者が新人をサポートしながら

ら経験を積ませるために連れてきた、といったところだろうか。

よくよく考えてみれば、このダンジョンの変貌が未だ広まっていないなら彼らは「初心者ダンジョン」のつもりでここに来た筈だし、その想像が正しそうだ。実際、彼らは様変わりしてしまったダンジョンの様相に入口で留まって困惑している。しかし、やがて中の様子を探ることにしたらしく2人組は警戒しながら奥へと足を進めた。

入口のある部屋から通路を慎重に進む2人の前に、レイスと黒鋼ゴーレムが1体ずつ姿を現す。驚愕に硬直する2人だが経験の差かルフリーの方がいち早く我に返り、ベネトの方に向かって何か叫ぶと同時に剣を構える。

しかし、ベネトの方は恐怖に竦んでおりその叫びに反応出来なかった。

レイスが闇の塊を放つと、ルフリーは咄嗟に横に飛んで直撃を躲すがベネトは反応出来ずに弾き飛ばされて壁に叩き付けられる。ルフリーは必ずすると崩れ落ちるベネトの方を気にしながらも油断せずに剣を構え直す。

そこに黒鋼ゴーレムが近付いて拳を振り降ろす。ルフリーはその拳を剣で斜めに受け流しながら右に躲すと、両腕で弧を描くように黒鋼ゴーレムの左脇へと剣を叩き付けた。しかし、その結果はルフリーの持つ業物の剣が呆気なく折れると言う無残なものだった。剣を振り切ったルフリーは自分の持つロングソードが中程から折れ飛んだ事に呆然とする。

そこに先程受け流された腕をそのまま横に振るう黒鋼ゴーレム、自失していたルフリーはかわすことが出来ず、まともに胴体に直撃を受けると5メートル程も吹き飛ばされ地面に叩き付けられた。何とか身を起こそうとするルフリーだが、そこへレイスが再度闇の塊を放ち、地面に倒れて咄嗟に動けなかつたルフリーは横殴りに再度

吹き飛ばされた。今度は完全に意識を刈り取られたらしく、立ち上がることは無かった。

気絶した2人に黒鋼ゴーレムが近付くと彼らの持つ武器とアイテムそしてお金を回収し、彼らをダンジョンの入口のある部屋の前まで引き摺るとそこから部屋の中に向かって投げ込んだ。

なお、入口のある部屋は居住区と同じように魔物の立入禁止場所になっているため、黒鋼ゴーレムは部屋の中には入れない。各階層からの転移陣の行き先もこの部屋となっている。

気絶した侵入者を放り出した黒鋼ゴーレムは先程回収したアイテムを拾うと、1階層の物品転移陣に向かって歩き始めた。直に彼が回収したアイテムがこの居住区に送り届けられるだろう。

一先ず、今回の侵入者については撃退が完了したと見て良さそうだ。

実のところ、殺さないように命令したとはいえ見ていてヒヤヒヤした。手加減はする筈だが、それでも攻撃している以上は当たり所が悪ければ死んでしまう可能性はゼロには出来ないからだ。侵入者がある程度の実力者であれば致命傷を避けるように反応出来るだろうからそんな事故が起こる確率は大分低くなる筈だが、今回は明らかに初心者が居た為心配で仕方無かった。

私はすっかり冷めてしまった紅茶を思い出したように飲み干すと執務室を出て倉庫に隣接する物品転移陣のある部屋へと向かった。

通路を歩きながら、先程の2人組の冒険者について考える。今はまだ1階層の入口のある部屋に横たわっているだろうが、彼らはこのダンジョンの異変を認識した。意識を取り戻せば街に戻り、冒険者ギルドにこのダンジョンの変貌を報告するだろう。

その場合、冒険者ギルドの対応としては2つ考えられる。

1つは調査のためにより高レベルな冒険者を送り込んでくること、

もう1つは公示して攻略者を募ることだ。ただ、攻略者を募るにしても難易度が分からなければ難しいため、おそらく最低一度は調査団が派遣されてくると予測している。今回とは異なり、それなりに高レベルのパーティが送られてくるだろう。何れそうなるとは覚悟していたが、いざその時が来ると不安で押し潰されそうだ。

物品転移陣のある部屋に入ると、丁度回収された剣とアイテムが送られてきたところだった。冒険者を撃退してアイテムを奪う……深く考えるまでもなく強盗と変わらない行為だ。ただ、倒れても武器とアイテム、お金を奪われるだけで生きたまま入口に戻されるとするのはダンジョンとしては破格の扱いでもある。これが他のダンジョンであれば確実に死んでいるのだから、感謝しろとは言われないがまだマシなのだと思うて欲しい。

なお、武器は奪っても防具を奪わないのは慈悲……などではなく、悪臭に耐えられないからだ。入浴が一般的でないこの世界、男性が何日も水浴びすらせずに身に付けている防具から醸し出される臭いは、想像するだけで身の毛がよだつ。

今回の戦利品はロングソードが2本（但し片方は折れている）と銀貨3枚と銅貨25枚、薬草が4枚、そして冒険者カードが2枚  
って、冒険者カード!?

拙い、これを奪ってしまうのは流石に悪いし、そもそも冒険者カードもお金も奪ってしまうと彼等は街に戻れなくなるので、予定が色々狂ってしまう。

私は慌てて入口の部屋に転移すると、彼等が未だ意識を取り戻していないことを確かめて冒険者カードを手早く返した。何とかフォロワーが間に合ったことに安堵しながら、私は元の部屋に転移する。後で、冒険者カードだけは回収しないようにダンジョン内の魔物に命令しておかないといけない。

最初の侵入者があってから2日後、再びダンジョンにアラームが響き渡った。どうやら、冒険者ギルドから調査のために派遣されてきた冒険者達が侵入してきたらしい。

2人組を叩き出したのが2日前の昼過ぎ、街に戻った彼らが冒険者ギルドに報告、対応を決めたギルドが翌日1日掛けて人集めと準備、そして今日調査団を派遣してきた……うん、タイミングも符合する。

私は足早に執務室に向かうと、以前と同じ様に椅子に座りダンジョンコアに手を翳した。

1階層を映した映像には4人の男性が映っていた。

名前：ヴァイフ  
種族：人族  
性別：男  
年齢：32  
職業：剣士  
レベル：25  
称号：なし

名前：バナード  
種族：人族  
性別：男  
年齢：29  
職業：剣士  
レベル：22  
称号：なし



名前：セオドル  
種族：人族  
性別：男  
年齢：29  
職業：魔導士  
レベル：20  
称号：なし

名前：エセル  
種族：人族  
性別：男  
年齢：26  
職業：スカウト  
レベル：19  
称号：なし

今度はかなりバランスの取れたパーティのようだ。加えて一番レベルが低いエセルですら先日のルフリーよりレベルが高い。

おそらく、リーメルの街の冒険者ギルドが即座に動かせる中でも高レベルのパーティなのだろう。流石にベテランらしくスカウトを先頭に立てて畏の有無や索敵を行い、慎重かつ安全に探索を行っている。

途中で遭遇した黒鋼ゴーレムに対しても、剣士が防御を固めている間に魔導士が土の魔法でゴーレムの足元を崩して動きを止めて対応するなど、役割分担がキツチリ決まっているパーティだ。

彼らは順調に1階層を探索すると階段を見付けると2階層へと降りた。

2階層目も最初は順調に探索を行っていた彼らだが、何故か途中

から急激に精彩を欠くようになった。立ち止まってしきりに議論を交わしているが、表情に焦りを感じる。

話している内容が分からないので、彼らにとって都合が悪い事が起こっていることしか分からない。ダンジョン内の映像を見ることが出来るのは非常に便利なのだが、音声を聞く事が出来ないのは不便なので何とか出来るものなら改善したいな。

その後も探索を続けていた彼らだが、集中を乱していたエセルが麻痺ガスの罫を踏んでしまい後ろに居たセオドルを除いた3人が麻痺。その間隙を突くように黒鋼ゴーレム2体に襲われて呆気なく全員が倒れた。

## 12：邪神の追剥

冒険者ギルドの調査団と思しきパーティを追い返した翌々日から侵入者が一気に増えた。大体1日に平均して3〜5組のパーティが襲来してくる。その度にアラームが響き渡って辟易させられたため、設定を変更して4階層まで到達したら鳴るように変えた。今のところ侵入者の8割が1階層で倒れ、残りの大半も2階層で倒れている。3階層まで到達したのは再挑戦してきた先日の調査団パーティだけで、4階層への到達者は居ない。

『ぎゃあああああー！』

『ち、ちくしょう……こんなところで……』

なお、ダンジョンコアを通しての監視については結構な魔力を費やす必要があったが音声も聞き取れるように変更出来た。

その結果、調査団のパーティが2階層で調子を崩した理由が判明した。どうもこのダンジョンの中には瘴気が漂っているらしい。確かに言われてみればダンジョンの属性の中にそんな単語があったような気が臍氣にするが、あくまでダンジョンとしての特性であって私のせいではないと信じたい。瘴気とかがって何か臭そうだし、断じて否定したい。

『なんて禍々しいダンジョンなんだ。』

『こりゃ、ダンジョンマスターも相当ヤバい奴だぞ』

『ああ、気を引き締めていかないとな』

ちなみに、彼らの会話を盗み聞きしたところ、瘴気にも色々種類があるそうなのだが、このダンジョンの瘴気は毒みたいに物理的

な効果はなく精神に対して影響するそうだ。簡単に言ってしまうえば恐怖心を増大させるものであり、ただでさえ警戒しながら進まなければいけないダンジョンにおいては一気に精神を疲弊させることになるという厄介な代物だ。あくまで精神的なものであって物理的にどうこうするものではないので気をしつかり持てば大丈夫なようだが、そうやって気を張っていること自体も精神的疲労を助長するのだから性質が悪い。

『く、瘴気が濃過ぎる！ これ以上は危険だ！』

『まだ2階層だぞ！？』

こんな浅い階層でこれなら、下はどれだけヤバいんだよ！？』

1階層は外に繋がっているせいか殆ど影響が無い程瘴気が薄いのに対して、2階層以降は階層を増すごとに濃くなっていく。

……やっぱり私が最深部に居るからか？

いやいや、邪神オーラは人間に対しては効果が薄い筈だから、他の原因だろう。だから私は悪くない。

襲来する冒険者の数に比例して、回収されるアイテムの量も増えている。正直、送られてくる回収品の仕分けで結構な時間を取られてしまっている。ぱつと見ても何だかよく分からないものも混ざっているため、アイテムボックスに一度放り込んで名称を確認して……とやっているとは意外に時間を喰ってしまうのだ。

そして、一生懸命仕事をしてはいるものの、悲しい事に時間を掛けて仕分けをする割には要らない物が多い。量産品の剣など何十本も持っただけでも仕方ないので街に持って行って換金したいところなのだが、ダンジョンで喪失した筈のものを売りに来た人間が居たら確実に怪しまれるだろうから出来ない。それならば回収するのを止

めればいい話なのだが、一旦始めてしまった以上途中から変更するのも変な憶測を生みそうで二の足を踏んでいる。

お金だけ回収するようにしとくんだった、剣とかもう見るのもウンザリだよ。

『ああ……ダメだ、意識が……』。

こ、この剣だけは……2年も金を溜めて漸く買ったこの剣だけは……』

と言うわけで、宝箱を置いてみることにした。

ダンジョンクリエイトのスキルで宝箱生成ボックスというものが設置出来たのだ。宝箱生成ボックスとは中に入れたものをダンジョン内にランダムに宝箱として設置してくれる優れ物だ。通常のダンジョンマスターは侵入者をダンジョン内で殺害して魔力を奪うことを目的としている為、獲物をおびき寄せるための客寄せとしてこの宝箱生成ボックスを使用する。強力な武器や高価な宝石などを宝箱に入れておき、欲に釣られてやってくる侵入者を獲物とするのだ。

うちの場合は回収品の中で不要なものばかり放り込んでいるので、まるで廃品回収みたいだけ。

尤も、不要品とは言え武器なんかはそれなりの値段で売ることが出来るだろうから、客寄せの効果もないわけでもない。それに、こっやってダンジョン内で失われたものが宝箱から回収出来ることが広まれば、そうやって回収したと見せ掛けて換金も可能になる。まあ、数が多いと流石に不自然なので、数本ずつ売るようにしないといけないけど。

なお、はずれの不要品だけだと微妙かと思ったので、10本に1本くらいの割合で加護付与した当たりの品を混ぜておく。呪われているかも知れないが、私の短刀を見る限り性能はいい筈だ。

『こ、この剣は……？』

『こりゃあ教会に報告しないと拙いな』

「ただいま戻りました」

「おかえり」

街へと買い物に行つて貰つていたテナが帰つてきた。

なお、訪れる冒険者の数が増えたため裏口を作つてテナにはそこから出入りするようにさせた。多少偏見が混ざっているかも知れないが、冒険者の半数くらいはガラの悪い男だ。街中なら兎も角こんな人通りの無い場所でテナのような女の子と遭遇すると絶対に絡んで来ると容易に想像出来る。

勿論街中でも絶対大丈夫とは言い切れないため、彼女には街で自分用にローブを買つてあまり顔を見せないように指示しておいた。

「買い込んできた食糧については食糧庫に入れておきました」

「ありがとう。」

それで、例の件は？」

「はい、こちらをご覧下さい」

テナには、買い物のおついでに冒険者ギルドでこのダンジョンのこととがどう扱われているか、それとなく様子を見てくるように頼んでいた。その結果について聞くと、彼女は一枚の羊皮紙を差し出してくる。

そこには、こんな記載がされていた。

依頼：リーメル南の新ダンジョン「邪なる追剥の洞窟」のダン

ジョンマスター討伐

報酬：金貨30枚

条件：ダンジョンコアの提出

期限：無期限

「邪なる追剥の洞窟？」

他にも新しくダンジョンが発見されたのだろうか？

「どうも冒険者ギルドでは、このダンジョンのことをそのように名付けたらしいです」

って、このダンジョンのことか。考えてみれば冒険者もギルドもダンジョンの正式な名称なんて知る術が無いのだから、別の呼び名を付けることは当然と言えば当然だ。

それにしたって「追剥」って……いや、確かに侵入者からアイテムやお金を奪って放り出しているから「追剥」と言えないこともないが、他のダンジョンに比べればまだ良心的な筈なのに印象が酷い。

「この依頼は通常の依頼と異なり受注不要で、条件さえ満たせば報酬が受け取れるそうです。

依頼用紙が各パーティに配られてました」

それは最早依頼と言うよりは賞金首といった方が正確なのではないだろうか。まさか、私が賞金首になるとはこの世界に来た当初は想像も……出来ないこともなかったか、スキルの説明とか見た時に報酬の金貨30枚は結構な大金だから、侵入者が一気に増えたのも領ける。攻略が進まなければギルドは報酬額を引き上げるだろうから、今後も侵入者は増える一方だろう。

普通のダンジョンであれば侵入者は途中で倒ればまず命が無い

が、このダンジョンではよっぽどの不運が重ならない限り命を落とすことはまず無い。つまり、他のダンジョンと異なり諦めなければ再挑戦が可能なので侵入者は増えることはあっても減ることは少ない。

何としても最下層まで突破出来ないようにダンジョンを強化しなければ。そう決意すると、私は執務室に戻ることにした。



### 13：絶体絶命

侵入者が襲来したことを示すアラームが響き渡る。

鳴る条件を4階層への侵入に切り換えて以降、久しく聞く事が無かったその音に私は緊張を高めた。いつも通り執務室の椅子に座り映像を表示して侵入者の様子を見ると、そこには4人のパーティが映っていた。その内2人が女性だ。

侵入者パーティのステータスを確認すると、そこには驚愕すべき事項が表示されていた。

名前：アーク  
種族：人族  
性別：男  
年齢：25  
職業：剣士  
レベル：38  
称号：聖剣の勇者

名前：ジオ  
種族：人族  
性別：男  
年齢：28  
職業：剣士  
レベル：33  
称号：なし  
名前：フレイ  
種族：人族

性別：女  
年齢：24  
職業：魔導士  
レベル：33  
称号：なし

名前：ウイディ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：19  
職業：修道士  
レベル：31  
称号：なし

勇者……？

先頭を歩く短い金髪をしたイケメン剣士の称号に驚愕する。

いや、こんなファンタジー世界なのだから勇者が居ることは然程おかしくないのかも知れないが、いざ目の前に登場すると矢張り驚かざるを得ない。加えて、称号として表示されているということは「何か」に正式に認められているということだろう。それが神なのか国なのかは分からないが、これまで100人近い侵入者が居たが、称号持ちは皆無だった。

しかし、名前負けでない証拠に勇者本人はもちろん、他のパーティメンバーもこれまで訪れた者達とは一線を画すレベルの持ち主だ。

これはもしかして絶体絶命のピンチなのでは……。

ダンジョンの階層は既に27階層まで増えているが、果たして彼らを止められるだろうか心配になってきた。仮に彼らがここまで到

達した場合、私はどうなる、何をされる。勇者が持つよく斬れそうなギラリと輝く剣を見てみると、背中を嫌な汗が流れる。私は彼らがここまで来ないことを祈りつつ、探索している彼らの道程を監視し続けた。

『そろそろ結界の効果が切れる頃なので結界を掛け直しますね』

『ああ。頼むよ、ウィディ』

シスター服を纏ったウィディがアークに対して進言すると、彼等は広めの部屋に立ち止まった。ウィディが呪文を詠唱するとパーティの全員が一瞬白い光に包まれた。発光は一瞬で収まったが、よく見ると彼らの全身が淡く光っているように見えた。

『これでまたしばらくはこの厄介な瘴気を防げるな』

『4階層目まで来ると大分濃くなってきているし、ウィディの結界が無ければとても進めないわね』

『ふふ、お役に立てて幸いです。』

アーク様は聖剣の加護があるから意味が無いかも知れないですけど』

『いや、助かるよ。』

幾ら聖剣の加護があるとはいえ、こんな邪悪な瘴気に包まれていると思うとあまり気分が良くないし』

邪悪で悪かったな。

それにしても、修道士なら瘴気を防ぐ手段もあるのか。これは重要な情報だ。アークが持つと言う聖剣の加護と言うのも気になる。

『それにしてもこのダンジョン、出来たばかりなんだよな。』

一体何階層まであるんだ』

『普通は何年も掛けて成長するものですからね』

勇者パーティは結界を貼り直すために立ち止まったのを契機として今居る部屋で休憩をするつもりのようにだ。周囲への警戒に気を配りながら、部屋の中に座り込んで話し始めた。

『それなんだが、ここには元々ダンジョンマスター討伐済の3階層のダンジョンがあったらしい。』

今回のダンジョンマスターはそのダンジョンを乗っ取って元になっていると言つのがギルドの見解だ』

『それでも、この階層が4階層目であることを考えると、短期間で成長しているのは間違いないわね』

『確かにな』

『まあ、流石に2桁ということは無いだろう。』

『このダンジョンマスターがいつダンジョンを乗っ取ったか知らないけど、長く見積もっても一ヶ月は経って居ないという話だし』

いや、27階層だ。

彼らが樂觀してくれている方が都合がいいので敢えて言わないが。

『ダンジョンマスター、か』

『どうした、フレイ』

『いや、このダンジョンのダンジョンマスターがどんな相手なのかと思っただけ。』

『どうにも印象がチグハグで……えげつない瘴気を放っているかと思えば、畏は非致死性の物ばかりだし』

妖艶な魔導士のお姉さんが考え込むところを見たアークが尋ねると、彼女はそんな疑問を口にする。確かに傍から見るとチグハグに見えても仕方ないか。瘴気なんて好きで放っているわけではないし、私からすれば方針は終始一貫しているつもりなのだけだ。

『そう言えば、この「邪なる追剥の洞窟」では今のところ一人の死者も出ていないと聞くな。

魔物にやられて気絶しても、武器やアイテムだけ奪われて入口に放り出されているらしい』

『ああ、だから「追剥」なんですね』

『だからと言って油断するわけにはいかない。

出没する魔物は気を抜いたらあっさり全滅しかねない強敵ばかりだし、畏だつて非致死性と言つても下手をすれば一気に窮地に陥る危険な代物だ。

それに、万が一聖剣を奪われたりしたら聖女神ソフィア様に顔向けできない』

『邪悪な存在が聖剣に触れることが出来るとは思いませんが、そうですね』

聖女神ソフィア、か。それがこの世界で信仰されている神様の名前なのか。そう言えば、リーメルの街の教会に行った時に礼拝堂の奥に女神像があつたような気がする。あの時はそれどころじゃなかった。たので細部までは覚えていないけど。

元の世界では神様なんて信じていなかったけれど、あの邪神が居る以上は神様が居ても不思議ではない………と云うか、邪神しか居ないのは嫌なので居て欲しい。まあ、実際に修道士が力を行使出来ている以上、少なくとも神の力は実在するのだと思う。

アークの称号と先程の話からすると、その女神に聖剣を授かったということなのだろうか。聖剣と言つからには聖なる力を宿しているのだろうし、アンデッドが多いこのダンジョンでは天敵とも言える存在だ。

教会の結界に拒絶されたことを考えると私も痛い目に遭いそうだが。勿論そうでなくても斬られるのは御免だが。

『ま、どんな奴かは分からないけれど性格が捻じ曲がっているのは間違いないな』

『あはは、全くだね。』

金にがめついみたいだから、格好も成金みたいに着飾ってるかもよ。

きつと外見も太った醜い肉達磨みたいな奴さ』

『アンデッドが多いみたいだから逆にガリガリの骨が出てくるかも知れないぞ』

『ふふ、そうですね』

むかつ。 な、殴りたい……。

軽口のもりなのだろうけど、幾らなんでも乙女に対して酷過ぎる言い草ではないか。私は沸き立つ怒りのままに4階層に現在出沒している魔物を彼らの元に向かわせると共に、魔力を注ぎ込んで5階層以降の魔物の出沒速度を倍増させた。

映像越しに怒りに燃える私に気付くこともなく、勇者パーティは休憩を切り上げて再び探索に向かった。

スカウトが居ない彼らがどうやって罨を避けているのかと思っただが、どうも勇者が勘1つで事前に察知しているらしい。あるいはこれも聖剣の加護とやらなのだろうか。会話を聞く限りではその可能性が高いが、随分と万能な性能の剣だ。と言うか、それは既に「武器」の範疇を超えている気がする。

流石の高レベルパーティと言うべきか、私の操作によって密度の増した魔物の襲撃も軽々と退けられている。スケルトンロードはあくに聖剣で斬り伏せられ、黒鋼ゴーレムの鉄拳もジオの盾で防がれる。レイスはフレイの放つ炎や吹雪で消し飛ばされ、カオスエレメンタルすらウィディの放つ光魔法で浄化されてしまう。

勇者パーティは全くの無傷と言うわけではないものの大きな怪我

を負うこと無く順調に探索を進めており、1階層当たり大体2〜3時間程で攻略している。現在は7階層まで到達しているが、既に深夜と呼べる時間帯であり流石に彼らの疲労も大分溜まってきているらしく、動きに精彩を欠く様子が見て取れた。特に体力的に劣る後衛の女性陣は今にも倒れそうなくらいふうらついている。

いや、よく見ると勇者だけは元気なままだな。聖剣の加護なのか、素なのかは分からないけど。

『少し休まないか、アーク』

女性陣の疲労を見て取ったジオが広めの部屋でアークに対して進言する。

『そうだな、このダンジョンに入って既に半日以上だ。』

まさか、ここまで深いとは思わなかったから野営の準備は足りないが、交代で仮眠を取ろう』

アークの言葉にフレイとウィディは深く安堵して座り込む。

『た、助かったよ』

『…はあ…ひい……』

ウィディに至っては既に言葉も出ないようだ。

1階層2時間としても入口から私の居る27階層までは2日以上掛かる計算になる。ダンジョン内で野営することを予め想定して準備していなければ、攻略は難しいだろう。そう考えると、取り合えず今回彼らに攻略されることはなさそうだ。少しホツとした。

なお、本当に余談となるが各階層の最初の部屋にトイレを設置することにした。このダンジョンでここまで長時間の探索をしているのは彼らが初めてなので、その問題には気付かなかったのだ。

おかげで金髪イケメン勇者の用足しという嫌な場面を目撃してしまった……言っておくが指の隙間から覗いたりしてはいない。

女性の場合は更に深刻であり、美少女シスターの顔を真つ赤にして半泣きで告げる姿に本気で同情したため、設置に踏み切った。休憩時の彼らの軽口には腹が立っていたが、それでも同性としての同情の方が勝った。

こんな親切なダンジョン、他には無いよ？

— 先ず朝までは彼らも動かないだろうし、私も今日は寝ることにしよう。



一夜明けると私は身体に掛けていたローブを羽織って洗面所に向かう。取り合えず触れていれば呪いによる強制着衣は発動しないため、寝る時には布団の中で毛布代わりにローブを掛けるようにしている。

顔を洗って眠気を取ってから台所に併設させたダイニングへと向かうと、台所では既にテナが朝食の準備をしてくれていた。

「おはよう」

「あ、おはようございます、アンリ様」

声を掛けると元気良く返事が返ってくる。

ダイニングのテーブルに着くと、あつと言う間に目の前に朝食が運ばれてくる。焼いたパンに目玉焼き、サラダにスープと健康的な朝食の姿だ。欲を言うと朝は和食にしたいのだけど、米も味噌も無いので無理を言っても仕方ない。

同じメニューを向かいに用意し、テナもテーブルに着いた。頻りに固辞されたためこうやって一緒に食事をして貰うまでに一苦労だったが、今では基本的に毎食一緒に食事を摂っている。私は王侯貴族ではないので、後ろに立たれて1人だけ食事するとか精神的に辛い。

「いただきます」

「いただきます」

はむはむ、美味しい。素朴ではあるがテナの料理は普通に美味しい。テナがまだ村に居た時にどんな暮らしをしていたかは敢えて聞

いていないが、彼女の性格からして真面目に親の手伝いもしていたのだろう。

「そう言えば」

「はい、何でしょう」

「聖女神ソフィアと聞いて何か分かる？」

「聖女神様ですか？」

「勿論知ってますけど……」

食べながら話を聞いてみると、この世界のスタンダードな宗教である聖光教により崇拜されているのが件の聖女神様らしい。この世界を創造した神様であり、世界を破壊しようとする邪神と戦っている光の神として、加護や啓示を齎して人々を導くそうだ。特に強い加護を受けた者は勇者となり、邪神によって生み出され人族に災厄を齎す魔王を倒す存在となるとのこと。

「あ、あの…… 勿論今はアンリ様に忠誠を誓っています！

聖女神さ、いえ聖女神のことは何とも思ってますん！」

「別に聖女神様と呼び続けても構わない」

考え事をして黙った私に妙な勘違いしたのか焦ったテナがフォロ―しようとする。命を助ける代償とは言え邪神の加護なんてものを付与してしまったテナには、その力が邪神に由来することは説明しなければならぬと考える話しておいた。異世界からのトリップとかは省いたが。

ただ、生憎と私は邪神に余計な力を植え付けられただけの人間であって別に聖女神様とやらに隔意は無いし、私に害が無いなら寧ろ頑張つてあの邪神を殴り飛ばして欲しい。

「勇者については何か知ってる？」

「勇者さ……いえ、勇者ですか？」

聖女神によつて加護が与えられた特別な人で魔王を倒す為に戦つて聞いてます。

あと、確かお婆ちゃんのお母さんが子供の時に、勇者が魔王を倒したため国を上げて盛大なお祝いが行われたと聞いたことがあります」

え？ 魔王討伐済み？

この世界の平均寿命は知らないけれど、テナの曾祖母が子供の時なら少なくとも50年以上前ではあると思う。今このダンジョンに侵入して来てる勇者パーティは年齢的に違う筈だ。それなら、彼は何のために加護を与えられたのだらう。もしかして他にも魔王が居るのかな。

「魔王つて沢山居るの？」

「いえ、少なくとも私は1人しか聞いたことないです。

ただ、倒してもやがて復活するって村に教えに来てくれた神父さんは言っていました」

成程、50年前に倒された魔王が復活して、それに対抗するためにアークは「今代の」勇者として選ばれたのか。

「魔王つて何処に居るか知ってる？」

「分かりませんが、魔族領の何処かに魔王城があつてそこに居ると言われてます」

「魔族領？」

「あ、はい。この大陸の西側の魔族が支配している土地のことです。」

東側の人族領は幾つかの国に分かれています、魔族領は魔王が全て支配していると言われています」

その後細かく聞いてみると、リーメルの街が属するフォルテラ王国は大陸の丁度中央部に位置するらしい。大陸の中央と言えば聞こえが良いが、東西で人族と魔族に分かれて統治されているのなら中央は最前線ということになる。勇者パーティは魔王を倒しに魔族領に向かう途中でリーメルに立ち寄ってダンジョンのことを聞き付けたりしたのだろうか。

と言うか、こんなところに寄り道せずにとっとと魔王討伐に向かつて欲しい。はよ行け。

朝食を終え、洗い物を始めたテナに紅茶だけ淹れて貰うと、パーティカップを持って執務室に向かう。

映像を確認すると、勇者パーティは既に簡易な野営を片付けて探索を再開していた。彼等が今居るのが7階層だから順調に行けば夕方頃に10階層のノーライフキングが守る部屋へ到達する見込みだが、正直、素人の私にはどちらが強いかなどサツパリ分からないのだが、もしもボスが敗北するようなら色々と考えないといけない。

今回彼らはダンジョンの階層がもつと浅いと思っていたためあまり準備してきていないということ、ここまで辿り着くことはないと思うが、次があれば万端の準備を以って攻略に掛かるだろう。ノーライフキングに勝てないなら構わないが、もしも倒せるようであれば何れはここまで来てしまう可能性が高い。

彼らが再びこのダンジョンを訪れる時までに対策を整える必要がある。緊張しながら探索を監視する私を余所に、彼らは順調に階層を攻略していった。

私の予想通り夕方になって10階層に到達した勇者パーティだが、私の予想と異なり10階層のボス部屋の前で足止めを喰らっていた。彼らが首を捻って考え込んでいるのは以前私がノーライフキングの部屋の前に様式美として設置した台座。

『「不死者の玉座に挑む者よ、正しき星辰を揃えよ」か。

一体どう言う意味だ？』

『このダンジョンはアンデッドが多いですから、「不死者の玉座」とはこのダンジョンの主であるダンジョンマスターを意味していると思います』

不思議そうな顔をするジオに、ウィデイが答える。

そうそう、そう思ってくれると私は凄く嬉しい。そして、ノーライフキングを倒して満足して帰ってくれるともっと嬉しい。

『成程、そうするとダンジョンマスターと戦いたければ「正しき星辰を揃えよ」ってことか。

正しき星辰って何だろう』

『星辰は星のことだね。

多分この台座にあるマークは星を指していると思うんだけど』

あ、そう言えば太陽と月と星のマークを付けたけど、この世界で通じるかどうかまでは考えなかった。元の世界では当たり前のように通じるが、この世界では何のマークだか分からないようだ。

まあ、推測で星だと分かってくれたから問題ないか。

『このマークをどうにかして揃えればいいのか？』

……動かねえぞ』

『魔力を籠めてみても駄目だね』

え？ いやいや、貴方達1枚だけだけどちゃんと石板拾ってたでしょうに。

もしかして忘れてる？ それとも、石板のマークをちゃんと見てないのか？

『アーク様、聖剣の導きで何か分かりませんか？』

『済まない、特に何も……』

『い、いえ！ 無理を言っつて済みません！』

畏を見抜けるチート剣も流石にこんなしょうもない謎解きには対応してないか。ホツとしたような微妙に残念なような。

『聖女神様から授かった聖剣でも無理なのかよ。

かなりの難問だな。

肉体労働専門のオレには荷が重いぜ』

『んなこと言っつてないで、一緒に考えなさい！』

あれ…？ どうも雲行きが怪しいぞ。様式美と思っつて設置したポーン問題だった筈なんだけど、本気で頭突き合わせて悩まれてしまった。階層内から石板を集めてくるのが面倒だけど、謎解き自体は2秒で終わるものだと思っつていたのだが。

こら、台座を斬ろうとするな。

石櫃でもないから蓋なんて開かないっつてば。

やめんか、脳筋！

『駄目だ、どうすればダンジョンマスターが出てくるのかサッパリ分からない。』

浅い階層のダンジョンだと思ってたから準備も足りない。

悔しいけれど、ここは一旦引き返すことにしよう。』

『クツ、ダンジョンマスターを目の前にして引き下がるしかないなんて……っ！』

え？　そこまで来ておきながらボスと戦わずに帰るとかあり得ないでしょう。

私としてもノーライフキングとどちらが強いか分からないと色々困る。

ちよ、待った。　本気で帰るな。

せめて手に入れた石板を置いてけ、ドロボー！

## 15：ラスボス戦

戦慄の勇者パーティ襲来からまた数日が経った。

予想を斜め下に裏切ってくれた彼らの行動は、拍子抜けも相俟って緊張しまくっていた私の心に激しい徒労感を与えてくれた。戦いもせずにダンジョンマスターにダメージを与えるとは……勇者恐るべし。

もうあの脳筋達は勇者（笑）でいいや。

しかし、1つ理解出来たこともある。

元の世界のゲームでダンジョンと言えば謎解きが当たり前だったが、この世界ではそうではないと言うこと。期せずして勇者パーティを追い払ってしまったわけだが、考えてみればこのダンジョンの攻略難易度が上がるのは私にとって安全性向上として歓迎すべきことだ。

と言うわけで、11階層から20階層までを謎解きやギミックを設置するように改装してみた。

昔やったロールプレイングゲームのダンジョンの仕掛けを思い出しながら参考にして色々盛り込んでみる。クイズ、動く床、回転床、トロツコ、順番通りに押すスイッチ、わざと落とし穴に落ちないと進めない構造、見えない床、2つの入れ物の水量を均等に調節する仕掛け、決まった順路に進まないと最初に居た部屋に戻される無限回廊。

うん、ちょっとやり過ぎたかも知れない。まあ、これでも一応命が掛かっているのだから、自重は要らないだろう。少なくとも、あの勇者パーティはもう一生最下層に到達することは無さそうだ。

あ、持ち逃げされた石板もちゃんと補充しておいた。



満足してダンジョンの改装を終えた私の耳にアラームが響き渡る。また4階層に到達した者が……って、まさか勇者パーティがもう来たのか？

そう思っただけ映像を表示すると、そこには銀色の長い髪をたなびかせた美しい少女が映っていた。甲冑とドレスが合わさったような紅い衣装をまとったその少女は武器も持たずに素手で黒鋼ゴーレムを引き裂いている。

名前：レオノーラ＝ロマリエル

種族：魔族

性別：女

年齢：16

職業：魔導拳士

レベル：24

称号：魔王の後継

「魔王……？」

勇者に引き続いて今度は魔王！？ 呪われてるんじゃないか、このダンジョン。って、よく見ると「魔王」ではなくて「魔王の後継」だった。後継と言うからには娘か何かなのだろうか。

魔族は初めて見るけれど、物凄い美少女であることを除けば人族と外見上の違いは無い。しかし、その強さは桁が違う。これまでの侵入者でも彼女と同じくらいのレベルの者は何人が居たけど、どう見ても彼女は先日の勇者パーティと同じかそれ以上の強さに見える。どうもレベルは種族毎の強さであって、同じレベルでも種族が異なれば強さには差がある様だ。そもそも、たった1人で4階層まで来られる時点で人族のレベル20との間には隔絶した差がある。

恐ろしい事に物理攻撃が効かない筈のレイスですら素手で消し飛

ばしている……って、そんなバカな。

あ、もしかして魔力を手に纏って攻撃しているとかそういうのだから、それなら触れない筈の死霊に触れることも納得がいく。どっちにしても人間業じゃないけど。

『フツ、こんなものか』

甲冑ドレスの裾を手ではたいて埃を落としながらひとりごちるレオノーラ嬢。威風堂々としたその仕草は魔王の後継という称号を見て居なければ戦乙女かと思間違えそうだった。

『この分なら邪神を名乗るダンジョンマスターも大したことは無さそうだな。』

すぐに辿り着いて叩きのめし、我ら魔族に喧嘩を売った事を後悔させてやるっ』

はい？

何か全く心当たりのないことで物凄い敵意を受けている様だ。邪神を名乗る？ 私がいつそんなことをした。魔族だって彼女が初めて見た魔族なのに喧嘩なんて売った覚えがあるわけ無い。

混乱する私を余所に、彼女は5階層へと進む階段を発見し降りて行った。

彼女の進撃の勢いは凄まじく、1階層当たり1時間という驚異的なスピードで進んでいる。途中を阻む魔物達も鎧袖一触で、全く足止めになっていない。

まさかその日の内に10階層まで到達するとは予想もしていなかった。

『フフン、こんな子供騙しの仕掛けでこの私を止められるとも思っただか』

どこそその勇者（笑）と異なり10階層の台座の仕掛けも無事にクリアしてくれた。何だろう、仕掛けを突破されたのに「ありがとう」と言いたくなるこの気持ちは。

1時間近く悩んでたことは言わぬが花。

3つの石板を台座に嵌めると、正面の石壁が2つに割れて玉座の間へと進む道が開かれる。

『いよいよご対面か』

レオノーラ嬢は躊躇することなく玉座の間へと足を踏み入れる。

豪華な赤い絨毯の先、一段高くなったそこには玉座があり不死者の王が鎮座する。

『よくぞ参った、客人よ。』

ここまで辿り着いたのは貴様が初めてだ』

『成程、台座に書かれていた通りのノーライフキングか。増長するだけのことはあるようだな』

玉座の正面に立ちノーライフキングを見据えるレオノーラ嬢に対して、ノーライフキングは鷹揚に話し掛ける。これまで余裕を崩さなかったレオノーラ嬢が初めて緊張しているように見えた。

『いかにも、この身は数多の眷属を束ねし不死者の王。』

たとえ魔族の王族が相手であっても膝を折るつもりは無い』

『どうやら私が何者かは分かっているようだな。』

叩きのめすだけのつもりだったが、気が変わった。

『ダンジョンマスターを辞めて何れ即位する私の配下となるがいい』  
『膝を折ることはないと言った、図に乗るな小娘』

穏やかに話しながらも2人の間の緊張感が高まっていく。

『ならば力尽くまで屈服させてやろう！』

『来るがいい、魔王の娘を眷属に加えるのもまた一興！』

高まり続ける緊張感は2人が同時に放った魔法によって弾け、激しい戦闘が始まった。

戦闘は熾烈を極めた。

ノーライフキングが闇弾を放てばレオノーラ嬢はかわし、レオノーラ嬢が牽制に放った炎はノーライフキングが召喚したゾンビやスケルトンが盾になる。デュラハンやスペクターといった高位のアンデッドも召喚されレオノーラ嬢を囲むが、レオノーラ嬢は臆することなく両手に視認できる程高い密度の魔力を集中し薙ぎ払う。

戦いはレオノーラ嬢の有利に見えたが、長引く事で徐々にその様子が変わってくる。ノーライフキングや眷属のアンデッドは生者ではないために疲労することはないが、レオノーラ嬢は魔族であっても生者であるため体力には限界がある、長期戦は彼女にとって避けるべきことだった。

息を切らして集中を欠いた彼女の足首を、斬り飛ばされたデュラハンの手が掴む。予想外の手にレオノーラ嬢はバランスを崩して斜

めに倒れ込む。眷属との連携に秀でたノーライフキングがその隙を逃す筈もなく、これまでで最大の闇の塊をレオノーラ嬢に向けて放った。

体勢の崩れたレオノーラ嬢はかわせずに直撃し、10メートル近く吹き飛ばされて地面に叩き付けられた。

『ぐ……うう……』

『ここまでのようだな』

うつ伏せになり激痛に悶えるレオノーラ嬢に、ノーライフキングは勝利を確信したのかゆっくりと歩み寄る。

『掛かったな!』

しかし、うつ伏せのまま起き上がらなかったのは演技だったのか、ノーライフキングが間合いに入るとレオノーラ嬢は身を起こしその手に炎を生み出す。

『フン、悪足掻きを……何!?!』

間合いに近付いたとは言え、苦し紛れに放つ魔法など幾らでも対処が出来ただろう。しかし、レオノーラ嬢はその手から放つと見せ掛けた火魔法を敢えて暴発させた。制御を失った炎は彼女自身の右腕に燃え広がる。

驚愕に固まるノーライフキングに向かって彼女は飛び掛ると、炎に包まれたままの拳を叩き付けた。

『喰らうがいい!』

『ば、ばか……な……』

予想外の攻撃にノーライフキングは反応出来ず、胸部に直撃を喰らう。骨の碎ける甲高い音がし、加えてレオノーラ嬢の腕に纏われていた炎が彼の身に纏ったローブへと燃え移る。

ノーライフキングは後ろに倒れるが、乾坤一擲の一撃を放ったレオノーラ嬢も姿勢を維持することが出来ずに前に倒れ込む。彼女はそのまま地面を転がって腕の炎を何とか消すことに成功する。

『づう……っ！』

激痛に上げそうになった悲鳴を噛み殺しながらも彼女は立ち上がった。彼方此方に傷を作り右手に大火傷を負ったその姿は控えめに見てもボロボロと言っていい按配だが、それでも彼女は凜々しく美しかった。

レオノーラ嬢は倒れたまま炎に包まれて崩れていくノーライフキングの元に歩み寄り、彼を見下ろす。周囲に居たアンデッド達もまた主の敗北により崩れていった。

『まさか余を倒すために自らを焼くとはな。

狂している娘よ』

『好きでこんな真似をするものか。

滅ぼさずに屈服させるつもりが、その余裕も無かった。

私をここまで追い込んだことを誇るがいい、不死者の王よ』

『何処までも傲慢な……まあ……よいわ。

……ン……リ……さ……申し……御座……せん』

ノーライフキングはやがて崩れ去り、王冠だけがその場に落ちたがそれもやがて塵となっていた。

レオノーラ嬢はそれを黙ってただ見下ろしていた。

次の瞬間、玉座の間に拍手の音が響き渡った。

## 16：賠償請求

突然玉座の間に響き渡った拍手の音に、レオノーラ嬢は弾かれたようにその方向　玉座へと視線を向ける。先程までノーライフキングが座っていた場所には継ぎ接ぎだらけの不気味な人形が置かれていた。

暇だった私が作った人形だけだ。

テナをモデルに手慰みに作ってみたのだが、どうも裁縫は昔から苦手で思ったように出来なかった。ちょっと反応が見てみたくてテナに見せてみたら本気で泣かれてしまった。自分がモデルの人形があんなだったことがショックだったのか、それとも単に人形が怖かったのかは分からない。

捨てようとも思ったのだが……と言うか何度か捨てたのだが、いつの間にか戻ってきてしまう。うん、呪われてるみたい。製作時間1時間だったので加護付与してしまったせいだ。

転移の応用で玉座の上にそつと置いたのだが、正直あの人形にはあまり意味は無い。何やら知らぬところで恨みを買っているようなので彼女と話がしたかったのだが、眼前に出て行くのは怖かったのでダンジョンコアを通して音声受信の応用で声だけ届けることにしたのだ。しかし、そうすると彼女は何処に向かって話せばいいか分からないだろうから、目印兼寄り代として適当な物を置いただけだ。話をすると私の存在をバラすことになってしまいが、まあ最悪の場合でも先程の戦闘を見る限りノーライフキングと同レベルの魔物を複数体用意して投入すれば何とかなる筈。

『何だ、貴様は』



『このダンジョンのダンジョンマスター。』

人形は単なる寄り代だから攻撃しても無駄。

欲しければ話が終わった後あげる』

『そんな不細工な人形、要るか』

まあ、そうだろうな。この呪いの人形、持っていつてくれると私としては非常に嬉しかったのだが。あげても戻ってきてしまう可能性も高いのだけれど。

『それにしても、ダンジョンマスターだと？』

先程のノーライフキングがこの主ではなかったのか』

『あれは10階層の中ボス』

『成程、そして不死者の王が従う主人が貴様か。』

あやつめ、魔王にも膝を折らぬと大言壮語を吐いておきながら、結局は狗だったとはな』

狗、か。彼 彼女だったかも知れないけど には10階層の守りを任せたがそれ以外については放置状態だったので、主従関係なんてものがあつたのか今となつては私にも分からない。

『まあそれは今はいい。』

それよりも……つまりは私が目的としていた不遜の輩は貴様ということだな』

ギリリと人形を睨みつけるレオノーラ嬢。ノーライフキングとの死闘で全身ボロボロながら凄みのあるその眼差しに映像越しとは言え私は身震い……しなかった。彼女は人形を通して私を睨み付けているつもりなのだろうけど、ダンジョンコアの映像は人形の視点じやなくて斜めの視点から表示しているので睨まれている実感が全然しない。

『貴女が何に怒っているのか知りたい』

『フン、知れたこと！』

私は邪神を名乗る愚か者に誅罰を下すために来たのだ』

『邪神……？』

『？ 何故そこで不思議そうな反応をする。』

街の者はこのダンジョンには邪神が棲み付いていると噂していたぞ！』

何だそれは。

『私がダンジョンマスターとして話をしたのは貴女が初めて。』

邪神なんて名乗った覚えは無い』

『何……？』

仮に名乗る機会があったとしても邪神なんて名乗るつもりは一切ない。それにしてもリーメルの街での噂は気になるな、何故邪神なんて話が広まったのだろう。何かしらの切っ掛けがなければ、そんな噂は立たないと思うのだが。

『貴様が名乗ったのではなかったのか？』

『名乗ってない』

『そ、そうか……』

ピシヤリと否定すると、レオノーラ嬢は冷や汗を掻き始める。途端にそわそわと落ち付かない様子になり、視線は彼方此方を彷徨い出す。

『つまり……思い込みの勘違い？』

私の指摘に彼女はビクツと反応すると動揺が激しくなる。まるで親に叱られることに怯える幼子のようにだ。

『ええと……その……そう思わなくもないことも無きにしても非ずと  
いうか……』

『魔力値100万をつぎ込んだノーライフキング』

『ぐっ……それは……』

嘘は言っていない。1日最大3体まで生み出せるから別に大して気にしていないけど。

『弁償』

気にはしていないが、彼女の反応が面白いのでちょっと畳み掛け  
てみる。レオノーラ嬢は私の言葉に苦虫を噛み潰したような顔を  
して呻く。

『し、仕方ない……償いはするが、何をすればいい』

『代わりに10階層の中ボスやって』

『な！？それは貴様に服従しろということか！？』

あ、まずい。ちょっと調子に乗り過ぎたか。途端に彼女が顔を赤  
くして憤りを露わにした。

『一時的な雇用、主従関係は無くもいい』

『しかしだな……』

どうやらレオノーラ嬢は主従というものに強い拘りがあるみたい  
だ。先程のは冗談半分だったので撤回したいのだが、今更嘘でし  
たって言ったらそれはそれで怒るだろうな。

『……分かった』

ん？

『ノーライフキングの代役、務めてやるっ』

げ、本気にされても困るんだけど。

『ただし！ 顔も見ただことない相手の下で働くつもりはない！

直接会って私が従っても良いと判断すればの話だ！ これは絶対に譲れん！』

つまり、私と対面したいということか。騙し討ちするための策……ではなさそうだな、彼女そういう小細工は苦手そうだし。まあ、直接会えば落胆して従う気を無くしてくれるだろう、私レベル1だし。

『分かった。それなら』

今からそちらに行く、と言おうとした私を遮って彼女は決意の表情で宣言する。

『よし、それならすぐに最下層まで到達してやる。

しばし待っているー！』

ちよ、ちよっと……。慌てて止めようとする私を余所に、レオノール嬢は玉座の後ろにある通路から先に進んでしまう。彼女、どうも思い込んだら一直線というか微妙に話を聞いてくれない人みたい。幾ら彼女が強いとは言っても、現在の最下層である31階層まで

到達するまでには少なく見積もっても2日は掛かるだろう。加えて、中層である11階層から20階層は力押しでは通れない謎解きフロアだから詰まると延々と時間が掛かる筈だ。それまでずっと待ってなくちゃいけないのだろうか。

とは言っても、あの調子だと今更言っても聞いてくれなそうだ。仕方ない、彼女が満足するまで先に進んで貰って、諦めたらここに招待することにしよう。

10階層まで1日で到達という快挙を成し遂げたレオノーラ嬢だが、案の定11階層以降はなんとか1日1階層攻略するペースまで落ち込んだ。

1日目、11階層クイズフロア。

ランダムに出題される10問の3択問題によって正解の通路を進んでいく階層だ。回答を間違えるとその時点で階層の入り口に強制転移させられて最初からやり直しとなる。

『ああ、折角8問目までいったのに!?!』

『残念、振り出しに戻る』

『おのれー!ー!ー!』

2日目、12階層動く床フロア。

矢印付きのパネルに乗るとその方向に自動で運ばれる、飛び越え禁止。何処に乗ると何処に運ばれるかきちんと計算しないと買った方向には進めない。ゲーム画面で俯瞰して見ることが出来るなら少

し考えればすぐに正解に辿り着ける程度の仕掛けだけど、自分の目の前に広がっていると結構難しいかも知れない。

『ぐぬぬ、目の前に階段が見えているというのに……っ！』

『急がば回れ』

3日目、13階層回転床フロア

至る所に床が回るギミックが設置されている。部屋の形が全て円形で通路が均等に繋がっている為、回転してしまうと向かうべき方向が分からなくなる。ついでに、あまり回り過ぎると……

『……き、きぼちわるい』

『武士の情け、目と耳を塞いでいてあげる』

あ、私いつだったか武士じゃないって言ったっけ。流石に憐れなのでコップに水を入れて転送してあげる。

4日目

『そろそろ諦めない？』

『ふ、ふざけるな。わ、私はまだいける……』

そうは言うけど、どう見ても以前と比較して大分覇気がなくなっている。傍目から見ても心が折れ掛かっているのが見て取れた。

ちなみにレオノーラ嬢は浅い階層のダンジョンを想定していたため殆ど手ぶらで訪れており、当然食糧なんかも1食分くらいしか持っていないかった。お腹を鳴らしながらクイズに挑む彼女の姿に見か

ねてパンとスープを転送してあげた。1日目は意地を張って食べようとしなかったレオノーラ嬢だが、2日目になると空腹に耐えかねたのか渋々と口に運んでいた。

『だ、大体なんだ！ この陰険な仕掛けの山は！』

『脳筋対策』

『誰が脳筋だ！ 貴様、最下層に着いたら一発殴るからな！』

『食事送るの止めようかな』

『なあ！？ ひ、兵糧攻めとは卑怯だぞ！』

兵糧持って来なかった奴が言うな。大体、ダンジョンで1日3食付きなんて他には無い好待遇なんだから、少しは感謝して欲しい。

『ちなみに1つ聞きたいんだが、このダンジョンは一体何階層まであるんだ』

あ、ようやくそこが気になったのか。正直、最初に聞くべきことだと思うんだけど。ダンジョンの階層が幾つまであるかは攻略のヒントになってしまふのであまり公言したいことではないのだけど、彼女だけならいいか。これまで会話した感触で言い触らしたりするような人物じゃないことは分かってるし。

『31階層』

『え……っ！？』

絶句して青褪めるレオノーラ嬢。苦勞しながら進んできたにも拘らずまだ半分にも到達していないのだから、当然だろう。とはいえ実のところ、21階層から30階層の下層フロアは階層はあっても未完成なので、現状一番難易度が高いのは今彼女が居る中層フロアだったりするのだけど、敢えて言わない。

『諦める?』

『ぐ……確かにこの調子ではそこまで到達するのが難しいことは認めざるを得んが……。』

最下層まで到達しないと貴様と対面出来んではないか』

『10階層で話した時、私はそこまで出向くつもりだった』

『何だと!？』

だとしたら、私のこの3日間の苦勞は……』

『話を聞こうとしなかった貴女の自業自得』

ぐうの音も出ないと言った様相で黙り込むレオノーラ嬢。

『分かった。』

悔しいが到達は諦める』

渋々と言った面持ちで言う彼女に私は内心でホッと胸を撫で下ろした。11階層以降の攻略で大分鬱憤を溜めてたようなので、自力到達されたらポコポコにされそうで密かに戦々恐々としていたのだ。攻略を諦めて招待されたのに殴り掛かる程、彼女は厚顔無恥ではないだろう。

中ボスやつてもらうつもりは最初からないけれど、この3日間で気持ちのいい人物であることは分かったし友好的な関係を築けたら嬉しい。

『了解。 転移陣を用意するのでそれに乗って』

最初はこの居住区に招待するつもりだったけれど、万が一にも話が拗れて暴れられたりしたら嫌なので別の場所で会うことにする。まあ、彼女の人柄から無いとは思うけど。

30階層のボス部屋は部屋だけ創ってまだボスを配備していない



ので、そこが丁度いい。

ちなみに、20階層のボスは配備済だ。オリハルコン製のリビングアーマーを召喚してついでに加護付与を行ってみたらちょっと酷い事になってしまった。

30階層はファンタジー世界おなじみのドラゴンにしてみようと  
思うのだが、どうせなら一番強そうなのにしてみようと思って魔力  
をダンジョンコアに溜めている最中だ。

え？ 侵入者を殺さないように非生物限定にしていたんじゃない  
かって？ まあ、ここまで来るような猛者なら大丈夫だろう。

……ん？ 非生物の魔物は自我が無いから命令には逆らわないと  
思って安心してたけど、レオノーラ嬢に倒されたノーライフキング  
は喋ってたな……はて？

30階層に移動すると玉座にちよこんと腰掛ける。中身も服装も  
威厳なんか無いから、少しでもまともに見られるようにしないと。

そう言えば、10階層と同じように20階層と30階層のボス部  
屋にも玉座を創ったけど、よく考えればどちらも人間サイズの玉座  
に座れるようなボスじゃなかった……無用の長物になってしまった。  
まあ、こうして役に立ったからいいか。

考え事をしていると、ギョッと音を立てて入口の大扉が開く。レ  
オノーラ嬢の転移先はこの部屋の1つ手前の部屋にしておいたので、  
着いたのだろう。入口に目を向けると紅い甲冑ドレスを纏った銀髪  
の少女の姿が見えた。

部屋に入ってくるのを待つが、彼女は中々動こうとしない。もし  
かして入ってくるように言わないと駄目なのかと思ったが、やがて

彼女はゆっくりと部屋に足を踏み入れる。

見ているこちらが不安になるくらい真つ青な顔をし、顔からは冷や汗がダラダラと流れる様子が見て取れた。彼女の足取りは重く数分掛けて私の座る玉座から10メートルくらいの場所まで来ると、その場に立ち止まってしまった。話し難いからもう少し近付いて欲しいんだけど、まあ聞こえない距離でもないからいいか。

「はじめまし」申し訳ございませんでした!」……て?」

いきなり土下座されたし。そう言えば、確か魔眼の説明に魔王が土下座する程度とか書いてあった気がする。魔王の娘にも土下座させてしまう程の恐怖……なのだろうか。

「あの「ご無礼の数々、深くお詫び致します! 私に出来ることであれば何でもします! ですから、どうか……どうか国の者達にはお慈悲を!」」

何で私が魔族領に攻撃し掛けるみたいになってるのか。そんなこととする気は毛頭無いぞ。

「いや、だから「何卒制裁は私だけで収めて頂きたい」……話を聞け」

話が進まないのにイラッときて思わず短刀を取り出して投げてしまった。呪いの短刀は彼女の眼前に突き刺さり、レオノーラ嬢は声にならない悲鳴を上げた。

「頭を上げて、立って」

「し、しかし……」

「いいから」

少し強めに言って強引に立って貰う。レオノーラ嬢は弾かれる様に直立不動の姿勢を取った。

「私は怒ってない」

「え？」

「制裁もする気は無い」

「ほ、本当ですか！」

本気で安堵した様子のレオノーラ嬢、目に涙を浮かべてすらいる。これまでのことは怒ってないけど、寧ろここでのやり取りの方がイラツとしたよ。

「それで、10階層のボスの話だけ……」

「は、はい！ 勿論誠心誠意務めさせて頂きます！」

「しなくていい」

「はい？」

先日は冗談半分で言ってしまったけれど、実際そんなことをされても困るのだ。魔王の娘を中ボスなんかにした場合、人族と魔族の双方から敵視される恐れがある。10階層の中ボスはノーライフキングをまた作れば良い。と言うより、レオノーラ嬢が11階層に進んだ後、既に新たに生み出して配備済だったりする。不思議なことに最初から私の名前を知ってたけど、何故だろう。

「代わりに頼みたいことがある」

「な、何なりと！」

「私の友人になって欲しい」

「ゆ、友人……？」

映像越しにだけ彼女と話をした3日間、結構楽しかった。スキルのせいで怯えられてしまっているのは残念だけど、それでも逃げられないだけ仲良くなる余地があると思いたい。

最悪の場合は直接目を合わせない映像越しであれば普通に会話が出来ることは分かったし、私自身の気持ちとしても魔王の娘と言う彼女の立場を考えても、出来れば彼女とは仲良くしておきたい。

「わ、分かりました！」

友人にならせて頂きます」

「友人だから敬語は要らない」

「分かりま……分かった」

この世界初めての友人ゲット。

脅迫はしていない。

……していないよね？

## 17：ガールズトーク

「そう言えば、レオノーラは魔王の娘で合ってる？」

「ん？ ああ、そうだ。」

現魔王は私の父に当たる」

友人契約を交わしたレオノーラを居住区に招いてお茶をする……前に浴場に叩き込んだ。埃や汚れに血と酷い格好だった彼女もさっぱりした格好になり、居間に場所を移してテナの淹れた紅茶を飲む。最初はぎくしゃくしていたが、徐々に慣れたのかお互いに名前で呼び合えるようになった。ただ、目は合わせてくれないけど。どうやら邪神オーラは本能の強い獣や魔物には効果覿面だが、理性が強い魔族には人族と同じで効果が薄いらしい。一方で、魔眼の方はしつかりと効くらしく、目を合わせると途端に土下座されてしまう。逃げられないだけまだマシなのだろう。私も彼女にうっかり目を合わせてしまわないように気を付けている。

「魔王は死んでも復活するって聞いたけど本当？」

「そんなわけあるか！」

怒られた。

詳しく聞いてみると、別に倒された魔王が復活しているわけではなくて単に代替わりしているだけらしい。テナが言っていた何十年前かに倒された魔王は先代でレオノーラの祖父に当たるそうだ。倒されても次代の魔王が登場することから人族の間では変な風に伝わっていたのだろう。

「魔王の娘なら魔族の姫……何故こんなところに？」

魔族領に程近いとはいえ、ここはれっきとした人族領だ。彼女がこの地に居るのは不自然に思える。

「ロマリエル家の慣わしでな、魔王の後継者は一人前になるために一人で旅をすることになっているのだ。

旅の行き先は特に決まりは無いが、私は一度人族領を見てみたいと思っていたので来てみた」

どこかで聞いたような風習だな。それにしても、仮にもお姫様がたった一人で敵地へ乗り込むとは大した行動力だ。

「魔王は魔王城に居るものだと思ってた」

「いや、その考えは間違っていないぞ。

魔王は影響力が大きいからな、魔王の座に着いてからは気軽に外出は出来なくなる。

だからこそ後継者に過ぎない今の内に、という意味もあるのだらう」

成程、最後のモラトリウム期間でもあるのか。大学の卒業旅行みたいなもの……ちょっと違うか。

「旅の期間は？」

「特に決まってるない。

何らかの功績を上げるまでは戻る気はないが」

「功績？」

「魔族の敵となる者を倒したり、あるいは益になる者を味方に引き入れたりだな」

何故か苦々しい表情をするレオノーラの様子にピンと来た。

「このダンジョンに来た目的もそれ？」

「ぐ……そうだ。」

邪神を騙る者に制裁を下し、場合によっては配下にしようと思っ  
てた」

成程、魔族にとって邪神というのがどういう位置付けなのかは分  
からないけれど、少なくとも勝手に邪神を名乗る者は許せない相手  
なのだろう。だからと言って、名乗ってもいないのに勘違いして襲  
われては堪らないので、彼女は猛省して欲しい。

「逆に聞いてもいいか、アンリ？」

彼女の問い掛けに私は無言で頷いた。

「お前は邪神にその力を植え付けられたと言っていたが……」

異世界云々は信じて貰えるか分からないのでテナと同様に話して  
いないが、私が邪神によって称号やスキルを植え付けられた人間で  
あることは既にレオノーラに話していた。

「正確には当人が邪神と名乗ったわけじゃない。」

私に付けられた称号やスキルからの推測」

「ふむ……」

レオノーラは私の返答に何やら深く考え込んでいる。私が無言で  
説明を要求すると、彼女は目を逸らしながら語り始めた。

「いや、お前の言葉を疑うわけではないが……邪神などと言う神は  
実在しない筈なのだ」

「？ 貴女やリーメルの住人は『邪神』という単語を使っていた。存在するからそう呼ばれているのではないの？」

「確かに、邪神という言葉や概念は存在する。」

しかし、邪神という神は実在しない」

それは何かの謎掛けだろうか。彼女の言う「実在しない」というのは神の存在否定とは少しニュアンスが異なるように感じる。レオノーラは「神」は居るが「邪神」は居ないことを確信を持って告げているように思えるのだ。

「邪神とは人族が提唱した架空の神なのだ」

「架空の神？」

あの邪神が架空？

実際に遭って話しているんだけど。

「ああ、アンリは神々について何処まで知っている？」

「この世界を創造した光の神 聖女神ソフィアが世界を破壊しようとする邪神と戦っていて、加護や啓示を齎して人々を導くと聞いている」

「噂程度に知ってはいたが改めて聞くと呆れるな」

何だか凄く可哀相なものを見る目をされた、目を合わせてくれなから想像だけだ。ただ、この世界の伝承についてはテナに聞いたぐらいしか情報源が無いのだ、そんな目をされても困る。

「いいだろう、少し長い話になるが魔族に伝わる真の神話を話してやる」

長くなりそうなので、テナを呼んで紅茶のお代りを淹れて貰う。



ついでだからテナにも一緒に聞いて貰おう、私だと人族に伝わる神話と照らし合わせたり出来ないし。

「世界は唯一の神である創造神によって生み出された。

創造神は生み出した世界の住人として様々な動物を創造し、そして最後に自身の姿に似せた人族を創り出した」

テナもここまでは異論が無いらしく頷いている。元の世界にも様々な神話があったが、創世記については割とどの神話も似たようなものだったと思う。

「人族は創造神の寵愛を得て繁栄を極めるが、すぐに行き詰ることとなる。

天敵の居ない人族が増え過ぎて、食糧を得ることが出来なくなつたためだ」

食物連鎖のバランスが崩れたつてことか。天敵が居なければ確かにそうなるだろうけれど、神話にしては随分と科学的だ。

「助けを求める人族に創造神は食糧を与えたが、同時にこの事態を憂えてある対策を取つた。人族の天敵となり世界の調和を整えるもの……魔族の創造だ。

魔族は生み出された役目に従い人族と敵対し、人族を攻撃して数を減らした。人族よりも強い代わりに人族よりも子供が出来難い、そんな魔族が人族の天敵となることで調和が生まれた」

「そんな……」

テナが自分の知る神話と大幅に異なるレオノーラの話に呆然としているが、確かに少数の強者が上に立てば食物連鎖のバランスは取れるし、テナに聞いた人族側の神話よりは理屈は通る。

「しかし、創造神は自身の行いに苦しめられる。

愛する人族を繁栄させる為に苦しめなければいけない……その二律背反の葛藤の果てに創造神は自らを3つに分けた。力の大半を世界の維持のために切り離し、残った力と心を2つに分けたのだ。

分かれた心はそれぞれ光の神と闇の神になり司るものを2分した。創造と破壊、太陽と月、昼と夜、人族と魔族といった具合にな

「……………」

既にテナは言葉も出ない様子だ。彼女の知る常識とは既に大きく掛け離れているのだろう。

「これが魔族に伝わる神話だ。神と呼ばれるものは光の神と闇の神だけだ。

邪神などと言う神は存在しない」

確かに、魔族の神話が正しいとすれば2柱の神は両方とも創造神から生まれた存在で、善悪や正邪で分けられるものじゃない。闇の神というといかにも邪悪そうに聞こえるが、日本神話で言えば月読尊のようなものだ。

「そもそも人族の言う聖女神とは人族が自身の信仰する光の神の権威を高めるために後から付けたものだ。そしてその為に架空の敵である邪神という存在を提唱し、光の神がそれと戦っているとした」

「闇の神と戦っていることにすれば良かったのではないの？」

「おそろくだが、流石に闇の神そのものと明確に敵対する度胸が無かったのだろうな」

「あの、聖女神が戦っている邪神は闇を司るって聞きましたけど……」

「ああ、ハッキリと明言していないだけで邪神が闇の神を意識して生み出された概念であることは明白だ。故に魔族では邪神という言葉もそれを信仰するものも、忌むべき存在とされている」

成程、自分達の信仰する闇の神を貶める概念だから嫌っているとレオノーラが邪神を騙るものに制裁を加えようとしていたのもそのためだったのか。

しかし、彼女の言葉で気になる所があった。

「信仰するもの？ 架空の神なの？」

「架空だがそれを知っているのは生み出した人族でも一握りだろう。虚構の話であっても上位者が喧伝すれば真実と思いつくのは無理もない。酔狂な話だが、本気で邪神を信仰する人族も居るらしいぞ」

元の世界でも悪魔信仰とかあったし、そういう人が居てもおかしくはないか。

共感は出来ないけれど。

「邪神については分かった。」

私が遭った相手が何者なのかは分からないけれど……」

「そうだな、ここで議論をしても憶測の域を出まい」

取り合えず、あの邪神は邪神（？）程度に思っておこう。

「光の神と闇の神のことは分かったけれど、勇者と魔王はどうなるの？」

「魔王は魔族を統率する為に闇の神が生み出した存在だ。そして、魔王の脅威に怯えた人族の為に光の神が生み出したのが勇者と呼ばれる者達だ」

それは本末転倒なのでは？

魔王の脅威は人族が増え過ぎないようにする調整役のためにあると言う話なのだから、脅威を排除してしまっただけは問題な筈だ。

私の疑問を察したのか、レオノーラは苦笑しながら続きを話し出す。

「言いたいことは分かる。」

魔王や魔族が倒されてしまっただけでは結局元の木阿弥になる、そういう意味では創造神の思惑と光の神の行為は矛盾している。闇の神と分かれたことで人族鼻祖に特化したのが光の神だから、そんな事態が起こってしまうんだ」

「成程、そうすると魔族は勇者のことをどう思っているの？」

魔族からしてみれば神から与えられた役目として人族を攻撃しているのに、神の下僕が襲ってくるのだから理不尽と言えば理不尽だ。

「光の神の思惑なんぞどうでもいい。我らにとって信仰する神は闇の神だけだからな。勇者も単なる手強い敵対者というのが魔族の見解だ」

「成程。勇者と言えば、以前このダンジョンにも来た」

「何？ どんな奴だった？」

私は以前このダンジョンに侵入してきた勇者（笑）パーティのひとをレオノーラに説明する。10階層まで来ながら石板の仕掛けを前に退散していった脳筋っぷりを話すと彼女はお腹を抱えて爆笑した。

「ぶ、くくく……あ、あの仕掛けでスゴスゴと諦めて帰ったのか……あははははっ!」

「聖剣の導きも謎解きには対応してないみたい」

「た、頼むからこれ以上笑わせないでくれ……は、腹が抜れる……く、苦し……くくく……っ!」

涙まで流しながら笑い続ける彼女の姿にちよつと悪戯心が湧いた。

「貴女も1時間くらい悩んでたけど」

「ブフツ!? み、見ていたのか!？」

私のツツコミに驚愕して途端に顔を真っ赤にして目を逸らすレオノーラ。勇者（笑）パーティを笑い物にしていたことがブーメランのように彼女に突き刺さる。

「は、話を聞く限りではその勇者は正勇者のようだな」

あ、誤魔化した。更に突っ込んであげても良いが、彼女の言った言葉が気に掛かったので今は止めておく。

「正勇者って何？」

「勇者にも色々種類があるの?」

「ああ、魔族側で付けている分類だから人族には馴染みが薄いか。

一般に勇者と呼ばれる者を魔族では3つに分類している。この世界の者が光の神の加護を受けてなる正勇者、異世界から召喚される召喚勇者、そして勝手に名乗る自称勇者の3つだ。召喚勇者、正勇者、自称勇者の順番に厄介さが増していく」

異世界召喚って一般的なのか。もしかすると、この世界に他にも

私と同じ立場の人間が居るのかも知れない。わざわざ探す気にはならないけど、もし会えたら話してみたいな。

それにしても、レオノーラの言う厄介さの順番はおかしいのではないか。

「順番、間違ってない？」

「自称勇者が一番弱そうだけど」

「ああ、一番弱いぞ？ 強い方から順番に並べても召喚勇者、正勇者、自称勇者の順だな。異世界から召喚されたものは強力なスキルを持っている確率が高いから正勇者よりも強い者が多い」

この世界でも異世界召喚で呼ばれる者はチートなスキルを持っているのが一般的か。チートスキルと言えば私のスキルもある意味そうだけど……正直、誰かに渡せるならあげてしまいたい。

「なら何故自称勇者が一番厄介なの？」

「弱いくせに後から後から際限なく湧いてくる。加えてならず者と大差ないような者が多いからな、殺すわ犯すわ盗むわで盗賊と変わらん。」

「魔族の間では最優先の討伐対象だ」

ああ、確かに資格もないのに勇者を自称するような人間だと性格も自己顕示欲が強くて自分勝手なのばかりになるか。

「成程、じゃあ召喚勇者が一番与し易いのは？」

「強いスキルを持っているから戦えば手強いが、元々この世界の住人じゃないからな、戦う理由が乏しいんだ。搦め手や懐柔策で回避出来る場合が殆どだ。魔王が女性だったり妹や娘が居ると8割以上の確率で寝返るといふ統計もある」

……それはひどい。

まあでも、いきなり拉致されて世界や人々のために戦えとか言われて納得する方が少数派か。

「ところで、1つお願いがある」

「ん？ 何だ？」

勇者についての話が一段落したところで、彼女に頼みたいことがあつたのを思い出した。

「私とテナに闇魔法教えて」

折角闇魔法が使えるそんな相手と友好的に話せるようになったのだから、この機会に教えて貰いたい。私もテナもスキルだけあつて知識が皆無なので宝の持ち腐れ状態だったのだ。例えて言うなら、プロ野球選手並みのバッティングが出来るけど野球のルールが分からない、みたいな。

闇魔法もダンジョンマスターのスキルみたいに何となくで使えればラクだったのだが、そう何でも都合良くはいかないらしい。あるいはダンジョン関連の能力が何となくで使えるのはスキルじゃなくて称号のおかげだったのかも知れない。

「教えられんことはないが、闇魔法は魔族の専用魔法だぞ。

お前達は一応人族だろう？」

一応は余計だ。

「大丈夫、スキルはある」

「何？ ああ、それも『邪神』に植え付けられたスキルかならば構わん」

よし、講師ゲット。

これで私も魔法少女デビュー、邪神少女テリブルあんり始め……ないから。

魔法を使う機会は今後もあまり無いと思うけど、いざという時の護身のために覚えておいて損は無いだろう。どちらかと言えば、引き籠もりの私よりも街に出るテナの方が必要性は高いだろうけど。

なお、3時間後にレオノーラが体育座りで遠い目をするようになってしまったのは私のせいではない。

「テ、テナにも負けた……」

「その、すみません？」

「どんまい」

弟子は師匠を超えていくものなのだよ。まあ、勝てるのは魔法だけだけだね。



## 18：狂宴

ダンジョンの入口部分はかなり広めのホールになっている。各階層で気絶した侵入者を転移させて放り込む場所でもあるため、余裕を持ったスペースとなっているのだ。それこそちょっとした催し物を開くことが出来るぐらいの広さはある。魔物も入口のある部屋までは出て来ないことに加え、わざわざ夜にダンジョンを訪れるような無謀な者はまず居ないため、深夜の時間帯であれば邪魔が入ることもない。

……だからって、ここでサバトとか開くんじゃない。

先日友人となったレオノーラはまた来ると約束して再び旅に出たが、彼女から聞いたリーメルの街の噂。このダンジョンに邪神が棲み付いているというもの。については、気になっていたのデナに街で調べて貰った。

その結果、あの噂は2つの原因から広まったことが分かった。

1つは今から1〜2ヶ月前、このダンジョンの異変が起きた頃に前後して起こった聖光教の教会への襲撃だ。まだ日も高い日中に突如恐ろしい何者かが教会を襲撃して邪なる者を拒絶する筈の聖なる結界を容易く破壊し、嘲笑うように立ち去っていったらしい。

もう一つはこのダンジョンから発見されたという武具。邪神の祝福を受けたその剣は凄まじい威力と呪いを孕んでおり、邪神直々に加護を与えたものと推測されている。

これらの事実から、ダンジョンに邪神が潜んでいるという噂が広まったのだ。

……心当たりなんてない、ないったらない。

噂が何処まで広がっているかは分からないが、少なくとも邪神を信仰する者達が大人数集まる程度には広まってしまっているらしい。そのことを、映像越しに頭の痛くなる光景を見ながら私は痛感していた。

部屋の中央には篝火が焚かれ、その上で何処から持ってきたのかと不思議に思うような大釜が乗せられている。大釜の中には怪しげな液体が煮立てられており、周囲に薄いピンクの煙が立ち込めていた。映像越しのために匂いは分からないが、あの部屋の中に強烈な匂いが充満しているだろうことは想像に難くない。

篝火を囲む形で100人近い人間が生まれたままの姿で狂態を晒している。一心不乱に踊り狂う者も居れば、近くに居る者と絡み付くように抱き合ってその身を貪り合う者も居る。充満する煙には麻薬のような薬効があるのか、みな恍惚とした表情をしている。

まさに魔宴と呼ぶべき狂乱の宴だった。とても正気で見ていられる光景ではないが、私はこのダンジョンの主としてきちんと監視しなくてはいけない。決して興味津々で覗いているわけではない。

宴は時間と共にその興奮を増していき、やがて頂点に達する。叫び声上がる中で、唯一人服を纏ったままの者が部屋の中央に進み出てくる。

その者は20代前半に見える若い金髪の男性で、端正な顔立ちに司祭服を纏っていた。彼は大釜の前に立つと居並ぶ信徒達の前でサツと右手を掲げる。その瞬間に狂乱の宴は一斉に止み、周囲に緊張感を孕んだ静寂が満ちる。

『これより贅の儀を始める！』

静寂を切り裂くように放たれた青年司祭の声に、先程までを凌ぐ大きさの歓喜の叫びが上がる。異様な空気の中、大柄な男性が4人掛かりで石造りのテーブルを運んで来て、青年司祭の前に降ろす。

贅と言うからには生贅を捧げる儀式だろうか。生贅と言えば山羊だよ、普通。

映像越しに見える場の雰囲気から嫌な予感がするけど。

そんな私の予感を肯定するように、連れて来られたのは粗末な貫頭衣を着せられた8歳くらいの少女だった。栗色の髪を肩口まで伸ばしたその少女は手を前で縛られ猿轡を嵌められた状態で無理矢理引き立てられてくる。

これから自分を襲う運命が理解出来ているのか恐怖に涙を浮かべて必死に抵抗するが、所詮は幼い子供の力であり、ささやかな抵抗にしかなっていない。

石造りの祭壇まで連れて来られると、着ているものを剥ぎ取られ手を頭上に伸ばした状態で祭壇の下を通した縄に手足をそれぞれ縛り付けられて固定されてしまう。

『んーーーーーっ!..!』

じたばたと暴れようとする少女だが、縄はきつく彼女を戒めており僅かに身を擦る程度の動きしか出来ていない。そんな少女を見下ろしながら、青年司祭は懐から短刀を取り出した。ギリりと光るその凶器に少女はイヤイヤをするように首を振るが、その場の誰もそんなことに構う者は居ない。

『我らが神よ、どうか供物をお納め下さい』

青年司祭はそう告げると振り被った短刀を少女の心臓目掛けて躊躇なく振り下ろし……って、冗談じゃない！

現実感の無い異常な光景に吞まれていた私だが、ハッと我に返ると慌てて転移陣を祭壇の上に発動させて少女を自分の元へと転移させる。一瞬の光の後、私の目の前には両手足を縛られて猿轡を嵌められた少女が横たわっていた。

かなり際どいタイミングだったので心配になって少女の様子を見るが、その幼い胸に血が出ている場所は無かった。彼女の胸の中央に手を当てて見るが、殺され掛けた恐怖のためか早鐘を打つような状態ではあったが、心臓の鼓動がしっかりと感じられた。

どうやら何とか間に合ったらしい。

ホッと安堵する私の耳にパリーンと何かが割れるような音が聞こえる。

怪訝に思っ て首を捻る様にそちらを向くと、部屋の入り口に立つテナと彼女の足元に散らばる陶器の破片が目に入ってくる。どうやらお茶を淹れてくれようとしたテナがティーセットを落として割ってしまったようだった。何故か動くこうとしない彼女に片付けるよう

に言おうとするが、彼女の浮かべた表情に私はその言葉を飲み込んだ。

「ア、アンリ様……」

驚愕、怒り、哀しみ、絶望……それらの入り混じった表情を浮かべながら、彼女は私の方を見て硬直している。ティーセットを割ってしまったくらいでそこまで咎めるつもりは無いんだけど。

「そ、そそ、その女の子は……？」

その言葉に彼女の視線の先に居るのが私だけで無い事を思い出し、この部屋に居るもう1人の存在である少女に目を遣る。恐怖の表情で涙を目に浮かべながら私を見上げる少女の姿に、私はふと冷静に立ち返って今の自分達の状態を客観的に見てみた。

8歳くらいの子供が全裸にされた状態で手足を縛られ猿轡を噛まされ涙を浮かべている。

そして、そんな少女に覆い被さるようにして彼女の薄い胸に手を当てている私。

へ、変態だ……って、違う！

自分がどう見られているか理解した私は慌ててテナの誤解を解こうと彼女の方を向く。

「話せば分か……」

「っ！」

私が声を掛ける前に、テナは泣きながら部屋を飛び出して行ってしまった。

ちよ、待つて。逃げないで。  
せめて割れたティーセットを片付けてって。

面倒なことになった。テナの誤解は後でちゃんと解いておかないと、私が百合趣味の上に小児愛嗜好だという思い込みが定着してしまいそうだ。縛られたまま転がっているこの少女のこともどうにかしないといけない。

しかし、それ以上に今急いで対処しなければいけないのは、生贄が消えて混乱しているサバトの方だ。咄嗟のことで後先考えずに行動してしまった為、どうにか收拾を付けないといけない。加えて、今後同じようなことを繰り返されても嫌なので、その点も何とかする必要がある。

と言うわけで、縄は後で解くので済まないがもう少しの間そこで転がっていてくれ、少女よ。

映像を見ると、捧げようとした生贄が殺される瞬間に消えたことで、集まった信徒達は当然ながら大騒ぎになっていた。神聖な儀式の最中に起こったアクシデントに恐慌状態になる者もいる。しかし、短刀をしまった青年司祭が振り返り手を挙げると、騒ぎは収まってい

いく。  
『皆も見届けたであろう！』

我等が神は供物を受け取って下さった』

その声に信徒達は一瞬静まり返ると、爆発的な歓声を上げた。青

年司祭は満足そうに頷くと、祭壇の方を振り返って無言で待つ。信仰する神が反応を見せたと思ひ、続くリアクションを期待しているのだろう。

これ、やっぱり私が何か反応しないと駄目なんだろうな。放置して寝たい気持ちで一杯なんだけど、それをした場合に彼らがどんな行動に出るか想像出来ない。

さて、どうするべきか。少女を搔つ攫った以上は生贄など要らんと云うのは通らないだろうし、返したら彼女は殺されてしまうだろう。かと言って良くやったとか褒めたりすると、今後同じことが続く可能性が高い。

『……不味い』

考えた挙句、妥協することにする。生贄は受け取ったが気に入らない、次回以降はもっと別の物にしろという作戦だ。

あ、呪いのテナ人形を置き忘れた。まあ、今回はいいか。

『え？ あ……申し訳ございません！』

その、お口に合わなかったのでしょうか？』

『人族や魔族は口に合わない。』

牛、豚、鶏、山羊 動物推奨』

『し、承知致しました！』

あ、あの……大変恐縮ですが、我らが神に相違ないでしょうか？』

ちょっと邪神っぽさが無くて違和感があっただろうか、少し疑われているようだ。しかし、私に邪神の演技をしろと言う方が無理があるのだから、これくらいで勘弁して欲しい。

『いかにも』

『おお！ お言葉を賜り光栄の極みに御座います！』

『口に合わぬ物だったとは言え、供物を捧げた信仰は大儀。故にこの杖を授ける』

侵入者の魔導士から回収した杖に加護付与をして青年司祭の前に置かれた祭壇の上へと転送する。邪神は偽物だけど加護は本物だから、これを渡しておけば多少の違和感は誤魔化せるだろう。

『こ、これは！？』

ま、まさか神器を授けて頂けるとはっ！』

青年司祭は祭壇の上に置かれた杖を恭しく持つと驚愕し、歓喜の涙を流す。

『以降も信仰に励むように』

『ははっ！』

深々と頭を下げる青年司祭を映像越しに見て、私は何とかなったことに安堵する。映像では青年司祭があげた杖を掲げて信徒の前で演説を行っているが、もう知らない。

次回があったとしても食用肉が送られてくるだけだ、儲け物と思っ  
つておこう。

サバトの方が收拾が付いたので、私は転がったままだった少女の手足の縄を解く。どうにも静かだと思っていたが、どうやら恐怖のあまり気絶していたらしい。この部屋に転移してきた時は意識があったと思うんだけど、どのタイミングで気絶したのだろう。



不思議に思っていると、執務室の入口から先程飛び出していったテナが無言で入ってくる。

「……………」

「テナ？」

動きを見せないテナに不審に思っ  
て私が声を掛けると、彼女は決  
意の表情で徐に來ていた巫女服を  
脱ぎ出した。服を脱ぎ捨てて下着  
姿となったテナの姿は歳相応の未  
成熟さの中に僅かな色気を孕ん  
だ。

部屋の灯りに照らされて浮かび  
上がるその白い肌は羞恥のせい  
か薄っすらと赤みが差している。

「その……アンリ様。」

どうしても言うなら私が……」

私はその言葉に思わずテナに向  
かって無言で手を伸ばし

威力の弱い闇弾を彼女の顔にぶ  
つけた。

私はノーマルだ、男っ氣無い  
けど。

冷静に戻ったテナに割れたティ  
ーセットの片付けと少女の世話を  
一通りさせてから、私は彼女に起  
こったことを説明して何とか誤解  
を解くことに成功した。状況を正  
しく把握したテナは真っ青になっ

て謝ってきたが、赦さない。

彼女の誤解も止むを得ない光景だったとは思うが、その後の反応には思うところがあつたため安易に赦さずにお仕置きをすることに  
する。

お仕置きといつても別に変なことはしていない、ただ1時間程正座させただけだ。それだけか？と思うかも知れないが、この世界の人間に正座という習慣はないようなので、慣れないこの姿勢は結構な苦行になるだろう。その証拠に1時間経過した後の彼女は足の痺れに立ち上がれず、床で悶えていた。

ちよつと悪戯心が湧いたため、テナの足を軽く指で突いてみる。

「ひいつ!?!?」

テナは敏感に反応して仰け反るが、身体を擦ったことでジーンという足の痺れが響いたらしく芋虫のようになた打ち回る。素晴らし  
いリアクションに感心した私は続けて逃げようとする彼女の足に追  
い打ちを掛ける。

つんつん。

「あう!.....やっ!.....ダ、ダメです!.....突つかないで下さい  
いっ!」

つんつん.....ちよつと愉しい。

「それで、あの子はどうするのですか?」

ようやく痺れが引いたのか何とか立ち上がったテナだが、顔は赤  
みが差したままであり目は微妙に涙目だった。彼女の反応に思わず

興が乗っていぢめてしまつたが、これ以上やると本気で嫌がられそうなのでこの辺で止めておく。

あの子と言っているのは先程世話を任せた生贄の少女のことだろ  
う。彼女はテナが入浴させて服を着せて今は寢室のベッドで眠つて  
いる。

「親元に帰す」

当然だろ。彼等が何処から攫つてきたのか知らないが、人道でも厄介事を避ける意味でもそれが最善の筈だ。

「でもあの子、奴隷みたいなのですが……」

テナの言葉に思わず固まる。

「奴隷？」

「はい、首輪をしてました」

首輪、してたっけ？ バタバタしていたのでそこまでハッキリと覚えていない。しかし、言われてみれば最初に少女が着ていた服は奴隷の着るような貫頭衣だった気がする。

……拙い、彼女が奴隷だとすると色々と話が変わってくる。先程の邪教徒達の中に彼女を買った主が居るのなら、彼女をどう扱おうとその主人の自由であり、むしろ助けた私の方が盗人ということになる。攫われてきたのなら親も探しているだろうから見付けられるかと思つたが、奴隷として売られたとしたらそれも望み薄。どうにも出来ない。

「で、どうするのですか？」

黙りこくった私に追い打ちを掛けるかのようにテナが問い掛けてくる。

……どうしよう。

「ひっ!？」

私と目が合うと栗色の髪の毛の可愛らしい少女が引き攣ったような悲鳴を上げて、テナの後ろに隠れる。ここ数日お馴染みとなってしまった光景であり、彼女は先日のお生贄の少女だ。

リリと言う名前と流行病で親を亡くしたことは聞き出せたが、それ以上のことは彼女自身よく分かっていたようで、何処の出身なのかお奴隷となった経緯も不明のままだ。

結局何も思い付けなかったので、少なくとも暫くの間はこのダンジョンで育てることにした。聞き出した話からすると親元に返すことも無理そうだ。

「リリ、アンリ様は怖くないですよ」

ちなみに、彼女から話を聞き出したのは私ではなくテナである。

リリは世話をしてくれたテナに懐いたらしく、彼女の後ろを付いて回っている。対照的に私は怖がられていて、先程の反応の通り話し掛けようとしてもすぐに逃げられてしまう。

私は姉妹のような掛け合いをしている2人の姿を眺めながら、溜息を吐いた。

## 19：兵糧攻め

ダンジョンを訪れる侵入者達の目的は様々だが、大別するならば金と名誉の2つとなる。

ダンジョンマスターの討伐に成功すれば多大な報酬が得られるし、そのダンジョンの難易度が高ければ高い程に攻略すれば名声となって広まる。

邪神の噂が流れて収入源……じゃなかった、侵入者が減るんじゃないかと心配していたが、そんなことはなく逆に増える傾向にあった。

どうやらギルドも一向に進まないダンジョン攻略に業を煮やしたらしく、報酬の上乗せを行ったらしい。

金貨100枚という報酬に釣られて、毎日平均的に10パーティー程がダンジョンに挑戦するために訪れては、上層フロアで力尽きては入口に放り出されている。

今のところ、再配備したノーライフキングまで辿り着けたパーティは居ない。

ところが、3日前からパタリと侵入者が来なくなった。

毎日武器やアイテムが次々と回収されて送られて来るため仕分けに四苦八苦していたのだが、唐突に何も送られて来なくなった。

気になってダンジョン内の各階層を見てみるが、居るのは魔物ばかりで侵入者の影は何処にも見えない。

初日は「まあ、偶にはそんな日もあるか」と気楽に考えていた。

2日目には「何かおかしい」と思い始めた。

そして3日目である本日、異常事態であると判断してテナにダンジョンの周囲を密かに探って貰うことにした。

「アンリ様、大変です！」

ダンジョンの周りが封鎖されています！」

裏口から出てダンジョンの周りを調べていた筈のテナが血相を変えて飛び込んできた。

「封鎖？ 誰が何のために？」

冒険者ギルドがこのダンジョンを危険と考えて封鎖したのだろうか。

しかし、このダンジョンは未だ1人の死者も出していない、あるいは意味世界で最も安全なダンジョンだ。

ギルドがそんな行動に出る理由は無いように思える。

「分かりません！」

ダンジョンの入り口に人が集まって何か作業をしていて、その内の何人かが街道を封鎖して街から来る冒険者を無理矢理追い返しているんです！」

ダンジョンの入り口で作業？

少なくとも冒険者を無理矢理追い返している以上は冒険者ギルドの仕業ではなさそうだが、ギルドなら報酬を取り下げれば済む話だし。駄目だ、話だけ聞いていても状況がちつとも分からない。

直接自分の目で見れば何か分かることもあるかも知れないと思い、私は仕方なく重い腰を上げる。

裏口に転移しようとしたところで、以前レオノーラに闇魔法を教えて貰った中に離れた場所を見る手段があったことを思い出す。

あれを使えばわざわざ外に出る必要も無い……って、それならテナに見に行つて貰う必要も無かつたのか。

久し振りに外に出る機会になる筈だったが、私の引き籠もり生活は延長されることになる。

運動不足で太りそうだ。

あ、さっき言った「重い腰」と言うのは物理的な話ではないので、勘違いしないように。

これから太つてしまつかもという話であつて、今時点の私が太っているわけではない。

お腹だつてこの通り……ぶにつ……あ……。

魔力で構築した鴉をダンジョンの裏口へと転移させる。

ダンジョンコアの機能による画面ではなく、闇魔法によって構築された鏡が鴉の見聞きしたものを映し出す。

見ることが出来る範囲がダンジョン内に限定されない利点があるが、代わりに鴉を見たい場所に移動させる必要がある。瞬時にとつづけるわけにはいかないし、ダンジョンマスターの能力よりも費やす魔力は多い。



ただ、後者の魔力については私の魔力値からすれば微々たるものなので、然程気にならない。

裏口から飛び出した鴉は空へと飛び上がるとダンジョンの入り口が見える場所へと移動し、そこにあつた樹に停まる。

鴉の視界が映し出された鏡には、テナの言っていた通りにダンジョンの入り口周辺で何かの作業を行っている人達が映っていた。

このダンジョンは街道から続いた先の湖畔の脇にある小高い丘を入り口としている。

入口の周囲は少し広い平地となっているのだが、特に整備もされていないため草が生え放題の荒れ果てた状態だ。

いや、荒れ果てた状態「だった」と言うべきだろうか。

恐らくはこの3日の間にだろうが、草は刈り取られ本数は少ないものの確かに生えていた筈の木も切り倒されていて、さながら広場のような姿になっていた。

そしてその場所で何やら土地を計測している者達の姿や積み込まれた資材などがあちらこちらに散見された。

……まるで建築現場のようだけど、よりもよって私のダンジョンの周りに何を造るつもりなんだ。

『ハーヴィン様！ 土地の測量が完了致しました』

『よくやりました。』

結果を設計班に伝えてから休憩に入りなさい』

『はっ！』

あ、作業をする人の中に見たことがある者が居た。

周囲に居る者に指示を飛ばしているのは、先日のサバトを取り仕切っていた金髪の青年司祭だ。

ってことは、まさかこの建築現場で作業しているのは邪教徒達な

のか。

何か凄く嫌な予感がしてきた。

『冒険者達が封鎖を無理矢理突破しようとしています!』

『!?!? すぐに行きますからもたせなさい!』

我らが神に捧げる神殿の建造、邪魔をさせてはなりません!』

『承知致しました!』

げ、やっぱり。

どうやら嫌な予感が早速当たってしまった。

演技で信仰に励めとは言ったけど、神殿を建造って頑張り過ぎだろっ。

一体どれだけのお金と時間を注ぎ込むつもりなんだ。

見た目20代前半なのに集団のリーダーとなっていて、不思議に思ってたけど、あの青年司祭は何処かの豪商か貴族出身なのだろうか。

そもそも彼らは邪神に何を求めているのだろうか。

レオノーラの話ではそんな神はこの世界に居ないと言ったことだから、彼らがこれまで何度先日のようにサバトを開き生贄を捧げてきたかは知らないが、得られた物は何も無いだろう。

全くもって無駄な努力でしかない。

って、そのせいかなぁ!?

これまで何1つ反応を返さなかった信仰対象(偽)が供物を受け取り言葉と宝物を与えたものだからはりきっているのだとすれば、今の暴走っぷりも頷ける。

『手前えがこいつらのリーダーか!?!?』

俺達はダンジョンの攻略にきた冒険者だぞ、何で邪魔しやがる!』

『恐れ多くも我らが神に挑む愚か者、我らが神に代わって私が誅罰を下します。』

信仰の証として賜ったこの神器に誓って、何人たりとも通しません！』

封鎖しているバリケードを乗り越えた冒険者に対して立ち塞がる青年司祭。

一触即発の空気が漂う。

『くそ、狂ってやがる！』

おい、こいつら畳んじまうぞ！』

『ああ！』

『愚か愚か愚かー！ 神罰の代行者、教主ハーヴィン参る！』

それにしても、この司祭ノリノリである。

『喰らいやがれ！』

『笑止！』

斬り掛かってきた冒険者に対して、青年司祭　ハーヴィンはその手に持った杖で合わせる。

両者の武器が衝突した次の瞬間、甲高い音を立てて冒険者の持つ剣が中程から折れ飛ぶ。

『ば、ばかな……』

『我らが神の神威を見よ！』

呆然とする冒険者をヤクザキックで蹴り飛ばすと、ハーヴィンは杖を高く天に掲げた。

杖から黒い電撃が走り、冒険者達を撃ち抜いていく。

『ぐあああああー！』  
『ち、ちくしょう……』

何人かは倒れずに堪え切るが、そこにハーヴィンは走り寄って杖を振り下ろす。

『神罰！』

『ぐぎゃっ！？』

『靦面！』

『ふっ！』

『神罰神罰神罰……！』

『……っ！』

電撃のダメージで上手く動けない冒険者達をハーヴィンは次々に殴り倒して気絶させていく。

息を荒げた彼が止まった時には全ての冒険者達が地に伏せていた。

『おお、流石はハーヴィン様！』

『我等が教主よ！』

周囲の信徒は尊敬の目で彼を見ていた。

誰も突っ込んでくれないから私が突っ込むけど、こいつ司祭の癖に前衛職だったんかい！

電撃を放っていたけど詠唱していなかったし、あれはおそらく杖の力だろう。ハーヴィン自身は肉弾戦しかしていない。てっきり魔導士か修道士だと思って杖を渡したのに……詐欺だ。

って、ステータスを見てから渡せば良かったのか。

『全ては我らが神のお導きです。』

『貴方達もより一層の精進をなさい』  
『はっ！』

導いてない、導いてないよ。  
少なくとも私はそんなことしていない。

『さあ、彼らはバリケードの外にでも放り出しておきなさい』  
『承知致しました』

そう言っただけで気絶した冒険者達を追い出すように指示すると、彼は神殿建設の指示に戻った。

それにしてもハーヴィンが予想以上に強い。  
流石にレオノーラよりは劣ると思うが、下手をすると勇者（笑）  
と同じくらいの強さなんじゃないだろうか。

この調子だと、冒険者がどれだけ来ても彼に排除されてしまいダンジョンに辿り着くことは無さそうだ。

神殿の建造にどれくらい掛かるか分からないけど、少なくとも年単位の期間が必要だろう。

収入源、じゃなかった侵入者が皆無だと神殿が出来上がるよりも私が干上がる方が早そうだ。

仮に神殿が先に出来上がったとしても侵入者はよりダンジョンに入れなくなるだけだから、結局は同じこと。

ひ、兵糧攻めとは卑怯な……っ！

レオノーラの台詞を借りてみたが、彼らはそんな気なしに善意でやってるから尚更性質が悪い。

また邪神として演技をして止めると言えば止めると思うが、神殿

を造るのを止めると言う上手い理由が見付からない。

困ったな、打つ手がない。

そうだ、こんな時こそ勇者の出番だろう。

忌まわしき邪教徒達の企みを打ち砕いて私の平穏を取り戻して欲しい。

あいつら何処行った。

私は勇者パーティがやってきて神殿建造の野望を打ち砕いてくれることに一縷の望みを託しながら、着々と進む工事を恨めし気に見ていた。

## 20：神殿戦争

「アンリ、居るか!？」

テナやリリと一緒に紅茶を飲んでいた時に突然飛び込んできたレオノーラに、私は驚いて彼女の方を向いた。

うっかり目を合わせてしまった結果、彼女は魔眼の効果で真っ青になってその場で土下座を始める。

私は慌てて視線をそらすと、テナにレオノーラを起こして彼女の分もお茶を淹れる様に頼む。

「い、いきなり酷い目にあった」

「ごめんってば」

「いや、まあ私が目を合わせてしまったのが悪いのだが」

席にお茶を飲んで一息付いたレオノーラが溜息を吐く。

以前に彼女が滞在した時には居なかったリリのことでもレオノーラに紹介する。

リリは最初人見知りを発動してテナの後ろに隠れていたが、害の無い人物だと理解したのかすぐに普通に話せるようになった。……

私は同じ部屋に居ることすら数日かけてやっとだったのに、不公平だ。

なお、リリが私から逃げ回っていた理由はこのダンジョンに充満している瘴気だった。私やテナに影響がないから気付くのが遅れたが、居住区といっても勝手にそう呼んで区別しているだけでダンジョン内なのだから当然瘴気は放たれている。邪神オーラのスキルと恐怖を煽る瘴気の合わせ技で、私が物凄く恐ろしいモノに見えていたらしい。勿論、瘴気はダンジョンの特性なので止めようと思っ

も止められるものではない。よって、この問題は居住区から瘴気を吸い出して他の階層に撒くように循環を弄ることで解決した。その分他の階層の瘴気が濃くなったかもしれないが、まあ仕方ないことだろう。

原因が分かかって居住区の瘴気を追い出すことで、リリは漸く逃げないでくれるようになった。それでも目を合わせると矢張り逃げられてしまうけど。

「それで、突然どうしたの？」

「先程の様子からして何か用事があつたみたいだけど」

「ああ、そうだった。」

「旅先で不穏な噂を聞いてな、慌てて引き返して来たのだ」

「不穏な噂？」

その言葉自体が既に不穏で続きを聞くのが怖くなる。

そう言えば、邪神の噂を聞いたのもレオノーラからだったか。

「リーメルの近くのダンジョンに邪神の信徒が集まっているという話が広まっていたな」

「ああ、そのこと」

私は思わず安堵した。

わざわざ旅先から知らせる為に戻ってきてくれたレオノーラには悪いが、その件であれば既に認識している。

期待した勇者（笑）パーティは動いてくれず、ダンジョンの入り口で勝手に進められている神殿の建造は未だ基礎部分を築いている状態だが、着々と進行している。

確かに厄介な問題ではあるが命を狙われる類ではないので、ゆっくりと対策を考えている。

それにしても、口振りからしてレオノーラはダンジョンの周囲を



直接見てはいないのかな。彼女には裏口のことも教えてあったため、そちらから入って来れば確かに封鎖されている場所を通らずにここに辿り着ける。

「む、やはり事実なのか。」

そうすると例の噂もいよいよ真実である可能性が出て来たな」

「今の話が不穏な噂ではないの？」

「いや、邪神の信徒が集まっているという話はあくまで前提だ。」

私の聞いた不穏な噂とはな、集まっている邪神の信徒を討伐する為に聖光騎士団が結成されたというものだ」

聖光騎士団？

「そ、そんな…っ!？」

「……………」

テナが何か知っているようで青褪めたが、リリは流石に幼過ぎるのか話しがよく分からないようで、そんなテナの姿を見て首を傾げている。

「随分と余裕だな、これがどういふことかはお前も分かっているだろうに」

「いや、聖光騎士団って何？」

私が質問するとレオノーラとテナはガクツと突っ伏した。

「お、お前な……聖光騎士団を知らんだと？」

以前から思っていたが、本当に人族なのか？」

「アンリ様……聖光騎士団とはその名の通り聖光教の要請によって結成される騎士団です。」

教皇のみが要請する権利を持ち、各国の騎士団によって構成されます」

つまりは元の世界の十字軍のようなものだろうか。

あと、レオノーラは失礼なこと言うな、この世界の事情を知らないのは不可抗力だ。

「理解し切れていないようだから付け加えるが、人族の国家は総て聖光教を国教としている筈だ。

聖光騎士団の標的になるということは、すなわち人族全てを敵に回したようなものだ」

ほわっつ？

段違いに危険度が増したぞ。

確かに教義を聞く限りでは邪神の信徒は教敵と言えるだろうが、いきなり大袈裟過ぎないだろうか。

集まっていると言っても多く見積もっても数百人程度の集団に対して、人族総出で出張するというのか。

そう聞いてみると、レオノーラは然もあらんと言った感じで頷く。

「確かに、邪神の信徒だけであればそこまで大規模に動員するのは不自然だ。

当然、それ以上の目的があると見るべきだろうな」

「それ以上の目的ですか？」  
「噂になっている邪神の調査、そして討伐あるいは封印といったところか」

成程、信徒だけでなく邪神も標的にしているなら大袈裟な動員も頷ける。

人族全てが敵になって襲ってくるなんて邪神って人も大変だなあ。

「分かっているとと思うが、お前のことだぞ」

分かっているよ、こんちくしょう。

現実逃避くらいさせて欲しい。

「私は邪神じゃない」

「この際それは問題じゃない。」

「真実がどうであろうと、人族の間でそう認識されていれば同じことだ」

確かに、私が邪神であろうとなかろうと各国や聖光教の上層部に邪神と思われてしまえば討伐対象から外れることはない。

しかし、何でそんな認識になるのかが謎だ。

「各国や聖光教の上層部は邪神が架空の存在と知ってる筈」

「む、言われてみればそうだな……」

以前のレオノーラの話では、邪神と言うのは聖光教が権威付けのために広めた架空の敵対者だ。

一般人や下っ端は兎も角、上層部は邪神など存在しないと知っているのだから、邪神出現の噂など一笑に付すだろう。

「あるいは偽物だと分かっているからこそ、かもな。」

邪神を名乗っているだけの偽物なら討伐も容易と考えてもおかしくない。

それに偽物であろうと一般人や信徒が本物だと信じているなら、それを討伐すれば権威を高めることが出来る」

名乗った覚えは無いのに。

でも、レオノーラの考えは正しいと私も思う。  
傍迷惑な話ではあるが、本物が偽物かに関係なく民衆がそれを信じているなら放置は出来ないということだろう。

「それで、聖光騎士団はいつ頃来るの？」

「そこまでは分からんが、各国が準備を整えて合流してからということを考えれば最低数ヶ月、場合によっては1年は掛かるのではないか」

流石にそこまでの大規模な軍事行動になるとすぐには動けないか。頭が痛くなる話ではあったけど、まだ余裕があると言っるのは僥倖だ。

状況的にとても安心は出来ないけれど、時間があるのだからじっくりと最善の対策を考えることにしよう。

そんなふうを考えていた時期が私にもありました。

「レオノーラ」

「わ、私のせいではないぞ!？」

以前も使った鴉による偵察でダンジョン外の光景が鏡に映し出される。

そこに映っていたのはダンジョンに繋がる街道を行軍する兵士達の姿。

邪教徒による封鎖に対して相對するように陣が敷かれ始めている

が、後から後から人数が増えており戦力差は比べるのもおこがましい程になっている。

「あれからまだ半月……話が違う」

「だ、だから私のせいではない。」

大体おかしいだろう!?

何故こんな早く兵が動かせるんだ!」

誤魔化すように八つ当たり気味に氣勢を上げるレオノーラ。

まあ、私も心配してダンジョンに滞在してくれていた彼女を責めるつもりはないのだけど。

確かに彼女の言う通り、幾らなんでも早過ぎるように思える。

「いや、待て。」

陣を敷いている兵士達の姿をもっと大きく映せるか?」

レオノーラが何かに気付いた様子で私に問い掛けてくる。

私は頷くと鴉を陣に近付くように操作する。

レオノーラは鏡に映る兵士達の姿をジッと見詰めていたが、やがて納得したらしく1つ頷く。

「成程な、カラクリが分かったぞ。」

今行軍しているのは総てフォルテラ王国の兵士だ」

フォルテラ王国とは確かこの地が属する国家だった筈。

全て王国の兵士? 聖光騎士団とは連合軍ではなかったのか。それともあれは聖光騎士団とは別口なのだろうか。

「おそらくは先遣部隊といったところだろう。」

連合軍の編成には時間が掛かるので、すぐに動ける軍で偵察と布

陣を進める腹積もりだ。

「フォルテラ王国は立地上、足が早いからな」

成程、フォルテラ王国が望んだのか押し付けられたのかは分からないが、そういった役回りなら当事国が担うのは自然だ。

レオノーラの言っている王国の立地とは魔族領に隣接していることを言っているのだろう、そういう環境ならば一定規模の常備軍を設けていても不思議ではない。

「それならすぐには襲って来ない？」

「彼らが役割に徹していられる程、敬虔ならな」

レオノーラが引つ掛かる物言いをする。

私は言葉の真意を問うように、銀色の髪を流した彼女の美貌を見詰める……目を逸らされた。

「フォルテラ王国からすれば、聖光騎士団の本隊が動く前に片付けたい筈だ。」

「ここが王国領である以上、このダンジョンのことは本来であればフォルテラ王国が対処すべき問題。」

如何に邪神が人族共通の敵とはいえ、自国の問題を聖光教や他国に対処されれば借りを作ることになる」

成程、借りを作れば今後の外交においてマイナス要素になるだろうから、避けたいのは当然だ。

「加えて、あの光景を見れば誰が見ても本隊を待つまでもなく対処可能に思えるだろうからな。」

この状態で何ヶ月も手を出さずにジツとしているのは難しいのではないか」

「確かに」

フォルテラ王国の軍勢が何人居るか正確なところは分からないが、少なくとも見積もっても数千、下手をすれば万を超える。

それに対して邪教徒達は建築作業を中断して布陣しようとしているが数百人程度……お話にならない。

加えて、王国軍が常備軍なら全て職業軍人だが、邪教徒側の戦闘要員はせいぜい数十人で残りは一般人。

はっちゃけ教主がどれだけ頑張ってもこの戦力差を覆すことは不可能、まさに焼け石に水。

王国軍の優位は揺るぎないし、本隊を待つ意味など何処にもないと私でも思う。

むしろこの状況では、逆に手出ししないと臆病者の謗りを免れないのではないだろうか。

「布陣が終われば戦闘が始まる可能性が高いな。

それで、どうするのだ？」

「……………」

どうするかなんて私が聞きたい。

こんな早く来ると思ってたかったら、何も考えてない。

私は嫌なことは後回しにしたい普通の人間なのだ、食べ物だけは逆に好きなものを最後に食べるが。

数ヶ月あると聞いていたので、来月くらいに考えれば良いかと考えていた。

選択肢としては大別すると3つくらいか。

(1) たたかう：我が眠りを醒ませし愚か者共よ、死の報いをく

れてやるう！（徹底抗戦）

（2）ごうふく：ど、どうか命ばかりはお助け下さい！（全裸土下座）

（3）にげる　：あばよ、とつつあん！（脱兎）

取り合えず（2）は無しの方向で。

全裸土下座なんかする気は無いし、たとえしたとしてもその後には待ち受けるのは悲惨な運命だろう。

（3）には物凄く心惹かれるのだが、何処に逃げれば良いのかという問題がある。

人族領全体を敵に回しているようなものなので、避難先として可能性があるとすれば魔族領か。

レオノーラの伝手で亡命とか出来ないだろうか。

私は一縷の望みを掛けてレオノーラの方を見るが、彼女はそれ意見を求められたと思ったように続きを話し出した。

「流石に真っ向からは数の差で押し負けそうだからな、私としてはダンジョンの地の利を活かして籠城戦が有効だと思うが」

あ、ダメっぽい。　彼女は完全に戦う気だ。

「どうする」というのは「どうやって戦う」だったのか。

そう言えば、勇者（笑）パーティよりはマシとはいえレオノーラも結構脳筋族だった。

こんな状況でも一緒に居てくれるだけ心強いけど、魔族領に亡命させてとか言ったら軽蔑されて見捨てられそうだ。

魔族領もダメとなると（3）も無理……（1）しか無いのか。

痛いのも殺されるのも、ついでに私が無事な範囲で誰かを殺すのも勘弁願いたいのだが。

いや、考えてみれば私は王国軍や聖光騎士団の本隊を倒すのが目



的ではないのだから、別に真つ向から戦う必要はないか。

こんな状況になってしまった以上、私にとってベストな結果はこちらが強大だと思って彼らが軍を引いた上で、今後も手出しを控えてくれることだ。

たとえ力尽くで目の前の王国軍を追い払うことが出来たとしても、今後何度も攻め続けられるのでは意味が無い。

派手なパフォーマンスでこちらの力を実態以上に見せ掛けて、とても敵わないと思ひ込ませる……これが最善の道だ。

……ハツタリ以外の何物でもないけど。

戦っても勝てないという認識が広まれば、和平交渉の可能性も出てくるだろう。

私は交渉なんて出来ないから、その場合は誰かに押し付けるつもりだが。

幸いにして派手なパフォーマンスに関しては心当たりがある。私は考えをレオノーラに説明すると、すぐに準備に取り掛かることにした。

正直レオノーラは良い顔をしないと置いていたけれど、意外にも賛同してくれた。先程はああ言ったものの、正攻法では勝ち目が無いことは彼女も流石に分かっていたのだろう。目の前の王国軍だけなら兎も角、後から来る聖光騎士団には数の暴力で押し負けてしまう。覆すチャンスは今だけだ。

さあ、一世代の大博打を始めよう。

## 21：邪神アベレージ

ダンジョンコアに手を翳し、久方振りの階層増築を行う。

しかし、今回行うのはこれまで何度も行ってきたものとは根本から異なる。これまで行ってきたのは通常の階層増築、洞窟型のダンジョンであるこのダンジョンでは地下階層を増やすことになる。それに対して今私が行っているのは、ダンジョンの型に反する特殊な階層増築だ。

初回到3000万ポイントと言う嫌がらせのような魔力値を費やす必要があるが、これによって地下ダンジョンでも地上階層の増築が可能になる……嗚呼、折角溜めてたのに。ドラゴンが遠退いた。

一度特殊階層増築を行えば、以降は通常の階層増築で地上階層を増やすことが出来る。地上階層は部屋だけでなく外装も設定しなければいけないから面倒だが、概ねのデザインは決まっているためテキパキと設定を進めていく。

隣でレオノーラが引き攣った表情をしているが、気にせずに最後のプロセスを終了する。

この部屋には何の変化もないが、これでパフォーマンスは成った筈と思って横に置きっぱなしの鏡から外の光景を見る。

布陣を終えた王国軍も、それに相対して殉教の覚悟を決めた邪教徒も、その場のあらゆる者が驚愕と畏怖に硬直してその場所を見詰めている。

先程まで建造中の神殿の基礎部分が剥き出しになった状態だった広場に、突如天を衝くような巨大な建造物が姿を現したのだ。

黒を基調にしたその宮殿は神聖さと禍々しさが絶妙なバランスで融合した意匠で、それ自体が一個の芸術作品のようだった。

きっと誰もが本能的に理解しただろう、この建造物が邪神の住まう神殿であることを。

そう、私は地上階層に5階建の神殿を創造したのだ。

必要な魔力値が多過ぎることから他のダンジョンマスターはまず地下ダンジョンに地上階層を作ることなどしていない筈。故にそんなことが出来ること自体知られていないと思うので、十分に派手なパフォーマンスとなっただろう。

邪神故の力とでも勘違いしてくれば更に効果的だ。

私はトドメを刺すためにレオノーラとテナを連れて最上階層に転移する。

尖塔のバルコニーからは呆然と立ち尽くす王国軍と邪教徒の姿が見える。

「レオノーラ、テナ、お願い」

「ああ、分かった」

「はい、アンリ様」

レオノーラとテナが同時に魔法の詠唱を始める。

彼女達に頼んだのは場の演出の手伝いだ。

レオノーラが唱えたのは戦闘域を強制的に夜に変えて闇魔法の効果を高める魔法。

テナが唱えたのは空中戦用の足場を構築する魔法だ。

神殿を中心に半径数kmが夜の闇に包まれる、そんな中を私はレ

オノーラとテナを連れてバルコニーから空中へと歩き出す。

本来ならそのまま地上に真つ逆さまになる行動だが、今そこにはテナの魔法により黒い煙で出来た階ホウキが作られており、私はそこをゆつくりと降りて行く。

足元がフワフワして頼りないし、墜ちないと分かっているのも怖いものは怖い。

内心では心臓が生まれてからこれ以上は無い程の音を鳴らしている。

出来ればレオノーラでもテナでもどちらでもいいから手を握って欲しいんだけど、この状況ではそうもいかない。

階ホウキは地上まで続いているが私は中程の踊り場で歩みを止め、改めて地上を見下ろした。

私の視線の先、地上にてそれぞれの陣を設けている王国軍と邪教徒は1人の例外もなく私を見上げている。

さあ、仕上げの時間だ。

私は静かに目を閉じると魔力を練り上げる。

場の演出をレオノーラとテナに頼んでまで温存した魔力を使い、

1つ派手な花火を空に打ち上げて見せようじゃないか。

圧倒的な力の差があると思いついで、二度と攻め込む気にならなくなってくればいい。

私はカッと目を開くと魔法の詠唱を

って、あれ？ 王国軍がないぞ、何処行った？

見せるべき観客が居なくなってしまった舞台上、私はどうしていか分からずに硬直する。

「あの、アンリ様？

もう終わったみたいですよ」

「王国軍ならお前を見た直後に逃げていったぞ」

何ですと？

って、それじゃあこの練りに練った魔力はどうすれば？  
許容量とか無視したから暴発寸前なんですけど。

「ほら、いつまでそうしてるんだ？

さっさと戻るぞ」

いいや、撃っちゃえ。

見掛け倒しの花火にするつもりが詠唱し損ねたせいで普通に攻撃力あるけど、街とか無い方角にやれば大丈夫だろう。

「なっ！？ 何をする気だ！？」

無理、もう止められない。

「ば、ばか！ やめろおおおおおー！！！！！！」

ちゅどん。

- 『資格者「アンリ」の信仰と恐怖が一定量を超えました』
- 『種族が「人族」から「神族」に変更されました』
- 『職業が「魔導士」から「管理者」に変更されました』
- 『称号「邪神の御子」が「戦慄の邪神」にクラスアップしました』
- 『称号「第三管理者」を獲得しました』
- 『スキル「アドミニストレーション」を取得しました』

は？

どうしてこうなった。

いや、自分自身の考えなしの行動のせいなので自業自得以外の何物でもないが、それでもこんなことになるなんて誰が予想出来ただろうか。今更何を言っても後の祭りかも知れないが、海より深く反省している。

反省しているから

「そろそろ赦して」  
「ダメだ、もうしばらく正座している」

おに。

王国軍と邪教徒の睨み合いに横槍を入れて一世一代の茶番劇を繰り広げた後、唐突に聞こえた『声』に呆然としながらも何とか体面を保ってダンジョンに戻った私を待っていたのは、激怒するレオノーラによる制裁だった。

彼女の剣幕に圧された私はそれ以降数時間に渡り、食事もトイレに行くことすらも許して貰えずに正座させられている。ただ、何故かお腹は空かないし、トイレにも行かずとも平気なところが不気味だ。

ちなみに、正座なんて知らない筈のレオノーラがこんな罰を下したのはテナが入れ知恵したせいだ。テナ……この前のこと根に持っているでしょ、絶対。そしてそうだとすると、正座が終わった後にどんな目に遭わされるか想像するだけで背筋に冷たい汗が流れる。

正座の文化がある日本人とは言え数時間の正座は流石に堪え、既に足の感覚はなく僅かに動かそうとしただけでも痺れが全身に広がる。

この状態でつつき回されたら……ぶるぶる。

なお、レオノーラが怒っているのは私が邪神になってしまったから……ではなく、そうなった原因である溜め込んだ魔力を抑えておけずに明後日の方向に放ったことだ。

当初の予定では派手なだけでダメージの無い魔法を使って王国軍



を脅かすつもりだったが、いつの間にか逃げ去っていた王国軍の行方に取り残されている間にタイミングを外してしまい、許容量を超えた魔力が暴走するところだった。

抑え切れなくなっただのでやむなくそのまま放ったわけだが、無害な魔法ではなく魔力をそのまま放つと当たれば被害が出てしまうので、その程度の分別は残っていた私は街の無い方角に放った。

そりゃ街もない筈だ、「魔族領」の方角なんだから。

私の仕出かしたことに気付いたレオノーラは慌てて魔法による通信で魔族領の被害状況を確認すると同時に私への説教を始めた。そんな器用なことしなくていいから、被害状況の確認に専念して欲しい。

「聞いているのか、アンリ！」

「聞いている」

別のことを考えてはいるが、少なくともちゃんと耳には入っている。

レオノーラの説教を右から左に聞きながしつつ、私は口の中でこっそりと「ステータス」と唱える。

名前：アンリ

種族：神族「New」

性別：女

年齢：17

職業：管理者 「New」

レベル：1

称号：戦慄の邪神 「New」、ダンジョンマスター、第三

管理者 「New」

魔力値：27193018

スキル：邪神オーラ（Lv.5）

悪威の魔眼（Lv.5）

加護付与（Lv.7）

状態異常耐性（Lv.9）

闇魔法（Lv.9）

アイテムボックス（Lv.9）

ダンジョンクリエイト（Lv.7）

アドミニストレーション（Lv.5） 「New」

装備：悪鬼の短刀

邪神の黒衣

墮落のベビードール

淫魔のスキヤンティ

闇のパンプス

巫女：テナ 「New」

うわぁ……えくと、うわぁ……。

ダメだ、言葉が見付からない。

一体どうしてこんなことになってしまったのか。

『声』が聞こえた時点で分かってはいたけど、改めて見ると色々酷い。

<戦慄の邪神>

恐怖の権能を司る邪神

<第三管理者>

世界の管理者の第三席

<アドミニストレーション>

管理者の基礎スキル。

世界の法則や環境の操作を行う。

Lv. は権限の及ぶ範囲を定義する。

Lv. 5は世界システムの根幹及び他の管理者の専任以外の全てについて権限を持つ。

私が第三席と言うことは他の管理者が2人(2柱?)居るわけで、レオノーラから教えて貰った神話が正しいなら光の神と闇の神がそれに当たる筈だ。

世界システムの根幹と言うのは、創造神が世界の維持の為に切り離れた力の事かな。

思えばこのステータスや称号、スキル、それにダンジョンコアの機能なんかも、そのシステムの一端なのだろう。

神にされてしまった私すらその管理対象から外れていないのだから、他に思い当たらない。

名前：テナ

種族：使徒族 「New」

性別：女

年齢：14

職業：巫女 「New」

レベル：1

称号：アンリの巫女 「New」  
魔力値：187530  
スキル：状態異常耐性（Lv・6）  
闇魔法（Lv・6）  
装備：邪神の巫女服

共連れでテナまで人族の枠から外れてしまった、ごめん。  
おまけに奴隷から解放されて私の巫女になってる。

「……以上がこちらの状況です」

「そうか、分かった。」

「また何かあつたら連絡する」

「承知致しました」

レオノーラの確認していた魔族領の被害状況が分かったみたいだ。  
私が縋る様な目で彼女を見ると、目を逸らしつつ教えてくれた。

「幸いにして、人的被害は出ていないそうだ」

よかった。私は内心でホッと安堵する。

説教は真面目に聞いていなかったけれど、それは被害状況が気になつて心配で集中出来なかったためでもある。一応、本気で心配はしていたのだ。あんな間抜けなこと被害を出してしまったら、申し訳ないにも程がある。

「が、山が1つ半壊したそうだ」

マジですか。確かに暴走寸前になる程の恐ろしい量の魔力が集ま

つていたけれど、まさか山を砕いてしまつとは。  
まあいいか、人に被害を出してないなら。最悪、付与されてしま  
つたスキルで多分直せるし。

そんなことを考えていた私を影が覆う。不思議に思つて見上げる  
と、レオノーラが私の前に立つて俯いている。銀色の髪に隠れて目  
元が見えないが、口元がひくひくと引き攣っているのが見えた。  
何だか拙い雰囲気だ。

「……話を聞いていなかったようだな？」

「聞いてた」

「それなら、私が何を話したか言ってみろ」

「……………」

「……ごめんなさい。」

「テナ、アンリが足をマッサージして欲しいそうだ」

「分かりました、レオノーラさん！

リリも手伝つて」

「ん」

本気でごめんなさい!？」

ちよ、待つて。今それは本当にマズイ。

手をワキワキさせながらにじり寄つて来ないで!

ぴぎゃー……………!!

テナがこれまで見たことが無いくらいのイイ表情で笑っている。

テナと一緒に遊んでいるリリも、怒っていた筈のレオノーラも楽しそうだ。

私が邪神なんてものになってしまっても彼女達はこれまでと変わらずに接してくれている。

何とも威厳の無い光景ではあるけれど、多分これは幸せなことなんだと思う。

平均的な人生になる筈が邪神基準の平均にされて、最後にはとうとう本当に邪神になってしまったけれど、

彼女達と一緒になら、きっと楽しく過ごせる。

邪神初心者の私だけど彼女達と一緒に笑って過ごさため、せめて平均的になれるように頑張ろう。

「ここはどうぞですか、アンリ様」

「つつん」

「よし、私も手伝ってやる」

もうホントに赦して……

## 21：邪神アベレージ（後書き）

ご読了ありがとうございました。

アンリさんが邪神になってしまったところで、邪神アベレージ【前篇〜邪之章〜】完結となります。

なお、この後はここまでのお話の別視点を場面ピックアップした【邪之章外伝】を展開します。

理由は、一人称だとどうしてもアンリさんが見ていない部分の描写が不足するためです。

あいつら何処行ったとか、あいつあの時何考えていたんだ等、本編では分からなかった部分も明らかになる、かも。

そしてその後、後篇である【神之章】に突入します。



## 外伝01：ある女将の接客（前書き）

外伝は主に本編を他者の視点から見たお話であり、本編とは打って変わってホラー調やシリアス調の話がメインになります。

しかし、既に本編を読まれて裏側を知っている皆様にはニヨニヨしたりホツコリしたりしながら読んで頂けると思います。

……まさか、外伝から読み始めるといふ斜め上の読み方をされている方はいないと思いますが、もしいらっしやった場合、流石にそれは私の想定外の範囲外ですので、ご承知置き下さい。

外伝は全十一話で一話毎の長さは話によってまちまちです。最初はジャブからどうぞ。

## 外伝01：ある女將の接客

「おや、お客さんかい。  
いらっしやい、ここは宿屋だよ」

もうすぐ日が暮れるという時間帯、入口の扉が開かれる音にアタシはそちらへと目を向けて入ってきた客に声を掛けた。入ってきた客は黒いローブを頭から被った怪しい格好だったけど、長年宿屋をやって何人も客を見てきたアタシには背格好で年頃の娘だつてこととすぐに分かったから、特に不審とは思わなかったよ。年頃の娘が顔を見せて歩いてると絡んでくるやつも居るからね、自分の身を守るのは当然つてもんだ。

はて、何故か少し寒気がしたけど……ま、気の所為だろうね。

「1泊幾ら？」

「1泊銀貨1枚、食事は朝食が銅貨5枚で夕食が銅貨10枚、お湯はたらい一杯で銅貨5枚だよ」

ちよつとばかりし他の宿屋よりも高いけど、その分だけ部屋も食事も良い筈だよ。酒場と一緒にじゃないから騒がしくないし、ガラの悪い客も居ないしね。

「5泊、食事とお湯もお願い」

その言葉と一緒に銀貨が手渡される。ひいふうみい、確かに6枚だね。普通は1泊ずつ払う客が多いんだが、随分金払いの良い娘だね。アタシが幾らとも言わない内に宿代も計算していたし、何処かの大きな商人の娘とかかね。

まさかとは思いつけど、お貴族様とかじゃないだろうね。着ているローブも随分と仕立てが良さそうだけど。幾らうちが比較的上等っていったって流石にお貴族様が泊まるような宿屋じゃないんだよ。

「はいよ、部屋は2階の突き当りの右側だ。

これが鍵だよ。

すぐに食事にするかい？」

「ええ、出来るのなら」

「よしきた、すぐに準備するから好きな席で待ってな」

アタシは木製のプレートが付いた鍵を娘に渡すと、厨房に居る亭主に1人分の食事を準備するように言いに行った。

例の娘はあまり口数が多い方じゃないみたいで世間話なんかもしないから名前も分かりやしない。外を出歩く時どころか宿の中や食事をしている時すらもローブを羽織って顔を隠しているところを見ると、何か訳アリなのは間違いないだろうね。気にならないと言えば嘘になるけど、あまり客の素性を詮索してもロクな事にならないからね、私は聞かないよ。

それにしても、泊まっている間は部屋の掃除もベッドのシーツの交換もなくていいって言ってたけど、部屋で何か変なことしちゃいないだろうね。ちょっと心配だよ。

朝食を食べると出掛けていって夕方になると戻って来ることを繰り返していた娘だけど、何日か経った日に一度だけ普段よりも早く帰ってきたことがあった。普段であれば口数が少ないとは言っても

「おかえり」と声を掛ければ返事を返すくらいはするんだけど、その日だけは何故か入口から入ってくるやいなや、そのまま階段の方へと歩いていったんだ。気になって娘の方を見るとローブの隙間から初めて見る顔が

っ！？ な、何だいあれは！

想像していたよりも綺麗な顔付きだけど、そんなことよりも何よりもあの目は一体何だい！？

怒り、憎悪、嫌悪、軽蔑、嫉妬、殺意、怨み、苦しみ、悲しみ、絶望、ありとあらゆる負の感情を詰め込んだようなあの黒い目。長年客商売で色んな客の目を見てきたけど、あんな目を見るのは生まれて初めてだよ。

いや、あんな目は人間のするもんじゃない。何かもつと禍々しい恐ろしいものの目だよ。見た瞬間、心の臓を鷲掴みにされたかと思っただよ。ああ、何て恐ろしい……。

ああ、何て客を泊めちまっただんだい。

出来れば今すぐ出てって欲しいけど、あと2日分の前金貰っちゃまってる。返して出てってくれるんならすぐに返すけど、もしそんなことを言っただ逆上して襲い掛かってきたら……。

あと2日、あと2日だ。今まで大丈夫だったんだから、あと2日くらい平気な筈だよ。そうだろう。

その日だけ様子のおかしかった娘の格好をしたナニカも、翌日以降は普段通りに戻っていた。幸い、アタシに顔を見られたのも気付いていないみたいだった。

怖くて仕方が無いけど、何とか顔に出さないようにしてなるべく今までと同じように話掛けるようにしなくちゃね。もし正体に勘付いたことがバレたりしたら、何をされるか分かったもんじゃない。くわばらくわばら。

そうして何とか、2日の時が過ぎた。

ああ、やっと出てってくれた……。

娘の格好をしたナニカが宿の宿泊を延長したいと言ってきたので、何とか懇願してお断りさせて貰った。正直いつ襲い掛かれるかとヒヤヒヤして背中を冷たい汗が流れたけど、娘の格好をしたナニカは何かを察したのか大人しく引き下がってくれた。

アタシは全身が脱力してぐったりと椅子の背凭れに寄り掛かった。この2日間できつと3年くらいは寿命が縮んだよ。

そのまま少し休んでいたけれど、気を取り直して部屋を掃除することにした。今度来るのはまともな客であって欲しいね。

って、何だい！ この黒い天蓋付きの寝台は！？

## 外伝02：あるシスターの恐怖

「聖女神ソフィア様は人族を創りたもうた偉大なる御方です」

私は礼拝堂の席の後方に立って、ミサのお勤めのために控えています。

席の反対側では聖女神様の像の前に立った神父様が礼拝堂に集まった信者の方達へと説法を行っているところです。今語られているのは聖女神様の祝福にまつわる有難いお話ですね。

教会のシンとした静謐な空間に神父様の声が響き渡る説法の間、心が洗われるような感じがして私はこの時間が好きでした。

「聖女神ソフィア様はいつでも私達を見守ってくれています」

聖女神ソフィア様、それはこの世界をお創りになられた尊き神様であり、世界を破壊せしめんとする邪神から私達人族を守って下さるとても慈悲深い御方です。

聖光教はそんな聖女神様の偉業を称え、人々に伝える為に存在します。勿論、教えを伝えるだけではなく聖女神様の御心に適うように孤児院の設立や炊き出しなどを行って貧しい人々を救済したり、争い合う国の間立って仲裁したりと、人族の平和のために尽力する素晴らしい組織なのです。

私の家は貧しかったため日々の食事にも困ることがありましたが、そんな私達家族を救ってくれたのが聖光教です。私は自分が助けられた様に誰かを助けたいと考えて、聖光教へと入信し修道女となります。

ました。

「聖女神ソフィア様は私達人族を愛し、邪悪なる者から私達を護ってくれます」

リーメルの街の教会はそれほど規模の大きいものではありませんが、魔族領から程近い立地であることから最後の砦となることも想定されています。それ故に、この教会が建立された時には当時の大司教様にわざわざ来て頂き、複数人で強固な結界を張ったそうです。普通の教会でも聖女神様の祝福によって邪なるものを退ける力が働きますが、この教会は特に強い護りの力によって守護されているのです。万が一魔族領からの侵攻によって街が危機に陥った場合でも、この教会はそう簡単には侵すことが出来ないだろうと言う神父様のお言葉を聞き、とても心強く思いました。

「聖女神ソフィア様の慈愛に感謝し、祈りを捧げなさい」

神父様の言葉に信者の方が両手を合わせて祈りを捧げます。私も共に祈りを捧げるためにその場に立ったまま目を



その瞬間、礼拝堂内にドンツと揺れが走りました。

いえ、建物も地面も揺れていません。空間そのものが音を立てて震えたのです。信者の皆さんも突然の衝撃に混乱しざわめきが広がっていきます。

「落ち着きなさい！」

神父様が静止しようとしませんが、中々収まりません。何が起きたのかは分かりませんが、私も神父様に倣って信者の方々に落ち着いて貰う為に声を上げようと思いました。

しかし、その瞬間私はふと何かを感じて後ろを振り返りました。するとそこには異様な光景が広がっていました。

聖光教の教会はいつでも誰でも受け入れる為、ミサの間でも扉を閉じることはありません。その為、礼拝堂の後方に居た私が振り返ると開いた扉から外の景色を見ることが出来ます。異様だったのはその外の光景、何と外の光景に罅が入っているのです。罅の向こうにはいつも通りのリーメルの街並みが広がっていました。その街並みが普段通りであるが故により一層その光景の異常さを掻き立てます。

一瞬にして異界と化した景色に啞然とした私ですが、やがてそれが教会を覆っている透明な何かに罅が入ったことによるものだと気付きました。私の様子に気付いたのか信者の方々も神父様も外へと目を向けます。

教会を覆っている何か？

まさか、神父様が仰っていたこの教会を護る守護の結界なのでしようか……いえ、だとしたら一体何故罅が！？

空間の罅に目を取られた私でしたが、やがて罅の向こう側に黒いローブを着た誰かが立っている事に気付きました。丁度罅が間にあって顔は見えませんでした。10代後半の女の子のようです。その少女は罅が入った場所のすぐ前に立っています。「そこは危険です、離れて下さい！」と注意の声を上げようとした私ですが、それより早く少女が右手を挙げて目の前の罅にそっと触れました。

その次の瞬間です、罅が一斉にその傷痕を広げていき視界の全てを覆ったかと思うと、パンツと言う呆気ない音と共に「何か」が弾けて消えました。

え？

そ、そんな……大司教様が張ったという守護の結界が！？

信じられない気持ちで呆然とする私ですが、これまで礼拝堂に感じられていた聖なる気配が確かに散って消えていくのを感じます。

そして、罅が無くなったことにより、先程までは見えなかった黒いローブの少女の顔が見えるようになりました。

彼女と目が合った瞬間、まるで首を絞められているかのような圧迫感が感じられ、呼吸が出来なくなりました。

私だけではありません、私の後に居た信者の方々も神父様も言葉を出すことすら出来ずに立ち尽くして居ます。

少女の姿をしたナニカは無言と礼拝堂に居る私を含めた人々を睥

睨すると

ニタリ、と嘲笑を浮かべ、何かを呟いて立ち去って行きました。

少女の姿をしたナニカが立ち去った事で、漸く私達は呼吸を取り戻すことが出来ました。信者の方々の精神的な疲労は大きく、誰もがぐったりして倒れ込んでいます。

ミサはとても続けられない状態だったために中止して、急遽暖かいスープを作って配るようになりました。正直私も倒れ込みたい気分でしたが、スープの準備をしないとイケません。

美しい顔立ちをしてましたが、あれはきつと邪神の眷属……いえ、大司教様の結界をあつさり砕いたのですから邪神そのものに違いありません。

結界を破壊するだけで何もせず立ち去っていったのは、いつでも襲えるという悪意の籠った宣告なのでしょう。邪神が浮かべた不気味な笑いがそれを物語って居ました。

邪神が最後に何を呟いていたのかは聞こえませんでした。きつと悍ましい呪いの詞に違いありません。

この世界は一体どうなってしまったのでしょうか、そして私達は何からどうなるのでしょうか。

ああ、聖女神ソフィア様。

どうか私達をお救い下さい。

### 外伝03：ある冒険者の災難

依頼の完了を報告を終えて報酬を受け取り、小休止を兼ねてギルドのテーブルと仲間達と談笑する。

報告した依頼はフォレストウルフの群れの討伐……俺達にしちゃ結構な難易度の仕事だった。フォレストウルフは森の中に群れを作って棲息する魔物だが、最近数が増え過ぎて森の中の街道を通る商人達を襲ったりしていたため、領主から討伐の依頼が来たって話だ。フォレストウルフは一頭一頭はそこまで強くはねえが、常に群れで行動して敵を囲んで襲うつつ厄介な相手だ。普通なら視界の悪い森の中で囲まれないように慎重に相手をする必要がある魔物なんだが、昨日は何故か森の入口近くまで出て来てやがったので簡単に狩ることが出来た。どうも何かに怯えているような様子だったのが気に掛かったが、一体何があったってんだ。

「しかし、今回は思ったよりラクだったな」

「狼共が何故か森の入り口に居たからな、それに統率も全然取れていなかった」

仲間達も俺と同じことを考えていたらしい。俺もそこに乗っかる事にする。

「獲物を探してたって感じじゃねえよな。」

「つーか、何か怯えてたように見えなかったか？」

俺の言葉に、仲間達は頷いた。

「確かにそんな雰囲気だったな。」

もしかして、強い魔物が森に棲み付いて逃げてきたとかか？」  
「知らねえよ。だが、それなら納得出来るだろ」

魔物が縄張りを変えるのは数が増え過ぎて餌が取れなくなった時  
か自分達よりも強い魔物が棲み付いた時が殆どだ。今回みたいに急  
な移動で、しかも怯えた様子となると後者の可能性が高え。

「まさか、森にドラゴンでも棲み付いたんじゃないだろうな」  
「ハハ、流石にドラゴンはねえよ」

ドラゴンなんざ長年冒険者をやっているでも見たこともねえ。魔族  
領の奥深くには居るつつう話だが。

「ま、何にせよ森に行く依頼があつたら気を付けた方がいいだろう  
な」

「そうだな、命あつての物種だぜ」

死んじまつたら何にもなんねえ。

冒険者つてのは身分も技術も不問なかわりに命が危ねえ仕事だが、  
新人の中には英雄に憧れるガキが結構居て無茶をやつては死んでい  
きやがる。目の届く範囲でなるべく俺らみてえな熟練者が世間つて  
もんを教えてやって死なねえようにしてやってんだが、それでもそ  
ういう奴は後を絶たねえ。

そうそう、丁度あんな感じに……っておい。

「カードの記載内容を転記させて頂きま」  
「おいおい、こんな小娘が冒険者志願だと？」

世も末だぜ」

見ると、黒いローブで全身を隠した奴が受付で冒険者登録を行っていた。しかし、隠して居てもその華奢っぷりにまだ尻の蒼いガキ、しかも女であることは一目瞭然だ。こいつ、女のガキのくせにパーティも組まずに冒険者やろつってのか？自殺行為だぞ。このまま放っておいたら2〜3日後にはゴブリンの巣で苗床になってるのが関の山だ。

俺は思わず立ち上がって横合いから口を挟んだ。

「おいおい、ガルツ。」

「また新人に絡んでんのかよ」

「毎度毎度飽きねえな」

仲間達が呆れたように言ってくるが仕方ねえだろ、ガキがばたばた死んでいくのは寝覚めが悪いんだ。軽く焼き入れてやって俺らの下で下積みからやってた方がコイツの為でもあんだよ。

小娘は俺にビビったのか顔を隠したまま無言で立ち竦んでいる。こっして見ると、ホント小っけえな。

「おら、何とか言ったらどうなんだ。」

「いつまでも顔隠して黙りこくってんじゃねえ」

そういつと俺は小娘のフードを手で払って顔を露わにした。

っ!？

そいつの顔を見た瞬間、俺は思わず硬直する。目が合った瞬間に、自分が死んだと思った。

魔族ですらこんな酷え目はしていないだろうっていう、暗く澱んだ目だ。

次の瞬間、腕にチクツとした痛みを感じたかと思った時には、女は禍々しい黒い短刀を構えてやがった。

ヤベエヤベエヤベエ！ 殺される！

「ヒッ!？」

俺は思わず情けない声を当てる尻餅を突いた。

気付いた時には目の前の存在は既に人間の女の姿をしていなかった。全身からヘドロ状の何かが噴き出した化け物だ。

俺は少しでもそいつから離れようと後ずさった。

「\$%、&\$&%、#!」

すると後ろから、何か聞き取り難い不気味な叫び声が聞えてきた。振り返ると、後ろにも似たような化け物が俺に向かって触手を伸ばしてきやがる。

「!？ うおおおおああー!?!?!」

「@#、\*?#\$&\$&%!」

俺は全力でその化け物に殴り掛かったが効いた様子がない。

それどころか、いつの間にか化け物に囲まれていて一斉に俺を襲って来やがった。

何とか振り払って外に出たが、そこには似たような化け物が溢れ



返っていた。

「一体、この街はどうなっちまったんだよ!？」

誰に言った言葉が自分でも分からねえが、吐き捨てる俺は化物で溢れ返っちまってる街から外に出ようと走り出した。

気が付くと俺は地面に横たわっていた。

ガンガンと痛みが走る頭に手を当てながら身体を起こして周囲を見る。どうやら、ここはリーメルの街の外の平原みてえだ。街の近くとは言え、魔物が全く居ないわけじゃねえ。こんな風に寝っ転がっていて喰われなかったのは運が良い。

取り合えずこうしていても仕方ねえから街に戻ろうとする。何かとんでもねえことを忘れている気がするが、思い出せない。

衛兵を殴り倒して無理矢理街の外に出たとか言われて街の入り口で揉めたのを皮きりに、色んな奴から身に覚えのない言い掛かりを付けられて四苦八苦する羽目になったのはそのすぐ後のことだった。

— 体え俺が何したってんだ!?

外伝03：ある冒険者の災難（後書き）

ガラは悪いですが実は気のいい人です。

#### 外伝04：ある奴隷の救済（前書き）

ある意味貴重な（ほぼ）完全シリアス回です。

微鬱注意ですので、苦手な方は読み飛ばして最後の3行だけお読み下さい。

## 外伝04：ある奴隷の救済

絶望に覆われた暗い地下牢の中、ただその人だけが私に手を差し伸べてくれた。

今年是不作の年だった。

畑の作物は萎びていてお腹に溜まらず、売り物としても値が付かない。僅かな蓄えはあつたけれど、それでも家族5人が冬を越すためには足りなかった。

村に奴隷商人の馬車が来た時、最早他に出来る事はなかった。

うちの家族はお父さんお母さんに2つ年上の兄さんと1つ年下の弟が居る。男手は労働力として残しておく必要がある為に売られるのは必然的に私だった。

売られると言っても厳密にはそんな制度はない、奴隷商人と結ぶ

のはあくまで借金の契約。

奴隷商人からお父さんが借金をして、その借金の形に私になる。お父さんが借金を返せなければ、私は奴隷になって売りに出されることになる。でも、最初からお金を返せる可能性なんてないことは誰もが分かっていた。奴隷商人もそのつもりらしく、返済を即座に諦めるなら金額を増しすると言われた。

お父さんは私から目を逸らしながら、その場で借金を返せないことを奴隷商人に告げた。

不幸なことがあった次には幸せなことが起こって欲しいけれど、聖女神様はそんな甘えは許してくれないみたいだ。

不幸に不幸が続き、街に戻る馬車の中で私は死病に掛かってしまう。身体を起こすことも辛く、胸がズキズキと痛い。咳き込むと血を吐いてしまうこともあった。

私以外にも2人程病に倒れた奴隷が居て、他の奴隷に病が感染する

ことを心配した奴隷商人に荷物を積んでいた別の馬車へと折り重なるように纏めて放り込まれた。死病によって売れる可能性が減った私達には他の奴隷達よりも少ない食事しか貰えなくなったけど、食欲もあまり湧かなかった。

馬車がりーメルの街に漸く着いた時、私は既に死に掛けていた。

奴隷商人の店で、私と病に倒れた2人の奴隷は同じ牢へと入れられた。そこは私達の様に既に死に瀕している奴隷を纏めて入れている牢だった。余計な費用を使わないように服を着ることすら許されず裸の状態で放り込まれた奴隷達が思い思いの格好で佇んでいた。私達が新たに牢に入れられても半分くらいの奴隷達は反応すら示さない、絶望に心が先に死んでいるその様に私の胸にも冷たいものが走った。

あれは私自身の未来の姿だ、そしてそれは遠い先の話ではない。

奴隷商人に、死に掛けた奴隷は殺される為に売られると教えられた。

冒険者や衛兵が強い魔物に対して生きた盾にするためや魔導の実験材料、あるいはただ単に欲求のため、安く購入出来て使い潰せる死に掛け奴隷を求める人は人数こそ多くはないものの存在する。

買われれば殺されてしまう、かと言ってこのまま売れなくても何れ……。

死病に蝕まれ痛む身体、そしてそれ以上に絶望に蝕まれる心。身体よりも先に心が死んでしまいそうな日々だった。何度か牢の前に客が来ては、牢の中の奴隷が減っていった。

ある日、また奴隷商人が客を連れてきた。

私は壁に寄り掛かったまま、その様子をぼうつと眺めていた。

これまでできた客は男の人が多かったけれど、今回の客は黒いロブで顔が見えないけれど多分女の人……それも私より少し大きいくらいの年の人のようだった。

奴隷商人とその人が何か話すと、その女の人は前に歩み出て自らフードを外して顔を露わにした。

その人の目を見た瞬間、死に掛けて止まり掛けていた筈の私の心が何故か震えた。

「彼女は？」

「名前はテナ、年齢は14歳です。」

このリーメルから少し離れたところにある村出身の借金奴隷なのですが、連れてくる旅の途中で死病を発病しましておそらく余命は



残り一ヶ月ほどと見ています」

奴隷商人の言葉に思わず身を竦める。自分の命が長くないことは分かつてはいたけれど、具体的な余命を他の人から言われると死の恐怖が克明に湧き上がる。

死にたく……ない……。

「私ならもしかすると貴女を助けられるかも知れない」

……え？

女の人から投げ掛けられた声を正しく認識するまで、少し時間が掛かってしまった。

助かる？ 私は助かるの？

私の方をじつと見詰める女の人の黒い瞳を見るが、その目は真剣で嘘を言っているようには見えなかった。それに何故だろう、この人の目を見ると何だか心の中がざわつく。

「証拠はないけれど信じて受け入れられるなら、この手を取って」

女の人が言葉と共に鉄格子越しに私に手を差し出してきた。

私は差し出された手と女の人顔を呆然と眺めていたが、ざわつ

く心のままに信じることにして手を合わせた。どうせこのままでは助からないことは確実なのだから、自分の心に従ってみようと思っ  
た。

身体を洗われ、暫くぶりに簡易ながら服を着せて貰うことが出来た。あれよあれよと言う間に色々な事が起こって混乱していたが、服と一緒に奴隷用の首輪を嵌められたことで、ようやく自分が買われたことを認識することが出来た。病で弱り立って歩くことが出来ない為、下人の男の人に運ばれてお店の中へと連れて行かれて床に寝かされた。

「彼女の首輪に手を触れて下さい」

奴隷商人の言葉を受けて、私を買った女の人が私の首に嵌められた首輪に手を伸ばしてきた。女の人がしばらく触れていると、首輪から光が放たれて何処からか声が聞こえた。

『アンリに隷属しました』

私はその女の人 アンリ様の奴隷となった瞬間だった。

「これで彼女はお客様の奴隷となりましたので、命令には絶対服従となります。」

彼女は歩ける状態ではないため、宜しければ馬車を呼びますか？」  
「要らない、背負ってく」

予想外の言葉に反応が遅れて、気が付いた時にはアンリ様に抱え上げられて背負われていた。

一体何処の世界に奴隷を背負って運ぶ主人が居るのだろうか。私は病で動かし難い身体を何とか動かして彼女の背中から降りようとしたが、がっしりと掴まれていて降りることが出来なかった。降ろしてくれる気が無いようなので私は暴れるのを止めた。

それにしても、女の人でそれほど体格も大きくないと言うのに、アンリ様は意外なほど力が強かった。幾ら私が痩せ衰えていて軽いとは言っても、女の人が軽々と背負える程ではない筈なのに。

それにしても、彼女はどうして私を買ったのだろう。瀕死の奴隷など使い道は限られているが、私にはどうしても彼女がそんな使い道で奴隷を欲しがる人には見えなかった。

背負われたまま何処に連れて行かれるのかと思っていたら、アンリ様は路地裏に入って人気のない広場で私を地面に降ろした。私はどうしてこんなところに連れて来られたのか分からず、ただ呆然とアンリ様を見上げるしかなかった。

「貴女は私を信じると誓った」

「……はい」

久し振りに発した言葉は掠れていたが、何とかアンリ様には届いたようだった。彼女は私のおでこに指を突き付けた。

「その言葉が真実なら受け入れて　加護付与」

『アンリから加護を付与されました』

再び聞こえた声と同時に、私は黒い何かに包まれた。痛みや苦しみは無かったけれど、私の中の決定的な何かが変わった感じがした。黒い何かが消えた時、私の格好は一変していた。ただの布に穴を開けただけの服が上等な布と装飾が施されたものになり、ガリガリに痩せていた筈の手足は肉を取り戻していた。

「え……あ……」

何が起こった分からずに手足や服を見ていた私だが、ふとこれまでずっと襲われていた痛みが消えていることに気付いた。呼吸をするだけで起こっていた苦痛が嘘のように無くなっている。

地下牢の中でアンリ様から投げ掛けられた「助けられるかも知れない」という言葉が脳裏に浮かぶ。

嘘じゃなかった……助けてくれたんだ……。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

私は命を救われた安堵にボロボロと涙を零しながら、アンリ様の手を掴んで感謝の言葉を繰り返した。

しばらく泣き続けた私だが、自分の行動を振り返って青褪めてしまった。奴隷が主人に縋りついて泣き喚いていたのだ、無礼な行動で怒りを買ってしまったかも知れない。私の命を助けてくれたアンリ様がそんなことをするとは思いたくないが、主人の怒りを買えば殺されてしまっても不思議じゃない。

「立って」

「は、はいっ！」

アンリ様の言葉に、ただでさえ無礼な行動をしてしまった私はこれ以上機嫌を損ねないようにバツと立ち上がった。そう言えば、自分の足で立てたのはいつ以来だろう。そんな余計なことを考えながら、私はアンリ様から投げられるであろう言葉に戦々恐々としていた。

「貴女には私の住処に住んで身の回りの家事と買い物をして欲しい」  
「……え？」

二重の意味で理解出来ない言葉に、思わず呆けた声で返してしまった。叱られると構えていたのに仕事を頼まれたことが一つ、もう一つは頼まれた仕事の内容にだ。

「不服？」

「め、滅相ありません！」

ただその……それだけでいいんですか？」

咎めるような言葉に慌てて首を振りながらも、先程聞かされた仕事の内容について尋ねずには居られなかった。奴隷をわざわざ買うのは普通の人にはさせられないような大変な仕事や嫌がられる仕事

をさせる為だ。それだと言うのに、先程アンリ様に言われたのは普通に使用人に任せるような内容で、奴隷にさせるような仕事じゃない。

「それだけでいい。」

ただ、街から離れたところに住んでるから、買い物は結構大変」「分かりました」

街から離れたところ？

一体この方はどんなところに住んでいるのでしょうか。

その後、アンリ様は私の為に靴と下着まで買い与えてくれた。どちらも奴隷に与えるような物ではないので驚いたし遠慮しようとしたのだが、下着を履かないと絶対にダメと言われた為、素直にありがたく使わせて貰うことにした。

アンリ様。

絶望に覆われた暗い地下牢の中、ただ一人だけ私に手を差し伸べてくれた人。

この人が私に一体何を求めているのかまだ分からないけれど、死ぬ筈だった私の命を助けてくれたのだから、何処までも付いて行こう。

「つて、ここのダンジョンじゃないですか!？」  
「私、ダンジョンマスターだから」  
「っ!？」

## 外伝05：あるギルドマスターの憂鬱

「初心者ダンジョンに異変、ですか？」

「はい、ルフリーさんからの報告です」

執務室で上がってきた報告書に目を通して、私は思わず首を傾げました。

初心者ダンジョンとはこのリーメルの街から程近い場所にあるダンジョンで、既にダンジョンマスターは討伐済なのですがダンジョンコアを見付けることが出来ずに、ダンジョンとしては休眠状態ではあるものの死んではないという中途半端な状態となっている場所です。

元々3階層という低レベルなダンジョンですし、出現する魔物も設置される罾も危険度が低いものばかりであるため、この冒険者ギルド・リーメル支部が管轄下に置いて初心者訓練場所として活用していました。ダンジョンマスターの居ないダンジョンはそれ以上成長することがありませんが、ダンジョンコアが破壊されていない間は自動的に魔物が出現し罾が設置され続けますので、訓練場所としては中々に有効でした。

「ダンジョン内の内装や雰囲気の変化に、出現する魔物の強化化ですか」

以前の初心者ダンジョンでは出現する魔物はスライムとコボルトのみでした。しかしルフリーからの報告を読む限りでは、レイスに黒い鋼鉄製のゴーレムが出没したということです。ルフリーは中堅の域に差し掛かった冒険者ですが、全く歯が立たなかったと報告されています。



「これはダンジョンマスターの復活……いえ、新たなダンジョンマスターが誕生したと見るべきですね」

ダンジョンマスターは自然発生したダンジョンコアと魔物や動物、あるいは人族や魔族が契約することで誕生します。ダンジョンマスターはダンジョン内で殺害した獲物から魔力を奪い、その魔力を用いてダンジョンを成長させます。放っておけばダンジョンは制限なく成長していくため、ダンジョンマスターは即討伐対象となります。いつの間にか街や都が飲み込まれていた、なんてことになりかねないですからね。

初心者ダンジョンはダンジョンコアが健在だった筈なので、そのダンジョンコアに何者かが接触して新たなダンジョンマスターになったのでしよう。

しかし、気になるのは出没する魔物が強力なこと、それからダンジョン内に漂っていたという禍々しい気配です。どちらも新たなダンジョンマスターが相当強力な存在であることを示しています。強力な魔物が、あるいは……魔族。

「ヴァイフ達を呼んで貰えますか」

「わざわざ名指しで俺達を呼ぶなんて珍しいな、ギルドマスター」

翌日、私は要請に応じて執務室を訪ねてきた4人組の冒険者パーティを出迎えました。彼らはこのリーメルの街のトップランカーであり、現状私が動かせる中では最もレベルの高いパーティです。

「貴方達にこの件の調査を依頼したいのです」

そう言うと、私はルフリーからの報告書をヴァイフに手渡ししました。ヴァイフはそれに一度目を通すとパーティメンバーに回しました。

「あの初心者ダンジョンに異変、か。」

わざわざ俺達に依頼するのは何故なんだ？」

「私の勘ですよ。この件は厄介な予感がします」

「やれやれ、アンタの勘は当たるからな」

最優先事項はこの『元』初心者ダンジョンの脅威度の調査です。

中堅に分類されるルフリーが歯が立たないとなると、相応の強さのパーティでないとダンジョンの脅威度も分かりませんので、出し惜しみは禁物です。

「細心の注意を払って調査を行って下さい」

「了解した、任せておいてくれ」

「で、結果がこの報告ですか」

「……面目ない」

ヴァイフからの報告を読み終えて、私は目の前に居る彼に話し掛けました。依頼の時とは異なりパーティメンバー達は同席していません。ヴァイフは依頼の結果に大分落ち込んでいるようですね。

「別に責めているわけではありません。  
ダンジョンの脅威度の調査としての目的は果たせていますから、  
依頼は達成で構いませんよ」

ただ、その調査結果が予想以上に厳しい結果だっただけです。まさか、このリーメルの冒険者ギルドのトップランカーが2階層で倒れるとは、夢にも思いませんでした。

強力な魔物に厄介な罫、それに……

「瘴気ですか」

「ああ、精神に影響する厄介なやつだ。対策無しではとても深層までは潜れない」

瘴気とは邪悪なる存在が放つ気配であり、毒の様に身体を蝕むものもあれば、今回のように精神に悪影響を齎すものもあります。ダンジョンの場合はダンジョンマスターの性質によって、ダンジョン内に撒き散らされていることがあると確認されています。一般的に瘴気の放たれているダンジョンのダンジョンマスターは高位の存在であることが多く、特に精神に影響する瘴気はその傾向が強いです。修行を積んだ修道士による結界や、聖光教で聖別されたアイテムである程度は防ぐことが出来ますが、厄介であることに変わりはありません。

「それにしても、よくダンジョン内で倒れて無事でしたね」

「確かに、普通はそのまま魔物に喰われて終わりだからな。

その辺は報告にも入れておいたが……」

気絶させられた後、武器とアイテムだけを奪われて気付いたらダンジョンの入口に放り出されていたそうです。この報告は先日のル

フリーの報告とも一致します。正直、意味が分かりません。『元』初心者ダンジョンに新たなダンジョンマスターが誕生したのは既に確定だと思いますが、ダンジョンマスターの目的はダンジョン内で獲物を殺害して魔力を奪うことの筈です。気絶させて武器やアイテムだけ奪い、生かして返す……こんなケースは初めてです。

「で、どうするんだ？」

ダンジョンマスターの思惑などこの場で考えても結論は出そうにありません。それよりもヴァイフが聞いてきたように、これからどうするかを考えるべきでしょう。彼としては、屈辱な結果に終わった調査の再挑戦をしたいのでしようけど。

「そうですね、新ダンジョンへ対策するため広く依頼を出そうと思います。」

報酬は金貨30枚といったところでしよう」

「金貨30枚!? ……いや、確かにそれくらいの報酬は必要か」

正直、出来たばかりのダンジョンの討伐依頼としては破格の報酬ですが、私はこれが多いとは思いません。ヴァイフも驚きはしたものの、すぐに納得しました。この冒険者ギルドのトップランカーは彼らですが、それでも踏破が難しそうである以上は、余所からの戦力に期待するしかありません。この金額であれば国中から挑む者が出てくるでしょう。」

「依頼を出す以上、ダンジョンの名称を考えなければいけませんね。既に、初心者ダンジョンとは別物です。」

そうですね……『邪なる追剥の洞窟』としましょうか」

「言い得て妙だな」

凶悪な瘴気が放たれていることと、冒険者の武器やアイテムを奪うことを目的としているとしか思えない不可思議な対応を鑑みての命名です。

さあ、依頼を出すと共に、他の街の冒険者ギルドへも連絡しないといけません。

これから、忙しくなりそうです。

まさか、この命名のせいで邪神に睨まれる羽目になるとは、この時は想像もしていませんでした。

## 外伝06：ある魔導士の嘆息

「邪なる追剥の洞窟？」

「ええ、冒険者ギルドで告知されていたんです。

新しく出来たダンジョンのようなんですけど、金貨30枚でダンジョンマスターの討伐依頼が出ていました」

「金貨30枚!？」

宿屋に併設された酒場でテーブルを囲みながら、街で二手に分かれて情報収集した結果を話し合う。

新しいダンジョンの攻略依頼か。それにしても、出来たばかりのダンジョンで金貨30枚とは随分と張り込んだもんだね。それだけそのダンジョンを警戒しているってことだろうけど。

「沢山のパーティが挑戦しているみたいだが、あまり進んでいないらしいな。

魔物も強力なやつが徘徊している上、瘴気まで漂っているって話だ」

「瘴気か。厄介だけど、ウイデイが居れば何とかかな」

歳は若いけどウイデイの修道士としての力は並みの司教以上、下手をすると大司教にも匹敵するから、彼女の張る結界なら瘴気も防ぐことが出来るだろうね。

「で、どうする？」

「そうだな、みんなの反対がなければ挑んでみようと思う。

ちよっと寄り道になるけどね」

アークに言われて少し思案する。私達のパーティは魔王討伐のために魔族領に向かう途中でこのリーメルの街に立ち寄っただけだから、ダンジョン攻略は完全に寄り道だ。とは言え、アークやウィディは性格上この街を放っておけないだろうし、攻略難度の高いダンジョンでは強力な武器やアイテムが手に入ることもある。それに、路銀は足りているとは言えお金はあつて困るもんじやないから報酬も魅力的だね。

「分かった、私は賛成するよ」

「俺もだ」

「私も賛成です」

私に続いてジオもウィディも賛成し、満場一致で新ダンジョンに挑むことになった。

ダンジョンの攻略難度が高いという話は事前に聞いていたが、正直ここまでとは思わなかった。辺りに漂う瘴気はウィディの結界無しにはとても無事では居られそうにない濃度だし、徘徊する魔物もかなり強力だった。加えて先程結界の張り直しに合わせて休憩を取った時から、これまで以上の勢いで魔物の襲撃が続いて私達の体力を奪っていった。

「ふう、さつきからやたらと魔物が襲ってくるね」

「ダンジョンマスターの悪口言っただから怒ってるんじゃないか？」

何度目かの襲撃を撃退しながら零した愚痴に、ジオが軽口で乗ってきた。

「確かに、意図的に差し向けられている感じがするな」  
「……………」

アークもそれに同意するが、唯一ウイディだけが話に入っていない。それどころか何故か俯き加減で小刻みに震えている。

「ウイディ？」  
「おい、どうしたんだ？」  
「大丈夫か？」

様子のおかしいウイディに口々に問い掛けるが、ウイディは中々答えなかった。しかし、やがて顔を真っ赤に染めて涙目になりながら言葉を返した。

「そ、その……………お手洗いに行きたくて……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

コホン、と咳払いをして私は男共を追い払った。

高位の冒険者とは言え生理現象には勝てない。ダンジョンに入ってからかなり時間が経っておりウイディの我慢も限界だったのだろう。男共が見えない位置まで離れたのを見届けると、ウイディはす



ぐさま壁際にしゃがみ込んだ。魔物はこちらの事情なんか斟酌してくれないからウィディ一人にするわけにはいかない為、同性の私が周囲の警戒に付く。

気まずいけれどこればかりは仕方ない。ダンジョン内にトイレなんて無いのだからやむを得ない話だ。

……と思つてたんだけど、どうもこのダンジョンはつくづく変わり物のようだった。

1階層下った最初の部屋に、男女それぞれのトイレの入り口が設けられていた。ご丁寧にプレートまで付いている。

「あやしい」

「あやしいぜ」

「あやしいな」

「先程の階層にあればあんな恥ずかしい目に合わずに済みましたのに……っ！」

ウィディだけは別の理由で唸っているけれど、普通に考えてあやしい事この上ないよ。ダンジョンにトイレが設置されているなんて明らかに不自然だ。畏の可能性が高い、高いんだけど……。

「アーク、畏が無いかわべられないかい」

実を言うと、私もちょっと限界に近かったりするんだよ。畏が無

いなら使いたい。アークの聖剣の加護で罫の有無が調べられるから、問題が無いか見て貰う。

「うう……まさかトイレの安全を調べるのに聖剣の加護を使うなんて思わなかった。

聖女神ソフィア様、お許し下さい……」

結局、罫は見当たらないと言うことで有難く使わせて貰うことにした。

ウィディが恨めしそうな目で睨んでいたけど、気にしないでおう。

10階層に到達した私達はある部屋で足止めを喰らっていた。その部屋には中央に大きな台座があり、そこには文字が刻まれている。

「『不死者の玉座に挑む者よ、正しき星辰を揃えよ』か。

一体どう言う意味だ？」

「このダンジョンはアンデッドが多いですから、『不死者の玉座』とはこのダンジョンの主であるダンジョンマスターを意味していると思います」

そうだね、私も同じウィディと同じ考えだよ。

「成程、そうするとダンジョンマスターと戦いたければ『正しき星

辰を揃えよ』ってことか。

「正しき星辰って何だろう」

そこが分からないのに成程も何もないだろうに、アークは相変わらずだね。

「星辰は星のことだね。

多分この台座にあるマークは星を指していると思うんだけど」

台座には文字の他に3つの四角上の窪みがあり、その中には何かのマークが刻まれている。丸の周りにギザギザが付いたマーク、太い弧を描いたようなマーク、そして5つの頂点を持つギザギザのマークだ。

「このマークをどうにかして揃えればいいのか？

……動かねえぞ」

「魔力を籠めてみても駄目だね」

ジオが右側の窪みに手を突っ込んでマークを横に動かそうとするが、全く動かないみたいだ。力でどうにかなるものではないみたいだ。かと言って、魔法の仕掛けと言うわけでもなさそうだ。

「アーク様、聖剣の導きで何か分かりませんか？」

「済まない、特に何も……」

「い、いえ！ 無理を言っただけです！」

ウィディがアークの持つ聖剣に一縷の望みを託すが、どうやらそれも無理のようだ。

申し訳なさそうにそれを告げるアークに、ウィディが恐縮している。

「聖女神様から授かった聖剣でも無理なのかよ。かなりの難問だな。」

「肉体労働専門のオレには荷が重いぜ」

「んなこと言っていないで、一緒に考えなさい！」

アークもそうだけど、ジオもあまり考えるのが得意ではない力押し  
の性格だ。とは言え、私とウィディだけに頭脳労働を全て押し付  
けられても困る。

その後、聖剣で台座に切り付けてみたり台座自体を動かそうとし  
たりと、色々試してみたのだが状況は改善しなかった。

「駄目だ、どうすればダンジョンマスターが出てくるのかサッパリ  
分からない。」

浅い階層のダンジョンだと思ってたから準備も足りない。

悔しいけれど、ここは一旦引き返すことにしよう」

「クツ、ダンジョンマスターを目の前にして引き下がるしかないな  
んて……っ！」

ま、仕方ないか。手詰まりだし、アークの言うように準備が足り  
ないのも事実だ。まさか出来たばかりのダンジョンがこんなに深  
いとは思っていなかったので、野営の準備も簡単にしかしてこなか  
ったのだから仕方ない。

私達は諦めて地上に戻ることにした。

その後、リーメルの街に戻って情報収集を行うことにした私達の耳にとある噂が入ってきた。

それは、あのダンジョンに本物の邪神が棲んでいるという噂だ。

「邪神か。正直、眉唾物だが……」

「ただ、あのダンジョンの瘴気が尋常じゃないのも事実だね」

実際探索してみて分かったが、あのダンジョンに漂っている瘴気の濃度は尋常ではなかった。それこそ、あそこに邪神が居ると言われても納得出来てしまうレベルだ。それに、出没する魔物も相応に強力だった。

「どうしますか、アーク様」

「……………」

ウイデイが問い掛けるが、アークは珍しく悩んだまましばらく黙っていた。

「正直……悔しいが今の俺達で邪神に勝てるとは思えない」

邪神つてのは魔王を生み出した存在だと言われているから、魔王よりも強いのはまず間違いない。今の私達で魔王に勝てるかは分からないけれど、少なくとも神と呼ばれる存在と戦って勝てるかと言えば望み薄だろう。

「確かにね」

「そうだな、流石に無理だろう」

「聖光教の教徒として口惜しいですが……」

ウィディは修道士の立場上苦い顔をしているが、だからと言ってここで無理をした結果魔王を倒せなければ本末転倒だ。勇者であるアークの役割はあくまで魔王を倒すことで、私達パーティーメンバーはそのサポートなのだから。

「一先ず、あのダンジョンのことは心に留めておいて、先に魔族領に向かうことにしよう。」

無事魔王を倒せた時は、ここに戻ってきてもう一度挑もう」

力強く宣言するアークに、私達はそれぞれ頷きを返した。

「それにしても苦労した割に結局収穫は良く分からねえ石板が一枚だけか。」

「やれやれ、とんだ骨折り損のくたびれ儲けだぜ」

「そう言えば、何だったんでしょうね、あの石板」

そう言えば、10階層で拾ったアイテムの中に用途の分からない石板があったね。特に魔力も感じないし、何の変哲もない石板にか見えないんだけど。

「分からないけれど、邪神が棲むと言われているダンジョンで拾ったアイテムだ。」

もしかすると、凄い力を秘めているのかも知れない。

魔王との戦いの切り札になってくれる可能性もある」

「だといいいけどね」

さて、寄り道は終わりでいよいよ明日からは魔王城を目指す旅の始まりか。

無事、この街に戻って来られることを祈るとしようかね。

外伝06：ある魔導士の嘆息（後書き）

アークは つきのせきばんを てんにかざした！

しかし なにも おこらなかつた。



## 外伝07：ある不死王の忠誠

何かに引き寄せられるような感覚を感じた。

これは……召喚？

ふむ、こうして喚び出されるのは久方振りよ。

確か以前は何処ぞの宮廷魔導士だったか、今では我が眷属だが。

願わくは、此度の召喚者は余が応じるに値するだけの人物であつて欲しいものよ。

余は 王だ。

数多の眷属を束ねし不死者の王。

例え相手が召喚主であろうと、王は膝を付かぬ。

余を配下にしようなどと企む浅はかな小物であれば、即座に息の根を止めて逆に我が眷属に加えてやろうぞ。

膨大な魔力と引き換えに我が身が実体化していく。

成程、これほどの魔力を無理なく行使出来る存在であれば、少なくとも実力はあるようだ。

そうして、余はその身を顕現させた。

眼球の無い眼窩から見える光景は何処かの部屋のようだ。目の前には蒼いクリスタルが台座に安置され、その横には黒いローブを纏った人族の少女 っ！？

「……………あ……………」

不死者である余は既に心臓の鼓動など無い。しかし、その瞬間だけは遙か昔に味わった鼓動が高鳴る感覚を確かに感じていた。呼吸も要らぬ身体だが、動揺に乱れて言葉にならない空気だけが漏れた。

嗚呼、嗚呼、嗚呼……余には分かる。

暗く禍々しい瞳に圧倒的な力、そして何よりもこの気配。

人族の少女の姿を模しているが、見紛う筈など無い。この御方は、この御方こそは余らが崇めるべき神だ。

かつて余が未だ人であった時に信仰し、終ぞまみえることの出来なかつた神。悠久の時の中で忘却の果てに追いやられていたが、思えば余がこの身を不死者と為したのも、いつか神にまみえることを夢見た為だった。

「……………お……………」

何か申し上げなければと思うほどに焦りが喉を滑らせる。

「私はアンリ、貴方にはこの階層の守護を任せたい」

言葉を発することが出来ない余に対して、神から言葉が掛けられた。

アンリ様！それが神の御名か！

しかも、私に任を命じて下さるとは！

「よろしく」

そう仰ると、アンリ様は蒼いクリスタルに手を翳し余を転移させた。

結局一言も話すことが出来なかった余は、せめてもの忠誠の証として転移されながらも膝を付き深々と頭を垂れた。

アンリ様から賜った玉座に座し、侵入者を待つ日々が続いた。

この玉座は余が受け持つこととなった部屋に、わざわざアンリ様が創って下さったのだ。歓喜と共に忠誠を新たにしたが、中々その忠誠を発揮出来る機会が来ない。

余が守護を任されたのは10階層。大半の侵入者は3階層までに倒れ、それより深い階層には殆ど訪れない。

先日、漸く一組のパーティが10階層まで降りてきたのだが、何か余の待つ部屋の前で引き返していった。気配を感じ取っただけなので何故引き返していったのかは分からぬが、ふむ、さては余の気配を察知して戦いを避けたか。中々に賢明な判断だが、このままではアンリ様に忠誠を示す機会に恵まれない。

「……………来たか」

だが、それもここまでだ。渴望していた機会が漸く訪れたのだ。

余の待つ部屋の前で何やら暫く手間取っていたが、扉が開かれ招かれざる客が入ってきた。入ってきたのはまだ若い銀髪の少女一人だが、ここまで来られる者が弱者である筈がない。それにこの気配……成程、魔族、それも魔王の血脈か。

「よくぞ参った、客人よ。」

「ここまで辿り着いたのは貴様が初めてだ」

「成程、台座に書かれていた通りのノーライフキングか。」

「増長するだけのことはあるようだな」

増長……？ 成程、増長か。

確かに、アンリ様と出会う前の余は増長していたと言えるだろう。自らよりも上の存在など端から認めていなかった。勿論、今ではそのような考えは捨てている。

「いかにも、この身は数多の眷属を束ねし不死者の王。」

「例え魔族の王族が相手であっても膝を折るつもりは無い」

そう、余はアンリ様に忠誠を誓った。以前の自らを頂点とする考えも捨てた。

しかし、それでも余が不死者の王であることに変わりはないのだ。余が膝を折るのは唯一アンリ様の御前のみ、例え魔王の血脈が相手だろうと断じて屈しはせぬ。

「どうやら私が何者かは分かっているようだな。」

叩きのめすだけのつもりだったが、気が変わった。

「ダンジョンマスターを辞めて何れ即位する私の配下となるがいい」  
「膝を折ることはないと言った、凶に乗るな小娘」

その傲慢な言葉、後悔するぞ。

「ならば力尽くで屈服させてやるうー！」

「来るがいい、魔王の娘を眷属に加えるのもまた一興！」

何か引き寄せられるような感覚を感じた。

魔王の娘に敗れた余はその身を滅ぼされたが、何故か拡散する筈の意識が残り漂っていた。その意識が今、引き寄せられている。先日の召喚とは異なる感覚だ。まるで……そう、まるで別に召喚されている何かと同化しているような感覚だった。

そして余は再び実体化した。

目の前には先日の焼き回しのように、余が忠誠を誓った我らが神の姿が見受けられた。

これは……アンリ様が余を復活させて下さったのか。嗚呼、使命を守れず敵に破れた余に何と慈悲深い御方であることが。

「アンリ様……」

「……………」

余は即座にその場に膝を付き、忠誠を示した。いつぞやは衝撃の大きさに醜態を晒したが、二度目であるが故に今回は行動することが出来た。

何やら戸惑っておられたアンリ様だが、すぐに言葉を下さった。

「貴方には10階層の守護を任せたい」

「承りました、この身の全てを掛けて敵を排除して御覧に入れまし

よう」

以前と同じ使命を頂いた。一度は不覚を取ったが、二度は無い。

「あと……念の為。受け入れて」

アンリ様はそう仰ると、余に向かってその手を伸ばして額に触れた。

外伝07：ある不死王の忠誠（後書き）

16話の復活フラグ 回収

強化フラグ ON

## 外伝08：ある魔王姫の交友

大扉が開いていく。

目の前に広がるのは謁見の間に似た広い部屋、そして奥の一段高くなった場所には玉座が据え付けられている。

玉座には、この場の支配者であろう一人の黒髪の娘が座っていた。黒いローブを纏ったその娘は真っ直ぐに入口に立つ私を見据えていて、遠く離れていてもその視線は明確に感じ取れた。

彼女と目が合った瞬間、私の中の本能が逃げると叫ぶ。どっと汗が吹き出し、血の気が引いていくのを感じる。きっと今の私の顔は青褪めるのを通り越して真っ白になっているだろう。手足が勝手に震えだし、歯が力チ力チと音を立てるのを何処か他人事のように感じていた。そしてそれに気付いた時、漸く自分が感じている感情が何なのかを理解した。

恐怖、いや絶対的な強者から受けるこれはむしろ畏怖と呼ぶべきか。

父である魔王陛下すら凌駕する存在感に、私は無力な兎のように委縮するしかなかった。

まずいまずいまずい……私は何という相手に無礼を働いてしまったのだ。

無責任な噂に振り回され相手のテリトリーに侵入した上、番人であったノーライフキングを倒してしまった。仮に魔王城で同じことをされたら、我らは絶対に相手を赦したりはしない。必ずや血祭り上げ、相手が国であれば戦争も辞さないだろう。



……国？

そのことに気付いた時、ガンツと頭を殴られたような衝撃が走った。

そうだ、事は最早私個人で済む話ではない。魔王の血脈である私が行った行為は魔族領の総意と受け取られかねない、いやむしろそう受け取る方が自然だろう。自身の軽率な行動を後悔するが、後の祭りだった。

魔王の娘である私にこれだけの畏怖を感じさせる相手だ、この力が国に向かえばどれだけの災厄となるか、想像も出来ない。

何としてもこの場で怒りを鎮めて貰わなければならぬ。その為ならこの身を差し出すことも躊躇ってはいけない、それが魔王の血脈として生まれた者の責任だ。

入口で立ち止まったままだったが、このままここで立ち尽くしていたら相手の機嫌を損ねてしまう恐れがある。逃げ出したくなる気持ちは必死で押さえながら、私は部屋へと立ち入った。

一歩足を進めるごとに、突き付けられる圧迫感が増していく。激流を流れに逆らって進むかのような苦行の中、使命感とそして恐怖に突き動かされるままに必死に足を前へと動かす。歩くだけで体力と精神力が削られていった。

玉座から少し離れた場所で、私はこれ以上前に進めなくなった。ダメだ、もう無理だ……幸いにして声は十分に届く位置だから、この場所で話すことにしよう。

これまでの行動で既に心象が悪いのだ、第一声が非常に重要になるだろう。

「はじめまし「申し訳ございませんでした!」……て?」

その場で床に両手と膝を付き、頭を深く下げる。

嘗ての召喚勇者達によって伝えられた最大限の謝辞を示す姿勢  
土下座だ。

って、しまった! 相手の言葉に被せてしまった、これはこれで  
無礼になってしまふ。

ええい、ここは畳み掛けるしかない。

「あの「ご無礼の数々、深くお詫び致します! 私に出来ることで  
あれば何でもします! ですから、どうか……どうか国の者達には  
お慈悲を!」」

ま、また!?

うう、何て運が悪いんだ、私は……。

「いや、だから「何卒制裁は私だけで収めて頂きたく」……話を聞  
け」

ッ!?

冷たい言葉と共に投げ付けられたナイフが目の前の床に突き刺さ  
った。私は恐怖に思わず声にならない悲鳴を上げていた。

まずい、絶対に機嫌を損ねてはいけない相手を怒らしてしまった。

「頭を上げて、立って」

「し、しかし……」

「いいから」

強い言葉で言われてこのままの姿勢は逆効果だと悟り、私は弾か

れるように立ち上がった。機嫌を損ねてしまったことを何とか弁解しようとするが、その前に彼女の方から話し掛けてきた。

「私は怒ってない」

「え？」

何を言われるかと戦々恐々としていたが、思いもよらぬ言葉に思わず呆けた声を上げてしまった。

「制裁もする気は無い」

「ほ、本当ですか！」

淡々とした言葉だが、幼子に教え諭すような雰囲気で行われて、漸く彼女に敵意が無い事を理解出来た。安堵のあまり、涙が出てきた。これで、国も滅ぼされずに済む。

「それで、10階層のボスの話だけど……」

「は、はい！ 勿論誠心誠意務めさせていただきます！」

「しなくていい」

「はい？」

国への制裁を免れる代償として私自身は従属もやむ無しと覚悟を決めていたのだが、思い切りス力されてしまった。いや、助かるのだが、それでいいのかと不安になる。

「代わりに頼みたいことがある」

「な、何なりと！」

や、やはりそうすんなりとはいかないか。代わりに何かをさせられるらしい。

いや、私自身のこととて済むのなら安いものだろう。私の軽拳妄動が原因だったのだから、たとえどんな屈辱的なことや苦痛であつても甘んじて受けなくてはならない。

さあ、何だ。私に何を望む!?

「私の友人になつて欲しい」

……………は?

ユージン?

ああ、友人か　　つて、友人!?

「ゆ、友人……?」

わ、私と友人になりたいだ!?!　　彼女は一体何を考えているのだ。

自慢ではないが、私は生まれて16年間一度たりとも友人など居たためしが無いのだ。友人になりたいと言われても、どうしていいか分からない。私が悪いわけではない、魔王姫という身分に生まれたいせいで対等な関係などそもそも築く事が最初から無理なのだ。決して私の容姿や性格が悪いわけではない、と思いたい。

つて、いかん。どのみち私には要請を受ける以外の選択肢はないのだ。正直、部下になれと言われたり鞭で打たれたりする方が遙かに気がラクだったが……。

「わ、分かりました!

友人にならせて頂きます」

「友人だから敬語は要らない」

「分かりま……分かった」

頼むから、これ以上難易度を上げないでくれ！

場所を31階層のアンリの居住区に移して、歓待を受けることになった。

名前と同時に人族であることも聞いたが、正直信じられない。信じられないのだが、冒険者カードの種族も人族となっているので事実と認めざるを得ない。当人は邪神にスキルを植え付けられたと言っており、私を感じた威圧については視線を外して貰ったら恐怖が和らいだので、スキルが原因であることは確認出来た。視線の他に恐怖を齎す気配も放たれているらしいが、そちらの方は少し寒気がするぐらいでそれほど問題無いようだ。

目を合わせなければ普通に話せる様になったが、何分友人というものとは初めてなので距離感が良く分からない。

しかし、出来たばかりの友人にいきなり風呂に叩き込まれるのが普通でないことは私でも分かる。

それはまあ、ダンジョンを探索していたのだからあちこち血や砂埃で汚れているし匂いも気になっていたが、あからさまにそれを言われると胸に突き刺さる。尤も、有難かったのも事実だ。まさか、ダンジョンで風呂に入れるとは思わなかった。

私を知る風呂は両手で抱えられる程度の大きさの浴槽に湯を張ったものだが、ここの風呂は何と部屋の半分が浴槽になっており、わ

わざわざ湯を張らずとも常に満たされているのを見て、思わず啞然としてしまった。

私は胸甲を外してからドレスを脱いで裸になり、浴槽へと身を沈めた。

「……………ふう」

思わず嘆息が漏れてしまった。湯の温かさが全身に沁み渡り、極上の心地だ。様々な事があつたせいで自分の思っていた以上に疲れが溜まっていたらしく、思わず意識が薄れていった。

コンコンというノックの音で微睡みから引き戻されて、湯に沈みそうだった顔を慌てて上げた。危ない危ない、溺れるところだった。どれほど意識が飛んでいたかは分からないが、指のふやけ方を見る限りは短い時間ではなかったようだ。

「失礼します」

言葉と共に金髪の美しい娘が浴室に入ってきた。先程のノックは彼女によるものだったのだろう。黒い変わった服を着ている彼女はテナといい、アンリの従者だと紹介されていた。

「お着替え、ここに置いておきますね」

「ああ、ありがとう」

私の着替えを持って来てくれたようだ。先程まで着ていたドレスも大分汚れているからどうしようかと思っていたところだ。風呂に入るまではあまり気にしていなかったが、こうしてサッパリした後、に汚れた服をもう一度着るのは気分が良くないので、素直に有難い。

「着ておられた服は洗濯しておきますが、構いませんか？」  
「すまない、頼めるか」

何から何まで申し訳なくなるが、私は洗濯などしたことがないので頼むしかなかった。

テナは私の着ていたドレスと甲冑を持って、浴室から出ていった。

浸かったまま思わず寝てしまっていたので、きちんと身体を洗えていなかった私は、髪から順番に身を清めていった。

その後、もう一度浸かってから名残を惜しみつつも浴槽から出ることにした。

用意された着替えの横にいつの間にか置かれていた布で身体を拭い、水気を落としてから着替えを身に付け……

って、このフリルだらけの服、私が着るのか!?

外伝08：ある魔王姫の交友（後書き）

実はガールズトークの間ずっとフリフリだったレオノーラ様



## 外伝09：ある教主の信仰

幼い頃、私の世界は色付いて見えました。

貴族の家柄に生まれ華やかな世界で過ごす日常に、その頃は何の疑問もなく生きてきました。

長男ではなかった為に家を継ぐことは出来ませんが、家の爵位は高かったので男子の居ない他家に婿入りすることになるだろうと思っただけで、実際当主である父はそのように考えていました。

フォルテラ王国の貴族は大きく分けて3つの派閥に分類されます。1つ目は王党派、王と王族に対して忠誠を誓う貴族の集まりです。2つ目は諸侯派、貴族の利益の追求を主眼に置いた派閥でしばしば王党派と対立しています。そして最後に教会派、聖光教と関わりの深い貴族の集まりであり、先に述べた王党派と諸侯派の対立には中立の立場を取っています。

勢力的には諸侯派が一番多く4割程、続いて王党派が3割、教会派が2割、残りの1割はその他の雑多な派閥に属していたり、あるいは個人主義で全ての派閥から距離を置いている貴族達です。

私の家は教会派の有力貴族であったため、幼い頃から聖光教に入学してましたし教会関係者との交流も多々ありました。幼い私はただ純粹に教えられたことを信じて聖女神へと信仰を捧げていましたが、成長と共に増えていく教会関係者との交流の中で私は現実に気が付いてしまいました。

横行する賄賂に漁色、教徒から搾取することしか考えていない肥え太った教会上層部、表向きの姿とは異なる低俗な実態がそこには

ありました。

同時に、その頃には私も「こんなことはおかしい」と声を大にして叫ぶことに意味がないことを理解できる程度には成長していました。不正の主体である教会上層部は聞く耳を持たないでしょう。教会派貴族も信仰心の強い貴族というわけではなく、教会の後ろ盾を用いて王国内での利益を求めめる者達の集まりであり、信仰心など持ち合わせている方が少数派です。そんな中で不正を暴こうとしたところで、黙殺されることが目に見えています。

孤立を恐れた私は思ったことを心の中に留めて外に出さないようにしました。そして、その内に私の心からは信仰心が消えていきま

した。  
色付いていた筈の私の世界は、ただ虚飾で塗りたくられただけの灰色の世界でした。

貴族や教会関係者との関わりが億劫になった私は、表向きの付き合いは続けながらもしばしば家を抜け出すようになりました。と言っても、明確な目的地はありません。ただ色のある世界に触れたくて、平民の格好を装い街にくり出して過ごしました。貴族社会や教会関係と違い、街は未だ色がある世界に見えたのです。

身分を隠して冒険者ギルドに登録したのはそんな時のことでした。元々、教会派貴族の嗜みとして幼い頃からメイスの扱いを仕込まれていた私は、すぐにギルドの中でも頭角を現すようになりました。いつの間にか一緒に依頼をこなす仲間も出来て、日々が楽しく再び世界が色付きました

仲間が依頼中に負った怪我で死ぬまで

は。

大怪我ではありませんでしたが、決して助からない怪我ではありませんでした。教会に運び込んで修道士の治癒術を受けられれば命を長らえることが出来た筈です。問題だったのは、高位の治癒術を使える司教が教会派貴族の治療に駆り出されて、一冒険者の治療など後回しにされたことでした。その教会には司教を除けば修行中の若い修道士しかおらず、満足な治療は望めませんでした。

私が家名を出せばこちらを優先させることも出来たかも知れませんが、それは同時に私の素性を明かすことでもあり、これまでのように仲間と過ごす事が出来なくなるのは明白でした。仲間を助ける為に仲間との絆を捨てなければならぬ、その二律背反に私は悩み決断を下せませんでした。悩んだ末に素性を明かそうとした時には、既に仲間の息は止まっていました。

世界は再び灰色に戻りました。

自分の都合で仲間を見捨てた私は、これまで通りの生活など出来ませんでした。嘆き後悔しましたが、仲間の命は戻りません。

ギルドに顔を出すのもやめて、酒場で安酒を飲んでばかりの日々が続きました。

そんなある日のこと、酒場で知り合った男に誘われて私はとある集会に参加しました。集団に名前はありませんでしたが、元々教会との関わりが深かった私にはすぐにその正体が分かりました。聖光教徒から邪神と呼ばれる神を崇める信徒の集会です。昔の私であれば唾棄して近付かなかったでしょうが、半ば捨て鉢になっていた私は集会に参加しました。

そして私は生涯二度目の、そして最後の信仰と出会いました。

集会で語られたのは聖光教の不正、そして聖女神と対立する神の

存在でした。

前者についてはかつて私が同じ思いを抱き、誰にも言えずに胸に仕舞い続けていたことでした。初めて共感を得られる居場所を見付けられ、私は歓喜しました。

後者の神の存在については聖光教でも邪神として述べられていますが、聖光教においてその神はただただ理由もなく世界を破壊せしめんとする邪悪な存在と言われています。否、聖光教では神が世界を崩壊させようとする理由を教えることが出来なかったのでしょうか。この世の人々が墮落した時に破壊を以って救済する真なる神、墮落した聖光教にとって都合が悪い存在であることなど明白です。彼らと彼らが崇める聖女神は自身の墮落を隠蔽する為、都合の悪い神を邪神と呼び迫害してきたのです。

私は真なる信仰を捧げる相手を見付けました。  
実家の権力、財力を密かに活用し、疎んでいた聖光教との繋がりも逆用しながら、私は教団にて立場を高めていきました。

とあるダンジョンに我らが神が降臨されたという噂が流れました。聖光教からの情報でしたが、彼らにとっても重要なことであるため、虚偽とは考え難いです。もしも真実なのであれば、我らが神をお迎えせねばなりません。

貢献が認められこの地方の統括に任せられていた私は、信徒に対して指示を出しダンジョンのあるリーメルの街へと向かうことになりました。

聖光教徒に嗅ぎ付けられると邪魔が入る為、分散してダンジョンの入口へと向かい、時間までに集結する手段を取りました。幸いにして、夜のダンジョンに来るような冒険者は居らず、我々の他には誰も居ません。

1階層に広い部屋があつた為、この部屋を儀式の場とすることにしました。信徒達に篝火と鍋、そして祭壇の準備を手配して私は儀式までの間に集中力を高める為に瞑想に入りました。

しばらくして、信徒達の集結が完了し儀式が開始されました。

精神を高揚させる効果のある香を焚き、集中力を高めることで神に対して訴えるのです。私自身はこの場を取り仕切るために司祭服を着ていますが、他の者達は邪魔な衣服を脱ぎ捨てることで世俗のしがらみを排除しています。中には信徒同士交わることでその陰気を神への供物とする者も居ます。

その場の信仰心の高まりを感じ、場が整つたと見た私は、部屋の中央へ進み出ると右手を高く掲げました。熱狂の渦にあつた信徒達は一斉に静まりかえりますが、その熱気は依然として……いえ、より一層の高まりを見せています。

「これより贅の儀を始める！」

私の叫びと共に、信徒達から歓喜の声が上がりました。

石の祭壇が用意され、生贄とする為に買われてきた少女が祭壇へと寝かされました。

「んーーーーっ!!」

涙を零して暴れる少女の姿に心が痛みますが、これも信仰の為で

す。貴女の魂は我らが神により回収され、新世界の礎となることでしょう。

「我らが神よ、どうか供物をお納め下さい」

その言葉と共に、私は振り上げた短刀を少女の心臓目掛けて振り下ろしました。

嘗て冒険者時代に味わった肉を割く感触と共に鮮血が飛び散る…  
… 筈が、次に私が感じたのは固い物に突き立った感触と火花でした。  
私が振り下ろした短刀は石造りの祭壇を僅かに削り、折れ飛びました。短刀をその身に受ける筈だった少女の姿は何処にも見えません。

一体、一体何が起こったのでしょうか！？

生贖の少女は何処に行ったのですか？

突然のことに混乱していた私ですが、すぐに理由に気付きました。少女は縛られた状態で私の目の前に居ました、彼女には逃れる力はないでしょうし、他の誰かが助けたのであれば私が気付かない筈がありません。

もしそんなことが出来る存在が居るとすれば、それは我らが神に他なりません！

これまで信仰を捧げてきましたが、我らの力と信仰が足りず、神からの反応を得ることが出来ませんでした。

しかし、しかしです！ 今日この時、初めて神が我らの儀式に反応を示して下さったのです！

ああ、噂は正しかった！ 我らが神はやはりこの地に降臨なさっていたのです！

私は歓喜のままに、信徒達へと告げました。

「皆も見届けたであろう！」

我らが神は供物を受け取って下さった」

私の言葉で信徒達も漸く事態を理解したのか、歓喜の音が広がっていきました。私はその様子に満足すると、我らが神がこちらをこ  
覧になっているであろう方向を向き、お言葉を待ちました。

『……………不味い』

が、あまりにも予想外な言葉が返ってきた。しかも、声は幼さの  
残る女性の声です。神の性別についてはこれまで何処にも述べられ  
て居ませんでした。女神なのでしょうか。

いや、そんな考察は後だ。御満足頂けなかつたのであれば、忠実  
な下僕として謝罪をせねばなりません。

「え？ あ……………申し訳ございません！」

その、お口に合わなかつたのでしょうか？」

『人族や魔族は口に合わない。』

牛、豚、鶏、山羊 動物推奨』

おお、神よ。貴女は私に肉屋に買い物に行けと仰っているのです  
よ。うか。

「し、承知致しました！」

あ、あの……………大変恐縮ですが、我らが神に相違ないでしょうか？」

不遜であることは重々承知していたが、どうしても聞かずに居れませんでした。これまで一度としてお言葉を下さった事のない神と話す名誉を賜ったのです、これは私の命に代えても確認せねばなりません。

『いかにも』

「おお！ お言葉を賜り光栄の極みに御座います！」

やはり、やはり我らが神なのですな！

歓喜と感動が私の全身を満たしていくのを感じました。

『口に合わぬ物だったとは言え、供物を捧げた信仰は大儀。故にこの杖を授ける』

思わぬお褒めの言葉と共に、祭壇の上に一本の杖が置かれました。この世の闇を凝縮した様な漆黒の杖、シンプルでありながら洗練された意匠を施されたその杖は触れずとも凄まじい力を放っていることが感じられます。

「こ、これは！？

ま、まさか神器を授けて頂けるとはっ！」

この圧倒的な力、間違いなく神器です。

私は賜ったその杖を手に取り、歓喜に打ち震えました。

ああ、私の人生は今この時の為にあつたのです。

『以降も信仰に励むように』

「ははっ！」

勿論です、仰られるまでもありません。この身の信仰と忠義は総



て貴女の為に。

私は賜った杖を掲げ、信徒達に向けて叫びました。

「今この時より、私は教団の教主となり皆を導くことを宣言します！  
我らが神より賜ったこの杖が、私の信仰の証です！

異論のある者は名乗り出なさい！」

教団内の下剋上とも言える宣言でしたが、神から神器を賜ったという事実はこれまで教主であつた者にも否定出来ません。いえ、否定などさせません。

我らが神は私に信仰に励めと仰つたのです、たとえ『元』教主であるうと私の信仰の邪魔はさせません。

「教主ハーヴィンの名に置いて、この地に我らが神を奉る神殿の建造を行うことを宣言します！」

さあ、これから忙しくなりますね。

ああ、世界はかくも色付いています！

なお、後ほど『元』教主や各地の統括者から私が教主を名乗った事を非難されましたが、私が神から直接信仰を認められた事を証明

すると、最早私が教主となることを止められる者は居なくなりました。

なにしろ、神器は私以外の者が持つことが出来ず、手放しても私の元へと戻ってくるのです。これは私の信仰を認められた証に違いありません。

おお、我らが神よ！ 何処までも付いていきます！

## 外伝10：ある王子の絶望

「おのれ、露骨な嫌がらせをしておって！」

会議場の中央に据え付けられた円卓にゴドウィン將軍の拳が叩き付けられた。

「気持ちは同じだが落ち着け、將軍。

陛下の御前だぞ」

「し、失礼致しました！」

宰相のフォルゲン侯爵の窘める言葉を受け、頭に血を昇らせていたゴドウィン將軍もハッと我に返って、慌てて父上に謝罪をした。

「構わん、余も気持ちは同じだ」

父上に限らず、この場に集った者達で將軍の言葉を責める気になるものは居ないだろう。何故なら、この場の誰もが同じ思いを抱いているからだ。

現在、王党派と呼ばれる者達を集めたこの会議で議題に挙がっているのは、聖光教から齎された聖光騎士団結成の布告についてだ。我がフォルテラ王国の辺境にあるダンジョンに集結した邪神の信徒の討伐を行うという布告だが、たかだか1000人にも満たない邪神の信徒の討伐のために聖光騎士団の結成は誰が見ても大袈裟な反応だ。

その点については問題となったダンジョンや付近の街で邪神と思しき存在の痕跡が目撃されたことにより、その調査と可能であれば封印・討伐を行う為に騎士団の結成が必要であるというのが聖光教

の言い分だ。

白々しい事この上ない。

邪神等と言う存在が聖光教が捏造した架空の脅威であることは、各国の上層部であれば周知の事実なのだから。聖光教も邪神の討伐など本気で言っているわけではなく、各国がその虚偽に気付くことも分かった上で敢えてこの決定を行ったのだろう。

「やはり、先日の申し出が原因でしような」

「そうであるうな。他に理由がない」

聖光教とは人類領最大の宗教団体であり、全ての国家において国教となっている。各国はそのために少くない金額を寄付金として聖光教の総本山であるルクシリア法国に支払っている。勿論、我がフォルテラ王国も例外ではない。

しかし王国は今年不作の年であり税収も例年よりも落ちることが見込まれるため、ルクシリア法国に翌年の寄付金の減額を申し出ていた。

この度の聖光騎士団の結成についての布告はその報復と見て間違いないだろう。

聖光騎士団と言っても、実態は各国の騎士団・兵士団の連合軍だ。ルクシリア法国の結成宣言があれば各国は参加することを求められるが、聖光教徒としての義務を果たす形であるため報酬など存在しない。これが魔族領への侵攻であれば制圧した領土を分配することで報酬とすることも考えられるが、今回の様に国内の問題を解決するために結成された場合はそれも無い。

無論、我が国が報酬を支払う義務があるわけではない、あるわけではないが自国の問題を他国の軍に解決されたとなればそれはその国に借りを作ったこととなり、外交において配慮する形で返す必要

が出てくる。

「報復、そして見せしめか」

「確かに、他国に対しての武力を伴わない示威行為とも受け取れ  
ます」

今回の布告における聖光教の意図は各国も理解していることだろ  
う。寄付金の減額を申し出ればこの様な目に遭う、という脅迫のメ  
ッセージでもあるのだ。

「今更寄付金の額を戻すと言ってもダメなのでしょうね」

「既に聖光騎士団の結成が宣言されている以上、無駄だろう。」

それに、そもそも支払えないから減額を申し出たのだ。

無い袖は振れん」

「  
.....」

会議場に沈黙が広がった。

「それで、如何致しますか。」

当事国である我が国には偵察と布陣をせよという指示が来ており  
ますが」

「嫌がらせの上に下働きをさせるつもりか。」

「何処までも我が国を弄つてくれるものだ」

偵察も布陣も軍事行動においては重要だが、手柄には繋がり難い。  
他国が手柄を上げれば上げる程に我が国がその国に負う借りは大き  
くなるのだから、これも嫌がらせの一環なのだろう。

しかし、これは好機でもある。

「私が先行部隊を率いて出陣しましょう」

「殿下!？」

私の発言に対して、円卓の周囲に座る全員の視線が集まった。

「ふむ、その意図は？」

「偵察と布陣を行うと見せ掛けて、討伐してしまえば良いのです。

各国や聖光教からは独断専行を誇られるかも知れませんが、大きな手柄を立てられて借りを作るよりマシな筈です。

若い指揮官が功を焦ったと言うことにすれば、不自然ではありません」

父上の問い掛けに私は自分の企みを話した。

各国にとっては軍の準備が無駄になるから多少の不満は出るかもしれないが、実際に出陣していない以上はそこまで強く何かを求めてくることはないだろう。

聖光教は黙っていないかも知れないが、彼等が名目上掲げている邪神や信徒の討伐を行って手柄を上げていれば公に王国を非難することは出来ない筈だ。

「しかし、何も殿下が泥を被る必要はないでしょう」

「王族である私であれば、各国もそこまで強く非難は出来まい。

他の者の場合は指揮官を処罰する様に求められる可能性がある」

王国に対する公然での非難は出来なくても、指揮官個人に対して命令違反の咎を責めてくることは考えられる。それを考えると、將軍達に任せることは出来ない。

私の意図を理解したのか、宰相や將軍も渋い顔をしながら黙り込

んだ。

「如何でしょうか、陛下」

「……よかるう、お前に任す」

問題のダンジョンの前で陣を構築し、目の前に集まった邪神の信徒達を見遣る。

向こうも陣形の様なもの敷いているが、その様は非常にお粗末と言っていていいだろう。人数もせいぜい1000人といったところなのに加えて、老人や女子供も混ざっておりまともな戦いにすらなりそうにない。伏兵などを配置するだけの余裕も無いのは一目瞭然で、このまま兵を進めれば容易く踏み潰せると確信出来た。

正直奴等が今この時に散り散りになって逃げていないのが不思議なくらいだが、これも悍ましい信仰心に拠るものだろうか。

そこまで考えて、思わず私は苦笑を浮かべてしまった。

「殿下？」

「いや、なんでもない」

不思議に思っただけで問掛けしてきたゴドウィン將軍に気にしない様に伝えた。

悍ましい信仰心、か。

邪神なんぞを信仰する者達の気が知れないのは変わらないが、此度の一件を受けて我等フォルテラ王家の者達の聖光教への信仰心も地に墜ちた。勿論、民達の前でそんなことをおくびにも出すわけにはいかないし、聖女神様に叛こうとしているわけではないが、少なくとも拝金主義が罷り通る今の墮落しきつた聖光教を信じる気にはなれない。王子としても私個人としても。

命を賭けて邪神を信仰する者達と、聖光を掲げながら裏で金をせびる者達とどちらがマシなのか、そんなことを考えたらおかしく思えて笑ってしまった。

頭を軽く振って気持ちを切り替える。

どちらも変わらない。

我が国に仇なすならばどちらも排除せねばならない。それがフォルテラ王家に生まれた私の責務だ。

「見よ將軍、邪悪なる奴原の陣を！」

何と貧弱な陣形であることか」

「然様ですな」

隣に立つ將軍と共に眼前の邪教徒達の陣を見ながら、周囲の騎士や兵たちにも聞こえる様に大きな声で話し始めた。

「斯様な木端にも劣る敵、聖光騎士団の本隊を待たずとも我が国の軍だけで対処出来るのではないか？」

「御意にございますが、偵察と布陣が我等に申し付けられた命にござります」



打合せ通りの台詞を紡いでいると、まるで自身が道化にでもなった気分がしてくる。が、それで構わない。今の私に求められているのは若さゆえに血気に逸った愚かな王子としての姿なのだから。

「このまま攻め込めば済む話であろう。」

偵察も布陣も必要あるまい」

「殿下、それは……」

それにしても、將軍……その演技はもう少しどうにかならんのか。棒読みではないか。

「構うものか！ 邪教徒共を目前にしながら何もせぬことの方が聖女神様のお怒りを買うわ！

全軍、進軍を開　　ッ！？」

号令を掛けようとした瞬間、周囲に轟音が響き渡った。同時に、視線の先で突然何かが持ち上がる様に形を為していく。

「　　ッ！？」

訳も分からず言葉も出せずに混乱する私の目の前で、それは姿を現した。

「……………」

「……………」  
「……………」

誰もが呆然とその光景を見上げていた。

先程まで建物の基礎部分しか無かった場所に、突如として禍々しくそれでいてどこか神聖さを感じる神殿が築かれたのだ。

これは現実の光景なのだろうか……。

この様な所業、まるで神の御業ではないか。まさか邪神が本当にダンジョンに棲んでいるとでも言うのか。

いや、邪神など聖光教が捏造した架空の存在である筈。

しかし、これは……。

戸惑う私達に対して畳み掛けるかのように、異変は続いた。

周囲が突然夜になり、薄闇が辺りを満たした。

次々と起こる異変に兵達に動揺が広がっていくのを肌で感じた。

私や将軍はそれをなだめる為に声を張り上げようとするが、それよりも早く闇の階かきが神殿の最上階から地面に対して伸びた。

私も将軍も兵達も、そして邪教徒達も、この場に居る全ての者の視線がその階かきへと集中した。

否、正確には階かきではなく、それを降りてくる存在にだ。

それは一見、少女の様な姿をしていた。

比較的小柄なその者は漆黒の髪に漆黒のローブを纏い、後ろに2人の少女を引き連れてゆつくりと階を下ってくる。

誰もが言葉を出すことも忘れ、固唾を飲んでその姿を見上げていた。

やがて階の中程にある踊り場でその存在が足を止めた時、それまで遠目で見えなかったその存在の顔が見えた。

人形のように整った顔立ちにこの世のものとは思えぬ濁った眼差し……その目で睥睨され全身が栗立った。

呼吸の音すらしない張り詰めた静寂の中、私は思わず呟いた。

「……………邪神」

その瞬間、伝播するように「邪神」と言う言葉が兵達の間を広まっっていく。

「逃げろ！」

誰かがそう叫んだ瞬間、陣は崩壊した。

兵も騎士も崩れるように逃げ出していく。

本来ならば私や将軍は立場をそれを制止しなければならなかっただろう。しかし、出来なかった。

何故なら私も将軍も、恐怖のあまりその場に留まる事など脳裏に無かったからだ。

兵達と共に邪神とその神殿に背を向けて、私は一目散に街の方へと駆けた。

邪神など聖光教が捏造した架空の存在であると思っていた。  
今回の騒ぎにしても愚かな狂信者の芝居であると断じていた。  
だが違った！

あれが本物の邪神でなくて何だと言うのだ！

私達は騙されていた！

聖光教は民に対して架空の敵対者を捏造したのではなく、私達国家の上層部に対して存在する敵対者を架空の存在に見せ掛けたのだ。そしてそれはおそらく、あの邪神が聖光教にとって都合が悪い存在であるからだろう。

もしや、聖女神様の御力を以ってしても届かないということなのだろうか。

いや、そのような事がある筈が……。

走りながら思考の袋小路に迷い込んだ私を嘲笑うかの様に、背後で黒い閃光が放たれた。

一瞬誰もが立ち止まりそちらの方角を向くが、閃光は明後日の方角へと飛んでいった。

周囲の兵達は胸を撫で下ろしていたが、私は逆に戦慄していた。  
あの光はおそらく……邪神の膨大な魔力が戯れに放たれたものだ。  
別の方角へと放たれたから良かったものの、もし我々や街、そし

て王都にあれが向けられたら……。

私は邪神に対してどうかこちらを向かないでくれと心の中で祈りつつ、再び街へと敗走を続けた。

外伝10：ある王子の絶望（後書き）

ここまでで概ね本編に追い付きましたが、外伝は繋ぎ的な短い話を  
後一話投入致します。

## 外伝11：ある邪神の嘲笑

『資格者「アンリ」の信仰と恐怖が一定量を超えました』  
『種族が「人族」から「神族」に変更されました』  
『職業が「魔導士」から「管理者」に変更されました』  
『称号「邪神の御子」が「戦慄の邪神」にクラスアップしました』  
『称号「第三管理者」を獲得しました』  
『スキル「アドミニストレーション」を取得しました』

「へえ、まさかここまで早く芽が出るとは思わなかったよ」

つい先日送り込んだばかりの存在が早くも神格者へと転生したことを映像越しに見ながら、笑う。

元々は単なる暇潰しだった。いや、それは今でも本質的には変わっていない。

創作を元にした下位世界の一つで、宙に浮いた状態になっている信仰を偶然見掛けたのが切っ掛けだった。同系統の信仰であった為に自分で喰らうことも考えたが、ふとした思い付きで器になれそうな者を送り込んで、どうなるかを眺めてみることにした。上手くすれば新たな眷属が一柱誕生し、失敗したところで別に大した損はない。

「過程もなかなか愉しかったし、人族のままで送り込んで正解だったね」

使徒にして送り込めばもつと手早く信仰を集められたかも知れないが、そうなる過程も含めて娯楽として愉しむ為に敢えて人族のままでスキルだけを詰め込んでみた。正直、魂が崩壊しないのがおかしいくらいの無茶な詰め込み方だったが、そこは素材が良かったと言えるだろう。

上位世界であの少女を見付けた時は思わず感嘆したものだ。人でありながら僕らに近い目を持つ存在などそうはいない。

「新たな管理者が誕生した以上、他の神格者も黙ってはいないだろう。」

これからどうなるか、実に興味深い」

あの世界には元々二柱の管理者が居る。

新たな管理者が誕生したことは、直に彼らも知るところとなるだろう。いや、既に把握している可能性もある。自身の管理する世界で新たな管理者が誕生することなど無視出来ないだろうから、何らかのアプローチを仕掛けてくる筈だ。

そして、基本的に僕らの系統は他者から忌避されることが多いので、まず間違いなく和平の道はない。

神格者同士の勢力争いが世界を巻き込んで繰り広げられることだろう。

「ああ、愉しみだ。本当に愉しみだよ」

勢力争いとはいえ、あくまで下位世界の中での話であり、自分の眷属が関わっているからと言って何かをするつもりはない。

負けて眷属が滅ぼされたとしても、それはそれ。お気に入りの玩具が一つ潰れるだけだ。

全ては娯楽、ただの暇潰し。



しかし、今回の暇潰しは随分と愉しめそうなのも事実だった。  
それもこれも、送り込んだ愛娘<sup>アレ</sup>のおかげだ。単なる思い付きだっ  
たがやってみて正解だった。

「嗚呼、君を創って本当に良かった」

現地の者達に痺れた足をつつき回されて芋虫の様にのた打ち回る  
眷属の姿を映像越しに見ながら、嗤う。

「他の二柱を制して主導権を握れたら、ご褒美くらいはあげようか  
な」

## 01：黒き歴史の始まり

何かを創るよりも壊す方が簡単という言葉を聞いたことがある。

それは逆説的に、創造という行為の困難さを示す言葉だ。

建物であれ、芸術品であれ、文化であれ、何かを創るということには多大な時間と労力を要するものだ。

ただ、敢えて一つ付け加えるとしたら

すっかり創ってしまったものの後始末も結構大変だということ。やらかしてしまったことも含めて。

そして、更にもう一つ付け加えるとしたら

大変だからといって人任せにすると状況が悪化する恐れもあること。

築いてしまった神殿、追い払った王国軍、助けた形になってしまった邪神の信徒、そして何よりも邪神になってしまった私自身。

問題が多過ぎてどこから手を着けるべきかも迷う状況、大まかな優先順位を付けて人に振れるものは振っていく、というのは考え方としては間違っていない筈だ。

そして私にとって現状最も優先順位を上げて対処すべきは自分が邪神になってしまったことであり、それ以外のことは優先順位を下げるというのも判断としては妥当であると改めて考えても思える。

だから。そう、だから……

「偉大なる我らが神　アンリ様の下僕たる教皇ハーヴィンの名において、

ここに『神聖アンリ教国』の樹立を宣言します！」

これは私のせいではないと思いたい。

あと、その国名はやめて欲しい。切に。

邪神の信徒達は神殿の地上1階層に受け入れて、対応をテナとレオノーラに頼んでいた。とは言っても、あまり細かいことまで面倒を見るつもりはなく、基本的には彼らは彼ら自身で取りまとめ貰う方針としていた。

「それが何でこんなことに？」

「そう聞かれてもな……」

「仰られた通り『信徒の取りまとめはそちらでするように』と伝えただけなのですが……」

神殿の最上階層で戻ってきたテナとレオノーラから、先程映像越しに見たはっちゃん教皇 改め、はっちゃん教皇の演説に至った経緯を聞くが、私から頼んだ通りのことしか言っていないらしい。それが何故国家樹立に繋がるのか……。

「その辺りは本人に聞いてみないと分からんが……」。

ただ、理由は兎も角として既に宣言されてしまっている以上、そう簡単には取り消せないぞ」  
「分かってる」

なお、国家樹立を宣言したものの、現状はあくまで言い張っただけの状態に過ぎない。他の国から承認されていないということもあるが、それ以前に国家の体を為していないのだ。神殿が一字に家も無い避難民に近い信徒が1000人ばかり居るだけなのだから、当然と言えば当然だ。

しかし、そんな宣言でも既に信徒達に受け入れられてしまっているため、今更無かったことには出来ない。

勿論、神としての立場を使ってゴリ押しで撤回させることは可能だが、それをやった場合に起こる混乱を考えるとそう簡単には踏み切れない。

「名前は何で？」

「『どうか教えて頂きたい！』と懇願されて教えてしまいましたか……その、問題でしたでしょうか」

心配そうに問い掛けてくるテナに首を横に振って返す。

私が口止めしなかったこともあるし、私自身の知名度が上がるこ

とについては利点があるので、私の名前を教えたことを咎めるつもりはない。と言うのも、あの宣言の直後に唐突に満腹感を感じたのだ。その時は何だか分からずに戸惑ったが、どうやら宣言で私の名前が周知されることで信仰の効率が上昇したのだと後から考えて推測した。

種族が神族になったことで食事も排泄も必要無くなってしまったが、代わりにこの世界の人々の信仰心によって満腹度が左右されるようになったようだ。いや、「なってしまった」と言った方が良さだろうか。

今は信仰心が保たれているのでお腹一杯で幸せな状態だが、信仰心が減り過ぎるとひどい思いをする羽目になりそうだ。しかも、おそらく食事を摂っても満たされないので信仰が回復するまで飢餓状態が続くことに……。

そう考えると、国家樹立というのも好都合なのかも知れない、主に知名度が保たれて私のお腹が満たされるという意味で。問題が片付くどころか激増したという点については頭が痛いし、各国の反応も不安だけだ。

私の望みは平穏な暮らしだが、飢えに苦しむのも嫌だ。適度に信仰を保ちつつ、各国から攻め込まれない程度の膠着状態が続いてくれるのが一番望ましい。

とは言え、知名度としては邪神国家というだけで十分だから……

「国名だけは変えたい」

「何故だ？ よい国名ではないか」

「私もそう思います。」

それに信徒の方々には既に知れ渡っているので、今から変更は……

……」

恥ずかしいんだってば。ベッドの上で転がるレベルだ。

あと、なんで邪神を祀る国が「神聖」なのか、真剣に問い詰めた  
い。

「信徒だけではないぞ、あやつは各国にも書面を送り付けたからな」

何その無駄な行動力！？　そこまで広まってしまったら最早変更  
不可じゃないか。

あの国名が全土に知れ渡るとか、どんな羞恥責めだ。

っていやいや、よく考えたらもつと重要なことがあった。

よりにもよって「邪神の国を作りました」なんて宣戦布告に等し  
いものを各国に送り付けた？

まだ「国」どころか「村」にすらなっていないこの状況で？

「すぐに各国が攻め込んで来る」

「油断は出来んが、当面は大丈夫だと思っぞ」

何故？という疑問を視線に乗せてレオノーラへと向ける……目を  
逸らされた。神族になっても相変わらず魔眼は健在、悪化してない  
だけまじだけど。

「ここに直接面しているのはフォルテラ王国だ。」

先日のことを考えれば、攻め込むことには慎重になるだろう」

まあ確かに王国軍を散々おどかしたし、今すぐには攻め込んで  
来ないか。と言っても、レオノーラの言う通り油断は出来ないし、  
時間の問題だろうけど。

「取り合えず地上3階層までは使っていいと伝えておいて、テナ。」

あと、国家運営はあの教皇に任せるようにして  
「はい、分かりました、アンリ様」

人選が心配だけど、凄く心配だけど……元々のまとめ役みたいだし、変える理由がない。それに、他に適任者の心当たりがあるわけでもない。

ちなみに、最上階層であるこの地上5階層は私の別荘の位置付けテナヤレオノーラの部屋も用意した。リリについてはまだ幼くて一人にするわけにもいかないのでテナと同室だ。尤も、最近はテナが忙しくなってしまったので、私がリリの面倒を見ることが多い。その甲斐もあつてか、目さえ合わせなければそれなりに懐いてくれるようになった。ちょっと感動。

地上4階層は念の為の防衛ラインだ。尤も、本拠点はあくまで地下31階層なので、こちらはいざとなれば放棄しても構わないのだが。

ダンジョンコアは地下31階層に設置したままで、新たに分割したサブコアを地上5階層に設置している。サブコアは階層追加などの機能が無かったりと一部の制約がある代わりに、ダンジョンコアと異なり最深階層以外でも運用出来る。ただ、バックアップとしての機能はなく、ダンジョンコア本体が破壊されるとサブコアも砕け散るようだ。

地上3階層より下は特に用途も決めてなかったもので、国家運営用に提供することにした。ここを拠点として、神殿の周りを開拓して街を作っていくことになるだろう。ただ、私はその辺りのことはよく分からないので丸投げだ。ついでに、はっちゃん教皇とのやり取りもテナに押し付けてしまった。いや、テナには申し訳ないと思うけど、あの勢いを考えると直接会うのは怖い。

ちなみに、地上階層と言えどダンジョンの一部だ。魔物の出没は



しないようにしたが、瘴気の発生は止められない。ただ、地下と異なり開けているので、外に逃がすことで対処することにした。

「そう言えば、レオノーラはここに居ていいの？」

教皇への指示をする為にテナが退出して会話が途切れたところで、ふと気になっていたことを口にする。

色々手伝って貰っておいてなんだけど、よく考えたら彼女が「他国の手伝い」をするのは立場上まずいのではないだろうか。

「ああ、それは問題ない。

国の方でもこの動向は注目されているからな、様子を知りたがっている。

しばらく滞在させて貰う代わりに、手伝うさ

「……ありがとう」

私が感謝を告げると、レオノーラは銀色の美しい髪を手で撫で付けながら顔を少し赤くしてそっぽを向いた。

「べ、別に礼を言われるようなことではない。

国からの指示だと言っただろう、密偵のようなものだぞ」

本気で情報を盗むつもりならわざわざそんなこと言う必要ない、と指摘するのは無粋だろうか。

心配してくれていることが見え見えだ。

「そ、そう言えば、邪神になってしまったことの影響は把握出来た

のか？」  
「半分くらい」

食事や排泄、それに睡眠が要らなくなった代わりに、信仰心が必要になりそうなことは実感した。寿命は分からないけれど、多分神族というからには不老だと思う。魔力とかスキルレベルなんかも軒並み上昇している。

なお、食事や睡眠は不要ではあっても出来ないわけではないので、生活リズムは変えていない。私の精神的安定のためにも人らしい生活をしたいからだ。決して、食っちゃ寝しても太らない状況を満喫しているわけではない。

管理者としての力は何が起るか分からなくて怖いので、まだ試していない。

「あと、服を着替えられるようになった」  
「は？」

短刀やローブなどの呪いについても、私自身が神族となることで克服出来た。ただし、呪いが解けたわけではなく、呪われたままでも私だけは着脱出来るようになったというのが正しいが。

それを話すと、レオノーラは……

「喜んでいるところ済まないが、既にお前はその格好で認知されているからな。」

あまりこころ衣装を変えられても困る」

「何故？」

「何故と言われてもな、神の格好がこころ変わっていたら不自然だろう」

……確かに、こころ着替える神様とかあまり聞かない。

像とかを見ても同じ格好をしているのが普通だ。

折角着替えられるようになったのに……私はどこもお洒落には縁が無いみたいだ。

これも邪神の呪いか。

## 02：各国模様

『それでは、各国の状況を教えて下さい』

画面の中で、テナが集まった者達へと呼び掛けた。

その場で円卓を囲っているのは教団の中の有力者達、勿論はつちやけ教皇もいる。

国家樹立宣言以降、各国の動向を窺う為に人を派遣し様子を見るようにさせていたが、それらの報告がこの場で為される予定だ。

出席自体は既に私の名代として認識されているテナに任せて、私は最上階層から画面で様子を見ることにした。なお、私の隣ではリリが絵本を読んで文字の勉強をしている。文明レベルが中世ヨーロッパレベルの割に妙に識字率と印刷技術が高いこの世界において、文字の勉強は必須事項だ。

テナは円卓の後ろの一段高い場所に特別に設けられた椅子に座って、その場に集まった者達を見下ろしている。私が神族に変わっても外見上の変化が無かったように、テナも使徒族に変わっても外見は変わっていないが、何処か超然とした雰囲気纏うようになった気がする。

美しい金髪に幼いながらも凜とした顔、神秘的な雰囲気を持つ黒い衣装を纏ったその姿は、まるで何処かのお姫様か巫女のようなだった。って、巫女はその通りか。

『それではまずは私から。』

聖光教総本山のルクシリア法国の動向ですが、我が国の国家樹立宣言を即座に否定。

各国に対して同調するよう呼び掛けています』

いきなりの報告に会議場内にどよめきが走った。

『落ち着きなさい、アンリ様もこの場をご覧になっておられるのですよ』

ざわつく議場に教皇の声が響くと、円卓はシンと静まりかえった。確かに見ているけど、わざわざ言わなくていい。

『ルクシリア法国がそのような対応をすることは、最初から分かっていたことです。』

問題はそれに対する各国の反応です。

そちらの方は如何ですか』

教皇の言葉に、一人の女性が手を挙げた。

『そちらについては、まず私から報告します』

『貴女は……確かフォルテラ王国の担当でしたね』

『はい』

フォルテラ王国は今私達が居る場所が元々属していた国であり、利害関係者としては最も重要な存在と言えるだろう。この報告は非常に気になる。

『フォルテラ王国はルクシリア法国の呼び掛けを拒否しました。』

更に、現聖光教上層部の不正を訴えて新たに派閥を形成、敵対の構えを取りました。

また、我が国の国家樹立宣言についても否定はせずに中立の立場を取っています』

先程の報告以上に室内が騒がしくなる。

有史以来、人族領の全ての国家の国教となっていた聖光教に真っ向から反抗したのだから無理もないだろう。いや、新たな派閥といふことは聖光教自体には反してはいないということだろうか。

『新たな派閥の名前はオリジン派、女神の教えに忠実であることを主軸にしている模様です』

『ルクシリア法国側はフォルテラ王国の声明に何と反応していますか？』

『教皇自ら遺憾の意を表明し、撤回を求めています』

女性の報告に教皇が、最初にルクシリア法国の動向を報告した男性へと問い掛けると、ある意味当然と言える答えが返ってきた。しかし、それで撤回するならば最初からそんな声明は出していないだろうから、敵対は必至だ。

『各国もルクシリア法国とフォルテラ王国の睨み合いの動向を窺う姿勢を見せており、膠着状態となっています』

それにしても、どういうことだろう。

フォルテラ王国からしてみれば、うちの国 自称だが は自国の領土を勝手に乗っ取って国家宣言しているのだから、真っ先に否定して当然の筈。実際私もそうなるかと予想していた。

それが蓋を開ければ中立、それも聖光教の総本山と敵対しながら、だ。私達と敵対するよりもルクシリア法国と敵対することを選ぶ理由が分からない。

「進展があつたのか？」

後ろから掛けられた声に振り返ると、そこには魔族領側の情報を集めるために留守にしていた筈のレオノーラの姿があつた。振り返

った瞬間、目を逸らされた。流れるような反応だ……慣れてきたな、彼女。

「おかえり」

「ああ、今戻った」

人族領であれば教皇達に任せてもある程度の情報が入ってくるだろうが、魔族領の情報は流石にそうはいかない。この場所は丁度両方の領土の真ん中付近にあるため、そちらの情報も疎かにするわけにはいかない。そのため、レオノーラに頼んで情報を集めて貰った。流石に彼女も自国を不利にするような情報はくれないだろうが、魔族領と敵対しているわけでもないので普通の情報でも十分だ。

そうだ、先程の話についてレオノーラにも意見を聞いてみよう。

一応王族の彼女なら、王国の思惑が分かるかも知れない。脳筋の部分が不安だけど。

「成程……」

議場では会議が続いているが、最も重要な部分は既に聞くことが出来たので、休憩にしてお茶を飲みながら先程の件をレオノーラに相談してみる。彼女は腕を組みながらしばらく考え込んだ。私は隣で甘い菓子パンに目を輝かせているリリの頭を撫でながら、彼女の考えが纏まるのを待った。

「3つ程思い付く事はあるな」  
「どんなこと？」

やっぱりレオノーラは頼りになる、脳筋とか思っでごめん。

「1つ目、単純にお前のことを怖がっている」

「……………」

褒めた私が莫迦だった。いや、確かに怖がられているとは思っし、推察としては間違っではないのだろうけど、期待していたのにその答えは酷い。テーブルに突っ伏した私の頭をリリが小さな掌で撫でてくれた。いい子だ。

「2つ目、元々フォルテラ王国と聖光教上層部との間で何らかの確執があった」

「確執？」

「ああ、この前王国軍が攻めてきた時に『自国の問題を聖光教や他国に対処されれば借りを作ることになる』と言っただろう？」

聖光教もそうなることは理解出来ていただろうに、それを知りつつ敢えて聖光騎士団を結成しようとしたわけだ。

邪神の対処を優先しようとしただけかも知れないが、王国との間に何らかの確執があった可能性もある」

「聖光騎士団の結成は王国に対する圧力ということ？」

「推測に過ぎないがな」

成程、確かにそんなことがあったのだとしたら、今の王国と法国のいがみ合いも領けるかも知れない。

「3つ目は……………魔族領との関係だな」

「……………」



魔族領がどう関わるのだろうか。  
小首を傾げる私に、レオノーラは続きを話し始めた。

「この地はフォルテラ王国の中でも魔族領に最も近い辺境だ。  
フォルテラ王国は魔族領に接した最前線だが、ここに国が出来れば事情も変わる。」

辺境の僅かな領土を失ってもメリットの方が大きいと判断してもおかしくはない」

「それは……」

つまり、私達を魔族領に対しての盾にしようとしているということか。

確かにそれなら、中立の立場をとることの説明になる。盾にするなら敵対関係でも友好関係でも駄目だ。前者は魔族領の代わりに新たな敵が出来るだけだし、後者だと敵を押し付けられなくなる。

そして、邪神国家と中立の立場をとる 敵対しないことを選択する以上、聖光教との関係悪化は必至。予めそれを見越していたからルクシリア法国に対して反旗を翻した、という流れか。

「どれもあり得るし、理由は一つだけとは限らないからな。」

案外、今まで挙げたことが複合的に絡み合った結果なのではないか」

そうかも知れない。

取り合えず、直近で敵対する可能性が最も高かったフォルテラ王国がルクシリア法国と睨み合って膠着状態に陥ってくれているのは、私達にとっても都合だ。

今の内に国としての体裁を整える動きをするべきだろう。

「そう言えば、魔族領の方は？」

「ああ、概ね静観だな。」

魔族としては邪神という存在を好んではないが、それは人族が我らが信奉する闇の神を貶めるための概念だったからだ。

闇の神とは全く別のお前と敵対する理由はない。

私を通して意志疎通が可能な状態なら、当面はこのままの関係を維持する方針だそうだ」

「そう」

それを聞いて安心した。

少なくとも自分の間は人族領の問題に専念出来そうだ。

私はお腹が一杯になって眠気まなこを擦っているリリの頭を撫でながら、安堵の溜息を吐いた。

『各国の動向や我が国の運営についてはこんなところですか。』

ここで一つ、テナ様にはアンリ様にお伝え頂きたいことがあります  
『す』

『なんですか？』

ん？

休憩の間に細かい話は概ね済んだみただけど、教皇が何か言い出してきた。

『実は各国にアンリ様の素晴らしさを知らしめるための方策を考え』

たのです。

是非ともアンリ様に内容を確認して頂きたく』

何をする気だ……。

不安だ、激しく不安だ。

### 03：邪教のすゝめ

【世界はアンリ様がお創りになりました。

人、動物、植物、ありとあらゆるものはアンリ様によって生み出されたのです。

しかし、愚かな人々はそれを知らず、

アンリ様を妬んだソフィアなる邪神がアンリ様の功績をさも自身が為したかのように装うと、

こぞつて邪神ソフィアを讃えました。

邪教に染まってしまった世界を嘆いたアンリ様は、

自身を信仰する者達を残して、世界を一掃することを決意されました。

邪神ソフィアを信仰する者達は地獄で永遠の苦痛を味わうことでしょう。

アンリ様を信じる者達だけが新たなる世界にて永遠の幸福を得るのです】

手にした文章から目を離し正面をみると、そこにはキラキラした目で何かを期待するようにこちらをみる教皇の姿があった。微妙にドヤ顔で、顔が良いだけにちょっとイラッとした。

「……レオノーラ」

「ああ」

ふぁいや〜。

「のおおおおおー！ー！？」

隣で一緒に覗きこんでいたレオノーラに頼んで文書を焼却処分してもらおうと、教皇は叫び声を上げた。

直接会いたくないからテナに任せていたところを、名指しで確認して欲しいというからわざわざ地上4階層に謁見の間を増築してまで会ったのに、こんな怪文書を読まされるとは思わなかった。増築したのは一応神扱いの私が気軽に3階層以下に降りていくわけにはいかないし、彼を5階層に招くのも避けたかったので、それ以外によい場所が無かったためだが。

なお、彼を5階層に招きたくない理由はリリと会わせない為だ。

彼の中ではリリは私に食べられたことになってる筈だし、リリだつて殺されそうになった相手には会いたくない筈だ。

ただ、親しい者を殺そうとした相手だと分かっているのに、その点では不思議なほど私は忌避感を感じていない。おそらく彼の強烈過ぎる個性のせいで印象が掻き消されてるのだと思うけれど。

テナとかはその点どう考えてるのだろうか。普通に話しているみたいだけど。

「何故ですか、アンリ様ー！ー！ー！」  
「うわ」

滂沱の如く涙を流しながらにじり寄ってくる教皇、私はドン引きして思わず反射的に闇弾をぶつけて弾き飛ばしてしまった。咄嗟だったのであまり加減出来ず強過ぎたかと思っただけど、教皇はピンピンしておりすぐに立ち上がってきた。私が言うのもなんだけど、この男は本当に人族なんだろうか。

そもそも、魔王の娘すら恐怖で土下座する魔眼を直視して何故こ

の男は無事……と言うか、微妙に興奮すらしているのだろうか。こちらが直視したくなくなってきた。

「失礼、取り乱しました。」

大変恐縮ですが、何がいけなかったのか御教示頂けないでしょうか」

今更キリツとした態度をとっても遅いよ。

何がいけなかったのかと聞かれても、むしろ良い部分を挙げる方が難しい。悪いところというのは良い部分があつて初めて言えるところだ。まあ、強いて一番悪いところを言つとするのなら……。

「無駄に敵対心を煽ってる。」

それに、内容も真実から離れたものが多い」

聖光教とは煽るまでも無く敵対必至かも知れないが、だからと言って無理に煽る必要はないだろう。折角国家間で睨み合ってくれているのだから、下手に刺激してこちらに矛先を向けられたくはない。それに、何故私が世界を創つた事になっているのか。私はそんなことをした覚えはない。

「確かに、多少の誇張表現は混ざっております」

多少？　これが多少……。

と言うか、誇張以前に嘘八百しか書かれていないのだが。

「しかし、現状我が国は人を集める必要があります。」

そのための経典です、耳目を集める為には少タイムパクトが強い方が宜しいでしょう」

勘弁して欲しい。あの文書で集まってきた人間で出来た国など、想像するだけで鳥肌が立つ。

しかし、経典の必要性については彼の発言を認めざるを得ないか。私としてもお腹を満たす為に、布教をすること自体については賛成だ。ならばここは……。

「経典は私が書く」

早まったかも知れない。

真っ白な紙の前で私は内心頭を抱えていた。

教皇の前で思わず自分が書くと言ってしまった。教皇は嬉々として立ち去っていった。が、先程から全くと言っていい程に筆が進んでいなかった。

そもそも、経典とは仮にも神と崇められる側が自分自身で書くものではないということに今更ながらに気付いたが、後の祭りだった。

加えて、それを抜きにしても内容を考えるのが難しい。

現在この神殿や周囲に居る信徒達は、聖光教や身分制度などに絶望した人達が多い。よって、彼らの信仰心を削がないようにするためには、現社会制度の破壊などの革新的な内容である必要が出てくるが、そうすると今度は聖光教や他国家に対して敵対心を煽る形になりかねない。

私としては先に述べた通り聖光教や他国家と敢えて敵対したいわけではないから、可能な限り刺激しない方向で進めたいのだ。

「アンリ様？ まだ起きておられたのですか」  
「テナ……」

一向に書き進められない状況に溜息を吐いていると、部屋の外から声が掛けられた。どうやらテナがリリを寝かし付けてから私の様子を見に来たらしい。

「あまり根を詰め過ぎても身体に悪いですよ。  
もうお休みになった方が……」

「大丈夫、テナはもう寝ていいよ」  
「アンリ様……」

嘘ではない、本当に大丈夫なのだ。何故なら神族になってしまった私は睡眠を必要としない。何日徹夜しようと思調を崩したりすることは無い。肉体的な疲労とも無縁だ。

「もしまだ寝ないつもりなら、お茶を淹れてくれる？」  
「かしこまりました」

使徒族になったテナは依然として食事や睡眠を必要とすることが分かっている。そのため、私と違ってきちんと休む必要がある。私を心配してくれるのは嬉しいけれど、お茶を淹れてもらった後は休ませないと。

カップを私の前に置いたテナに対して休むように言おうとするが、それより先にテナの方から話し掛けてきた。

「捗らないのですか？」



私が悩んでいる様子を見て取ったのかそう聞いてくるテナに、私は無言で頷いた。一枚書いてはくしゃくしゃにして投げ捨てることを繰り返し返しているこの状況は、どう控えめに見ても捗っているとは言えないだろう。

「何を悩まれているのですか？」

「聖光教や既存国家に喧嘩を売らずに改革を推奨する文章が書けない」

自分で言つてて無理な注文に頭が痛くなる。改革の時点で既得権益を持つ者に対して喧嘩を売ることになるのは確定なのだから、最初から矛盾している。

「その、どうして改革しなければいけないのですか？」

「どうしてって、それは……」

それが信徒達の求めていることだからだ、そう答えようとした私はふと思ひ留まった。

本当にそうなのだろうか？

確かに、信徒達の中には聖光教や身分制度などに絶望した人達が多い。しかし、だからと言って全員が全員改革を求めているかと言えば、そうと聞いたわけではない。

裏切られ傷付いた彼らが求めているのはもつと漠然とした「正しい何か」だ。そうでなければ、宗教ではなくもつと別の場所に拠り所を求めていただろう。

そして、「正しい何か」を語るのであれば、無理に改革に繋げる必要などない。国家体制とか宗教の在り方とか、そんな小難しいことに無理に触れる必要は最初から無かったのだ。倫理や道徳、そういった「あるべき姿」をそのまま述べればいい。

悩んでぐちゃぐちゃになっていた頭の中にスツと光が差した気分だった。

「もう大丈夫みたいですネ。」

お邪魔になるといけないので、私はこれで下がらせて頂きます。」

私の様子を窺って安心したのか、テナは微笑みながらお辞儀をしてくる。私は彼女に対して頷きを返した。

「おやすみ、テナ。」

それと……ありがとう。」

「はい、おやすみなさい。」

そうだ、別に気取る必要はないんだ。

結局のところ経典なんてものは土台であって全てではないのは、聖光教の広まり方を見ればよく分かる。私は思ったことを素直にそのまま書けばいい、教義などは教皇達がその上に勝手に積み増していくだろう。

うん、書けそうだ。

私は気を取り直して紙に向かい、想いを籠めてペンを走らせ始めた。

< 黒の経典 >

特級危険指定書物。

邪神がその怨念を籠めたと伝えられており、世界に現存する中でも特に強力な呪いが掛けられている呪物の一つ。

この経典を受け取った者は複写して誰かに渡すまで不幸が続く。

また、複写されたものにも同じ呪いが発動するため、何処までも増殖していく。

なお、このアイテムは如何なる力を以ってしても破壊出来ない。

### 03：邪教のすゝめ（後書き）

不幸の手が……じゃなかった、「黒の経典」の不幸例

- ・ 十円ハゲが出来る
- ・ 高いところに行くと耳がキーンとなる
- ・ 眉間の間に指を近付けられる感覚がする
- ・ 花粉症になる
- ・ 周囲にトイレの無い時に限ってお腹を下す
- ・ 毎朝足が攣って目が醒める
- ・ 足の小指を必ず棚にぶつける
- ・ 無意識に本音を口走る
- ・ 語尾に『じゃしん』が付く

## 04：光と闇

神族になつて呪いを克服出来たことで、長風呂が出来るようになった。

これまでは30分程で上がらないと呪いが発動して服が湯の中に飛び込んでくるため、時間を気にしながら入るしかなかったのだが、これでようやくゆつたりと堪能出来る。

汗などは掻かないようになったが身体が汚れないわけではないため、基本的に入浴は毎日するようにしている。何よりも熱いお湯に浸かると心が安らぐため、欠かせない。

「ふう……」

沁み渡る熱さに思わず溜息が漏れた。私はお湯を掬ってから水面へと落とした。浴槽に波が立ち、それがまた心地の良い振動となつて私の身体を揺らしてくれた。

そうやって暫らく遊んでいたが、既に一時間程入っていることだし、のぼせたりはしないけれどそろそろ上がるうかと立ち上がる。

すると、唐突に浴槽の外に真紅の袖無しローブを着た男が何処からともなく顕れた。

薄い緑色の長い髪をした長身の男で、顔は整っているが何となくガラの悪そうな目付きをしている。

「あん？」

あまりのことに身体を隠すのも忘れて棒立ちになる私の前で、男は周囲を見回し、やがて私の存在に気付いた。

「  
.....  
」

しばらく無言で見詰め合う時間が続いたが、やがて男は視線を僅かに下に向けるとフツと鼻で嗤いながら目を逸らした。

私は無言のまま、わりと手加減抜きの間弾を男に向けて放った。

地上5階層に急遽会議場と円卓を用意して、私は3つ用意した席の内の1つに着いた。残り2つの席には先程私の入浴中にお風呂場に侵入してきた覗き男と、白銀の全身甲冑を着た金髪の女性が座っている。ちなみに、私のわりと本気の間弾を受けながら覗き男は傷一つすら負っていない。

テナが円卓を周りながら私を含めた3人の前にお茶のカップを置いていく。

「ありがとう、後はいいから下がっていて。

それと、この部屋には誰も近付けないで」

「は、はい！ 分かりました」

内心の緊張が声に出ってしまったのか、テナは私の指示を聞くと弾かれるように部屋から出ていった。

ちょっと悪い事をしてしまったが、しかし私が緊張するのも状況を考えれば仕方のないことだと思う。

まさか『闇の神』と『光の神』が揃って直接乗り込んでくるとは夢にも思っていなかった。

私から見て左手に座っている真紅の袖無しローブを羽織った長髪男は、闇神アンバーと名乗った。

薄緑の長髪といいローブの下の肌蹴た胸元といいヴィジュアル系ロックバンドのミュージシャンのような外見だが、円卓の上に両足を組んで乗せている態度の悪さのせいでチンピラにしか見えない。

私としては裸を見られるわ胸を見て嘲笑われるわで既にかなり心象が悪い。こんな男を崇め奉っているかと思うと、魔族達に同情しなくなる。レオノーラには後で「早まるな」と言っておこう。

しかし、肌で感じる威圧感の本物で、神に属する存在であることは疑いようもなかった。相手は「闇」を司る神なのだから、私の闇弾が傷一つ与えられないのは属性として当然だったのだろう。

一方私から見て右手、浴場における闇神とのいざこざの後に姿を見せて諫めに入ってきた全身甲冑を着た女性だが、彼女は光神ソフィアを名乗った。

美しい金髪を三つ編みほぐしにした外見年齢20歳程度の穏やかな物腰の女性であり、清楚で真面目な雰囲気醸し出している……のだが、一つ言いたい。

教会にあった女神像と格好が違い過ぎる、詐欺だ。

これが許されるなら、私も着替えたって構わないのではないだろ

うか。

遠目に見ただけだった。が礼拝堂に安置されていた女神像は修道服のような衣装を纏っていたと思う。それに対して、今日の前に居る女性は白銀の全身甲冑を一部の間もなく着こなしており、どこからどう見ても武闘派にしか見えない。まるでジャンヌ・ダルクのようだ。当人の物腰が穏やかなだけに、逆に怖い。

正直、私はチンピラ風の闇神よりも彼女の方が怖い。冗談も通じなそうだし。

それに比べて、闇神の方は悪ぶってるだけであまり怖くない。彼の方に視線を向けると、その視線に気付いたのかこちらを向いてきた。

「あに見てやがんだ」

「覗き魔」

あ、しまった。つい本音が。

「ハッ、覗く価値があるとでも思ってたのか？」

その貧相なカラダに、という無言の続きと共に胸の辺りに視線を向けられた。反射的に手で隠したくなるが、ここで怯んだら負けだと思い、隠さずに真正面から相対して睨み付ける。しかし、流石に神族と言うべきか魔眼の効果は殆ど無いようで、怯みすらせずに平然としている。

「つつつか、そもそも何で神族が風呂なんざ入ってたんだよ」

睨んでいたら鬱陶しそうに視線に手を翳しながら闇神がそんなこ



とを言ってきた。確かに新陳代謝は無いが、汚れないわけではないので身を清めるのは当然だと思っただが……神族は入浴しないのが普通なのだろうか。

別にこの覗き男がお風呂に入っていないなくても私に近寄って来ないでくれれば好きにしてくれて構わないけど、神族は入浴しないとすると、もしかして彼女も……。

「アンバー、彼女は肉体の束縛から解放されていないようです。身を清める必要があるのも当然でしょう。」

「私や貴方のような魂のみで存在している者と一緒に考えてはいけません」

光神が闇神を諷めるように横から口を挟んできた。と同時に一瞬だけ私の方を凄まじい眼光で睨んだ。考えていたことがバレてしまったようだ。はいお姉様、貴女は不潔じゃありません。

「ケツに殻付いたままのガキってことかよ。  
チツ、面倒くせえな」

「やれやれと言いたげな気だるそうな溜息を吐く闇神。それにしても、どういうことだろうか。光神の言葉をそのまま受け取ると、彼女達は肉体を持たない魂だけの存在だと言っことになる。こうして椅子に座ってお茶を飲んでいるところを見ると俄かに信じ難いが、ここで嘘を言う必要は無いだろうし真実なのだろう。しかし、そうだとすると私はどういう位置付けになるのだろうか。」

「何か聞きたいことがあるなら答えましょう。」

「本題に入る前に貴女には予備知識が必要なようですし」

「まあ、仕方ねえか。」

「このままじゃ話にならねえしな」

疑問を抱えた私に、光神が問い掛けてきた。彼女の言う「本題」とやらも気になるが、ここは素直に疑問を聞いておこう。目的が分からない相手に不用意に会話するのは危険だが、私の持つ情報が少な過ぎてそういった駆け引きが出来る状態じゃない。

「私と貴女達、何が違う？」

私は先程疑問に感じたことを端的に問うてみた。

「神族ということは変わりません。」

ただ、創造神から別たれた私やアンバーは最初から神族だったため、肉体を持たず魂のみで存在しています。

それに対して、人族から神族になった貴女は肉体を持ったままです。

魂が神族に変わったことで肉体にも影響は出ているでしょうから、肉体面でも人族の時のままと言うわけではないでしょうが」

「俺やそっちの生真面目女は普段は実体を持たずに意識のみの状態で活動してる、今はこうして具現化しているけどな。」

まあ、お前も肉体が減びれば俺らと一緒になるだろ」

つまり、今の私は中途半端に肉体を持った半神族のようなもので、肉体が減びたら彼らと同じような完全な神族になるということか。何だか途轍もなく重い話をサラッと言われた気がする。

「まあ、肉体を持ったままであっても神族であることに変わりありませんので、力の行使は問題ない筈です」

「力の行使？」

もしかして、神族になってしまった時に一緒に付いた「管理者」

としてのスキルのことだろうか。他に神族になって得た力に心当たりはないので、多分合ってると思うが。

「ああ、それが俺らが今回わざわざ訪ねてきた『本題』だ」

ずっと円卓に足を載せていた閻神が姿勢を正して円卓上に組んだ腕を載せ、身を乗り出す。議場の緊張感が高まり空気が張り詰めた。

「今日俺らがここに来たのは……『権能』を決める為だ」

## 05：会議は踊る

「『権能』とは私達管理者が司るもの……あらゆる物や事象、概念に対して『権能』が存在します。

そして、私達にとってそれは『力』であり『担当』であり『義務』でもあります」

「『権能』は管理者ごとにメイン1つとサブが複数、それから管理者に属さないフリーの3種類だ」

光と闇の神達は訪ねてきた本題だという『権能』について私に説明してくれた。メモを取りたいけど、そんな雰囲気じゃないのでしつかり憶えておくようにする。

「メインの『権能』は管理者の固有の属性で変えられねえ。

俺は『闇』でそっちの生真面目女は『光』、お前の場合は……」  
「恐怖』かよ。

また随分とエグイヤつを選びやがったな」

選んでない。私は選んでない。

彼らの『メイン権能』がそれぞれ『闇』と『光』だというのは納得だが、私の『恐怖』は納得いかない。

「感情系の『権能』は出来ることが限られる代わりに、その感情から信仰を得られますからね。

貴女は自身に向けられたものだけを吸収しているようですが」

国内の信徒からだけでなく外からも信仰が流れてくるような感じがしていたが、そのせいだったのか。私は一体どれだけ怖がられて

いるんだ。

……ん？ 今の光神の言葉にはちょっと引つ掛かる部分があったな。

「自分以外に向けられたものも吸収出来るの？」

「当たり前だ、『権能』は世界の管理権限だからな。

正しく機能させていれば、誰に向けられたものだろうと信仰として糧に出来る。

まあ、自分に向けられた感情の方が意図的に吸収する手間が無い分効率はいいけどな」

知らなかった。何が起るか分からないからと思つて管理者の力を使わないようにしていたが、そのせいお腹を満たすか。信仰を集める上ではかなり大きい話なので、後で確かめるとしよう。

「で、残りはサブとフリーだが、こっちについては管理者同士の合意で決めてる。

メインとサブまでがその管理者の専任として扱われるからな」

「専任の『権能』は他の管理者が使用出来ません。

それに対してフリーの『権能』は全ての管理者が同じように使えます」

「それなら全てフリーにしておけばいい」

「そこだけ聞けばそう思うだろうが、フリーの『権能』からじゃ信仰が得られねえんだよ。

それに、担当が明確じゃねえってことは対処が遅れる危険性も孕んでる」

成程、だから『力』であり『担当』であり『義務』なのか。

そこから『力』を得られる代わりに、その分野に対して責任を持つ必要があるわけだ。

「かと言って全ての『権能』を専任にしまうと、他の管理者の使用出来る手立てが減ることになります。

それ故に、緊急度が高いものを『サブ権能』とし、それ以外はフリーとしているのです」

「で、本題だ。

これまで『サブ権能』は俺とこいつが二分していたが、そこに新たに前が管理者として加わってきた。

だから、改めて『サブ権能』を決め直す必要がある」

彼らが揃って訪ねてきた理由はよく分かった。これは世界の今後を決める重大な会議というわけだ。

一通りの説明が終わったところで、お茶を淹れなおして改めて会議を始めることにした。なお、テナをこんな危険な場所に呼び戻すのは可哀相なので、お茶は私が淹れた。2柱が微妙な顔をしていたけど、文句は受け付けない。

「さて、それじゃ早速始めるとするか。

まず俺は『魔族』だな、コイツは譲れねえ」

「私も『人族』は譲れません」

こ、この流れは……美味しい部分は自分達で押さえて余り物を私に渡す、新人イジメの構図!？

さては「貴女のような下賤神族の面汚しな出身には『ゴブリン』や『下品』がお似合いです」とか「お前みてえな俄かモンが、まさか俺らと同等だとも思ってたんじゃないやねえだろうな」とか言ってくるつもりか。

色々丁寧に説明してくれたから油断していたが、考えてみれば人族から神族になり領域を荒らそうとしている者。私が望んだわけではないが、を彼らが好意的に受け入れてくれるわけがなかった。

しかし、これをそのまま受けるわけにはいかない。

この勢力争いで負ければ、この国が周辺国家から低く見られることにも繋がりがかねない。それでは私やテナ達の平穏が脅かされてしまう。権勢を振りたいわけではないが、足場を確保するために最低限の力は必要だ。

ここは頑として主張せねばなるまい。

「認められな」

「後は貴女に任せます」

「後はお前に任せるわ」

い？

「大任だと思いますが、貴女なら出来ると信じています」

「ま、これもお勉強ってやつだ」

こ、こいつら……私に全部押し付ける気か。

そうだった、以前レオノーラに聞いた話を話半分を受け取ったとしても、彼らは自分の鼻屑の種族を愛でていられれば後の事はわりとどうでもいい連中だった。あの時聞いたのは光神だけだが、この調子だと闇神も似たようなものだろう。

闇神が光神のことを生真面目と呼んでいたが、これの何処が生真面目なのか。

これまではそれぞれの種族を守るために厭々やってきたが、押し付ける相手が出来たから自分の好きなことだけやって後の面倒事を全て私に押し付けようという魂胆と見た。

「冗談ではない。

攻め込まれないように最低限の権勢は欲しいが、全てを押し付けられるのは望むところではない。私が欲しいのは平穩なのだ、殺神的スケジュールできりきり舞いでは意味が無い。

ここは頑として主張せねばなるまい。

「認められない」

「あ？」

「あ？」

睨まれた。やっぱり光神の方が怖い。だが、ここで引くわけにはいかない。



「他の『権能』全てが私の担当ということは『疫病』とかで人族や魔族を滅ぼすことも出来る。」

「それでいいの？」

「　　ッ！」

「　　ッ！」

私が言葉を発した瞬間、光神と闇神がバツと立ち上がった。睨まれているのは先程から変わらないが、威圧感が段違いに跳ね上がる。

「手前、いい度胸じゃねえか」

闇神が手に魔力を溜め始めるが、光神がそれを手で制しながら私に話し掛けてきた。

「人族を滅ぼす、と言いましたか？」

「それが出来てしまうことが問題。」

1 柱に『権能』が集中していると、止められなくなる」

「成程、3 柱のバランスが取れている必要があると言いたいわけですか。」

「一理あります。しかし」

光神は言葉を途中で止めると、突然右手に身の丈もあろうかという巨大な剣を出現させたかと思うと、円卓に叩き付けた。轟音と共に、円卓は両断される

「先程のような戯言を次に口に出したら、滅します」

怖……はい、肝に銘じておきます。

私は両手を顔の高さまで上げて降参のポーズを取ると弁解を述べ

る。

「あくまで例え話、やる気は無い」

「そう願います」

「どうやら何とか矛を収めてくれたようだ。」

勿論私だって人族や魔族を滅ぼす気など最初からなく、そういう危険性があるからバランス良くするべきだという例示のつもりだったのだが、今後は光神の前で人族が絡むことで迂闊な発言はしないように気を付けよう。

彼女が闇神から「生真面目」と呼ばれていた理由が少し分かった。でも、どうせならその生真面目さはもう少し他のところにも発揮して欲しかった。

真つ二つにされてしまった円卓を修復 壊したのは光神なのに何故か私が して改めて会議を再開する。

しかし、議論は遅々として進まなかった。私一人に全てを押し付けられることは阻止出来たものの、光神も闇神もなるべく多く誰かに押し付けるように動いたためだ。結局、1柱への押し付けから「誰か1柱が破壊的な行動に出ても残り2柱が協力すれば止められる」という範囲での押し付け合いに移行しただけだった。

気を抜くと押し付けられるままになるので私も反論したのだが、それによつていよいよ完全に不毛な押し付け合いに陥ってしまった。

古参と新参、男神と女神、正属性と負属性、2対1の攻防が目まぐるしく入れ替わって、途中から既に誰と議論しているかもよく分からなくなってきた。

なまじ食事も睡眠も必要ないだけに議論は際限なく続いてしまう。

「はあ……はあ……」

「ふう……埒が明きませんね」

「全くだ、しつけえぞ手前ら……」

必要も無いのに息を切らせながらお互いに睨み合う。

しつこいのはお前も一緒だと閻神には言いたいが、光神の言う通り埒が明かない。

「分かった、スッパリと決める方法を提案する」

「ふむ、言ってごらんなさい」

「つつーか、そんなもんあるなら最初から言えや」

閻神、五月蠅い。

たった今思い付いたのだから仕方ないだろう。

「勝負をして勝った者が分配を決める。」

但し、勝者は3柱のバランスには配慮すること」

「ほう、面白えじゃねえか」

「成程、このまま議論し続けても決着しそうにないので、それも良いでしょう。」

しかし、一体何で勝負するのですか？」

勿論、単純な戦闘なんかをするつもりはない。ゲームとかも無しだ。どちらも私がボロ負けするのが目に見えてるし。

「勝負は……ダンジョン」

## 05：会議は踊る（後書き）

アンリさんが学んだ効率の良い会議のための教訓

- 1．最初に時間を決めてその中で議論すること  
「エンドレス会議は危険」
- 2．進行役を置くこと  
「居ないと収拾付かなくなる」
- 3．議事録はちゃんと作ること  
「記録取っていると意識してたらもう少し気を遣った……かも」

## 06：その日世界が震撼した

「アドミニストレーション」

初めて、管理者としてのスキルを使うことになった。  
スキルを行使すると、ステータス画面と同じようにウィンドウが  
浮かび上がってきた。

メニュー：権能行使

情報閲覧

加護付与

啓示

神の力と言うわりに随分とシンプルだが、先日の光神や闇神の話から考えると神族の力の行使の大半が『権能行使』に拠るものなのだろう。

『情報閲覧』とは文字通り世界で起こったことないしは起こっていることを知ることが出来るものという話だ。流石に神族であっても未来の情報は得られず、あくまで参照出来るのは過去と現在の情報だけらしい。

『加護付与』は神の力を加護と言う形で分け与える行為……のだが、私が既に持っている加護付与スキルと機能的には変わらないようだった。強いて言えばこちらは任意行使のみで勝手に付与されてしまうことはないらしいが、私にとっては使い道がない。私としては、むしろ今ある加護付与スキルを止める方法が欲しい。

そして今回私が使用しようとしているのが『啓示』 自身の信者に対して言葉を伝える能力だ。

正直しよばい……。

いや、光神や闇神なら大陸全土の信者に言葉を伝えられるのは有効なのかも知れないが、私の場合は大半が神殿内に居るからあまり意味がない。ダンジョンマスターの能力でも意志伝達は可能だし、あまりする気はないけど直接話すことだって出来ないこともない。訂正しよう、「あまり意味がない」ではなく「全く意味がない」。

ないのだが、他の2柱が啓示を齎しているのに私だけ他の方法と違うのもこう、あるのかどうかも分からない威厳とかに関わるので私も同じ方法を探らなければならない。

私はメニューの中の項目を意識し、呟いた。

「啓示」

「ダンジョンが勝負方法とはどういうことですか？」

「意味分かんねえぞ、お前寝惚けてんじゃねえだろうな」

私の提案に対して、2柱は非常に胡乱気な表情で答えを返してきた。

彼らの気持ちは分かる、私も自分で一体何を言ってるんだと思っ  
て後悔しているところだ。一つ言い訳をさせて貰うなら、長時間の  
会議で精神的に疲れていたのだ。

しかし、一度言い出してしまった以上はやっぱり無しとは言えな  
い雰囲気だ。押し切ろう。

「私が神族になる前に作った地下のダンジョン、31階層まであるけど未だ攻略者ゼロ。」

人々が攻略したら光神ソフィア、魔族が攻略したら闇神アンバール、決められた期間内に攻略出来なければ私の勝ち」

思い付きだったけど、案外いけるような気がしてきた。

いつぞやの勇者パーティーにレオノーラ、人々と魔族の中でそれぞれ最上級に近い人物であっても半分も攻略出来なかったのだ。おそらく人々や魔族でこのダンジョンを攻略出来る人物はこの世界に居ないと思う。主に実力面よりも脳筋度合い的な意味合いでだが。

光神や闇神と直接争わなくていいのも大きい。直接対決だと経験で劣る私がどんな勝負方法でも不利になってしまっただろうが、この方法であれば相手は人々や魔族達なので、不利は少ない。

「へえ……面白そうじゃねえか」

「人々を我々の争いに巻き込むのですか？」

闇神は乗り気のようにだが、光神は私の提示した案に難色を示してきた。彼女にとって人々は守護する対象であるため、自身のために危険に晒すのが忍ばれるのだろう。それについては闇神も一緒の筈だが、性格の差によるものだろうか。

「世界の運営方針を決めるのだから、彼らだつて無関係じゃない」

「……分かりました、いいでしょう。私は賛成します。」

アンバール、貴方はどうですか？」

「俺も構わねえぜ」

よし、2柱とも乗ってきた。後は細かいルール決めだ。



その後、少しばかり議論を交わして詳細なルールが決定された。最初に『権能』の押し付け合いをしていた時に比べれば、遙かにスムーズに話が進んだ。

1・ダンジョン「邪神の聖域」を誰が攻略するかで競い合う。

人族が攻略すれば光神ソフィア、魔族が攻略すれば闇神アンバー、どちらも攻略出来なければ邪神アンリの勝ち

なお、攻略とは31階層に設置する『攻略の証』に最初に触れることを指す

2・勝者となった管理者は『サブ権能』の配分を決める権利を得る

但し、3柱のバランスにある程度配慮した配分を行うものとする

3・勝負の期間は1年間

4・『権能』を以って直接的に攻略の支援や妨害を行うことは禁止とする

5・邪神アンリは期間中に階層を追加してはならない

6・邪神アンリは期間中に固有の魔物を追加召喚してはならない。

但し、ドラゴン一体のみ可とする

7・邪神アンリは攻略に挑戦する人族や魔族に死者が出ないように、最大限の配慮を行う

8・光神ソフィアおよび闇神アンバーはそれぞれ人族と魔族に、期間中の神聖アンリ教団への戦闘行為や破壊工作を禁止させる

9・邪神アンリは攻略者から入場料を取っても構わない。

但し、挑戦者1人当たり1回銀貨1枚を上限とする

「俗物が」

「守銭奴だな、おい」

聞こえない。

「『攻略の証』って、それか？

何つーか……お前、趣味悪くねえか」

「別に私の趣味じゃない」

『攻略の証』については30階層からの階段を降りた31階層の最初の部屋に円柱状の台座を創って設置しておく。居住区まで入って来られて荒らされたりするのは嫌だから、『攻略の証』を取ったらダンジョン外に転移するようにしておくつもりだ。

「やけにドラゴンに拘ってましたが、何か意味があるのですか？」

「ドラゴンはロマン」

色々なことがあって後回しになってしまっていたが、折角魔力は十分にあるのだから夢だったドラゴン召喚はやっておきたい。それに、30階層のボスが空席のままなのは格好が付かないだろう。

何だか話が進むにつれて2柱の眼差しが生温かくなってきたような気がするけど、多分気のせい。

なお、どさくさに紛れてこの国に対して期間中の戦闘行為や破壊工事を禁止させることをルールに盛り込んだ。ダンジョン攻略に見せ掛けて攻めて来られたりしたら困るので必須の条項でもあるのだが、これで国家建設にも猶予が出来た。国を創るとなると正直1年の猶予期間では到底足りないと思うが、人口も少ないことだしある程度の形くらいは整えることが出来るだろう。

光神と闇神に国家として認めて貰ったことも、今後の各国との付き合いにおいて大きな意味を為すだろう。

啓示を以って、国内外に居る信者達へと言葉を伝える。

大半の人族は知らないであろう闇神のこと、光神と闇神と私の間で勢力争いを始めたこと、その一環として各国や魔族からダンジョンへの挑戦者がやってくること、国民はその挑戦者の妨害をしてはならないこと。

なお、勢力争いとは言ったが、通常その言葉でイメージするものとは逆に仕事の押し付け合いをしていることについてはわざわざ触れることはしない。これは今頃それぞれの種族にダンジョン攻略を指示する啓示を齎している光神や闇神も一緒だろう。

国民による挑戦者の妨害はルール上禁止されていないので出来ないこともないのだが、少々思うところもあつて禁止しておくことにした。彼らが妨害をすることで争いになつても困るし、何よりもこれは国家としてもチャンスなのだ。

光神や闇神から直々にダンジョン攻略を指示された人族や魔族は、躍起になつて攻略しようとするだろう。私のダンジョンは基本的に脱落者は外に放り出されるだけで再挑戦も可能だから、きつと何度も何度も繰返し挑戦してくる。そうなれば、自然と挑戦者はダンジョンの近くに滞在して攻略に挑むようになるだろう。一番近くの街はリーメルの街だが、更に近くに宿泊場所があれば利用しない手はない筈だ。神殿の周囲に宿屋を開業すればきつと客は入る。

挑戦者がダンジョン内で倒れた場合は武器やアイテム、お金はこ

れまで通り回収するつもりなので、商店や預り所なども開けば間違  
いなく流行る。商品は回収したものをそのまま回せばいい。

ダンジョン内の階層の地図を売って、階層の構造を定期的に変更  
するのもありかも知れない。階層の追加はルールで禁止されている  
が、既存の階層を改装する分には問題ない。価格設定次第だが、一  
定の売上げが期待できそうだ。

そう、この勝負は外貨獲得のチャンスなのだ。

と言うか、主産業の存在しないこの国にとって、そうでもしない  
といつまで経つても自給自足の村レベルから脱却出来ない。国家運  
営は基本的に教皇達に任せて関わらずにいたかったが、この絶好の  
機会を逃すのは悪手だろう。

だから、私は啓示の最後をこの言葉で締め括った。

「これより我が国は『ダンジョンの街』として観光業を促進させる」

## 07：ダンジョン再始動

先日の啓示以降、急ピッチで神殿の周囲に街作りが進められている一方、私は暫くの間放置してしまっていたダンジョンの整備に取り組んでいた。

私が邪神になってしまったあの日以降、上に神殿が建ってしまったこのダンジョンに侵入者は一人も来ていない。別に何かを停止していたわけではないので、その点においては今すぐ来客があっても問題は無いのだが、折角なのでこの期に色々と整備しておきたい。

さて、前置きはこれくらいにして、早速だが念願のイベントへと移りたい。

そう、待ちに待ったドラゴン召喚の時だ。

ドラゴン それはファンタジー世界における生物の頂点に位置する最強の象徴だ。ある時は最悪の敵として、ある時は頼もしいことこの上ない味方として、そしてある時は世界を管理する神として、立場は違えど常に最強の存在としてドラゴンは描かれる。

勇壮な体躯に鋭い牙、あらゆる物を斬り裂く爪に強固な鱗、そして大空の覇者の名に相応しい力強い翼。ブレスを吐けば一撃で大軍を薙ぎ払い、時として強力な魔法すらも自在に操る最強のモンスター。

蜥蜴の姿に似た西洋竜と蛇の姿に似た東洋龍の2種類に分類出来るようだが、やはりドラゴンと言えば西洋竜だと私は思う。ドラゴン好きにも色々な人が居ると思うので異論はあるかも知れないが、少なくとも今回召喚するのは私なのだから私の好きに選ばせてもらう。

ほんの少しばかり浮かれていることを自覚しながらも、私はドラゴン召喚の準備を進めることにした。

やはりドラゴンなのだから相当な巨体であることは間違いないだろう。

ダンジョンコアが安置されているこの執務室で召喚するのは少々危険だ。実は20階層ボスのオリハルコン製リビングアーマーを召喚した時にその失敗をやらかして、部屋が半壊したという苦い思い出がある。同じ過ちは二度は繰り返さない。

私は最下層から動かせないダンジョンコアではなく移動可能なサブコアを持つと、これから召喚するドラゴンを配備することを予定している30階層のボス部屋へと転移した。どうせ他の部屋で召喚してもその後でこの部屋に転送しなければいけなくなるのだから、最初からこのボス部屋で召喚するのが手っ取り早い。

以前レオノーラと対面した時に使用した30階層のボス部屋は、あの日のまま何も変わっていない。玉座もこれから召喚するドラゴンにはそぐわない人間サイズの大きさだが、この辺りの内装はドラゴン召喚後に合わせて改装を検討しよう。

「ダンジョンクリエイト」

サブコアを手に持ち呟くと、ウィンドウが立ち上がる。

私はその中で「召喚」の項目を選んで、数多の魔物の分類中から「竜種」を選択する。そうすると、様々なドラゴンが画像とパラメータ付きで列挙される。火竜に水竜に地竜に風竜、並んでるラインナップを見るだけで思わず顔がにやけてしまいそうになるが、努め

て平静を保つ。

どうせなら一番強い奴にしよう。魔力なら神族になった日から特に大きく使用する場面もなくて只管溜め込んでいたので、どんなドラゴンでも選びたい放題だ。召喚に必要な魔力値でソートすることが出来たので、一番数値が大きいものを見る……格好いい、強そう。これに決めた。

「サモン・ドラゴン」

別に掛け声は要らないのだが、つつい口から出てしまった。

召喚を実行すると私の前の床に直径20メートルはあるうかといふ巨大な魔法陣が展開される。魔法陣が明滅するとその上に膨大な魔力が集束し空間が歪み始めた。そして、その歪みから黒い巨大な何か徐徐に姿を現し始める。

期待しながら見守る私の前で、その巨大な存在は雄叫びを上げた。

「ピギヤアアアアア」

「ッ!」

「……………」

どつしてこうなった。

まさにその一言が相応しい。私はただただ呆然としたままその惨状を眺めるしかなかった。

勇壮な体躯に鋭い牙、あらゆる物を斬り裂く爪に強固な鱗、そして大空の覇者の名に相応しい力強い翼　を持ったドラゴンが部屋の隅っこで壁に頭を向けながら怯えている。まさに、頭隠して尻隠さず。

黒龍ヴァドニール。

魔力値5000万ポイントという嫌がらせを通り越して最早絶対に召喚させる気ないだろうという膨大な魔力、それと引き換えにこの世に現出させたその最強最悪のドラゴンは、魔法陣から姿を見せた瞬間悲鳴を上げると脱兎もかくやという勢いで私から離れるように逃げていった。

うん、私も薄々この結果を予想しなかったわけじゃない。

最近では効果の薄い人族や魔族、それから全く効果の無い神族としか会っていなかった為に私も存在ごと忘れかけていたが、邪神オーラのスキル説明に「ドラゴンが裸足で逃げ出す程度の効果」と確かに書いてあった。

それは認める。認めるけど、やっぱり酷い。

楽しみに……ずっと楽しみにしてたのに……。

最強のドラゴンを召喚して更にその上加護付与なんてしたらどうなってしまうのだろうと、柄にもなくワクワクしながら夢想したりもした。しかし、黒龍のこの様子ではどう見ても私を心から受け入れてくれそうには見えない。実際、私が立っていた位置から一歩前に進んだだけでビクツと震え、必死に逃れようと更に壁にその身を押し付ける有様だ。

あ、とうとう仰向けにひっくり返ってお腹を見せ始めた。

要らない、最強のドラゴンの服従のポーズとか要らない。お願いだからこれ以上私のドラゴンへの憧れを粉々にするのはやめて欲しい。



どう考えてもこれ以上ここに居ても状況は好転しそうにないので、私は失意と共にその場を後にすることにした。

執務室には戻らず、神殿の地上5階層の自室へと転移する。

ドラゴン召喚以外にも色々とやらなければならぬことは多いのだが、大きくやる気を削がれてしまった。

自室の天蓋付きベッドに横になると、枕を抱き抱えて顔を押し付ける。

「アンリさま？」

舌つ足らずな声を掛けられてそちらを……向かずに様子を探る。どうやらリリが私の部屋で本を読んでいたらしい。彼女の部屋はテナと同室なのだが、日中はテナが忙しくて構えない為に私の部屋に居ることが多い。気が付かなかったせいであらうと格好悪い姿を見せってしまった。

私は身を起こすとリリに向かって返事をしようとした、が何と返せばいいのか分からずに躊躇ってしまった。

そんな私の様子に気付いたのかどうか、リリは読んでいた本を閉じると、テーブルから離れて私の方へと駆け寄ってくる。

「アンリさま、どうしたの？」

「かなしいの？」

「どうやら、私が落ち込んでいるのが雰囲気伝わってしまったらしい。」

「そんなことを言いながら私の頭を撫でてくれるので、思わず目頭がツンとなる。」

「大丈夫、ちょっとツライことがあっただけ」

私はそうやってリリをなだめると、彼女の栗色の髪を逆に撫でた。リリはその感触に心地良さそうに目を細める。

私はリリの仕草に微笑ましい気持ちになると共に、彼女の首に着いたままの首輪が目に入り思わず眉を顰めた。

彼女はテナと異なり私の加護付与を受けては居ないので、未だ人族のままだ。それ自体は別に良いことだと思うが、問題は未だに奴隷身分のままということである。テナは私が神族になった時に一緒に使徒族へと種族が変わり、その時に奴隷身分から解放された。リリにも加護を付与すれば同じように奴隷身分から解放されるのではないかと推測しているが、使徒族が不老だったりする可能性がある為に今の彼女の年齢でそれをするのは憚られる。

私が神族の『権能』を十分に使えるようになれば、人族のまま奴隷身分から解放したりすることも出来るようになると予測しているが、現状では不可能だ。

私は彼女の首輪から目を離すと、気持ちを切り替えて話し掛けた。

「リリはお勉強？」

「うん、ご本を読んでいるの」

「偉い、少し読んであげる」

「ホントに!？」

本当は勉強であることを考えると自分で読んだ方が良いのだろうけど、励ましてくれたお礼に少しくらいはよいだろう。

目を輝かせるリリに微笑ましい気持ちになりながら、頷いて返した。シヨッキングな出来事でささくっていた心が癒されていくのを感じる。

「どんな本、読んでのの？」

「これ」

リリは先程まで読んでいた本を差し出してきた。

私は差し出されるままに本のタイトルを見た。

『ドラゴンと少女』

もついで。

## 08：侵入者改めお客様

『いらつしゃい！』

古今東西様々なダンジョンがあれど、こんな台詞で迎えられるダンジョンは他には存在しないだろう。

もしあるとしたら、正直この世界の者達の頭を心配してしまう。

ちなみに、今来た侵入者改め挑戦者はまだダンジョンに辿り着いたわけではない。彼らにはこれから襲い掛かってくる刺客を乗り越えてダンジョンまで到達するという試練が待っている。私はその様を管理者権限の情報閲覧機能によって覗き見、いや監督しているところだ。

『お兄さん、宿屋はうちがオススメだよ！』

『いや、うちだ！』

『可愛い子居るよ！』

『武器に防具、何でも揃ってます！是非お立ち寄り下さい！』

『薬草足りてるかい！？ダンジョン攻略は準備万端でないと！』

『預けていればダンジョン内で倒れても大丈夫！預かり所はこっちだよ！』

『地図買わないですか？これ持たずに攻略は難しいですよ！』

そう、客引きと言う名の刺客だ。

挑戦者はまずダンジョンの入口がある神殿の前に立ち並ぶ宿屋や商店、預かり所などの店員達による壮絶な客の奪い合いに晒されるのだ。この時点で脱落率は9割を超える。脱落と言っても、別に死亡とか再起不能とかではなく攻略開始が1日遅れるだけの話だけど

も。

それにしても出迎える店員達はやけに商魂逞しい者ばかりなのだけれど、彼らは本当に邪教徒なのだろうか。それとも、もしかして先日 の啓示で私が発破を掛け過ぎたかな。

鉄の意志を持って刺客の攻勢を乗り越えた極一部の挑戦者と、刺客の攻勢に屈して一泊した多くの挑戦者達はダンジョンの入口である神殿へと辿り着くことが出来る。

邪神の神殿と言うことで大抵の人が警戒しているが、別に門番などはおらず門戸は広く解放されている。

しかし、入口を潜ると彼らの前には第二の刺客が現れるのだ。

そして今、新たに一人の冒険者と思しき被害者……間違えた、挑戦者がやってきた。当然の如く彼の前にも第二の刺客が登場する。

『貴方はアンリ様を信じますか！？』

『おわっ！？ な、何だお前は』

豪華な司祭服を纏った金髪の男性……はっちゃけ教皇ハーヴィンだ。仮にも国家元首で色々忙しい筈なのだが、新規客が訪れるとかなりの高確率で出没する。

『アンリって……邪神のことか？』

『そんなの信じるわけないだろうが！』

彼の反応は私からすれば「まあ、そうだろうな」と言う感じなのだが、教皇はこの世の終わりのような表情で天を仰いだ。

『おお、何と罪深い！？』

『アンリ様！ どうかこの憐れな子羊に御慈悲を！』

『誰が憐れな子羊だ！』

私にどうしろと。

余談だが、本日彼がこの台詞を叫んだのは5回目だ。それは本日挑戦者が訪れた回数とも一致する。その度に毎回毎回彼はこの世の終わりのような嘆きを発している。挑戦者が彼の言葉に対して怒鳴るが、どこ吹く風だ。

『そんな貴方にはこれを進呈しましょう。

私が手ずから書き写した有難い経典です。

これを読んでアンリ様のことを学んで下さい』

そう言いつつ、彼は懐から取り出した一冊の冊子を挑戦者へと手渡す。挑戦者の男性は反射的に差し出されたそれを受け取ってしまった。

……そう、受け取ってしまった。

『何だよこれ……って、うおおおおああー！ー！？』

黒の経典じゃねえか、なんてもの渡しやがる！』

どうやら私の書いた経典は既に各国に悪名が知れ渡っているらしく、渡された彼はそれが何であるかに気付いたようだ。受け取ってしまったと書き写して誰かに渡すまで不幸に襲われる呪いの経典は、既に近隣諸国にジワジワとその手を広げている模様。……正しく生きるための道徳本だったんだけど。

書き上がったものをレオノーラに見せたら呪いが発動してしまい、書き写して広めていくしなくなってしまったのだが、訳も分からず不幸になったら流石に申し訳ないため、せめてものお詫びとして表紙の裏にきちんとルールは追記しておいた。そのため、対処法はすぐに分かっただろうし、危険物としての認知も早目に広がったよ

うだ。

それにしても教皇、一体何冊書き写したんだ。彼の懐からは今日だけで既に20冊近い経典が出てきているのだけだ。

『畜生、憶えてやがれー！ー！！！』

挑戦者の彼は典型的な捨て台詞を残すと、経典を持ったまま神殿の外へと逃げていった。きつと、写本に必要なものを揃えに行ったのだろう。

こうして第二の刺客の手によって神殿まで辿り着いた者達も脱落し、ダンジョン「邪神の聖域」は本日も難攻不落を誇っている。

……って、それじゃあダメだろう。入口で全員追い返してどうする。

ダンジョンが難攻不落なこと自体は良いが、諦められてしまい客が来なくなっても困るのだ。第一の刺客 客引き は趣旨に合致しているし、引き留めているだけで追い返しているわけではないので構わない。しかし、第二の刺客はダメダメだ。

「神罰執行」

私はテーブルに置いてあったお盆を彼の頭上へと転移させた……縦に。

『いや、申し訳ございません。  
ついつい布教に励んでしまいました』

頭にタンコブを作った教皇に対して映像越しで会話をする。布教してくれるのは私としても有難いのだが、やり方が酷い。あれではどう考えても信仰どころか、逆に敵意を増長させる結果にしか繋がらない。まあ、恐怖には繋がるかも知れないので、そちらからの信仰は得られるかも知れないけど。

『布教はいいけど、追い返すのは禁止。』

来た時よりも帰りの方が狙い目』

『成程！ アンリ様の御力を思い知った後の方が受け入れやすいという事ですね。』

御慧眼、感服致しました』

いや、そういうことではないんだけど……まあ、いや。

『今のところ来た挑戦者は人族だけ？』

『はい、そのようです。』

少なくとも、神殿内にまで来た者には魔族は見当りませんでした』

教皇にこれまでの挑戦者の動向を聞いてみたが、魔族側の動きは未だ見えないようだ。

しかし、それはある程度予想が出来ていたことでもある。この地



は元々人族領であり、人族と敵対している魔族にとっては敵地に当たる。大挙して押し寄せてくれば各国が過敏に反応する恐れがあるから、魔族にとっても慎重に動かざるを得ないのだろう。

なお、レオノーラを見れば分かるが人族と魔族の間に外見的な差異は殆どない。別に角があるわけでも翼が生えているわけでもない。聞いてみたが、見分けられるのはせいぜいが髪と目の色くらいらしい。血が混ざってしまえば均されてしまう程度の特徴だが、意図的に敵対種族として設けられたために人族と魔族が恋愛関係になることはかなり稀なので、一応見分けることは出来るようだ。まあ、偶に召喚勇者とかがその辺を気にせずに引っ掻き回したりするせいでも徐々に混ざってはいるという話だが。

一番懸念していたのは神殿やその周囲で人族と魔族の争いが起こることだが、少なくとも現時点ではその心配はないらしい。とは言え、魔族側も閻神が発破を掛けている筈なので、このままずっと安泰なわけではない。引き続き警戒が必要だ。

『分かった、引き続きお願い』

『はい、畏まりました。』

『必ずや、布教を成功させて御覧に入れましょう』

『いや、だから……』

『おや、これは失礼。』

『布教は帰りに、でした』

『本当に大丈夫なのだろうか。』

「ふむ、今日も中々美味だな」

「ふふ、沢山ありますのでお代わりは遠慮なく言ってお下さいね」

「はむはむ」

珍しくテナとレオノーラも早目に手が空いたので、今日はリリも含めて一緒に食卓を囲むことが出来た。最近はずいぶん忙しくて誰かしらが同席出来ない日々が続いていたので、貴重な機会だ。

「成程、確かに美味しいですね」

「へえ、悪くねえじゃねえか」

「は、はい！ ど、どうもありがとうございます……」

……こいつらが居なければ。

何で居るんだ、光神に闇神。食事も要らない筈なのに、ちゃっかり食べてるし。可哀相に、テナがかなり緊張している。

ちなみに、さっきからレオノーラは闇神の隣の席に座って甲斐甲斐しく世話を焼いているし、リリは光神の膝の上に乗せられて食べさせてもらっている。闇神は無愛想な態度ではあるが、決してレオノーラに対しては邪険にはしていない……やはり胸か、胸なのか。

冗談はさておき、光神がリリにただ甘で闇神がレオノーラには優しいのは、それぞれの種族鼻根の気質に拠るものなのだろう。私やテナに対するものとは、明らかに態度が違う。その優しさをもう少しだけ私達にも向けてくれてもバチは当たらないと思うのだけだ。

「何か？」

「あん？」

視線に気付いたのか、光神と闇神が私に対して問い掛けてきた。

「何で居るの？」

「魔族への指示出しも終わったしな、後は勝負の動向を見るだけだ。だったら、近くの方がいいだろ」

「私も同じです。」

それに、近くで見守って居ればいざという時に挑戦者の命を救うことも出来ます」

ちよつと待つて欲しい。

今後の命運を掛けた勝負を近くで見守りたいというのは分かるが、それは聞き捨てならない。

「……勝負が終わるまでずっと居る気？」

「当然です」

「当たり前だろ」

帰ってくれないかな。

「何か問題があるのか、アンリ？」

「アンリさま？」

ぐ、レオノーラとリリが敵に抱き込まれた。

私は最後の味方であるテナの方へと目を向ける。

「……………」

無言の視線によるやり取りは『なんとかして』『無理ですよ』の  
一瞬で決着した。

光神と闇神が邪神の神殿を溜まり場にするなんて、聖光教の教徒や魔王達が知ったら発狂するんじゃないだろうか。

そんな半ば現実逃避に近いことを考えながら、私は内心で深く溜息を吐いた。

## 09：彼らが帰ってきた

「ここが……本当にあの時のダンジョンなのか？」

「場所は間違っていない筈ですが……」

「噂には聞いていたけど、流石にこれは魂消たね」

「やっぱりヤバいところだったみたいだな」

客引きを適当にいなして入口の前に立ち神殿を見上げる4人のパーティーの姿が、情報閲覧画面越しに見えた。

短い金髪をしたイケメン剣士に美少女シスター、妖艶な魔導士のお姉さんに体格の良い剣士の4人パーティー。

そう、石板どろぼろ達が帰ってきたのだ。

……間違えた、勇者パーティーだった。

かつて私がまだ人族だった時にこのダンジョンに襲来し、10階層のボスであったノーライフキングに挑……まずに直前で引き返した脳筋勇者パーティー。いつ再挑戦して来るかと思っていたのに知らぬ間に何処かへ旅立っていた彼らだが、どうやら再びこのダンジョンへと挑戦するつもりのようなようだ。

「これは貴女の差配？」

「ええ、人族全体への啓示とは別に、聖剣を通じて個別に依頼しました」

私と並んで椅子に座って映像を見ていた光神ソフィアに問い掛けると、彼女は微笑みながらそう答えた。その表情からは彼女の自信の程が窺える。確かに、彼女が動かせる中では彼らは最高の人材な

のだろう。勇者というのが彼一人なのか他にも何人が居るのかは知らないが、人族という括りの中では最強の一角であることは間違いない筈だ。

挑戦者の悉くが10階層まで辿り着くこと無く倒れている現状を考えれば、彼らぐらいの実力者でないと意味が無いというのは頷ける。

尤も、私としては前回の結果を知っているだけに、どうして彼女がそこまで自信満々で居られるかが分からない。

「色々騒動があっても介入して来なかったから、何処かに旅立ってたと思ってただけだ」

「ええ、魔族領に入って魔王城の近くまで進んでいました」

「そっぴや、結構直前まで来ていたな」

これからラスボスに挑もうとしている勇者を呼び戻したのか、鬼だな。

「聖女神様」の加護を受けて勇者になった彼としては、彼女直々の依頼は絶対に断れなかったことだろう。

「それにしても、聖女神様直々に依頼が来るなんてな」

「ああ、魔王討伐よりもこちらを優先するようというお言葉だし、余程重要なことなだろう」

「魔王討伐よりも重要……ちょっと想像出来ないね」

「聖女神様のお言葉です、私達には理解し得ない深謀遠慮によるものなのでしょう」

重要なことであるのは事実なのだけど、なんだか彼らに本気で同情しなくなってきた。

種族：人族  
性別：男  
年齢：26  
職業：剣士  
レベル：41  
称号：聖剣の勇者

名前：ジオ  
種族：人族  
性別：男  
年齢：28  
職業：剣士  
レベル：35  
称号：なし

名前：フレイ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：24  
職業：魔導士  
レベル：35  
称号：なし

名前：ウイディ  
種族：人族  
性別：女  
年齢：20  
職業：修道士  
レベル：34  
称号：なし

試しにステータスを見てみた。以前の細かい数値までは流石に憶えていないが、アークのレベルが30台だったことは憶えているので、レベルが上がっているのは間違いない。

それだけの激戦を潜り抜けていざ魔王と決戦を……というところで呼び戻された彼らの苦勞を想像すると、思わず涙が零れそうになる。

前回の反省を活かして野営の準備も万端に整えてきた彼らは、順調に攻略を進めて2日目に10階層まで到達した。しかし、彼らは既に一度10階層まで攻略しているのだから、この結果は予想出来る範囲だった。問題はここからだ。

果たして彼らは、以前乗り越えられなかった仕掛けを今回は乗り越えられるのだろうか。固唾を飲んで見守る私の視線の先で、彼らは仕掛けのある台座の前へと辿り着いた。

「あの台座は何ですか？」

「10階層のボス部屋を開けるための仕掛け、石板を集めて嵌め込まないと開かない」

「ああ、あれか……」

光神ソフィアの質問に私が答えると、隣に居たレオノーラが額を押さえた。そう言えば、彼女もあの仕掛けで1時間くらい頭を悩ませたんだった。



ちなみに、闇神アンバーの方は今日は姿を見ていない。

「……？ 以前と文章が変わってないかい？」

「そうですね、後半は一緒ですが前半が違います」

「まあ、そんなことよりもどうやって道を開くかの方が大事だろ。」

「聖剣の方はどうなんだ、アーク」

「ちよっと待ってくれ……。」

成程、この階層に隠された石板を嵌め込めばいいらしい」

！？

映像越しに聞こえてきた予想外の会話に、私は思わずバツと振り返って光神ソフィアの方を向いた。すると、彼女はサッと目を逸らした。その様子を見て、私は瞬時に状況を把握した。

……この女、私から聞き出した情報を啓示で勇者に流したな。

「卑怯者」

「心外ですね、啓示での助言は禁じていなかった筈です」

確かにルール上は問題ない。「権能」を用いての支援は禁止にしたが、啓示を使用することは禁じていなかった。しかし、ズルいことに変わりはないと思う。

それにしても、これは拙いかも知らない。脳筋には中層フロアの仕掛けを攻略出来ないだろうと思って高を括っていたけれど、光神ソフィアが助言役として加担するとなると話が変わってくる。

管理者は情報閲覧でこの世界のあらゆる情報を見ることが出来るから、彼女の助言があれば仕掛けの類はあつと言つ間に攻略されてしまう。

いや、待てよ？

それならどうして彼女はわざわざ私に質問したのだろうか。仕掛けの解き方が分かるなら、あんな質問をする必要は無かった筈だ。つまりは、彼女は仕掛け自体は見る事が出来ても解き方は分からなかったということなのだろう。

それなら、私が解き方を教えなければ助言の幅も狭められる。

「もうヒントはあげない」

「それは残念ですね」

それほど残念そうには見えない表情で返してくる光神ソフィア。まあ、彼女も私がそう何度も口を滑らせると思うほど樂觀視はしていなかっただろうし、最初だけ儲けものといった感じだったのだろう。

明確な回答までは持ち合わせていなくても、俯瞰的に見ることが出来る助言者が居るだけで大分攻略の難易度は下がるのも事実だ。

中層の謎解きフロアで一年間凌げると思っていたけれど、これは下層フロアの出番もあるかも知れない。

一時間後、10階層を回って石板を集めた勇者パーティは再び台座の前へと戻ってきていた。4枚の石板を4人がそれぞれ1枚ずつ石板を持って台座の前へと並んで立つ。

ん？ 4枚？

なんで4枚？ 3枚しか設置していない筈なのに。

あ、もしかして前回持ち逃げした1枚を後生大事に持ち続けたのか。既に別のマークに切り換えて石板も補充してるから、前回の石板はもう役に立たないのだけど。

『さて、早速石板を嵌め込んじゃうか』

『ああ、この3ヶ所の窪みに……あれ？』

『石板は4枚ありますが……残りの1枚は何処に嵌めればいいのか、しょう？』

『他に嵌め込む場所は無さそうだね』

勇者パーティも枚数がおかしいことに気付いたのか石板を嵌め込む直前で頭を突き合わせて悩み、台座の他の場所に嵌め込む場所がないかを探し始めた。

勿論、そんな場所がある筈ない。

台座をくまなく探して見付からず、部屋の中を搜索し始める彼らの姿に頭を抱えたくなった。そして、当然の流れのようにアークが聖剣の柄を額に当て始めた。光神ソフィアからの助言を求めているのだらう。

これ、彼らが中層フロアに行ったら彼女は付きつきりで誘導する羽目になるんじゃないかな。心なしか、彼女の後頭部に大粒の汗が浮かんでいるように見えた。

「ソフィア、彼らに以前の石板は除外するように伝えて」

「アンリ！？」

「……いいのですか？」

私の申し出にレオノーラと光神ソフィアが驚きの声を上げる。確かに前言撤回になってしまおうが、まどろっこしくて見てられないの

だから仕方ない。それに、前回の石板が混ざってしまおうと言うのは流石に想定外でヒントも殆どないから、この程度のフォローはしてもいいと思う。

また、私としても彼らを先に行かせることにメリットがないわけではない。果たして彼らがこの先にいる10階層のフロアボスを突破出来るか否か、それは勝負の行方を予測する上で一つの目安になるだろう。と言うか、二度も肩透かしを喰らわされるのは御免だった。

決して、答えが分からなくてまごついている光神ソフィアに同情したわけではない。

「分かりました。

それでは言葉に甘えます、アンリ」

光神ソフィアが啓示を以ってアークに助言すると、彼は仲間達にその内容を説明して、以前の石板を脇に放り出して残り3枚を台座へと嵌め込んだ。

って、要らなくなったからと言って前回の石板をそこに捨てていく。余計に紛らわしくなるじゃないか。

意図せず後発部隊を攪乱する置き土産を残したアーク達は、開いていく入口を潜り玉座の間へと足を踏み入れた。あの石板、後で回収しておかないと……。

## 10：黒き暴君

「黒き暴君に挑む者よ、正しき星辰を揃えよ」

新たに刻まれた文字の通り、石板を台座に嵌め込んで扉を開け玉座の間に入った彼らを待ち受けるのは黒き暴君

『グオオオオオーツ！！！！』

黒龍ヴァドニール。

巨体から放たれる咆哮が物理的な圧力すらもって、アーク達へと襲い掛かる。ただそこに存在するだけで圧倒的な力を感じさせるその様は、まさに暴君という言葉が相応しい。

……その勇壮さを是非とも私の前でも発揮して欲しかった。

『ド、ドラゴン！？』

『何て大きさだ！？』

『いけない、陣形を整えて下さい！』

『来るよ！』

「アンリ？ 10階層のボスはノーライフキングじゃなかったのか

「？」  
「入れ替えた」

かつての10階層のフロアボスを知っているレオノーラから質問が来るが、答えは至ってシンプルだ。ドラゴン召喚の後にしばらく考えたが、フロアボスの配置を入れ替えて10階層のフロアボスにドラゴンを配置することにしたのだ。

しかし、それも仕方ないだろう。仰向けになって腹を見せるようなドラゴンに、最後の砦とも言える30階層のフロアボスを任せると気になれないのはむしろ当然だと思う。私でなくてもそうする筈だ。ちなみに、20階層のフロアボスは加護付きオリハルコンアーマーのまま据え置き、元々10階層のフロアボスであったノーライフキングを30階層へと配置変更している。いや、正確には元ノーライフキングと言った方が良さだろう。彼は私が加護を与えることで別のものへと進化してしまった。

「あなたは何てものを召喚しているのですか！？  
あれは黒龍ヴァドニール……世界に災厄を齎す最悪のドラゴンではないですか！」  
「うん？」

光神ソフィアが焦ったような表情で問い掛けてくるが、私は思わず首を傾げた。「世界に災厄を齎す」とかは知らないが、一応召喚に必要な魔力値順で最大だったものを選んだのだから、それくらいの逸話があっても不思議ではない。不思議ではないのだが、同時に召喚されてからこれまでの彼の様子を見ると、どうしてもそんな逸話とイメージが繋がらない。

そもそも、彼女は何故こんなに慌てているのだろうか。

確かにスペックとしては高いが、神族に匹敵するという程でもないだろうに。

「管理者が対処出来ない相手ではない筈」

「それはそうですが、対処するまでにどれだけの被害が出ると思っているのですか！」

成程、人族に出る被害を心配するところは彼女らしいと言えば彼女らしい。

しかし……

「ダンジョン内で飼っている分には被害は出ない」

「……………あ」

「言われてみれば、確かに外には出られそうにないな」

そう、レオノーラの言う通り、黒龍ヴァドニールは基本的にダンジョンの外に自力では出られない。いや、ダンジョンの外とか言う前に、その巨体のために今彼が居る部屋から外に出ることも出来ない。彼が外に出る方法があるとすれば、私が転移させることくらいだ。流石にずっと部屋の中と言うのは可哀相なので、偶には外を散歩させてあげようかとは思ってはいるが、仮に外に出したとしても放し飼いにする気はない。

故に、被害を心配する必要はないのだ。

「……………」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が部屋の中を満たす。光神ソフィアは顔を微妙に赤らめている。冷静になって状況を正確に把握すると、先程まで焦って騒いでいたことが恥ずかしく思えるのだろう。

「戦闘が始まったようですね」

あ、ごまかした。

巨体に似合わぬ俊敏さで飛び掛って来る黒龍ヴァドニールの顔目掛けて、フレイが炎を放つ。魔法に対する抵抗力故か殆どダメージは無いようだが、流石に顔面に目掛けて飛んでくる炎を無視することとは出来なかつたのか、黒龍のスピードは僅かに遅くなった。その隙に彼ら4人は黒龍の直線状から退避する。次の瞬間、先程までアーク達が居た場所に黒龍の巨体が飛び込んだ。退避していなければ撥ね飛ばされて大きなダメージを負っていただろう。

『喰らいやがれ!』

黒龍が彼らの方を振り返る前に、ジオが黒龍の肩口の辺りに剣で斬り付けた。しかし、キンツという金属音と共に彼の剣はあっさりと弾かれた。

『チツ、硬いな……おっと』

ダメージは無かったものの鬱陶しいと感じたのか、前足を払うようにして薙ごうとする黒龍に、ジオは咄嗟に後ろへと跳んで回避する。



『俺の剣じゃ斬れそうにねえな』

『それなら、この聖剣ならどうだ!』

ジオを攻撃する為に前へと差し出された形になっている前足に、今度はアークが聖剣でもって斬り付ける。聖剣はジオの剣とは異なり弾かれること無く黒龍の鱗に斬り込みを入れ、僅かだが鮮血が舞った。

『ギャオオオオオーッ!』

『何とか斬れるみたいだが、やはり凄い防御力だな』

与えられた痛みに怒りの叫びを上げる黒龍は、その鋭い牙を以ってアークに噛み付こうとする。

『させねえよ!』

アークに噛み付こうとする黒龍の横つ面をジオが剣ではなく盾で殴り付けた。ダメージは無いが、横からの攻撃で噛み付きは逸れ、その牙はアークを捉えることなく閉じられた。

『ありがとう、助かった!』

『いいってことよ。』

俺じゃダメージを与えられなさそうだからな、攪乱に徹することにする。

お前は聖剣での攻撃に集中してくれ!』

『分かった!』

ジオは剣を放り捨てると盾を両手で持ち、アークに対して攻撃を仕掛ける黒龍に叩き付けることで攪乱を始めた。どちらにしても斬れないなら、面の大きい盾の方が妨害になるという判断だろう。ジ

オが作り出した隙に唯一黒龍にダメージを与えられるアークが斬り付ける。後方からの炎による援護もあって、彼らは少しずつであるが着実に黒龍に対してダメージを与えていく。

しかし、黒龍はそんな彼らに焦れたのか大きく息を吸い込むと咆哮を上げた。咆哮に伴う爆発的な風圧が彼らを襲う。

『グオオオオオオーツ!!!』

『うわあっ!?!』

『く、マズツた!?!』

先程入口で放たれた時は距離があった為に体勢を崩す程度で済んだが、今度は至近距離だ。アークとジオはひとたまりも無く吹き飛ばされ、フレイやウイディの居る方角へと数メートル飛ばされて床に叩き付けられた。

『アーク様!?!』

『ジオ!?!』

フレイとウイディが駆け寄り、薬草と回復魔法で彼らのダメージを癒し始める。そんな勇者パーティを尻目に黒龍は先程咆哮を放った時以上に大きく息を吸い込み始めた。

『ま、まさか……!?!』

『ブレス!?!』

フレイとウイディが青褪めるが、アークとジオが倒れている状況では回避は困難だ。2人は決意の表情になるとそれぞれ魔法の詠唱に入った。

□

ツ！！！』

黒龍の大口から紫電を伴った黒い炎が吐き出される。フレイは火魔法で少しでも黒龍のブレスの威力を削ごうとするが、フレイの火魔法は巨大な黒い炎にあつと言う間に飲み込まれる。ウイデイの展開した障壁が彼ら4人を包み込み護ろうとするが、ブレスに対してほんの僅かに拮抗した後に碎け散った。

ブレスに飲み込まれて絶体絶命の状況かと思っただが、回復したアークとジオの2人がそれぞれウイデイとフレイを抱き抱えると少しでもブレスの着弾から離れるように身を投げた。

ブレスは先程まで彼らが居た場所の床へと着弾し、4人はその余波によって吹き飛ばされた。余波と言ってもその威力は凄まじく、床へと叩き付けられた彼らは命に別条は無いものの立ち上がることも出来ずに呻いている。

黒龍はそんな彼らに向かって、ゆっくりと近付いていった。

「お、おい……拙くないか？」  
「アンリ！ このままでは彼らが！？」  
「大丈夫」

映像を見てレオノーラと光神ソフィアが焦り始める。光神ソフィアに至っては大剣を取り出し、今にも飛び出していきそうな剣幕だ。私は彼女らを宥めると、映像の先へと通信で声を伝える。

『ヴニ、おすわり』

反応は劇的で、倒れた勇者パーティに向かって歩いて歩んでいた黒龍ヴアドニール　愛称ヴニはその瞬間その場でピチツと姿勢を正して座り込んだ。

「へ？」

「は？」

レオノーラと光神ソフィアが間抜けな声を出して固まるが、私は彼女らのことは一旦放置して、勇者パーティをダンジョンの外へと転移させるべく魔法陣を展開する。彼らが無事に外へと送り出されたことを確認してから振り返ると、レオノーラが土下座を始めた。私と目を合わせないように逸らすことに慣れてきた彼女だが、今回は安心してたせいで反応が遅れてしまったみたいだ。

「何ですか、あれ？」

「何と言われても……」

光神ソフィアがまだぼうっとしたまま、問い掛けてきた。しかし、回答は躑けの成果としか言いようがない。

アンデッドやリビングアーマーと異なり、ヴニは生き物なので当然のことながら餌が要る。餌をあげるのはわたしがやっているのだが、折角なのでついでに躑けを試みているのだ。毎回毎回私が部屋に行くたびに部屋の隅っこまでダッシュで逃げ出すのは変わらないのだが、一応命令すれば反応する程度には懐いてくれたのだ。取り合えず、「おすわり」「ふせ」「まで」「まではきちんと覚えさせた。」「おて」はやると私が潰れるのでやらない。

「貴女は……最悪のドラゴンをペット扱いですか」  
「まあ、アンリだな」

光神ソフィアと土下座をやめたレオノーラが何故か疲れたような溜息を吐いた。

首輪とか付けた方がいいかな。

……あ、アーク達からアイテムとお金を回収するの忘れてた。

## 11：四の天に座す王

『フンツ、ここが邪神とやらの神殿か』

新たに神殿の入口に挑戦者が立った。それ自体は連日のことであり特別に注視するべきことでもないのだけど、今回の人物は他の挑戦者とは一線を画している。

短いツンツン頭の大柄な体格をした精悍な男性だが、銀髪で紅い瞳というレオノーラと同じ様な特徴をしている……魔族の特徴だ。神殿内の信徒達もそのことに気付いたようで、他の挑戦者の時は異なり遠巻きに彼の事を見ていた。レオノーラと接することで魔族にも多少は慣れている信徒達だが、やはり初めて見る相手だと勝手が違うのだろう。

名前：イジド  
種族：魔族  
性別：男  
年齢：31  
職業：魔導士  
レベル：26  
称号：なし

ステータスを表示して確認してみたが、やはり魔族で間違いないようだ。それにしても、彼のステータスにはどこか気になる部分がある……

「ああ、漸く来やがったか」

「ぬ……よりもよってアヤツが来るとは」

何処が気に掛かるのかが分からず首を傾げていた私の横で、映像越しに彼の姿を見た闇神アンバルとレオノーラが反応を見せた。闇神アンバルの方は兎も角として、レオノーラが嫌そうな顔をしているのが気になった。

「知り合い？」

「四天王の一人なんだが、以前から私に言い寄って来る奴だな」

いたのか、四天王。

「四天王ってどんな存在？」

「ん？ 四天王のことを知りたいのか？」

我が父でもある魔王陛下は大勢の配下を従えているが、その配下の中で特に強い力を持つ4人の高位魔族のことを四天王と呼ぶのだ。

四天王は四属性をそれぞれ司っていて、あの男 剛地鬼イジドは『地』だな」

四属性というと、地・水・火・風かな。司ると言っても神族というわけではないので、その属性の魔法を得意としているということなのだろう。

「他には『風』の烈風騎レナルヴェと『水』の血氷将ヴィクトがいる。

今回はイジドしか来ていないようだが……」

「？ 3人しか居ないみたいだけど」

四天王と言っていたし四属性を司っているなら4人居る筈なのに、

地・水・風の3人しか名前が挙がっていない。もう1人、『火』を司る四天王が居ないとおかしい。

「いや、その……ワタシだ」

「は？」

ワタシ？ それが最後の四天王の名前？

「だから、私が最後の一人……『火』を司る魔炎姫レオノーラだ」

恥ずかしそうにしながら応えるレオノーラ。そう言えば、彼女は闇魔法の他に火魔法も得意としてたな。

魔王の娘なのに四天王なのか、王族は配下とは別枠になりそうなものだけだ。

「四天王だったんだ。これからは魔炎姫レオノーラって呼んであげる」

「頼むからやめてくれ、結構恥ずかしいんだ」

顔を赤くして恥ずかしがるレオノーラの姿に少し悪戯心が湧くが、あまりいじめ過ぎると嫌われそうなので自重しておくことにする。

「それで、彼はどれくらい強いのか？」

先程見たレベルからするとレオノーラと同等くらいの筈だが、実際に強さを知っている人の意見が気になった。

「私と同格だが、地属性はどちらかというと防御向きだからな。」

「対一で戦えば、おそらく私が勝つだろう。」

本人の性格とは一致しないが、攻撃に秀でた者と組むことで真価



を發揮する男だ」

そうだ、先程彼のステータスを見て何か引掛かっていたが、それが何だったのか漸く分かった……職業だ。

レオノーラは魔導拳士であり、肉弾戦も魔法もこなす万能型だ。前衛も後衛も一人でこなせる彼女だからこそ、ソロでダンジョンを攻略すると言う荒業も可能だった。

それに対して、画面に映ってる男は魔導士……剛地鬼とかいう二つ名には似つかわしくないが、職業を考えれば後衛型になる筈だ。普通に考えれば、ソロでダンジョン攻略が出来るとは思えない。

何か隠し玉でもあるのかとも思ったが、レオノーラの説明を聞く限りではそれもない。

「地属性ってどんな魔法？」

「火魔法や水魔法がそれらの現象を『生み出す』ものであるのに対して、地魔法や風魔法は既に存在するものを『操る』ことを主とする。地魔法であれば大地を、風魔法であれば大気をと言った感じだな。

地魔法での主な戦闘方法は岩石を身に纏って鎧にしたり、大地を隆起させて盾としたり、それから土からゴーレムを創り出したりといった感じだな」

成程、大地の上に立って戦うことで最大の力を發揮する魔法というわけか。バトルフィールドの選択が非常に重要になるスキルのようだ。しかし、そうだとすると気になることがある。

「ダンジョン内はレンガで舗装されてるけど、地魔法使えるの？」「無理だな」

「……………」

キツパリと無理だと宣言するレオノーラに、次の言葉が見付からなくなってしまうた。

「普通のレンガなら色々使えるとは思うが、ダンジョンの内装は基本的に破壊が出来ないからな。

地魔法で操ったりすることも出来ない筈だ。

地肌が剥き出しのダンジョンであれば、まだ何とかなるのかも知れないが」

それってつまり、彼はダンジョン内では全くの役立たずになるということではないだろうか。魔導士なので肉弾戦にも向いていないだろうし、得意の地魔法は使えない。

「アヤツも魔族だからな、あまり使っているところを見たことはないが地属性以外に闇魔法は使える筈だ。

ただ、このダンジョンの魔物はアンデッドが多いからな、闇魔法は効果が薄い。

まあ正直……無理じゃないか」

仮にも同僚なのにそんなあっさり……本気で彼のことが嫌いなんだな、レオノーラ。引き攣りそうになる顔を努めて無表情に抑えながら、私は闇神アンバールの方を向いた。

「人選ミスじゃない？」

「ああ？ 知らねえよ。

俺は当代の魔王にダンジョン攻略を命じたただけだ、人選までは口出ししてねえ」

つまりは魔王　レオノーラの父親がそんな人選をしたと言うことだろうか。直属の部下の能力くらいは把握出来ていそうなものだ

けど、何で不向きな人材を投入するような真似をしたのだろうか。四天王が同格なら、他のメンバーでもっとダンジョン攻略向きの力を持っている人物を派遣すればいいのに。

意見を求める為に、再びレオノーラの方に目を合わせないように気を付けながら振り向いた。

「クソツ、何でだ!? 何で魔法が発動しねえんだ!?!」

「ふむ、父上の思惑か……」。

そうだな、一番役に立たない奴を捨て石にしたのかも知れないな」

何だか今日はレオノーラの発言にいつになく毒が混ざっている気がする。一体彼はどんな言い寄り方をしたのだろうか。

しかし、捨て石と言っても彼を捨て石にすることで何か得られるかと考えると疑問だ。正直、ダンジョン攻略する気がないとしか思えないけど……って、もしかしてそれが正解だろうか。魔族はこのダンジョンの攻略に積極的では無くて、取り合えずの義務を果たしたというポーズのために四天王の一角を派遣したと言うことであれば納得がいく。

確かに私が神族になってしまった時の経緯を考えると魔族からは相当恐れられているだろうから、このダンジョンの攻略に積極的なれないというのは当然なのかも知れない。山とか半壊したらしいし。

ただレオノーラ……もしもその推測が真実だとすると、今この場でその発言には大きな問題があるんだけど。

「つまりは何か? アイツは俺の指示をシカトしやがったってことか?」

「え……ッ!? め、め、め、滅相もございません!」

そう、魔族がダンジョン攻略に積極的でないとすると、それは闇

神アンバールの命令に背いたことになる。彼の言葉を聞いてそのことに気付いたレオノーラは瞬時に真っ青になった。

「じゃあ、どういうことだ？」

「え、あ、その……そう！ 偵察です！」

確かにアヤツではダンジョン攻略は不可能でしょうが、本命である後発部隊の攻略の可能性を上げるためにダンジョンの情報を収集する偵察の役割を負っているのです！」

冷や汗を掻いて焦りながらも、何とか闇神アンバールに対して言い訳をするレオノーラ。勢いがあり過ぎて逆に説得力が薄くなっている気がするけど、今の彼女にはそんなことを気にする余裕も無さそうだ。

「ま、そんならいいけどよ」

勢いに圧されたのかそれとも本気で納得したのかは不明だが、闇神アンバールはレオノーラの言葉を受けて引き下がった。

魔王が実際にどんな思惑でイジド一人を派遣してきたのか真偽の程は不明だが、彼女がこう宣言してしまった以上は闇神に逆らっていないことを証明する為にも、後発の戦力を投入しないわけにはいかなくなってしまった。

『ぐあああああー！？』

あ、雑魚敵にやられた。

『フンツ、昨日はたまたま調子が悪かったただけだ』

一体、彼は誰に言い訳しているのだろうか。

昨日呆気なく途中で倒れたイジドだが、翌日に再度ダンジョンへと挑戦を仕掛けて来ていた。普通の挑戦者は倒れた後は暫く休養するのだが、彼のタフさには思わず感心してしまった。

なお、昨日このダンジョンに挑戦した時と異なり、イジドは周囲に彼自身と同じくらいのサイズの土で出来た人形を10体従えている。おそらく、あれが昨日レオノーラが話してくれた地魔法によって創り出したゴーレムなのだろう。

確かに、ダンジョン内の地面を利用することは出来なくても、外で魔法を行使してそのままダンジョンに入ってくれば問題は解決する。昨日の失敗を顧みて、彼も対策を取ってきたのだろう。

それにしても、10体ものゴーレムを同時に操作するなんて芸当が見られるとは思わなかった。流石は四天王の一角と言っべきだろうか。地面さえあれば無限にゴーレムを生み出せると言うなら、ダンジョンの中では兎も角として屋外であればかなり強力な戦力となることは想像に難くない。

『ハツ、魔法さえ使えればこんなダンジョンくれえ楽勝だぜ』

「無理だな、魔法は使用出来るかもしれないが、ずっと使い続けていては魔力が持たない。」

途中の階層で魔力切れになって立ち往生が関の山だ」

相も変わらずバツサリと切り捨てるレオノーラ。本当に彼は何をやってこんなに嫌われているのだろうか。聞くのが少し怖いけど、やはり気になる。

「随分と彼のことが嫌いみたいだけど、どんな言い寄られ方をしたの？」

私が尋ねた瞬間、レオノーラの顔が嫌なことを思い出したかのよう  
に盛大に歪んだ。

「言い寄られ方、か。」

『俺の女になれ』とか言いながら厭らしい目で見たりベタベタと  
触ってきたりされてな。

あしらってはいたのだが、正直腹に据えかねていた」

セクハラか……それは確かに私も好感が持てない。それにしても、  
レオノーラは魔王の娘なのに、彼は王族相手によくそんな事が出来  
るな。ある意味で大物というべきなのだろうか。

『ぐぶっ………』

あ、もう魔力が尽きたみたい。意外と早かった。

『これまでは様子見、ここからが本番だぜ』

この日彼は3日連続ダンジョン攻略挑戦という称賛すべきか呆れ  
るべきかよく分からない快拳を遂げた。子供の言い訳みたいなこと

を言い始めているけど、一体何が彼をここまで奮い立たせるのだろうか。

なお、本日の彼は昨日のゴーレムを引き連れて居ない代わりに、大きな袋を背負ってまるでサンタクロースのような格好になっている。

一体何を持ってきたのかと疑問だったが、その疑問に対する答えは彼が魔物に遭遇した際に判明した。

「ハッ、喰らいやがれ！」

彼が袋の中身をぶちまけると、そこには大量の土が広がった。そして、彼が詠唱するとその土が盛り上がり、人型を為す。成程、常時ゴーレムを操作していると魔力が持たないから、使わない時は土の状態で運ぶつもりなのか。地味だけど、魔力の温存としては確かに効果はありそうだ。凄く地味だけど。そして格好悪いけど。

「アンリ！ 頼みがある！」

イジドの涙ぐましい奮闘ぶりを観戦していたところに、レオノーラが扉を叩き付けるように開いて部屋に入ってきた。その様相はまさに怒髪天を衝くといった表現が相応しく、全身から憤りを露わにしている。そして、映像に映るイジドの姿を見ると、その怒りは更に燃え上がった。

レオノーラは私の両肩をガツと掴むと、目を合わせないながらも強い調子で睨んできた。

「頼む、アヤツを徹底的に叩き潰してくれ」

痛たたた！？ ちょ、レオノーラ、強く掴み過ぎ。

「何かあったの？」

元々彼のことは嫌ってはいたようだけど、今日の彼女は昨日までとは様子が違い過ぎる。私は気になって、レオノーラに聞いてみた。

「本国に問い合わせたのだがな、イジドの奴はこのダンジョンの攻略を成功させたら私との婚姻を認めると父上から言われてるらしい」

成程、それで彼は異様に気合が入っているのか。意中の相手が手に入る上に魔王の娘と結婚出来て権力も得られるとなれば、必死になるのも頷ける。

魔王の発言は彼には無理だと分かった上で発破を掛けているとは思えないけど、レオノーラは怒りで冷静な判断が出来なくなっているようだ。

「王族に生まれた以上、政略結婚を否定するつもりはない。

否定するつもりはないが、それでも嫌なものは嫌だし、アヤツとの婚姻が国のためになるとも思えん。だから、阻止してくれ」

私の肩を掴む手に一層力が入り、ギリギリと音が鳴る。このまま肩を砕かれては堪らないので、私は慌てて何度も頷いて何とか解放された。

放っておいても彼がこのダンジョンを攻略するのは無理だと思うけれど、レオノーラに納得して貰うためにも何かしらの行動してみせる必要がある。私は心を鬼にして、取り出した一冊の経典を彼の前に転送した。

「ん？ 何だこりゃ」



合掌。

11：四の天に座す王（後書き）

風「イジドの奴が墜ちたか」

水「フン……彼の者は四天王の中でも最弱」

火「ボスまで辿り着くことすら出来んとは魔族の面汚しよ……っつて、死んではおらんぞ。

10円ハゲを気にして引き籠ってるだけだ。

私としてはこのままずっと引き籠っててくれると有難いのだが」

## 12:嵐の前の一時

先日、残念な四天王が黒の経典の新たなる被害者となってから、ダンジョン攻略については奇妙な小康状態が続いていた。勿論、一般の御客様はコンスタントに来場してくれているのだが、勇者や魔族四天王のような特徴のある挑戦者が居なかつたためだ。やはり、一般の冒険者などにとってはこのダンジョンは大分難易度が高いようで、10階層まで辿り着ける者は居なかつた。

そもそも、このダンジョンに挑むには瘴気を防ぐ手段を持っていることが最低条件のため、その時点でそれなりに数が絞られることになる。このダンジョンレベルの瘴気を防ぐとなると、かなり修行を積んだ修道士でないと難しいらしい。

尤も、光神や闇神がこのまま黙っているとは思えないので、今の状態は嵐の前の静けさと思っていた方が良かったろう。

そして、間が空いたせいで少し冷静になって……気付いてしまった。

私、何でこんな勝負してるんだろう。

管理者の仕事全て押し付けられるのは勘弁願いたかったが、バランスを考慮して分担することに話が進んだ時点で多少多めに引き受けることになったとしても別に構わない筈だった。いや、むしろ国のことを考えれば、勢力は大きい方が良いので引き受けてしまった方が良かったとも言える。

ところが、ソフィアとアンバーが押し付けてこようとしたことに反射的にやり返してしまったせいで、話が拗れに拗れてしまった。今から思えば必要のない苦勞をしていた。

しかし、やはり押し付けられるのは癪なので出来れば勝ちたいと思う辺り、思った以上に私には負けず嫌いな部分もあったようだ。少なくとも、勝ちを狙っていく方針を変える気は無い。

ただ、折角冷静になれたので、放置してしまっていたことを幾つか進めることにする。

まず何よりも優先してしたかったこと、それは着替えだ。

折角呪われた装備を外すことが出来るようになったのに、信仰の象徴たる存在は衣装を変えるべきではないというレオノーラの意見もあって、ずっと同じ服装で過ごしていた。

しかし、ソフィアの格好と女神像の差を鑑みて、別に着替えてもよいのではないかと思うようになったため、この度衣替えをすることにしたのだ。

ついでに、短刀も使わないので仕舞っておくことにして、護身用にはもう少し物騒でない物を持つようしてみた。

……一時間経つとどちらも加護付与で改造されてしまうことに気付いたのは後からだっただけ。

加護付与後の衣装は黒薔薇の飾りの付いた肩紐の無い漆黒のドレスで、私にとってはちょっと冒険した大胆なデザインになってしまった。偶には黒以外の服も着たかったのだけど、加護付与で結局また真っ黒に変わってしまった。多分何色の服を着ても全て黒になってしまうので、泣く泣く諦めることにした。

短刀の代わりの護身用具には扇を選んだ。

「ステータス」

名前：アンリ  
種族：神族  
性別：女  
年齢：18  
職業：管理者  
レベル：1  
称号：戦慄の邪神、ダンジョンマスター、第三管理者  
魔力値：42039845  
スキル：邪神オーラ（Lv.5）  
悪威の魔眼（Lv.5）  
加護付与（Lv.7）  
状態異常耐性（Lv.9）  
闇魔法（Lv.9）  
アイテムボックス（Lv.9）  
ダンジョンクリエイト（Lv.7）  
アドミニストレーション（Lv.5）  
装備：災厄の扇  
黒死薔薇のドレス  
墮落のベビードール  
淫魔のスキヤンティ  
闇のパンプス  
巫女：テナ

うん、ちゃんと変わって……ん？

久し振りにステータス画面を見たら、何だか魔力値が随分と増えているような気がする。もしかして、神族の魔力値って信仰の集ま

り度合いで上下するのだろうか。他に魔力値が増えるような心当たりが皆無だから、それ以外には考え難い。

扇とドレスの名称についてはもう気にしないことにしておく。

「お似合いです、アンリ様」

「ふむ、悪くないな」

「似合ってますよ、アンリ」

「アンリさま、きれい」

折角衣装を新調したのでみんなに披露してみたところ、女性陣からは概ね好評だった。

「フッ」

アンバールからは案の定、一部分を見て鼻で嗤われた。

彼の反応については予想出来ていたからあまり腹も立たない。

「おお、これは素晴らしい。

是非ともその御姿を彫像として世に知らしめねば。

そうです、折角ですからこの神殿と同じくらいの高さの像にしましよう！」

やめんか。

二つ目にしておきたかったこと、それは『権能』の設定変更だ。  
以前ソフィアとアンバーから、「恐怖」の『権能』は正しく機能させれば、私に向けられたものでなくても信仰を得られると教えて貰った。色々と慌ただしかったために試せていなかったが、やはり私のお腹具合のために重要なことなので信仰を獲得できる手段は広げておきたい。

#### 「アドミニストレーション」

スキルを発動すると、以前と同じようにメニュー画面が立ち上がる。

#### メニュー：権能行使

情報閲覧

加護付与

啓示

「権能行使」の使用を念じると、別のウィンドウが立ち上がった。

メイン：恐怖

サブ：未設定

フリー

『メイン権能』の欄には「恐怖」、『サブ権能』は現状で一つも持

っていないため「未設定」となっている。『フリー権能』は大量にあるために此処には表示しきれないだろう。

私が『メイン権能』の「恐怖」を選択すると、表示が切り替わった。

信仰取得：非活性

感情調節

「恐怖」の権能で出来ることはこの2つだけらしい。そう言えば、ソフィアが感情系の『権能』は出来ることが少ないと言っていた気がする。

「感情調節」とは名前から察するに「恐怖」の感情を大きくしたり小さくしたり出来るということだろうか。それ自体は別に良いのだが、問題はその対象範囲だ。

管理者という存在が「世界の」管理者であることを考えると、これを下手に弄ると世界全ての生き物の感情が操作されてしまう恐れがある。一步間違えるだけで恐怖に満たされた地獄のような世界や感情を抑制されたデイストピアになってしまいそうなので、あまり触らないようにしておこう。

今重要なのもう1つの「信仰取得」だ、これが非活性状態になっているせいで今の私は自身に向けられた「恐怖」からしか信仰を得られていないのだろう。私は信仰取得の設定を切り替えて活性状態に変更する。

「……………?」

切り換えた瞬間に爆発的に満腹度が上がるかと構えていたのだけれど、殆ど変わらなかった。いや、少しは増えている感覚があるの



だけど、元々を考えると微々たる増え方でしかない。

しかし、微々たるものとは言え増えてはいるのだから、設定変更が失敗しているとは思えない。一体、何故だろう。世界中の恐怖から信仰を得られるようになった筈なのに、何故今までと然程変わらな……って、まさか。

いやいや、そんな筈はないだろう。

きつと何かの間違いだ。

まさか「元々世界中の人々の恐怖の大半が私に対して向けられていた」なんて、そんなことはない筈だ。もしもそうだったとしたら、この世界に来てから最も深くと言っていいレベルで落ち込む自信がある。

まあ、この世界に来てから最も深くと言っても、よく考えたら私はこの世界に放り込まれてからそこまで落ち込んだことはなかった。強いて挙げればヴニの件でがっかりしたくらいだ。

普通なら無理矢理異世界に飛ばされたら元の世界に帰りたいと思うところなのだろうけど、不思議とそんな郷愁を覚えたことも無い。思えば神族になる前から、元の世界を思い出すことすら殆どなくなっていたような

考えていると何だか頭が痛くなってきたので、切り換えて三つ目にしておきたかったことに取り組みことにする。

三つ目は神殿に居座り続けている二柱、ソフィアとアンバールの扱いについてだ。扱いと言っても追いつくことは初日に諦めたし、彼らに宿泊料を払ってくれるような殊勝さも期待していない。そもそも、お金持っていないだろうし。なので、別のことで役に立つて貰うようにすることを考えるようにした。

彼らの持つ一番の価値はその影響力だ。光神が闇神の存在を暴露して邪神とは別の存在であることを公開したことで、聖光教の総本山であるルクシリア法国は大打撃を受け、フォルテラ王国発祥のオリジン派は周辺各国に対して広まることになった。なお、ソフィアにとつては人族全体の繁栄に興味はあっても、人族同士の政治的な争いについては興味がないようで、宗教派閥間の争いに対して積極的な介入は考えていないようだ。

彼らの影響力をこの国にとつて一番良い形で活かすとしたら、それは各国との間を取り持つてもらおうことだろう。敵対必至のルクシリア法国は流石に無理でも、中立を宣言しているフォルテラ王国であれば国交を持てる可能性はある。魔族側とは現状で敵対しているわけではないし、レオノーラを通じて連携もあるから闇神の御墨付きが得られれば普通に付き合える可能性は高い。

「と言うわけで、取り持つて」

「それは別に構いませんが……」

「面倒くせえな」

ソフィアはやってくれそうだが、アンバールの方には嫌そうな顔をされた。しかし、単純に面倒というだけで、間を取り持つのが嫌というわけではなさそうだ。

「泊めてあげてる宿泊料」

「チッ、分かった分かった、言っというてやるよ」

よし、国交ゲット。予定だけど。

人族と魔族は敵対種族だから直接の国交はないけれど、間にうちを通せば貿易とかも可能になるかも知れない。それぞれの領土でしかない採れない特産品とかも多そうだし、敵対感情を抜きにすれば交易を行いたいという商人も居るだろう。

うちも中間マージンでがつつり儲けられそうだ。

「そう言えば、ソフィアに聞きたいことがある」

「私にですか？ 何でしょうか」

「リリの奴隷身分、解放出来ない？」

奴隷身分になったままのリリの解放については、以前『権能』を使いこなせば私でも出来るようになるかも知れないと考えたが、それならばソフィアなら今すぐにも出来るのではないかと思いついたのだ。

「身分解放ですか、『人族』の『権能』を持つ私であれば可能です」

「出来るならやって欲しい」

「そうですね……分かりました、いいでしょう。」

主人も周囲に居ないようですから誰も困らないでしょうし、彼女のことは私も好ましく思っていますから後で解放しておきます」

よかった、懸案の一つが解決しそうだ。

「そう言えばあのガキ、信徒達にはお前が喰ったことになってるんだったか。」

死んでると思われてるなら、そりゃ奴隷の主人からの文句もないだろうな。

それにしてもよ……」

「何？」

アンバールがこちらを見ながら何か含みのある表情をする。

「いやなに、人喰いだと思われてんのによく信徒達に逃げられねえ  
なと思っただけだ」

「……………」

否定出来ない、人喰い虎と同じ檻に入れられたら普通の人は怖がるだろう。

まあ、私が直接話すのは教皇くらいだから、他の信徒は現実味がなくて危機感を感じていないだけかもしれない。

はっちやけ教皇は怖がるどころか「アンリ様に召し上がって頂く  
など光栄の極み！ さあ何処からでもご賞味下さい！」とか言い出しそつだ。

食べないから。

### 13：大人げない

嵐の前の静けさは終わつたらしい。

その波乱の幕開けはダンジョン内に侵入してきた挑戦者は6人のパーティによつて齎された。人数的には少し多めだが、これまでもいかなかったわけではない。しかし、人族と魔族の混合パーティというのはお目に掛かった事がない。具体的には人族が3人で魔族も3人、魔族側は全員男性だが人族は男性2人に女性1人だ。

人族の内の1人は既に2度見たことがある聖剣の勇者アークであったため、パーティメンバーが変わっていることに不思議に思つて全員のステータスを見てみると、そこには驚愕すべき名前が並んでいた。

聖槍の勇者ライオネル、そして聖弓の勇者オーレイン

……まさかの全員勇者パーティだった。

ちなみにライオネルは長身に青髪の左側だけ編んだ軽薄そうな青年で、オーレインは薄紫の髪を肩口まで伸ばした少女だ。

嫌な予感がして魔族側を確認すると、案の定こちらも錚々たる名前が並んでいた。

四天王の一角たる『風』の烈風騎レナルヴェと、同じく四天王である『水』の氷氷将ヴィクト、そして魔王エリゴール「ロマリエル」レナルヴェは騎士の名に相応しい落ち着いた風情の短い銀髪の青年で、ヴィクトは片眼鏡を付けたインテリ風の風貌で少し陰険そうな長髪の男性だ。

そして、称号を見れば何者か一目瞭然の男性……レオノーラの父親でもある筈の魔王陛下は渋いおじ様だった。短い髪の体格の良い壮年の男性という意味では先日の残念四天王イジドも同じ筈なのだ

が、明らかに貫禄が違う。

勇者3名に魔王と側近2名というあり得ない組み合わせのパーティに一言だけ言わせて欲しい。

「大人げない」

「ルールには違反してねえだろ」

「啓示で人を集めただけですからね」

分かっている、別にルールの禁止事項に当たるとは思っていない。だからこそ「大人げない」と言ったのだ。

「禁止ではないけど、攻略と認められるのは最初に『攻略の証』を手に入れた者だけ。」

混合パーティでも、勝利を手に入れられるのはどちらか片方」

「それは分かっています。」

しかし、まずはダンジョンを攻略しないことには始まりません」

「30階層まで攻略したら、そこでアイツらに白黒付けさせればいい」

成程、このままではどのみちダンジョンを攻略出来ないと考えて、一時的に障害を乗り越えるまでの暫定パーティを組ませたのか。ダンジョンを攻略した後は『攻略の証』を巡って対立することになるのだろうが、そこまで辿り着くために双方の陣営の最強を結集すると言っつのは理に適っている。

「でも、何か険悪な雰囲気なんだけど」

6人パーティとは言ったが、彼らは勇者勢と魔王勢に分かれて睨み合っている。その様はパーティというよりも敵対関係にしか見えな

い。

「ああ……まあ、そりゃ勇者と魔王だからな。それくらいは仕方ねえだろ。」

一応、ダンジョンを攻略するまではやり合うなと厳命しているさ  
「不倶戴天の敵同士ですからね、流石に仲良くすることまでは期待してません」

それはそうだろうな、流石に勇者と魔王が仲良くなんか出来るわけがない。この世界へのしがらみがない召喚勇者ならまた話が違ってくるけど、彼らは正勇者だ。二柱の厳命によって辛うじて一時的な協力関係を渋々受け入れているというのが現状だろう。

実力的にはこの世界の人族と魔族のトップ陣だけど、ダンジョン攻略においてはチームワークが課題になりそうだ。

私はソフィアやアンバールとの話を切り上げて、この場に居るもう一人の人物の方を向いた。

「あの人がレオノーラのお父さん？」

「ああ、そうだ。」

私の父であり魔王陛下でもある。

後続部隊でダンジョンを攻略するとは聞いていたが、まさか父上自ら来るとは……」

レオノーラも魔王直々の登場は聞いていなかったようだ。

「他の二人は前に聞いた四天王？」

「ああ、『風』の烈風騎レナルヴェと『水』の血氷将ヴィクトだ。」

レナルヴェは父上の近衛隊長を務めている騎士で、ヴィクトは政務を取り仕切る宰相の任に就いている」

「四天王以外にも役職があるんだね。レオノーラは？」

「私か？ 今は国を離れているが、国に居る時は父上の補佐だな。」

尤も、私の場合は役職というよりいずれ王位を継いだ時の為に学ぶという意味合いが強いのだが」

そう言えば、彼女は次期魔王でもあるんだった。それなら、若い内からそう言うことを学ぶ場が用意されていても不思議ではない。

そこまで考えた時、私はふと名前の出ていない最後の四天王のことを思い出した。

「前に来たイジドって人は？」

「農耕と土木工事だ」

温度差が凄い。いや、重要なことだというのは分かるけど「近衛隊長」とか「宰相」とか「国王補佐」と並べると違和感が半端無い。まあ、地魔法以外は苦手という話だから仕方ないのかも知れないけど。

「ところで、重要な人達がみんな来てしまつて国は大丈夫なの？」

「……………流石に父上もその辺は考慮している……………筈だ」

本当に大丈夫なのだろうか。

流石にドリームチームだけあつて、階層攻略はこれまで挑戦した



どのパーティよりも早かった。瘴気に關しても勇者3名は光神の加護によって防ぎ、魔族側はそもそも耐性が高いため問題にしていな  
い。

なお、勇者勢と魔王勢は一緒に進んでは居るものの一切口を聞こ  
うとしない。パーティ内の緊張感が高く、ピリピリとした張り詰め  
た雰囲気映像越しにも見て取れた。但し、ライオネルだけはその  
空気も気にせずにオーレインを口説き続けていたけど。

『この先がドラゴンが居る部屋だ、気を付けてくれ』

10階層までをあつと言う間に攻略し、石板の仕掛けもアークが  
既に知っているため迷うことなく扉を開けることに成功した。

黒龍のことも事前にアークがパーティメンバーに伝えていたのか、  
部屋に入った彼らは驚くこともなく戦闘態勢を整える。

しかし、勇者勢と魔王勢は相変わらずあまり連携を取っておらず、  
それぞれ黒龍の両サイドへと分かれた。6人パーティというより、  
実質的には3人パーティが2つ両側から攻撃を仕掛けるような形に  
なっている。

『行くぞ、ライオネル！ オーレイン！』

『ああ、任せとけ』

『後方支援は任せて下さい』

勇者勢の方は、アークが最前衛でライオネルが中衛、オーレイン  
が後方支援と役割分担をしているようだ。

『遅れをとるな、二人とも』

『心得ております、陛下』

『お任せ下さい』

それに対して、魔王勢の方は、おじ様が最前衛でレナルヴェエが遊撃役、ヴィクトが後方支援の役割を担う形になっている。

おじ様はこれまでの階層の攻略は無手のまま敵を薙ぎ払ってきたのだが、ここにきて手元に黒い大剣を召喚して炎を纏わせた。レオノーラが火魔法を得意とする魔導拳士であるように、父親である彼は火魔法を用いた魔導剣士が本来の戦闘スタイルなのだろう。

『まずは小手調べといこうか。  
我が一撃を喰らうがいい！』

彼は炎を纏わせた大剣を片手で軽々と持ち、一気に黒龍に駆け寄るとそのまま叩き付けた。その威力は凄まじく、体格では圧倒的に有利な筈の黒龍が数メートル押し飛ばされる。

『魔王に遅れたら勇者の恥だよな』  
『そうです……ね！』

彼の渾身の一撃を皮切りに、戦闘が開始される。後衛であるオーレインとヴィクトがそれぞれ光と氷の矢で援護をし、中衛であるライオネルが攪乱して出来た隙をアークとおじ様が突く。黒龍も爪や牙で応戦しようとするが、その出足を遊撃役であるレナルヴェエが素早い反応で斬り付けて崩す。風を司ると言われているレナルヴェエだが、彼は風魔法を攻撃ではなく移動補助として速さを極めた剣を主体とした戦い方をしようだ。

『私が居る限り、陛下に貴様の爪牙は向けません！』  
『やりますね、レナルヴェエ。  
私も負けては居られません』



程の矢による攻撃によって口内を傷付けられ、切り札であるプレスも使うことが出来ない状態に追い詰められた彼に、最早勝利の目は無かった。

流石に最強最悪と謳われたドラゴンでも勇者と魔王の本来あり得ないドリームチーム相手では分が悪かったというところだろうか……いや、これはむしろバトルフィールドの所為が大きかったのかも知れない。もしもこれが屋外の拓けた場所であれば、高空からのプレスによる一方的な攻撃で勇者や魔王達は為す術もなく敗れていた筈だ。

ダンジョンと言う彼の長所が活かせない戦場で戦わせてしまった私の失敗だ。

『……そこまで。もういいよ、ヴニ』

傷付いていくヴニの姿に、私は見ていられなくなって通信で静止を伝える。轟音が鳴り響いていた室内が瞬時に静まりかえった。

アーク達も攻撃の手を止めて、周囲の様子を窺っている。

『通してあげて』

私がそう言うとヴニは暫くその場でじっとしていたが、やがて部屋の端へと下がって黙ってアーク達を見詰めた。

『この声、まさか邪神か？』

おじ様が問うてくるが、私はそれに答えることなくボスが倒され

たら開くようになっていいる階段がある部屋への扉を遠隔操作で開いた。

『先に進んで』

私の伝えた言葉に、彼らはしばらくヴニの方を見て様子を窺っていたが、やがて諦めたのか先へと足を進め始めた。

『行くぞ、まだ先は長い』

『承知致しました』

『少々不完全燃焼ですが……仕方ありませんね』

『俺達も行こう』

『そうだな』

『あのドラゴン、後ろから襲ってきたりしないですよね』

「これで第一関門突破ですね」

「ようやく三分の一か、先は長えな」

「うっん、喜ぶべきか哀しむべきか……」

混合パーティが11階層に歩を進めたところを見届けて、ソフィアとアンバーは安堵の溜息を吐いていた。対照的に、レオノーラは複雑そうな表情をしている。

「ソフィア、ヴニの傷を治して欲しいんだけど」  
「黒龍のですか？ まあ、構いませんが」

ソフィアからOKの返事をもらえて、私は内心ほっとする。  
アンデッドやリビンググアーマーなどの類であれば魔力を注げば修復が可能だが、生物であるヴニの傷を癒すには回復魔法が必要になる。私は闇魔法しか使えないので彼に回復魔法を掛けてあげることが出来ないが、光神であるソフィアなら回復魔法が使える筈だ。  
彼には無理をさせてしまったので、早く治してあげたい。

「では、治してきます」  
「お願い」

私が頼んだのと同時にソフィアの姿が消え、映像の先に現れた。  
突然姿を見せたソフィアにヴニが警戒した様子で唸るが、ソフィアは気にした様子もなく彼に向けて手を翳して魔法を行使する。

流石に神族である彼女の行使する魔法は強力で、あれだけ傷付いていたヴニの身体も殆ど一瞬で全快した。  
傷を癒されたことに戸惑うヴニを余所に、ソフィアは背を向けるとさっさと転移して執務室に戻ってきた。

「終わりましたよ」  
「ありがとう」

事も無げに言うソフィアに私は感謝の意を表す。実際、彼女のおかげでかなり助かった。これで彼女が手を貸してくれなかったら、大量の薬草を投じた薬用スープを作って無理矢理飲ませるくらいしか方法が無かった。

私がそう言うと、ソフィアとアンバーの二柱は顔を引き寄せた。

「ペットの虐待はやめなさい」

「流石にその扱いは酷えぞ」

「もう少し頑張ってやったらどうだ」

心外な、ヴニを心配するが故の治療なのに。

13：大人げない（後書き）

剛地鬼イジド は なかまに なりたそつに こちらをみている…

…



## 14：謎解き地獄

私は元の世界でも職に就いていたわけではないから想像することしか出来ないけれど、コールセンターとかの問い合わせ窓口とかは引つ切り無しに電話が掛かってきて戦場みたいになっているのだからうか。

「違います、その問題は左が正解です！」

「そんな俺が知るか！ ちったあ自分で考えろや！」

「ああ！？ 何故左に行くのですか！」

え？ 私が左に行くように言った？ …… まあ、そう言う時もあります」

「ったく、分かった分かった。

調べてやるからちっと待ってる！」

問い合わせの対応に追われるソフィアとアンバーの二柱を横目に見ながら、私はお茶を啜っていた。

「忙しそうだね」

「 貴女のせいでしょうっ！？」

「 手前のせいだろうかっ！？」

怒られた。

現在混合パーティが攻略している11階層はレオノーラも苦労していたクイズフロアだ。ランダムに出題される10問の3択問題に従って正解の道を選ぶというシンプルなフロアだが、一回でも間違えると階層の入口に逆戻りのため、10問全てに正解する必要がある

る。

11階層に突入してからというものの、彼らから二柱に対する問い合わせが引つ切り無しに掛かってきているようで、部屋の中では二柱の怒号が飛び交っていた。

まあ、そうなるのも無理はないだろう。なにしろ、勇者勢の方はそう言ったことを得意とする知識に長けたパーティーメンバーを置いてきた戦闘一辺倒の顔触れのようにだし、魔王勢の方もレナルヴェは戦闘タイプで、ヴィクトだけが知能面で秀でていたと言った状態だ。おじ様はよく分からないけれど、少なくとも見ている限りではクイズであまり活躍している様子はない。

このパーティ、圧倒的に知力が不足している。

「戦闘能力主体でメンバー選出したのが徒となりましたか」

「アイツら、基本的に脳筋だからな」

「ご愁傷様」

その上、彼らは知恵を出し合って協力して進むということも出来ておらず、勇者勢と魔王勢で殆ど個別にクイズに挑戦している。やはり、両者の確執は大きいのだろう。

尤も、共に先に進まなければいけないと言う二柱からの厳命があるためか、一応同じ方向には進むようにはしているようだ。先に解いた方をもう片方が追いかけると言う暗黙の了解のもとに、競い合うようにして進んでいる。

『ふむ、この問題はこちらが正解ですね』

『チツ、負けてたまるか!』

『ちょ、ライオネルさん!? そっちは不正か……ああっ!?!』

『……また最初からか』

『貴様ら、その莫迦をしつかり抑えておかんか』

『いや、その……すまない』

あれ、何だか意外と仲良さそうに見えてきた。

何度も不正解になり振り出しに戻ることを繰り返したクイズフロアに比べると、動く床のような俯瞰的に見ることが出来れば解ける類の仕掛けのフロアについては、光神と闇神の助言によって彼らは然程苦勞することもなく順調に進んでいった。

……そう、彼らは然程苦勞していない。彼らは。

混合パーティが順調に攻略を進めるその裏ではソフィアとアンバールの涙ぐましい努力があった。

「右、右、下、下、上、下、右、下、上」  
「下、左、左、下、上、右、下、下、上」  
「下、右、下、下、上、左、下、右、上」  
「右、上、下、下、右、上、右、右、下」  
「下、左、左、右、上、下、下、左、左」  
「右、右、右、右、上、下、右、右、下……で、一番下が出口か」  
「はい、これで今の部屋の分は全て書き写せました」

紙上にダンジョンの大部屋の見取り図を書いて、動く床の矢印を一つずつ書き写していくソフィアとアンバール。彼らは出来上がった図面を中央に置いて、両側から睨んで頭を悩ませ始めた。

「ここから乗ると右に行つて下に行つて……ダメだ、戻っちまう」  
「それならこちらから……これもダメですか」  
「本気で面倒くせえな、飛び越せないのかよ」  
「それが出来るならとつくにやらせています」

図面に書かれた矢印を辿りながら、ソフィアとアンバーは正解の道を探すために話し合っているが、中々正解を見付けることが出来ないでいる。

「大変だね、お茶飲む？」

「だから貴女のせいでしょうっ！？ 貰います」

「だから手前のせいだろうがっ！？ くれ」

怒りながらもお茶を要求する二柱に、私はお茶を淹れてあげた。彼らが今取り組んでいるような頭を使う作業の時は糖分が重要なので、ちよつと多めに砂糖を入れてあげよう。果たして神族に糖分が要るかと言われると疑問だけど。

「はい」

「ありがとうございます」

「ああ」

カップを渡すとそれぞれに返答し、図面と睨めっこをしたまま彼らはお茶を口に含んだ。

「げほっ！？」

「ぶはっ！？」

次の瞬間、彼らは口に含んだお茶を嘔き出した。汚いな。

「あ、甘え……!?!」

「貴女、どれだけ砂糖を入れたのですか!?!」

「いっぱい」

お茶2杯で砂糖壺の半分くらいを消費した。

「それより、図面はいいの?」

「え? ああ!?! 折角書き上げた図面が……」

「チツ、早く拭き取れ!」

噴き出したお茶で濡れてしまった図面を慌てて拭くソフィアとアンバールだが、書き込んだ矢印が滲んでしまつて当初の目的を果たせそうにない。

「うう、また図面の書き直しですか」

「やってらんねえ……おい、半分はお前のせいなんだから、手伝いやがれ」

「……仕方ない」

何故私のダンジョンを攻略するための助言を私が手伝わなければならぬのかとも思うが、流石に今回は私が悪い部分もあったので、図面書きだけは手伝つことにした。

「つつーか、そもそもお前が正解を教えれば済む話じゃねーか」

「無理、覚えてない」

入り組んだトロッコに乗って移動するフロアやスイッチの切り替えて扉を開閉して先に進むフロアも、光神と闇神が毎回図面を引いて頭を悩ませたおかげで順調に攻略は進んでいたが、見ることは出来ても解き方までは分からない類の仕掛けについては流石の彼らも頭を抱えていた。

19階層の仕掛けはまさにそのような仕掛けで、2つの入れ物の水量を均等に調節することで先に進むための道が開かれるというものだ。

10の容量が入る2つの水槽の片方に満杯の水が入っており、もう片方は空の状態。この状態で3の容量が入る桶と7の容量が入る桶を用いて、両方の水槽の水量を5ずつにすれば先に進めるようになる。スイッチを押せば水槽の水は最初の状態に戻るため、やり直しは幾らでも可能だ。

「ええと、これで宜しいですか？」

「大丈夫」

テナに頼んで、丁度いい大きさの入れ物を2セット用意して貰った。19階層の実際の仕掛けとは大きさが異なるが、縮尺は合わせてあるため解き方を考えることには十分な筈だ。

映像越しでは勇者や魔王達が同じように仕掛けに取り組んでおり、桶で水槽から水を汲んで移し替えたりと施行錯誤を行っている。

用意した4つの入れ物をそれぞれソフィアとアンバーの前に置き、入れ物の一つにテナが液体を注いでいった。

「何故私達がこんなことを……」

「言っんじゃないやねえ、気が滅入るだろが」

苦手な部類の仕掛けであることを既に察したらしく、ソフィアとアンバールの表情は暗かった。しかし、溜息を吐きながらも謎解きに取り組み始めた彼らだが、すぐに違和感に気付いたようで怪訝そうな表情をする。

「この匂い……」

「って、おい！ これ酒じゃねえか」

そう、先程テナが入れ物に注いだのは水ではなくお酒だ。匂いで気付いたソフィアとアンバールは微妙にそわそわとし始めた。

宗教とお酒が切っても切り離せない関係にあるのはこの世界でも同じようで、ミサではお酒が供される。私は飲んだことがないので分からないけれど、神族というのはお酒が好きというのが一般的な認識らしい。

なので試してみたのだが、明らかに二柱とも気になって謎解きに集中出来なくなっている様子が窺えた。

彼らの姿に、私は長期戦になりそうな予感を感じて休憩することにした。

「テナ、お茶のお代わりをお願い」

「はい、かしこまりました」

自分でも淹れられないことはないが、やはり彼女に淹れて貰った方が美味しいため、テナにお代わりを頼む。ほどなく渡されたカップに口を付け、ほうつと息を吐いた。

「あの、アンリ様？ アンリ様は何故あの方達に協力されているのでしょうか。」

ダンジョンが攻略されない方が良いのですよね」

テナが二柱に聞こえないようにするためか、小声で聞いてきた。確かに、勝負のことだけを考えれば私がソフィア達や混合パーティの手伝いをする必要はなく、むしろ妨害をする方が自然だと言える。お酒で集中力をかき乱したりはしたけれど、妨害とも言えないような些細な悪戯でしかない。

どのみち彼らが仕掛けを解くのは時間の問題という考えもあるが、一番の理由は勝負の後のことを考えてのことだ。

「彼らとはなるべく関係を深めておいた方が、今後の安全に繋がるから」

一年間の猶予期間を得ることに成功したが、逆に言えば一年しかないのだ。

神殿の周囲は店を中心として建築ラッシュが起きており、この国は急速に発展を続けている。しかし、現状ではどう鼻屑目で見ても国家と呼べるまでには至っていない。精々これまでは村だったものが漸く街になり掛けたくらいだ。おそらく、一年後を考えても街レベルであって国レベルまでには到達していないと私は思っている。

そうすると、下手をすれば一年間の猶予期間が終わった瞬間に各国から攻め込まれて窮地に陥る危険性すらある。それを防ぐためには各国と国交を結んで攻め込まれない程度に関係を深めておく必要があるのだが、そのために最も有効なのは、彼らの神であるソフィアとアンバールに取り持つて貰うことだろう。

一応既に仲を取り持つて貰うことについては頼んでいるのだが、彼らとの関係が深ければ深い程、各国は攻め込めなくなると思うので、なるべく仲良くしておきたい。

「まあ、それだけじゃないけど」



尤も、そういった打算を抜きにしても彼らとの会話を結構楽しんで  
いる気持ちがあるのも確かだ。元の世界では一人っ子だったが、  
もしも兄や姉が居たらこんな感じだったのかなとか想像してしまっ  
た。

#### 14：謎解き地獄（後書き）

矢印の方が見易いでしょうか。

上から入って下に抜けます。

こんな感じの部屋が幾つも連なっている階層です。

ちなみに、上のは総当たりで確認していけば誰でも分かる筈ですの  
で置いておくとして、水量調節の仕掛けの方も特に回答募集な  
どは致しませんので感想欄への回答書き込みなどはご容赦願います。

## 15：邪神の鎧

既に半ば日課と化しているダンジョン攻略の監視だが、参加する面子はその日その日によって異なる。私は基本的に毎日だけど、次に多いのがソフィアとアンバール、そしてレオノーラ、リリ、テナと続く。

今日は偶々いつもよりも人が多く、殆どの者が私の執務室に集まって椅子に座り、映像を見ていた。

リリはソフィアの膝の上に座り、レオノーラはアンバールの横で以前と同様に給仕のように世話をしている。そして私の後にテナ……と言いたいところだけど、残念ながら彼女だけは用事があってこの場に居ない。

何故だろう、ホームの筈なのにアウェイな気分だ。

「今日で父上達は20階層に到達か」

「長かったな……」

「ええ、全くです……」

ここ数日謎解きに追われていたせいか、ソフィアとアンバールは少しやつれたように見える。まあ、神族はその程度で疲労したりはしない筈なので、おそらく気のせいだろう。

「お疲れ様」

「……………ふう」

「……………はあ」

あれ？ てつきり「お前が言うな！」という感じの反応が来るかと思っていたのだけど、二柱は深く溜息を吐くのみでそれ以上の反

応を見せない。

どうやら、予想以上に弱っているみたいだ。

「それでアンリ、20階層もボスが居るのですよね」

「勿論」

「確か、20階層はリビンググアーマーだったか」

「うん、合ってる」

「10階層に比べて、随分と平凡なボスだな」

「そう?」

平凡なのだろうか。あれを見ると、とてもそうは思えないのだけ  
ど。

ちなみに、リビンググアーマーと一口に言っても、大きく2つに分  
類される。

鎧に怨念が取り付いて動くアンデッド寄りのリビンググアーマーと、  
魔法によって動くゴーレム寄りのリビンググアーマーだ。なお、「リ  
ビング」という名を冠しているが、どちらも生命があるわけではな  
い。

20階層のボスとして配備しているのは、後者であるゴーレム寄  
りのリビンググアーマーだ。

ボス部屋に混合パーティが警戒しながら足を踏み入れると、扉は  
自動的に閉じられる。オーレインが背後で閉じた扉に一瞬気を取ら

れそうになったが、意識して前方へと集中を向けていた。

『あれは……』

『この部屋の主と言ったところか』

何も無い部屋の中、彼らから見て前方数十メートルの辺りに目を引く存在感を放つものが居る。片膝を立てる形で座っているそれは、全長5メートルはあろうかと言う巨大な漆黒の甲冑だった。

「おい、ちよつと待てや。」

あれの何処がリビンググアーマーなんだ」

「ん?」

映像の中のボスを見たアンバールが口元を引き攣らせながら聞いてきた。

「いや、百歩譲ってリビンググアーマーであることは認めるとして、どう見てもただのリビンググアーマーじゃねえだろ」

「原形を留めて居ませんが、あれはオリハルコンですね」

「それだけじゃねえ、加護でガチガチに固めてやがる」

彼らの言っていることは概ね正しい。20階層のボスは固有の魔物であるオリハルコン製のリビンググアーマーに対して、私が加護付与を行ったものだ。アンバールはガチガチに固めていると言っていたけれど、私としては普通に加護付与しただけで、それ以上に特別なことはしていない。

召喚した時には人間サイズより少し大きい程度の白銀の甲冑だったのだが、加護付与によって色は黒く染まり倍以上に大きくなってしまった。加えて、元々オリハルコン製で高い強度と魔法抵抗力を持っていたが、それらについても更に強化されている。

これが20階層フロアボス

邪神の鎧：アンリルアーマーだ。

彼らが近付くとアンリルアーマーは徐に立ち上がり、両手に剣と盾を構える。その動きは滑らかではあるもののどこか機械的だった。立ち上がることでその全容が明らかになると、混合パーティの警戒が高まった。黒龍程ではないが、それでも十分に巨体と呼ぶに相応しい大きさだ。巨大であるということは、それだけで脅威となり得る。

『気を引き締める、レナルヴェエ、ヴィクト。』

『下手をすると先のドラゴン以上かも知れん』

『ハッ、心得ております』

『成程、これは厄介かも知れませぬ』

いち早く戦闘態勢を整えたのは魔王勢の方だった。おじ様の警告にレナルヴェエとヴィクトの2人はアンリルアーマーの動向に注視しながらも、どんな状況にも対応出来るように姿勢を整える。

『行くぞ、ライオネル！』

『オーレイン！ 援護を頼む』

『了解、と』

『承知しました。任せて下さい』

勇者勢の方も陣形を整えてそれぞれの武器を構える。彼らの武器を見て私はふと疑問に思い、ソフィアの方を向いた。

「そう言えば、聖剣とか聖槍って何で出来てるの？」

「あれもオリハルコンです。」

加えて私の加護も与えてますが、持ち主の保護を主眼としているので威力にはあまり影響はありません」

「当代魔王の持つてる魔剣も同じだ。」

まあ、こっちは持ち主の保護はあまり考えてねえから威力重視だけだよ」

何だかオリハルコンと加護の品評会みたいになってきた。

素材も加護付きであることも一緒だけど、加護の向き先が異なるのでその辺りが重要になりそう。アンリルアーマーは加護が守備力重視に働いているので、話を聞く限りでは威力を重視していない勇者達の持つている聖剣などでは大きなダメージを与えることは難しそうだ。鍵となるのは威力重視の加護が付与されているおじ様の魔剣だ。

おそらく、レナルヴェエやヴィクトが持つ攻撃手段ではダメージにすらならないだろう。

『く、硬い!?!』

『残念ですが、我々は陛下の援護に徹した方が良さそうです』

ヴィクトの氷の矢を盾で防いだアンリルアーマーの隙を狙ったレナルヴェエだが、手応えに顔を顰めると素早く後ろに下がり反撃を回避した。

一度攻撃して効果が無いことを即座に悟ったレナルヴェエとヴィクトの両四天王は、素早い判断でダメージを与えることよりも攪乱や支援に切り換えることにしたようだ。

『ハッ!』

2人の援護を受けて攻撃を仕掛けるおじ様。その剣撃はアンリルアーマーに傷を付けることに成功するが、黒龍を押し飛ばす程の威

力があるにも関わらず、アンリルアーマーはその場から下がることも無く反撃として手に持つ大剣を振るう。

『クツ!?!』

咄嗟に魔剣で受けるおじ様だが、その威力に撥ね飛ばされ空中で身を捻って着地する。

『ご無事ですか、陛下!?!』

『問題ない。』

それよりも厄介だな、ドラゴンと異なり非生物故にこちらの攻撃に怯みもせん』

『勇者達の方もあまり攻め切れていないようですね』

攻めあぐねて牽制を繰り返しながら素早く意見交換を行う魔王勢。一方でヴィクトの言葉通り、勇者達の方も攻め切れずにいた。

『硬い! ドラゴンよりも厄介だぞ』

『聖槍でもこの程度の掠り傷にしかないのかよ!?!』

『口惜しいですが、私の聖弓ではダメージを与えられそうにないですな』

オーレインの聖弓は弓自体はオリハルコンだが、それ自体を武器にするわけではなく媒介にして魔力を光属性の矢として打ち出すものだ。幾ら弓の素材が同等であっても、分類としては魔法攻撃になるためにアンリルアーマーへの攻撃は有功打にはなっていない。

アークの聖剣とライオネルの聖槍はまだダメージを与えることが出来ているが、それでも決して大きな傷ではない。

『ヴィクト、何か手は無いか?』



『そうですね……見たところ敵はこちらの攻撃に対して自動的に対応しているようです。』

ダメージにならない私やレナルヴェエの攻撃にも逐一反応しているのがその証拠です。

故に私の援護でレナルヴェエが仕掛け、反撃の隙を陛下の魔剣で攻撃するのが最善かと』

『成程、ではそれでいこう』

『承知致しました』

素早く作戦を決めると、魔王勢は駆け出した。

ヴィクトが氷の矢をアンリルアーマーの頭部を狙って打ち込むと、アンリルアーマーは左手に持った盾を掲げてそれを防ぐ。盾を高く掲げた隙を狙って、レナルヴェエが素早く足元に駆け寄って斬り付ける。当然その斬撃はアンリルアーマーの防御力の前に掠り傷一つ付けることは出来ない。しかし、アンリルアーマーは攻撃に反応してレナルヴェエに対して反撃しようと大剣を振り下ろす。

『おおおおおーっ！！』

その大振りの隙を突いて、風魔法を駆使して後方へと飛び下がるレナルヴェエと入れ替わるようにおじ様が渾身の力を籠めて魔剣を叩き付けた。アンリルアーマーの胴体へと激突したその攻撃は、これまでで最大の傷を漆黒の鎧に与えることに成功した。

『ふむ、いけそうだな』

攻撃を受けても怯むことのないアンリルアーマー相手には闇雲な追撃は危険と判断したのか、おじ様はヒットアンドアウェイに徹するべく一旦後ろに下がった。

アンリルアーマーはあくまで機械的に反応するため、攻め手が同

じ行動を取れば愚直に同じ対処を繰り返す。そのため、おじ様達は一度確立されたパターンを繰り返すだけでダメージを重ねることが出来ていた。

連携を取れてはいないものの勇者達の攻撃も丁度よい牽制となつて、漆黒の鎧へと与える傷は増えていく。

「最初はどうかと思いましたが、順調ですね」

「そうだな、このまま繰り返し返してれば勝てるだろ」

「まあ、父上やレナルヴェ達は流石と言ったところですが……」  
「……………」

映像越しの混合パーティーの奮闘を見て既に勝った気になっているソフィアとアンバール、そしてアンバールに同意しつつも私に心配そうな視線を投げってくるレオノーラ。リリは状況が分からないように首を傾げている。

甘いよ。

私は啓示を使ってある人物に指示を出した。

『む？』

最初に異変に気付いたのはレナルヴェだ。続いて遠目に見ていたヴィクトやオーレインが気付き、おじ様やアーク達が遅れてそれを察した。

『動きが……変わった？』

そう、これまでは効果の無いレナルヴェやヴィクト、オーレインの攻撃にも反応していたアンリルアーマーが、彼らの攻撃を完全に無視して自身にダメージを与え得るおじ様、アーク、ライオネルに標的を絞ったのだ。

異変はそれだけではなかった。アンリルアーマーが剣を持ったまま手を掲げると、そこから複数の闇弾が放たれてパーティを襲った。

「きゃっ！？」

「うお！？ 危ねえ！」

「莫迦な！？ 意志を持たぬ鎧が魔法だと！？」

「あり得ません！ ……まさか、あの鎧？」

アンリルアーマーが闇魔法を放ったことに驚く混合パーティ。驚きで彼らが硬直したその隙を狙って、アンリルアーマーは大剣をアークとライオネルに向かって横薙ぎに払った。

「ぐぐぐ……うわあ？！」

「畜生！？ ……がふっ！」

聖剣と聖槍で一瞬だけ止めることに成功するが、体格とパワーの差は大きく彼らは数メートル撥ね飛ばされる。ライオネルの方は運悪く飛ばされた方向に壁があったため、背中から壁に叩き付けられることになってしまう。

「おい、何をしゃがった？」

「あの鎧、中に誰か居ますね？」

アンリルアーマーの様子が変わったことにソフィアとアンバーが私の方へと問い掛けてくる。

ソフィアの推測は正解だ。アンリルアーマーは魔法によって動く鎧だが、その動かし方は分類すると2種類に分けられる。先程までは自動操縦モードで決められたパターンに従って行動していたため、動きが機械的だった。それに対して、現在の手動操縦モードでは操縦者が直接判断して動かすために臨機応変な対応も可能だし、魔法の使用も可能になる。

しかし、あれを操縦出来るものは限られていて、私か私の眷属でないと動かすことは出来ない。

「そう言えば、テナの姿が見えないのが気になっていたが……まさか……」

「テナお姉ちゃん？」

そう、テナがこの部屋で覗き見メンバーに加わっていないなかったのはそのためだ。私の眷属であり闇魔法の使い手でもあるテナであれば邪神の鎧：アンリルアーマーを動かす資格は十分だ。優しくて戦闘にはあまり向いていないけれど、元々今回の戦闘では殺害は避けることになっているからその点では逆に安心出来る。

唯一の難点は戦闘経験が薄いことだけど、生身で戦うのと異なり鎧を操縦するのであれば下手に戦闘経験は無い方が有効とも言える。熟練の戦士とかだと感覚の違いに戸惑ってしまうだろうけど、テナにその心配は無い。

『まずいな、先程までとはまるで動きが違う』

『ええ、同じ方法では対処出来ません。』

『私やヴィクトの攻撃は無視されてしまいます』

『最早牽制にもなりませんか。僅かでもダメージを与えられるものでないとダメそうですね……』

ヴィクトはそう言うと、アークとライオネルの方にチラリと視線を向けた。

ダメージの無いレナルヴェエやヴィクトの攻撃は牽制にならないため、有効打であるおじ様の攻撃を当てる為には僅かでもダメージとなり得る攻撃を牽制として攻撃を組み立てる必要がある。そして、それが出来るのはあの場では勇者達だけだ。

『陛下……』

『ぬ……やむをえんか』

ヴィクトの物言いたげな視線に、おじ様は渋々と頷くとアンリルアーマーへの警戒を絶やさないように気を付けながらアーク達の方へと近付いた。

『おい』

『魔王？』

近付いてきて声を掛けたおじ様に、アークが不思議そうな声を上げる。

『一度しか言わん。』

『奴を倒して先に進む為に貴様らの力が必要だ……手を貸せ』

『ふざけんな、誰が手前なんか……アーク？』

おじ様の言葉にライオネルは反射的に拒絶しようとするが、その前にアークがライオネルを手で抑えた。

『どうすればいい？』

『おい、アーク！？』

『もう分かってるだろう、ライオネル。』

『俺達だけじゃアレを倒すのは無理だって』

『それは……』

アークの説得にライオネルも反論出来ずに黙り込んだ。実際、彼らの攻撃ではノーダメージではないものの掠り傷程度しか与えられない。彼らだけではどれだけ攻撃を重ねても、アンリルアーマーを倒すことは不可能だろう。

『ああ、つたく！』

『分かったよ、協力してやる！』

『フツ』

結局ライオネルが折れて、アークとライオネルが前に、おじ様が後ろに立って改めてアンリルアーマーへと向き直った。

『攻め手は任せろ、貴様らは奴の攻撃の隙を引き出せ！』

『仕方ねえからやってやるよ、今回だけだからな！』

『行くぞ！』

あれ？ 何か息合ってる……？

映像の中で展開されるドラマに遠い目をしてしていると、後ろからソ

ファイア達が感心したような声を上げた。

「まさかアンリ、確執していた彼らを和解させる為に敢えて試練を？」

「へえ、たまには良いことするじゃねえか」

「考えたな、アンリ」

「アンリさま、すごい」

え？ いやいや、そんなことして私に何のメリットがあるのか。そう言いたいんだけど、リリの純粋な感心の表情を見てしまうと言い難い。

私は答えられずに無言のまま映像を見続ける。そんな私の耳に切羽詰まった通信越しの声が聞こえてきた。

『アンリ様、もう無理です！ もちません！』

声の主は現在進行形で勇者や魔王の猛攻に晒されているテナだ。勿論、攻撃を受けているのは外側の鎧なので彼女自身に傷は無いが、このままアンリルアーマーが破壊されたら彼女も危ない。

『お疲れ様、もう戻っていいよ』

どのみち、もう彼女でも止めることは出来そうにない。そう判断した私はテナをアンリルアーマーの中から私達の居る執務室へと転移させる。

「こ、殺されるかと思いました……」

ちょっと泣きそうになってるテナの頭を撫でながら映像を見ると、自動操縦モードに戻って途端に動きが単調になったアンリルアーマ

―はみるみる内にその身体を傷付けられていった。破壊されるのも時間の問題だろう。

中層フロアも突破されてしまい、いよいよ後が無くなってきた。残るは下層フロアのみ、少し不安になってきた。



## 16：ボスラッシュ

ダンジョン「邪神の聖域」の上層フロアはダンジョンとしてはオードックスな構成だ。

魔物とトラップが通常のダンジョンよりも強力な点と瘴気が厄介だが、即死級の凶悪なトラップがあるわけではないし、きちんと対策を整えていれば、高レベルの冒険者パーティであれば攻略は不可能ではない。

続く、中層フロアは上層とは打って変わっての謎解きを中心としたフロアで、魔物やトラップの出現率が極端に低くなる代わりに、様々な仕掛けが待ち構えている。こちらは上層フロアとは異なり、単純な戦闘力だけでは突破することは出来ない。

このようなダンジョンはこの世界でも他に類が無く、攻略ノウハウが全く存在しないことも難易度を高める一因となっている。

ならばその次に待ち受けている下層フロアはどうか。

強力なトラップがあるわけではない、いやむしろトラップは一つも無い。複雑な謎解きがあるわけでもない。瘴気は奥の階層に進むたびに強くなっていくので上層フロアや中層フロアよりも強いが、それだけだ。

しかし、下層フロアは上層フロアや中層フロアと比べても攻略難易度は遥かに高いと私は見ている。

その理由は至極単純　魔物が強いからだ。

上層フロアや中層フロアに出現する魔物は他のダンジョンよりも強いとは言え無限に湧き出す雑多な魔物であり、幾ら強力とは言っ

ても限りはある。

それに対して、下層フロアに出現する魔物は……。

「どづいつことですか、アンリ!？」

「話が違えぞ、手前!？」

下層フロアの光景を映像越しに見たソフィアとアンバーが私に喰って掛かってきた。

「何の話？」

「惚けるつもりですか？」

私が言っているのはあの魔物達です……あれは、固有の魔物ではないですか！

ルール上、召喚していいのはドラゴン一体のみだった筈です」

「堂々とルールを破るたあ、いい度胸じゃねえか」

彼らが憤っているのは下層フロアに出現する魔物勢を見たためだ。ヴァンパイア・ロード、ドラゴン・ゾンビ、ハイ・スペクター、オーガ・ゾンビ……普通のダンジョンであればボスとして登場してもおかしくない高位のアンデッドが単なる通常敵として登場する異常な光景だ。

勿論、それらは無限に湧き出すような雑多な魔物ではなく、例外なく固有の魔物ばかりであることは言うまでもない。

「『邪神アンリは期間中に固有の魔物を追加召喚してはならない。但し、ドラゴン一体のみ可とする』」

「あん？」

「そうです、ルールにしっかりと定められているではないですか！」

そう、以前定めたルールでは私は期間中に固有の魔物を召喚してはならないことになっている。ヴニは例外だけど。

ならば私はルール違反を犯したのかと言えば、そういうわけではない。

「ルールは破ってない」

「え？」

「どういうことだ？」

「だって、アレを召喚したのは『私じゃない』」

そう、ルールはあくまでも「私が」召喚することを禁じているだけだ。文面上も「邪神アンリは」と明記されている。このルールには「私以外の人物が」固有の魔物を召喚することに関して制約はない。だから、私以外の人物が固有の魔物を召喚する分にはルールには抵触しない。

「な！？ あれだけの魔物を貴女以外の誰が召喚したと言っているのですか？」

「30階層のボスをしてる、私のもう一体の眷属」

「もう一体の眷属、だと？」

そう、私が加護を与えて眷属となった元10階層ボスのノーライフキングだ。

元々あらゆる不死者の王であった彼は下位のアンデッドを召喚する能力を持っていたが、加護付与によって別の存在へと進化しても

その能力は健在、いやむしろ更に強化されている。

かつてノーライフキングであった時には同格だった筈のヴァンパイア・ロードなどの高位のアンデッドすら召喚可能になり、それらを21階層から29階層へと配備しているのだ。

「確かに神族の眷属であれば出来ても不思議ではないですが……それは少々狡いのではないですか」

「ルールは破ってない」

「そりゃそうだけだよ……」

ソフィアとアンバールはまだ微妙に不服そうだが、ルール違反でないことは澁々ながら受け入れられた。

「それにしても、また随分と高位のアンデッドばかり集めたものですね」

「30階層のボスがアンデッドだから、自然とそうなる」

「勝負の行方は別として、お前の担当種族はアンデッド全般で確定だな」

担当種族って、ソフィアが『人族』、アンバールが『魔族』を担当しているように私は『アンデッド』担当ということか。私は特にアンデッドが好きと言うわけではないし、ゾンビなんかの腐乱したやつはむしろ苦手な部類なのだけど、邪神のイメージに近いと言われると返す言葉が無い。

「……考えとく」

「ああ、そうしとけ」

「しかし、アンバール。」

アンデッドは高位の者でない限り意志を持たぬものが殆どです。それでは得られる信仰も僅かなのではないですか？」

「確かにそれだけだと高が知れてるけどよ、『恐怖』との合わせ技なら悪くねえんじゃねえか？」

アンデッド自身が生者に恐れられる存在だからな」

「成程、それもそうですね」

私としては、これ以上周囲から恐れられる要素を増やしたくないのだけど……信仰としては恐れられた方が多く得られるから複雑だ。そこまで考えて、信仰について以前からソフィアに聞きたいと思っていたことを思い出した。

「信仰で思い出したけど、人族で邪神の信徒になってる人達はいいの？」

人族は彼女の担当であり信仰の基盤であるはずだが、教皇やこの国の人間は彼女ではなく私に対して信仰を向けている。ソフィアとしては面白くないのではないかと気に掛かっていたのだ。

「あまり増やされては困りますが、一部であれば構いません。」

それに、元々貴女を信仰していたと言うよりは私への信仰の対立概念のようなものでしたから、責は私にあります」

「そう、それなら良かった」

確かに、信徒達は元々私を信仰していたわけではなく、彼らの言うところの聖光教への反発から対立する存在を信仰していて、そこに私が乗っただけだ。光から自然と生まれた影の部分であり、否定と言う形ではあるけれど広義の意味においては彼らもソフィアを信じる存在と言えるのだろう。

「同属性の神族スキルがあつたせいで信仰に合致しちまつたんだつたか、難儀なもんだ。」

お前がこの世界に突然現れた時は何かと思つたけどよ」

「……………え？」

初めて聞く話に思わず声が漏れてしまった。彼らはそんな前から私の事に気付いていたのか。

「知つてたの？」

「勿論、気付いていましたよ。」

異世界からの来訪者は昔から数人居てそこまで珍しくありませんが、その中でも貴女は群を抜いて異質でしたからね。

大抵は光属性の力を持つ者ばかりなのですが……………」

「単純な闇属性とも違つたしな。」

そもそも、異世界から来る奴はこちらからの召喚に乗って来る奴が殆どだったのに、全て無視して強引に乗り込んできやがった時点で目立つてたぞ」

「私は送り込まれただけ」

私が自分の意志でこの世界に乗り込んできたわけではなく、あの邪神に無理矢理放り込まれただけだ。

「それくらいは分かつてます。」

少なくともこの世界に来た時の貴女は、世界の壁を越えられる程の力を有していませんでした」

「しばらく様子見するかと思つてたら神族になつちまうし、あん時は焦つたぜ」

それも、私の意志じゃない。不可抗力だ。

「それで一層警戒してたんだがな、信徒を集めて国を作ったり経典を広めてるくらいで特に怪しい動きもねえし」

「不審な点はあるけど、新たな管理者が増えたと言う事実は事実。」

『権能』の問題を放っておくわけにもいかず、直接接触することにしたのです」

「それを今話してくれたのは、疑いは晴れたということ?」

「まあ、少なくとも貴女自身に企みはないということは確信しています」

「性格悪いけどな」

アンバール、五月蠅い。そして、貴方には言われたくない。

「引つ掛かる言い方だけど、私以外には企みがあるということ?」

「貴女を送り込んできた者の意図は不明なままですからね。」

「貴女はその者から何か聞いていないのですか?」

「……何も聞いてない」

ソフィアに聞かれて思い返すが、私をこの世界に放り込んだ邪神から特にその目的などを聞いた記憶は無い。この世界で何をしろと指示されていたわけでもない。

「神族になる前も後も何の指示も出していないことを考えると、特に目的もない気まぐれだと言うのでしょうか……」

「まあ、警戒しておくのに越したことねえだろ」

「そうですね」

「分かった」

確かに、あの邪神のことは何も分かっていない。何故私をこの世界に送り込んだのか、明らかにする時が来るかどうかは分からないけれど、心に留めておくことにしよう。

下層フロアに出没する魔物は高位のアンデッドばかりだ。そして、その強さは一体一体がかつてのノーライフキングに匹敵する。ノーライフキングがレオノーラとほぼ互角だったことを考えれば、魔族の四天王と同等クラスの敵が集団で襲い掛かって来ることになるのだ。

一度であれば、魔王と四天王が二人も居る混合パーティの方が有利に戦えるだろう。しかし、そんな戦いが何度も続くとなればやがて消耗する挑戦者の方が不利となるのは自明の理だ。

……そう思っていた。

魔物達としばらく切り結んだ後に仕切り直しとして後退したおじ様は、アークへと話し掛けた。

『こやつら相手には貴様らの持つ武器の方が効果がありそうだな』

『アークだ』

『何？』

『俺の名前だよ、貴様じゃなくてアークだ』

アークの返答に怪訝そうな表情をするおじ様だが、やがて察したのか男らしい笑みと共に剣を構えた。



『フツ、良かろう。』

ならばアークよ、先のリビンググアーマーとは逆だ。道は私が切り拓いてやる、見事仕留めてみせよ。』

『任せろ！』

アークとおじ様が

『仕方ねえから、お前に援護を任せてやるよ。』

『フツ、貴方の力量で私の援護を活かせますか？』

『へッ、手前こそ俺に当てるんじゃねえぞ！？』

『そんなへまはしませんよ！』

ライオネルとヴィクトが

『オーレイン嬢だったな、』

『じよ、嬢！？』

『敵の攻撃は全て私が捌く、貴女は攻め手に集中して貰いたい』

『……はい！』

オーレインとレナルヴェエが

それぞれがペアを組み、コンビネーションを駆使して敵に当たっていく。確かに、アンデッドに対して有効な聖なる武具を持つ勇者達の力を活かすには最高の戦術だ。しかし、数日前まで確執を持っていた筈の彼らがここの見事に連携を取るなんて、一体誰が予想していただろうか。

あまりの息の合い方に、逆に彼らの今後が心配になってきた。

下手をすると勇者達のピンチの時に「フツ、このようなところで倒れるとは情けない。私を倒すのではなかったのか」とか言いなが

からおじ様が助けに来そうなレベルに見える。

あるいは、冒険の途中で黒幕である強大な悪の存在に気付いて仲間に入って共に立ち向かうとか……って、まさに今がその状態？

いやいや、黒幕とか強大な悪とか、どう考えても私には合わないから違うだろう。世間的なイメージは別として。

私がそんなことを考えているうちに、混合パーティは圧されつつあった戦況を押し返しつつあった。

おじ様が炎を放って作った道を、アークが果敢に飛び込んでヴァンパイア・ロードに斬り付ける。

ヴィクトの放つ氷の弾幕の隙間を巧みに縫いながら、ライオネルがドラゴン・ゾンビに聖槍を突き立てる。

ハイ・スペクターの放つ魔法を風を纏わせた剣でレナルヴェエが逸らし、護られていたオーレインが光の矢で穿つ。

その様は神話や伝説として謳われるに相応しい光景だった。

『よし！ 階段を見付けたぞ！』

『順に飛び込め！ 我らの目的は魔物を倒すことではない、先に進むことだ！』

『先に行つていいぞ、殿は俺に任せな！』

『レナルヴェエ、オーレイン嬢、貴方達から行きなさい！』

『承知した！』

『あ、貴方も嬢とかつて……もう、分かりました！』

まだ21階層、下層フロアは29階層まで存在するため先は長い。普通であれば、最初のフロアで苦戦しているようでは到底最下層まで辿り着けるとは思えない。しかし、私は何となく彼らが最下層まで到達することを予感していた。

これはいよいよ、私も腹を括っておく必要があるかも知れない。

## 16：ボスラッシュ（後書き）

序盤のボスクラスがラストダンジョンで通常敵として登場するのは  
お約束ですね。

不死王様？ まだウォーミングアップ中です。

17：インペリアル・デス（前書き）

ラスボス戦です。

BGMは好みでお掛け下さい。

## 17：インペリアル・デス

ギィっという音と共に大扉が開いてゆく。

扉越しにすら感じられていた威圧感が遮るものが無くなったことで増したためか、扉の前に立ったアーク達はその身を僅かに震わせた。

『……………行くぞ』

魔王の言葉にパーティは我に返って動き出すが、その足取りは警戒のために自然と遅いものとなっていた。

彼らの進む先には段上に玉座が据えられ、この部屋の主がそこに座っていた。

豪華な玉座に座して勇者や魔王達を待ち受けるのは、漆黒のローブを纏った骸骨だ。その体軀はここまで立ち塞がった黒龍や邪神の鎧と比べれば遥かに小さく、普通の人間サイズでしかない。しかし、その場に集った者達はその相手から、これまで対峙したどんな敵よりも強い威圧を感じて委縮していた。

『……………』

『……………』

玉座の前まで足を進めるアーク達だが、相手は無言のまま眼球の無い眼窩で彼らを見詰めるのみで、それ以上のリアクションを見せない。

アーク達も彼の放つ威圧感に自分達から話し掛けることが出来ず、無言で待っていた。

咳払いをするのも憚られる張り詰めた緊張感に彼らの精神が限界

を迎えようとした時、骸骨の口から声が発せられた。

精神の弱いものであればその声を聞くだけで死に誘われかねない、低く、そして魂を揺さぶる声が彼らを出迎える。

『よくぞ参った、客人達よ。』

ここまで辿り着いたのはそなたらが初めてだ』

投げられた言葉はいつぞやの時と同じ台詞だが、それを知るのは彼の他に私とレオノーラだけだ。

『貴様は……貴様は何だ？』

『ふむ、かつてであればその問いには「王」と答えたところであるが、今の余は我らが神 アンリ様にお仕えする下僕の一に過ぎぬ』  
『アンリ……邪神アンリか』

魔王の問い掛けに対して静かに答える骸骨。そこから発せられた私の名前に、勇者達は険しい表情になる。

『それで、お前がこのボスつてことでもいいんだよな？』

『いかにも、我らが神よりこの地の守護に任じられている。』

故に、そなたらをこの先に行かせるわけにはゆかぬ』

骸骨の言葉に彼らは警戒心を高めて武器を構えた。

『フッ』

『ッ！？ 何がおかしいのですか！？』

その様を見て笑った骸骨に対して、オーレインが過剰に反応を示す。それは緊張の表れだったのだろう。

『おかしいのではない、嬉しいのだよ……ご令嬢』

『ごれ……！？ う、嬉しいって何がですか？』

『先にも述べた通り、この階層に到達したのはそなたらが初めてだ。この地の守護に任じて頂いたことは名誉であって不満など欠片も存在せぬが、我らが神に対する忠義を示す機会に恵まれぬことを口惜しいと思っていたこともまた事実。』

『それがこうして機会が巡ってきたのだ、これを嬉しく思わずに何とする』

そう言つと、骸骨は立ち上がり漆黒のローブを翻して両手を広げた。

『名乗ろう、我が名はインペリアル・デス。』

偉大なる我らが神 アンリ様の眷属にして、この地の守護を任されし者』

骸骨 インペリアル・デスの名乗りに対して、勇者達もその手に持つ彼らの象徴に等しい武器を掲げながら、それぞれに名乗りを上げた。

『聖剣の勇者アーク』

『聖槍の勇者ライオネル』

『聖弓の勇者オーレイン』

『魔王エリゴール＝ロマリエル』

『四天王が一、烈風騎レナルヴェ』

『同じく血氷将ヴィクト』

その様子に、インペリアル・デスは満足そうに頷くと戦意を發した。



『さあ、来るがいい。我らが神への忠誠を示す為、全力を以って相手をしよう』

このダンジョンにおける最後の決戦の火蓋が、今切られた。

『行きます!』

『援護は任せて下さい!』

初手はオーレインとヴィクトの遠距離攻撃だった。一度に放てる最大数の矢が、インペリアル・デスただ一体を目掛けて降り注ぐ。しかし、その矢の雨に対してインペリアル・デスは右手を掲げると円状の障壁を生み出して軽々と防ぐ。

『隙あり!』

矢の雨を防いでいるインペリアル・デスに対して、一気に駆け寄ったライオネルが胸を狙って聖槍を突き出す。如何に強力な威圧感を放っていると言えど、インペリアル・デスもアンデッドであることには変わりはない。それならば、アンデッドに対して有効な聖なる武具であれば大きなダメージを与えられる筈。そう信じて放たれた攻撃は呆気なく止められた。

『ば、ばかな……』

胴体を狙って放たれた聖槍を、インペリアル・デスは右手で障壁を展開したまま左手のみで防いだ。いや、正確には左手の人差し指一本で穂先を止めたのだ。肉の無い骨だけの脆そうな指が最強に分類される聖槍を止める、その現実感の無い光景に止められたライオネルだけでなくその場の誰もが凍り付いた。彼の身体は邪神の鎧以上の防御力を誇ると言うのだろうか。

『隙を突きたいのであれば、声を発するべきではない』

そう言うと、インペリアル・デスは突き出されたままになっていた聖槍を手を伸ばして握り、無造作に横に振るった。その腕力は人間サイズの、それも骨だけで構成された体軀からは想像出来ない程強く、ライオネルは聖槍と一緒に地面と平行に撥ね飛ばされた。

『うおおおおお！？』

『く、間に合え！』

放り出されたライオネルをレナルヴェエが素早く反応して駆け寄り、受け止めた。もし彼が受け止めて居なければ、ライオネルはそのまま数十メートル先の壁面まで叩き付けられて一気に戦闘不能に陥っていただろう。

『ぐ、すまねえ！』

『何、大したことはない』

助けられたことに感謝を述べるライオネルに、レナルヴェエは微笑みながら首を振った。

『危ない！』

『させるか！』

撥ね飛ばされた二人が短く言葉を交わしていたところに、離れたところから声が聞こえた。

何事かと振り返るライオネルとレナルヴェのすぐ横を黒い何かが凄まじいスピードで通り抜ける。声のした方を見ると、インペリアル・デスにアークと魔王が斬り掛かっているところだった。

放たれようとした追撃を彼らが逸らしてくれたおかげで危機一髪を脱したことに気付いた彼らは、即座に立ち上がると左右に分かれてインペリアル・デスと斬り結んでいるアークや魔王のもとへと駆け付けた。

『すまねえ、助かった!』

『申し訳ございません、陛下!』

アーク達が近接で戦っているために、巻き込まないようにオーレインとヴィクトは攻撃の手を止めて隙を窺っている。その為、インペリアル・デスは空いた右手もアーク達への対応に向けていた。しかし、そこにレナルヴェとライオネルが加わったことで戦況が傾く。流石に四対一の近接戦闘には手が回らなくなったのか、インペリアル・デスは全身から魔力を放つと四人を吹き飛ばして距離を取った。

『そう言えば……』

『?』

再度距離を詰めて攻撃を仕掛けようとしたアーク達の機先を制するようになり、インペリアル・デスが言葉を発した。アーク達は攻撃のタイミングを逃してしまい、その言葉に耳を傾けざるを得なくなる。

『全力で相手をするとおきながら素手のままでは虚言になっ

てしまうな』  
『なにっ!?!?』

驚くアーク達の前で、インペリアル・デスは右手を身体の前へと差し出した。固唾を飲んでその様子を見るアーク達。インペリアル・デスの掲げた手の下、彼の影から黒い棒状の物が突き出して来る。彼はそれを右手で掴むと影から一気に引き抜いて、両手で構えた。

それは身の丈もありそうな程の全長を持つ片刃の大鎌だった。漆黒のローブに骸骨の身体、そして大鎌……その様子はまるで伝承に登場する死神そっくりだった。死を否定する不死者の皇帝が死に誘う死神の姿とは皮肉にも思えるが、おそらく加護を付与した私のイメージが影響している部分もあるのだろう。

『お待たせした、続きといこうではないか』

インペリアル・デスはそう言うが、アーク達は迂闊に動く事は出来なかった。先程まで素手の状態でも彼らを圧倒していた敵が武器を手に取ったのだ。それを警戒しないような愚か者はこの場には一人として存在しない。

『どうした、来ぬのか？』

『ならば、こちらから行くでしょう』

そう言うのと、インペリアル・デスは忽然と姿を消した。

『なっ!?!? 何処に?!?』

慌てて彼の姿を探すアーク達だが、何処にも見当らない。そして、次の瞬間援護射撃を行うために後方にいたオーレインとヴィクトの

前に、突然インペリアル・デスが出現する。

『莫迦な!?!』

『嘘!?!』

ヴィクトが咄嗟に張った水の障壁を紙の如く斬り裂き、オーレインが盾にした聖弓を小枝のように跳ね飛ばし、インペリアル・デスの振るった大鎌はオーレインの肩とヴィクトの腹部を深く斬り付けた。

『きゃああ!?!』

『ぐ……っ!?!』

『オーレイン!』

『ヴィクト!』

悲鳴を上げて倒れる二人を助けようとアーク達が駆け寄ろうとするが、それより先にインペリアル・デスは再び姿を消した。

『く、また消えたか』

『超スピード……ではないな、短距離転移か』

『このダンジョン内限定ではあるがな』

後ろから掛けられた言葉に魔王は咄嗟に振り向かず、魔剣を後ろに振るう。

『む、いかな。』

隙を突くなら声は出すなど言ったのは余であったな』

魔王が振るった魔剣を大鎌で受け止めたインペリアル・デスは、苦笑しながら姿を消す。

『く、拙い！ このままでは一方的に攻撃を受けるばかりだ』  
『円陣を組め！ 死角を無くすのだ！』

魔王の指示に従って、アーク、ライオネル、レナルヴェエの三人は彼の周囲に集まり、それぞれ背中合わせになって何処から攻撃されても対応出来るように備えた。

『何処だ、何処から来る？』

警戒し周囲を探る四人だが、インペリアル・デスは一向に姿を現さない。痺れを切らしそうになりながらも、必死で集中力を保つ彼らに、声が投げ掛けられる。

『集うことで死角を無くす、か。発想は悪くない……』

アーク達が声のした方を向くと、最初に座っていた玉座に腰掛けて彼らに右手を向けるインペリアル・デスの姿があった。

『だが、別に武器を持ったからと言って、魔法が使えなくなるわけではないのだよ』

『！？ 離れるー！』

魔王の声に彼らが反応するよりも早く、彼らが集まって身を寄せていた中心に向かってインペリアル・デスの右手から闇の塊が放たれる。

アーク達は咄嗟にその場から飛び下がるが、一番玉座に近い場所に居たライオネルだけは避けられずにまともに闇弾を受けてしまう。

『ぐあああああ……っ！？』

『うわあ!?!』

『クツ……』

『ぬう……』

ライオネルはその身を酷く打ち据えられ、苦悶の声を上げるとその場に崩れ落ちた。ライオネル以外の三人も直撃は免れたものの、余波を受けてダメージを負っている。

『く、強過ぎる!』

『確かに、これまで戦った如何なる相手よりも遙かに強い。』

『このまま戦い続けても敗北は必至だろう』

『陛下、それとアーク殿……次の一手、私が何としても防いでみせます。』

『攻め手をお願い出来ますか?』

『レナルヴェエ!?!』

『……分かった』

レナルヴェエの決死の表情での提案にアークは驚愕の声を上げるが、魔王はそれを険しい表情で受け入れた。

『相談は済んだかな、それでは戦いを再開……いや、そろそろ終わりとするべきか。』

『そなたらはよく戦った、この戦いを余は永久に記憶しておこう』

静かにそう呟くと、インペリアル・デスはまたしても姿を消す。

先程まで彼が姿を消した時にはアーク達は慌てて周囲を探っていたが、今回は無言のまま剣を構えて集中力を高めている。また、レナルヴェエは静かに目を閉じ、周囲に風魔法を展開していた。

『そこだ!』

レナルヴェエが周囲の空気の流れが乱れた箇所に向かって、渾身の突きを放つ。その直前に姿を現したインペリアル・デスは髑髏の表情に驚愕を浮かべながらも、レナルヴェエの放つ突きを冷静に捌き、大鎌を振るった。

後ろに下がれば大きなダメージは回避出来る筈だが、レナルヴェエは敢えてその場に留まり、大鎌による一撃をその身で受け止めた。

『何っ！？』

『ぐ……今です！』

苦悶の表情を浮かべながらも合図を放つレナルヴェエに、アークが応じる。

『ああ！』

聖剣で斬りかかって来るアークに対して大鎌で応戦しようとするインペリアル・デスだが、レナルヴェエがその身に受けたまま大鎌を掴んで放さず、対応出来なかったために鎌から手を放し、その腕で聖剣を受け止めた。

『狙いはよい、しかし力不足だな……ぬ？』

聖剣を軽々と受け止めて笑うインペリアル・デスだが、アークの表情に絶望が浮かんでいないことを見て取り、怪訝そうな声を上げる。

『ならば、その力……私が足してやるっ』

インペリアル・デスがその腕で受け止めている聖剣に、駆け寄っ



た魔王が魔剣を叩き付ける。その衝撃によって大きく聖剣は大きく押し込まれ、受け止めていた腕を弾く。

『ぬ、おおおおおーっ!?!?』

二人分の力で押し込まれた聖剣はインペリアル・デスの腕を弾くとそのまま振り切られる。その剣閃は敵を捉えることはなかったが、彼のローブの裾を斬り飛ばし、黒い布地の切れ端が宙を舞った。

『く、外れたか!?!?』

『だが、押し切れたのも事実だ。』

このまま攻め続けるしかあるまい……ん?』

飛び下がり、相手の反撃を警戒するアークと魔王だが、インペリアル・デスの反応が無いことに怪訝そうな顔付きになる。見ると、彼は少し離れた床に目をやり、アーク達の方には見向きもしていない。

あまりに隙だらけの状態だが、逆にそれが不審で攻撃を仕掛けることが出来ないアーク達。不思議に思っただが視線を向けている床を見ると、そこには黒い何かが落ちていた。

『……………れ』

『何だ?』

インペリアル・デスの口から小さな呟きが漏れていることに気付いた魔王が戸惑いの声を上げるが、相手は床を見続けたまま一向に微動だにしない。彼の見ている先に落ちている黒い物、それは先程斬り飛ばされたローブの裾だった。

『……おのれ』  
『お、おい？』

地獄の底から湧き上がって来るようなおどろおどろしい声に、この場に立つ二人は思わず怯む。

『おのれおのれおのれおのれ、よくも！』

よくも、アンリ様から賜ったローブに傷を付けてくれたな！』

『                   ツ！？』

『                   ツ！？』

突如激昂し始めたインペリアル・デスに、強烈な怒気を叩き付けられ硬直するアークと魔王。

そして、インペリアル・デスはそのまま宙に浮かび上がり、全身から凄まじい圧力を放ち始める。しかし、圧力と言っても周囲に叩き付ける類ではなくむしろその逆、それは目に見えぬ何かを引き寄せるものだった。引き寄せられ集束し、視認出来る程の密度を持ち始めたもの……それはダンジョンのあらゆる場所に漂っている瘴気だ。

瘴気はダンジョンの階層が深くなる程にその濃さを増していき、30階層という最下層に程近い階層では最高の濃度で周囲を満たしている。その瘴気が今、一体のアンデッドのもとへと集い始めている。

インペリアル・デスは収束し濃縮された瘴気をその身に取り込みその姿をより禍々しいものへと変えていった。

『どつやら、ドラゴンの尾を踏んでしまったようだな』  
『……』

諦念の言葉を漏らす二人の前で、インペリアル・デスは濃縮され

た瘴気を大鎌に乗せて振るった。

ちゅどん。

あまりの惨状に見てられなくなって、目を閉じて耳を塞ぎ、心の中で擬音だけ合わせておいた。

そろそろ良いかと思っただけ目を開けると、映像の中ではボロボロになって倒れたアークとおじ様の姿が映っていた。最後まで立っていたパーティーメンバーが倒れたことで、ここに彼らは全滅したことになる。

反応が無いことに不思議に思っただけ、部屋に居る面子の方に目を向けると、そこには「ぽかーん」と大口を空けた面々の姿があった。佳境ということでは今日は全員で観戦していたのだが、誰も一様に啞然としている。

私はその様子を見ると、抜き足差し足忍び足で執務室から外に向かおうとした。

「待ちなさい」

しかし、その努力は実らず、むんずとばかりにソフィアに首根っこを掴まれて捕獲されてしまった。

「アレは一体なんですか？」

「何って、前にも教えたもう一体の眷属」

私がそう答えると、ソフィアは「はあ………」と深い溜息を吐いた。

「アレはどう見てもただの眷属ではありません。」

既に殆ど神族の域に到達しているではないですか、流石に反則でしよう!？」

「そんなルールはない」

「いや、アレは俺もどうかと思うぞ？」

人族や魔族でどうにかなる相手じゃねえだろ」

「だとしてもルール違反じゃない」

「そもそも、何故神族になったばかりの貴女の眷属があんなことになってるんですか」

「確かにな、恐ろしく信仰心の高い眷属が数百年単位で時間を重ねないとあんな風にはならねえ筈なんだが………」

「そんなの私も分からない」

こうなるだろうとは思っていた。自重とか自粛とか、そう言う言葉を完全に無視した彼の存在をソフィアやアンバーに知られたら絶対に怒られると思ったので、混合パーティがここまで来てしまったことには酷く憂鬱だったのだ。

しかし、最早開き直るしかない。

実際、ルール上では禁じられていないのだから、問題は無い筈だ。

ソフィアとアンバーの追及をいなし、テナやレオノーラ、リリのジト目から目を逸らしながら、私は内心で自身を納得させた。

17：インペリアル・デス（後書き）

混合パーティを倒した！

アンリは聖剣、聖槍、聖弓、魔剣を手に入れた！

攻略階層の最高記録を達成した混合パーティだが、最後の砦でもある30階層のボス インペリアル・デスに敗れて敗退となった。なお、ダンジョン内で倒れた以上、相手が勇者や魔王であっても武器やアイテムの回収を免除する道理は無いため、聖剣や聖槍、聖弓に魔剣もしつかりと回収させて貰った。勿論、それ以外のアイテムやお金も含めて。

そしてその瞬間が、彼らのダンジョン踏破が不可能になった瞬間でもあったとも言える。

勇者達についてはソフィアに加護が付与された聖なる武具が力の源であり、それを奪われると力の大半が失われる。

おじ様の方はそこまで武器に依存しているわけではないけれど、やはり魔剣があると無いでは戦力に大きな差が生じる。

聖剣や魔剣を失った彼らには、最早ダンジョンを攻略するだけの戦力は無かった。

そして、そのまま勝負の期間は終わりを告げようとしていた。

ちなみに、聖剣や魔剣についてはソフィアやアンバーから要望があり、期間中は預かるものの勝負が終わったら返すことにした。

回収した以上は私の物なので無視しても良かったのだが、どうも

聖剣などのソフィアが加護を与えた武器は持ち主が呼ぶとその手元に飛んで戻る機能があるらしく、ダンジョンの中でギユンギユン飛び回って危なっかしいことこの上ないのだ。

取り合えず捕獲して、ダンジョンの一部屋に放り込んで外から鍵を掛けておいたが、部屋の中から聞こえる音から推測するに依然として暴れている様子が窺えた。おそらく、勇者たちが諦めずに呼び掛け続けているのだろう。

私としてもこんな傍迷惑な剣なんかさっさと返してしまいたい。こんな状態じゃ売り物にもならないし、ダンジョンのドロップアイテムにも出来ない。

魔剣の方はそんな機能もなく大人しいのだが、聖剣を返すなら魔剣も返さないと不公平だろう。それに、魔剣は魔王が代々受け継ぐものらしいので、いずれレオノーラの手元に渡るのだから、友人としては返しておくべきだと思う。

まあ、本来返す義務は無いのだから、多少の代価は要求してもいいよね。

勝負を開始してから一年間、その期限が残り三十分程で終わりを迎える。

私達はその時を31階層の『攻略の証』を安置した部屋で見届けようと、全員で集まっていた。

「『攻略の証』って……」

「まさか、『コレ』がか？」

『攻略の証』を見たテナとレオノーラの表情が引き攣る。そう言えば、ソフィアとアンバーは既に知っていたけど、彼女達にはこのことを言っていなかった。

部屋の中央には丸テーブル状の台座があり、その上には継ぎ接ぎだらけの不気味な人形が置かれている。

これが私の設置した『攻略の証』、レオノーラが始めてダンジョンに来たときにも使った呪いのテナ人形だ。

なお、私自身は神族になることで呪われている状態を克服したが、だからと言ってこの人形の呪いが浄化されたわけではない。そのため、この人形に私や眷属のテナ以外が触ればもれなく呪いもプレゼント、という寸法だ。

別に、ダンジョンを攻略された場合は腹いせに呪ってやろう、なんて陰険なことを考えていたわけではない。邪魔だから誰か持って行って欲しいとは思っただけ。

「残り時間も後僅かですね……」

「チツ」

「ひっ!？」

勇者やおじ様達がそれぞれの武具を失った時点で既に敗北濃厚だったにも関わらず、敗北宣言はしていなかったソフィアとアンバーだが、事ここに到っては流石に勝利を諦めた様子を見せている。ソフィアの方は落胆した態度だが、アンバーはあからさまに不機嫌そうだ。

アンバーがあまりに苛立ちを振り撒いているため、リリなんか怖がって私の後ろへと隠れてしまった。

「今から攻略者がここまで来ることもないだろうし、もう勝負は決



まったな」

「おめでとうございます、アンリ様」

レオノーラとテナの祝福を聞いて、ようやく私も勝利の実感が湧いてきた。勝利の直後に『攻略の証』をトロフィー代わりに掲げようと、台座に向かって一歩前に出……ようとして、つんのめった。

バランスを崩して倒れ込みながら後ろを見ると、ドレスの裾の上にもリリの足が乗っている。どうやら、アンバールを怖がって私の後ろに隠れたリリがドレスの裾を踏んでしまっていたようだ。以前着ていたローブと異なり、今着ているドレスはそこそこ裾が長いので、気を付けないと踏まれてしまうのだ。

後ろから引つ張られるような形になってバランスを崩した私は、倒れる中で反射的に前にあつた台座に手を伸ばして掴むことで、何とか転倒することを免れた。

「大丈夫ですか、アンリ様!？」

「う、ごめんなさい……」

テナが慌てて私を助け起こしてくれた。リリは……謝らなくていいから裾の上から降りて欲しい。

「おいおい、何やってんだ」

「取り合えず、転ばなくて済んだようですが」

ソフィアとアンバールも呆れたような声を掛けてくる。

「前の服より裾が長いのだから、気を付けないと危ないぞ。」

あと、人形が撥ね飛ばされてこっちまで飛んで来たぞ」

咄嗟だったので気付かなかったが、先程私が台座を掴んだ際に手

が当たってしまったのか、台座の上に置いてあった呪いのテナ人形が撥ね飛ばされてレオノーラの足元まで転がっていつてしまった。

彼女はそう言いながら、屈んで足元の人形を拾う。

「……………あ」

テナがその様子を見て、ポツリと声を上げた。私を含めた部屋の全ての者がそれを聞いて、彼女の視線の先に居るレオノーラへと視線をやった。

「……………あ」  
「……………あ」  
「……………あ」  
「……………あ」

みんな揃って一律、同じような間抜けな声を上げてしまう。

「え？ ………………あ」

突然みんなから視線を向けられて戸惑ったレオノーラだが、視線の先が自分の手の中を向いていることに気付き、そこにある物に気付くと同じような声を上げた。

「……………あああああー！？」

部屋中に叫び声上がる中、転移魔法が発動してレオノーラの姿

がそこから消えた。

レオノーラのバカ……

「納得いかない」

円卓のある会議室に場所を移して、開口一番で私はそう告げた。

「担当種族が『攻略の証』に最初に触れたら勝ち、だろ？  
疑問を挟む余地はねえだろうが」

確かにレオノーラは魔族なのでルール上ではアンバールの勝ちとなる。しかし、あんな事故で勝敗が覆るのは釈然としない。そもそも、もとはと言えば彼がリリを怖がらせたのが原因なのだ。

「ソフィアの意見は？」

「そうですね。確かに締まらない決着の付き方ではありますが、ルールに従えばアンバールの勝利とせざるを得ないのではないですか」

彼女からしてみれば、どちらであっても自分の勝利になることは

ないのだから、敢えてルールを調整する気にならないのは仕方ないか。

私としても自分の意見が不利なのは理解している。ただ、少し……いや、かなり悔しいだけだ。

「ア、アンリ……私が悪かったから、いい加減許してくれないか？」  
「ダメ、まだ正座してて」

会議室の隅の方から私に声が掛けられたが、私はちょっと冷たく返事をする。声を掛けてきたのはレオノーラで、先程から反省のために正座して貰っている。

転んで人形を台座から落としてしまった私が悪い部分もあるからそこまで強く責めるつもりはないのだが、それでも彼女のうっかりによる部分も大きいのでしっかり反省して欲しい。

「正座は兎も角、この人形を取って欲しいんだが……」  
「ダメ、しばらく持つてて」

正座をするレオノーラの膝の上には、呪いのテナ人形が置かれている。この人形、以前は捨ててもいつの間にか戻ってくるというだけのもだったが、放置している間に呪いが強まったのか、手放すと即座にトコトコ歩いて戻ってくるようにレベルアップしていた。そのため、レオノーラは手放すに手放せず、ずっと抱えている。

「まあ、そっちの落とし前は好きにしな。

過程は兎も角として勝ち負けは勝ち、負けは負けだ。  
諦めるこつた」

「……………分かった」

アンバールの念押しに、私は澁々と自身の敗北を認めた。悔しい

けど。

「と言っわけで、早速『権能』の割振りを決めちまうか」

そう言うと、円卓の一角に腰掛けているアンバールの周囲に無数の文字が浮かび上がった。続いて、ソフィアの方も同じように自身の周囲に文字を浮かび上がらせる。

「これが今俺らが持つてる『サブ権能』だ。

新たに『サブ権能』にするべきものもないからな、今俺らが持つてる『サブ権能』の何割かをお前に渡せば完了だ」

「具体的に何割にするのですか？」

「そつだな……4割つてとこか」

各々から4割ずつだと、ソフィア：アンバール：私の持つ権能の比率は6：6：8となる。

「それだと私だけ多い、不公平」

「バランスが崩れていない範囲であれば問題ない筈です」

確かに、少しでも自分の持つものを減らしたいからこそ勝負をしていたのだから、配分が均等でないことに文句を言うつもりは無い。私が不公平だと言っているのは「私だけ」多いことに対してだ。

勝負に勝ったのはアンバールなのだから、私とソフィア両方の配分を増やせばいい筈なのに、私だけ狙い打ちされるのは納得出来ない。

「何で私だけ？」

「お前は新人なんだから経験積む必要があんだろ、好意で仕事振ってやってるんだから有難く思え」

私は睨みつけるが、アンバーは涼しい顔をして受け流した。

と言うか、絶対嘘だ。この悪意のある配分は、ダンジョン攻略で苦勞をしたことに対する意趣返しに違いない。

しかし、比率を決めるのは勝者というルールだし、バランスが崩れていると言うほどでもないので、悔しいが私がここで騒いでも覆りそうにない。

「じゃ、まずは大罪系からいくか。

そうだな『暴食』『強欲』『色欲』『嫉妬』をくれてやる」

は？ 大罪って七つの大罪だろうか、この世界にも同じ概念があったのか。

それにしても渡されたセレクションが何だか酷い。抗議せねば。

「私はそんな大喰らいじゃない」

「食事の必要もねえのに毎日三食喰ってる時点で十分大喰らいだろ」

それを言われるとグウの音も出ないが、最近は貴方とソフィアも毎日三食食べてるのに……。

「だったら『強欲』というのは……」

「いや、これはどう考えてもお前にピッタリだろ」

……まあ、入場料取ったりしてたから、これはやむなしか。  
しかし、残り二つは断じて合っていない。

「『色欲』と『嫉妬』は絶対に合っていない」  
「そもそも合ってるかどうかなんてのは、参考にはなっても必須事項じゃねえしな」

さつきと言っていることが違い過ぎる。

と言うか、七つの大罪とこの世界の七つの大罪系が一緒だとすると、残っているのは『怠惰』『傲慢』『憤怒』……絶対、意図的に格好いいやつだけ自分のとこに残したな、この男。

あと、比率が合っていない。四割と言いながら半分以上渡すな。

「それでは私からは美德系を渡しましょう。

『節制』『儉約』『忍耐』をあげます」

ちよつと待った、大罪系と混ぜて変なことになってる。『暴食』と『節制』とか両立し得ないから。

あと、こっちはこっちで『勤勉』『純潔』『慈悲』『謙譲』とか耳当たりの良いものを自分のとこに残してるし。

あまりのことに呆然としている間に、ソフィアとアンバールの周囲を漂っていた文字のうち幾つかが私の方へと飛んできた。

要らない、要らないってば。

「じゃ、次は生物系だな……」

待って、お願いだから。この流れのままだとんでもないことに

……

数時間後、燃え尽きて円卓に突っ伏した私を余所に、散々私に『権能』を押し付けたソフィアとアンバーはホクホク顔で部屋から出ていった。

「あの、アンリ様……大丈夫ですか？」

「大丈夫……じゃない」

億劫な気分のまま顔を上げると、周囲には様々な文字が浮かんでいる。その内容は非常に雑多であり、こんなごった煮の内容を司ることを考えると最早邪神と言えるかどうかすら分からない。

最後にアンバーが「こんだけごちゃ混ぜならこれも入れとくべきだろ」と言っただけ置いていった『混沌』の文字が目の前で光っており、無性に腹が立った。

『称号「変神」を獲得しました』

随分と久し振りに聞いた『システム』の声だけど、『変神』ってなんだ『変神』って。

そこはせめて『混沌神』にするところでしょう!？

……私はこの苛立ちを何処にぶつければいいのか。



「その……わ、私は一体いつまで正座していればいいんだ？」

そんな私の耳に、会議中も正座をずっと続けていたレオノーラの声が届いてきた。最早足の痺れが限界を迎え、僅かに身じろぎするだけで凄まじい刺激を受ける状態になっているらしく、動くことすら出来ずに硬直している。

そう言えば、こうなった原因の半分くらいは彼女のせいだった。

私は矛先を向ける相手を見付けたことに内心で暗い笑いを浮かべると、彼女の痺れた足に向かって指を伸ばした。

18：決着（後書き）

本編完結まで残り2話の予定です。

## 19：邪神の誘惑

気が付いたら光源が1つもない真つ暗な空間に立っていた。  
見覚えのある光景に慌てて自分の格好を確認する……よかった、  
ちゃんと服を着ている。

パチパチと言う音が耳に入り、そちらを向くと予想通りの人物が  
立って拍手をしていた。

長い黒髪をした少年……私を今の世界に放り込んだ邪神だ。

「やあ、久し振りだね」

相も変わらずの人を喰ったような笑みを浮かべながら、邪神が私  
に向かって話し掛けてくる。

「何の用？」

「つれないね、感動の再会だと言うのに」

冗談じゃない、少なくとも私の方には感動する要素が何一つない。  
例えばここ一年程の様々な苦労は全て、目の前の邪神が大本の原因  
だ。まさに疫病神という言葉が相応しい。

このタイミングでこの空間に誘い込まれたことも、嫌な予感しか  
しない。

「まあいいや。」

今日ここに招いたのはさっきの拍手の通り、君のこれまでの成果  
に対して感謝と報酬を与えるためだよ」

「感謝と報酬？」

予想外な言葉に思わず聞き返してしまう。これまでの成果とは何を指しているのだろう。

「まずは感謝の方だけど、君の行動は見ていても愉しかったよ。単なる思い付きだったけど、君をこの世界に送り込んで本当に良かったよ」

「こんにやろつ。」

薄々そんな気がしていたけれど、私は目の前の邪神にとって玩具のような位置付けのようだ。

「そもそも、何のために私を送り込んだの？」

「手の者を送り込んだ理由なら、宙に浮いてた信仰を利用して眷属を創るためだね。」

それが君であった理由は、面白そうだったからだけだ」

「つまり、私が神族になったのは既定路線だったと言うこと？」

「違うよ、確かにそうなり易いようにお膳立てはしたけど、そうなるかどうかは僕にも不明だった。」

実際、驚いているんだよ？ まさか、あんなに早く神族になるなんて、予想もしていなかったからね」

邪神の回答を聞いて少し安心した。これまでの私の行動が全て彼の掌の上だったりしたら、正直ショックが大きい。

「もし、私が神族にならなかつたらどうしたの？」

「別に？ その時はその時だよ。」

なつたら良いとは思っていたけど、必須と言っわけではないしね」

随分と適当な扱いだが、特に腹は立たない。

「眷属を創ると何かメリットがあるの？」

私の眷属はテナとインペリアル・デスだが、彼女らは私にとって味方だからこそ役に立ってくれている。目の前の邪神にとって私は眷属に当たるとは思わぬだろうけど、私としては彼に仕える気など無いし、彼のために何かをするつもりもない。

こんな眷属を創って、果たして何のメリットがあるのだろうか。

「眷属の質や量はステータスになるんだよ。

少ないよりは多い方が良く、使徒族よりは神族、野良神よりは主神の方が価値が高い。

そういう意味では、この世界で主導権を握った君は、価値が高い方だね」

「主導権を握った？」

ソフィアやアンバールと行った勝負のことを言っているのだろうか。私は勝負に負けた立場なのだけだ。

「まあ、予想とは大分異なる展開ではあったけど、結果的に最も多くの『権能』を手に入れたんだから、世界の主導権を握ったと言っているだろう。」

重要なのは過程ではなく結果だから、君達の勝敗の基準なんかはどうでもいいんだ」

確かに、勝負に負けて仕事を押し付けられたせいで、私の持つ『権能』は三柱の中で最も多い。それは主導権を握ったと言えるのかも知れないけれど、勝負に負けて褒められるのも何だか釈然としない。

「で、そんな頑張った君に、褒美でもあげようかと思って」

「だから、報酬？」

「そういうこと。」

で、肝心の報酬の内容だけど……君が望むなら、君を人間に戻した上で地球に転移させてあげよう」

ッ！？

全く予想していなかった言葉に、思わず息が止まった。

人間に戻る？ それだけじゃなくて、元の世界に帰れる？

「悪くない話だよね？」

どちらも、普通ならあり得ない報酬だよ。

今この時を除けば、二度とこんな機会は来ないからね」

邪神が畳み掛けるように話し掛けて来るが、私は頭が混乱してしまっ  
て言葉の意味が中々理解出来なかった。何とか必死に気持ちを  
落ちつかせて、疑問に思ったことを問い掛けた。

「眷属を創ることが目的なのに、私を人間に戻していいの？」

先程の話では彼の目的は質の高い眷属を創ることであり、私が神  
族になったことでそれは果たされた。だと言うのに、その褒美に私  
を人間に戻してしまっは本末転倒としか思えない。

「人間に戻すと言つても、厳密には『神としての君』から『人としての君』を分離すると言うべきかな。」

眷属としては残った『神としての君』だけで十分だよ」

どうすればそんなことが出来るのか私には想像も出来ないけれど、軽く述べる彼の様子を見る限りでは、本当に出来るのだろう。

本当に人間に戻れる……？

「眷属として『神としての君』がこの世界に残っているなら、『人としての君』は別に必要ない。」

さつき言つた通り、望むなら地球へ転移させてあげよう」

人間に戻れるだけじゃなくて、元の世界にも帰れる……。

今まであまり考えないようになってきたけれど、その言葉を聞いた瞬間に元の世界の家族や友人のことが思い出されて、途端に懐かしさが溢れ

「但し、当然ながら転移は一方通行だよ。」

地球に転移した後は、こちらの世界に戻ってくることは認められない」

冷や水を掛けられたような気持ちになった。

待つて、それは……。

「勿論、君以外の人物を地球に転移させることも出来ない。」

地球を選ぶなら、この世界の者とはお別れと言つことになるね」

元の世界へ戻るなら、テナヤレオノーラ、リリ達とは二度と会えない、それは世界を隔てるなら当たり前のことかも知れないけれど、その事実が私の胸に深く突き刺さった。

元の世界の家族や友人か、今の世界で出会った人達か、どちらかを選んでどちらかを捨てなければならぬ。

私は目を閉じて心の中で両者を天秤に掛ける。

長い年月を過ごしてきた元の世界の人達と、時間は短いけれど深く関わった今の世界の人達。

こんな選択肢はどちらを選ぶのも苦しいことで、中々決断出来ない

……筈だ。

それなのに、私の中の天秤は不自然な程に呆気なく傾いた。

やっぱり、おかしい。

先程、元の世界に帰れると思った時にも、不思議と懐かしさが湧いて来なかった。

何かが変だ、決定的な何かが間違っている。

そうだ、目の前の邪神の言葉を鵜呑みにしては駄目なのだった。

それで前回は失敗している。

私の言葉を意図的に読み間違えたのかどうかは未だに分からないけれど、彼によって願いを歪められて叶えられたところから全ては始まった。

今回は彼からの提案だが、その意図しているものが私の認識と異なる恐れは十分に存在する。

冷静になった頭でこれまでのやり取りを思い返して、違和感を覚えるところはなかったかを確認する。



「さあ、君はどちらの世界を選択する？」

地球か、今のせか」

「何故？」

「え？」

違和感を見付けて、私は邪神の言葉を遮った。

「何故、貴方は

『元の世界に戻る』と言わずに『地球に転移する』と言つて？」

「……………」

絶えず人を喰ったような笑顔を浮かべていた邪神から笑みが消え、無表情になった。

思えば、最初に会った時からずっと、彼は私を何処から連れてきたかなんて一言も言わなかった。

私も『元の世界』の最後の記憶から、当然そこから連れて来られたと思っていたため、特に気にしていなかった。

また、突然家族や友人と引き離されて異世界に放り込まれたなら普通は元の世界に帰りたいと思う筈だが、私は何故かその気持ちがあつたし、会えると思っても懐かしさも薄かった。

そしてもう一つ。今回、私は普通に服を着ている。前は裸だっ

たのに、だ。目の前の邪神がわざわざ私の服を脱がすような存在とも思えないし、それなら何故前回は裸だったのか。

「一つ教えて、『元の世界』の『私』は元気？」

「……………ふふ、あははははははっ！」

私の問い掛けに、無表情だった邪神が唐突に大声で笑い出した。

「あははは、参った参った。僕の負けだよ。

よく気付いたね。僕がこれまでにあった人間では、可能性に気付いても中々受け入れられない人が多かったのに」

ああ、その言葉で全て肯定されてしまった。

私は『元の世界』で生まれたのではなく……………。

「そうだね、君が『元の世界』と呼ぶ『地球』で生きていた少女の肉体と記憶をコピーして、僕が産み出した存在だよ。

最終的に神族になる眷属を創るには、その方がやりやすかったからね。

ちなみに、君のもとになった少女も普通に元気だよ」

前回私が裸だったのは、文字通り「生まれたままの姿」だった。連れて来られたのではなくこの場所で産み出されたのだから、服な

ど着ている筈がない。

「つまり『元の世界』……違う、地球に行っても……」  
「君の居場所は何処にもないし、待っている人も居ないね」

地球には私のもとになった『私』が既に居るのだから、当然だ。  
私が行っても、せいぜいドツペルゲンガー扱いされるのが関の山だ。

「もし、私が気付かずに『地球に転移』するって答えてたらどうしたの？」

「別にどうもしないよ、望み通り『地球に転移』させてあげてたさ」  
危ないところだった……どう転んでもロクな結果にならない選択  
肢を掴まされるところだった。

「何でそんな引っ掛けをしたの？」

私はジト目で睨み付けながら、邪神に問い掛けた。睨み付けても、  
当然ながら私の魔眼の効果など彼は微風ほどにも感じていない。

「報酬をあげる前の、最後の試練と言ったところかな」  
「報酬……」

その話は生きていたのか。しかし、あんな性質の悪いトラップを  
仕掛けられた直後だと、どうしても疑いの眼差しを向けざるを得な  
い。

「いやいや、今度は本当だよ」

最早信用度はゼロだけど、取り合えず話を聞いてから判断するこ

とにして、私は先を促した。

「と言っても、報酬は先程の話と変わらないんだけどね。後半の部分が無いだけで」

先程の話と言うのは「私を人間に戻して、地球に転移させる」と言っていたことだろう。後半が無いということは前半の「人間に戻す」と言う部分だけ叶えると言うことだろうか。

「勿論、報酬だから無理には言わないよ。

選択肢をあげるから、自由に選んでくれて構わない」

確かに、考える価値のある報酬だ。

今はまだ神族になって日が浅いから実感が湧かないし、私もなるべく考えないようにしていたが、この先年月が経つにつれて『神』と『人』の差は大きくなっていく。使徒族のテナは兎も角、レオノールやリリヤ他の人達は歳を取って、やがて命を落とすのに、私達だけは取り残される。

神族になる前のように、人としてみんなと一緒にの時を過ごしたいと思ったことがなかったと言えば嘘になる。

しかし、先程の例があるため安易に頷くことは出来ない。

「そこにデメリットはないの？」

認識の違いは兎も角、目の前の邪神は質問されれば答えるし、一度も嘘は吐いていない。積極的に問いただして違和感がないかを確認するのが、よりよい選択をするための必須事項だ。

「デメリットかい？ そうだね……ん？」

私の質問に考える様子を見せていた邪神が、何かに気付いたように私の横に視線を向けた。私もつられてそちらの方を向くが、真っ暗な空間が広がっているだけで特に何も……いや、光の線が縦に走ったかと思ったら、そこから強い光が差し込んできた。

私は嫌な予感がして反射的にその光の線上から身を逸らす。すると、次の瞬間縦に走った光から光線が伸び、私のすぐ横を通って遙か向こうまで駆け抜けていった。

「アンリ！ 無事ですか！？」

「死ぬかと思った」

光の線があつたところに空いた穴から剣を持って飛び込んできたソフィアに、そう返す。本当に、避けてなかったらどうなっていたか。

「ぴんぴんしてんじゃねえか」

「危うく吹き飛ばすところだった」

確かに傷一つ負っては居ないけれど。

続いて姿を見せたアンバールに返事をするが、どうも意図が伝わっていないように見える。

「アンリ様、ご無事ですか！」

「大丈夫か！ ……っ！？」

「ひっ！？」

続いてテナ、レオノーラ、リリがこの空間に飛び込んできたが、邪神と目が合うとレオノーラは即座に土下座を始め、リリはテナの後ろに隠れてしがみ付いた。まあ、私の魔眼で駄目なら彼の目も駄

目なのは仕方ない。

「遅ればせながら馳せ参じました。何なりとご命令を」

最後に漆黒のローブを翻してインペリアル・デスが姿を見せ、私と邪神の間に立った。既にその手には大鎌が構えられており、臨戦態勢だ。

みんな心配して駆け付けてくれたようだけど……わりともう粗方片付いた後だよ。

「大分近くに寄せたとはいえ、まさかこの空間まで追い掛けてくるなんてね」

取り合えずみんなを宥めて、邪神が用意した円卓に座って話を続けることにした。

これまでの経緯を説明して一段落したところで、邪神がそんな言葉をもたらした。

「アンリの眷属であるテナであれば、主従の繋がりから場所は分か

ります。

「そこまで辿り着くための穴を空けられるかどうかは賭けでしたが」  
「俺の力をそっちの生真面目女に渡して、二人分でやっとしてこ  
るだったな」

「そこまでして駆け付けてくれたのは有難いけれど、その場合延長  
線上に私が居ることを忘れないで欲しかった。」

「そっちの眷属や友人は兎も角、君達がそこまでして彼女を助けに  
来るなんてね」

「それは勿論、彼女に居なくなられては困りますから」

「折角仕事を押し付け……任せられる相手が出来たんだからな、い  
きなり居なくなられちゃ困るんだよ」

飛び込んできた時の本気で心配している様子からするとそれだけ  
ではなさそうだけど、そういうことにしておこう。私も照れくさい  
し。

「さっきの話だけど、私が人族に戻った場合、眷属のテナや彼はど  
うなるの？」

テナは元々加護付与をした時から眷属になっていたが、私が神族  
になったことで使徒族へと種族が変わっていた。

インペリアル・デスはノーライフキングだった時に加護付与をし  
て眷属になったが、その時点ではまだここまで飛び抜けた存在では  
なかった。彼が限界を突破したのは、やはり私が神族になった時だ  
と思う。

「どちらも、私が神族になったことが存在に影響している。ならば、  
私が人族に戻った場合はどうなるのか。」

「眷属は『神である君』と『人である君』のどちらかを選択することになる。」

「神である君』を選んだのであれば、今のまま変わらない。」

「人である君』を選んだのであれば、君が神族になる前の状態に戻るだろうね」

「『人である私』を選んだ眷属は、もう『神である私』とは関係なくなるの？」

あるいはその逆は？」

「直接は関係ないけど、『人である君』が『神である君』の一部であることには変わりがない。」

人としての一生を終えたら、魂は『神である君』に統合される。

「人である君』を選んだ眷属も、その時に『神である君』のもとに戻るよ。」

そういう意味では、どちらを選んでも100年後には大した差は無くなるね」

要するに、このまま神族と使徒として生き続けるか、人としての一生を経てからそうなるかの違いということかな。

一見する限りデメリットは無さそうだけど、彼の信用度はゼロなので、私はオブザーバーに聞いてみることにした。

「彼の言っていることは全部本当、ソフィア？」

「前例を見たことはありませんが、理屈としては正しいと思います。」

普通なら神族から人族になるなど不可能ですが、人族から神族になり、未だ肉体を有している貴女だけは例外です。

付け加えると、『人である貴女』を分離した『神である貴女』は、神族としてより純化した存在となります。

眷属がステータスというのは私達には分からない感覚ですが、その方が彼にとっても価値が高いということもあるのでしょうか」



その言葉に邪神の方を向くと、彼はスツと目を逸らした。  
自分のメリットを敢えて話していなかったようだ、それくらいであれば別に私にとってデメリットと言うわけでもないし、気にすることはないか。

「私が人族に戻ることを選んだら、貴方達はどうする？」

「私は……」

私はテナとインペリアル・デスに問い掛けた。テナは回答を迷っているようだ。私は彼女に人として一緒に生きて欲しいけれど、この選択は彼女自身がすべきことだろうと思う。

「私は、やっぱり『人としてのアンリ様』を選びます。

そちらの方が身の回りのお世話とかお役に立てると思いますし」

「そう、貴方は？」

テナの回答を聞き、私は続けてインペリアル・デスへと質問を向けた。

「余は『神としてのアンリ様』にお仕え致します。

元より不死のこの身、『人としてのアンリ様』のお傍に仕えるよりはその方が良いでしょう」

彼は迷わず、そう答えた。元より邪神への信仰を抱いている彼にとっては、当然の選択だろう。

「さて、話は纏まったかな。そろそろ結論を聞かせてよ。  
君は『神』として存在するのか、それとも『人』として生きるの  
か」

眷属達の希望を聞き終わった私に、邪神が選択を迫ってきた。

「私は……」

## 19：邪神の誘惑（後書き）

次回、本編完結

なお、マルチエンディングではありません。ルートは一本です。

## 20：普通のアンリ

「私は……人として生きたい」

元々、私が望んでいたのは平穏だ。神族になってしまったことについてはもう心の整理はついていたけれど、人としての生を取り戻すことが出来ると言われると、やはり心は傾く。

邪神の話を聞く限りでは、一時的なもので結局最終的には神族になるようだが、一種のモラトリアム期間と考えればいいだろう。

テナヤリリ、レオノーラ達と同じ時を過ごすことが出来るのであれば、それを選ばない理由は何処にもなかった。

「そう、分かったよ。」

それじゃあ、分離するからそっちに立って」

邪神の言葉に従って、私は円卓から立ち上がって少し離れた場所に立った。

「じゃ、いくよ」

その言葉と共に、私は訪れる衝撃に備えて目を閉じた。しかし予想したような衝撃はなく、代わりに何かが身体全体からごっそりと抜けていくような感覚がした。

「はい、終わったよ」

邪神の声を受けて目を開くと、目の前には私と瓜二つの人が立っていた。

いや、瓜二つと言うよりも、もう一人の私と言った方が正しいの  
だろう。

神族としての立場と役割を押し付けることになってしまっ「私」  
に対して何か言おうと口を開くが、それより先に私の手足に異変が  
生じた。

い、痛……何か手足がじんわり痛い。

「何か痛い」

「成長痛じゃないかな。」

神族だった時には止まっていた成長が、今一気に来たんだろうね」

思わず呟いた声に、邪神が理由を説明してくれた。

確かに、神族であった間には成長していなかったけど、私はその  
間に一つ歳を取っている。本来であればある程度の成長はあった筈  
だ。そんな急に成長すれば、痛みが生じるのも不思議ではない。

激痛という感じじゃないけれど、じんわり痛い。

「テナは大丈夫？」

成長が止まっていたと言う点では使徒族となっていたテナも同じ  
だ。いや、私よりもテナの方が年齢的に成長の度合いが大きい分、  
痛みも大きいだろう。心配になって質問する私に、テナは痛みを堪  
えながら返答を返してきた。

「は、はい……手足と胸が痛いですけど、これくらいなら我慢出来  
ます」

胸？ 確かにテナは胸の辺りを痛そうに押さえているけれど、何  
故だろう？ 私は何ともないのだけど……。

みんなの眼差しが生温かいので、取り合えず私も胸を押さえておくことにした。……生温かさが増した、何故だ。

まだ痛みは残っているけれど、大分慣れてマシになってきたので、改めて対面の続きをすることにした。

目の前に立つ『神としての私』を改めて見る。顔も体型も格好も私自身と瓜二つだけれど、やはり何処か存在感のようなのが異なっている気がする。目の前の彼女は、より純化した神族なのだから、それも当然なのだろう。

「貴女には色々押し付けてしまっけど……」

「気にしなくていい。貴女の記憶も想いも最後には私のところに還ってくる。」

人としての一生を満喫してきて」

どちらも私なので議論しても仕方ないかも知れないが、『神としての私』がそう言うってくれたことで罪悪感が少し減って心が軽くなった。

「分かった。」

「それで物は相談……」

「？」

『神としての私』がキョトンとした表情になる。自分も周りからこ

んな風に見えているのかと、少しくすぐったい気持ちになった。

「お金頂戴」

「……………」

自分自身にジト目で見られるという経験をしたのは、この世界で私が初なのではないかと思う。

しかし、これはきちんと話しておかないといけないことなのだ。神族だった時は食事も趣味以上の意味はなく衣も住もお金は掛からなかったが、人族に戻った以上は先立つものがないと生活出来ない。『神としての私』はこれまで通り神殿に居続けるのだろうけど、私は人族としての一生を満喫するためにもいつまでも神殿に引き籠っているわけにはいかない。そうすると、住居を手に入れるにしても宿に泊まるにしても、やはりお金は必要になるのだ。

現在の資産の所有権が『神としての私』にあるのか私にあるのかは微妙な線だが、邪神として得たお金のほうが多いためこのままいくと不利だ。ここは、交渉によって分け前を勝ち取らなければならぬ。

「7:3」

「どっちが7？」

「もちろん私」

「それは偏り過ぎ、そもそも神族の貴女はそんなにお金は必要無い筈。5:5」

「それは持つていき過ぎ。あれは邪神として得たお金。6:4」

暫く応酬が続いたが、流石に『私』は手強かった。

結局、私の取り分は四割となったが代わりに以前手に入れた聖剣、聖槍、聖弓を持っていいことになった。

と言っても、これらについてはソフィアやアンバー達との勝負

が終わったため、条件付きで勇者達に返すことになっている。言ってみれば、その条件を課す資格　勇者達への命令権　を譲り受けたような形だ。

「貴女と言う人は……」

「ま、『強欲』の権能持ちだしな」

「アンリ様……」

「……………」

「あははは、君は本当に面白いね」

交渉に熱中している間に、周囲のみんなから物凄く呆れた視線を向けられていた。

ちなみに、レオノーラとリリは相変わらず土下座したりテナの後ろに隠れたりしている。空間内に魔眼を持つ者が二人も居ると、視線から逃れるのも難しいみたいだ。

「アンリ様が二人！？　これは私の祈りが叶った結果でしょうか」  
「落ち着いて」

そして、お前は一体何を祈ってた。

何処で暮らすにしても、『神としての私』と私が瓜二つである以上、教皇には話を通しておかないと色々混乱を招きかねないと思っ  
て顔合わせをすることにしたのだが、二人に増えた私を教皇が見た



直後の言葉がそれだった。

顔合わせと言っても、既にお互いに見たことがあるので事情説明がメインなのだが、どうにも初っ端から意気を削がれた気分だ。

「成程、お話は理解致しました。

つまり、『神としてのアンリ様』はこれまで通り神殿におわし、

『人としてのアンリ様』は下界に住まわれると言つことですね」

「下界……」

神が住む世界と人が住む世界と言つ意味では間違つていない表現だけど、こんな目と鼻の先でそんな言葉を付けるのはどうなのだろうか。

「それで、どちらに住まわれるのでしょうか。

必要とあらば、神殿の3階層の部屋を整えますが……」

その言葉に、私は少し考え込んだ。

神殿に住むと言つ選択肢はない。それでは、これまでとあまり変わらない。かと言つて、邪神と同じ姿をした私が神殿の周りの街に住むのは色々とリスクが大きい。バレなければ問題ないとも思うものの、念には念を入れておいた方がいいだろう。

一番良いのは、街から少し離れた場所に屋敷でも建てることだろうか。

幸いなことに、資金もあるし体力のある働き手にも当てがある。

「街の外に屋敷を建てて住むことにする。

建築士の手配と、完成するまでの仮の住処をお願い」

「畏まりました。すぐに手配を致します。

完成までは3階層のお部屋をお使い下さい」

そう言つと、教皇は慌ただしく謁見の間から立ち去っていった。

「それじゃ、そろそろ行くから」

「分かった、何かあつたら連絡して」

荷物も持ったし、お金もきっちり四割貰った。旅立つ準備は万端だ。旅立つと言つても、屋敷の建築が終わるまでは神殿の部屋か街の宿に泊まるだけだ。

それくらいならここにいってもいいような気もするけど、やはりケジメはきっちりと付けるべきだろう。ズルズルと居続けるのは良くない。

なお、聖剣、聖槍、聖弓については暴れ続けているせいでダンジョンの一室を開かずの間にして対処していたが、よくよく考えればアイテムボックスに放り込んでおけばそんなことをしなくて済むということに気付いた。今更だ。

私は部屋の外に出て、待っていた三人に声を掛けた。

「テナ、リリ、レオノーラ……もう出られる？」

「はい、大丈夫です」

「はい」

「ああ、私の方は問題ない」

神殿を降りる私と一緒に付いてきてくれるのはこの三人だ。但し、レオノーラは元々魔族の国との連携役としてこの教国に居たので、私と一緒に住むと言うよりはニヶ所を行き来するようになることを予定している。

謁見の間がある4階層から階段を降り、3階層に足を進める。

ここから下は信徒に開放している階層であるため、基本的に私は

これまで足を運ばないようにしていた。仮にも神として崇められていた者が気軽に降りていつては混乱を巻き起こすと思つての配慮だが、人族に戻つた今であれば問題ないだろう。

3階層以下に居る信徒でこれまで私が直接会つた人物は教皇くらいなので、顔がそこまで広まってることはあり得ない。もしかすると私が神族になつた時に目撃していた人物は居るかも知れないが、一年前の話だし遠目だつたから問題ないだろう。

「そう言えば、まだ人形を持つたままなんだ？」

「いや、お前が取つてくれないからだろう……」。

「いい加減取つてくれないか？」

レオノーラはあれからずっと人形を腕に抱えている。もう既に皆の中でその光景が普通になつているし、そのままでもいいのではないかと私は密かに思っている。

それに、取つてくれと言われても

「無理、もう外せない」

「は！？ どういうことだ？」

「それを外せるのは『神である私』だけ。人族に戻つた私には外せない」

そう、呪いを克服出来たのは神族になつたからだつた。逆に人族に戻つた以上、最早その人形の呪いは私にはどうにも出来ない。

ん？ 今何か大事なことを見落としているような気がした。

「ちょっと待て、それでは私はずっとこのままでないといかんのか？」

「『神である私』なら外せるだろうけど、今出てきたばかりだし戻るのはなし。」

似合ってるからそのまま持つてれば？」

「勘弁してくれ……」

がつくりと肩を落とすレオノーラ。まあ、気が向いたら『神である私』に連絡して外すように頼んであげよう。気が向いたら。

話をしている間に3階層の入口の大扉が近付いてきた。ここから先はある意味において新たな門出の第一歩となる。

私は少々の期待と不安を胸に抱きながら、大扉を開けた。

大扉の先には広い部屋があり、少なくとも人数の人が動き回っていた。それらの人々は扉の開く音に反応して、各々の作業の手を止めて私達の方を向く。

大勢の視線が集まって思わずたじろいだが、今の私はもう人族に戻ったのだから別に注目されることはない、気を取り直す。

が次の瞬間、部屋に居た人達は一斉に土下座を始めた。

何故？　と思うが、すぐにピンと来て慌ててステータスを確認する。

「ステータス」

名前：アンリ  
種族：人族 「OLD」  
性別：女  
年齢：18  
職業：魔導士 「OLD」  
レベル：1  
称号：戦慄の邪人、ダンジョンマスター、変人  
魔力値：3031504  
スキル：邪神オーラ（Lv・5）  
悪威の魔眼（Lv・5）  
加護付与（Lv・7）  
状態異常耐性（Lv・6）  
闇魔法（Lv・6）  
アイテムボックス（Lv・4）  
ダンジョンクリエイト（Lv・7）  
装備：災厄の扇  
黒死薔薇のドレス  
墮落のベビードール  
淫魔のスキヤンティ  
闇のパンプス  
眷属：テナ 「OLD」

やっぱり、スキルが普通に残ってる……。

人族に戻ると言うから神族化のために不相应に植え付けられていた邪神用スキルも一緒に無くなると思っていたのに、神族になる直前の状態にまでしか戻ってない。

って、よく考えればテナが眷属なのだから、少なくとも加護付与スキルを持ったままなのは確定だったのか。もっと早く気付くべき

だった。

しかし、それ以上に称号の戻り方が中途半端過ぎる。『戦慄の邪神』が『戦慄の邪人』で『変神』が『変人』って、『神』を『人』に変えただけじゃないか。と言うか、誰が『変人』だ。

私は苛立ちのままにステータス表示の称号の部分を手につ扇で叩いたが、当然ながらすり抜けるだけで表記は何も変わらなかった。その時、ふと手に持った扇に目が留まり、嫌な予感がした。

私はその予感のままに、扇をその場に置いて近くの机の上にあったペーパーナイフを手にとってみた。

……次の瞬間、地面から飛び上がった扇にペーパーナイフが私の手から叩き落とされる。

ああ、やっぱり……。

人族に戻ったせいで克服した筈の呪いも元に戻ってしまったているようだ。また、着た切り雀生活になるのか。

「アンリ、どうかしたのか？」

頭を抱える私に、人形を抱えたままのレオノーラが心配そうに話し掛けてきた。

そうだ、さつき人形の話をした時に感じた違和感はこれだったのか。人形の呪いを外せないなら、装備の呪いも同じ状態で当然だった。

レオノーラに呪いの人形をしばらく持つるように言った報いだろうか。

人を呪わば穴二つ、大分変則的だけど。

その後しばらく頭を抱え込んだが結局どうにもならないので、元々の状態に戻っただけだと思っことにした。

それよりも重要なのは、今周囲で土下座をし続けているこの人達をどうすべきかだ。

一般人なら脱兎の如く逃げ出す私の魔眼と目を合わせて土下座で済んでいるのは、この人達の精神力が並みの人より強いからなのか、それともこの国にずっと居るせいで邪神の力に慣れたのか。

いずれにしても、信徒に開放した1階層から3階層の内、最上階層である3階層に居るこの人達は教国の主要人物なのだろう。彼らくらいには教皇に話したように私と『神としての私』の関連性を説明しておいてもよいのではとも思うが、如何せんかなり人数が多いし噂が拡散しないと言い切れない。

ならば結論は一つ……

「戦略的撤退」

三十六計逃げるに如かず、全員が土下座で下を向いているうちに姿をくらまそう。今なら多分気のせいで済ませられる……といいな。幸いにしてここはダンジョンの地上階層であるため転移出来る。

本当は新たな門出だから歩いて外に出たかったのだけど、この際仕方ない。

そう結論付けた私は、転移の魔法陣を展開して、三人と一緒に神殿の入口まで一気に移動した。

移動した先は幸いにも物陰であり、いきなり人に囲まれるという事態にはならず済んだ。

「い、いきなり跳ぶな」

「ビックリしました」  
「うう……」

三人がいきなり移動させた私に抗議してくるが、あの場合は仕方ないだろう。

私は取り合わずに、神殿の入口の様子を窺う。神殿の入口付近に人が居ないわけではないが、それでもそれほど多くはない。今なら注目されることなく外に出ていけそうだ。

「行こう」

「やれやれ」

「はい」

「分かりました」

私達は物陰から出ると、神殿の入口を潜った。

丁度昼時であり、高く昇った太陽の光が暖かく周囲を照らしている。

気温は高めだが涼しい風が吹いているせいで、それほど暑さは感じない。

久し振りに吸った外の空気に、とても清々しい気分になる。

……あれ？ 私、もしかして神族になった一年前から外に出るのは今回が初めてなのでは……？

いやいや、そんなこと……あるはずが……あるかも。



自分の引き籠もり振りに戦慄していた私だが、ふと視界に妙なものが映り、そちらに気を取られた。

神殿の横で工事が行われ、何か巨大な建築物が建てられている。しかし、どうも形状が普通の建物とも違うように見える。その建築物の横幅はそれほど大きくないが高さは神殿の半分程である、しかもまだ建築途中でありこれから更に高さを増すようだ。

「テナ、あれが何だか分かる？」

私達の中で、教国の事情に一番詳しいのは中継ぎをしていたテナなので、試しに聞いてみた。テナは私の質問に首を傾げるが、視線の先を追って工事現場を見ると、頷いて回答を返してくれた。

「え？ ああ、あの工事ですね。」

教皇さんがアンリ様の像を造ると言っていましたよ」

あの話、本気で進めてたの！？」

そんな物を建てられたら、どうあっても私と『神としての私』の関連性を隠せないじゃないか。

いや、でも私の顔をきちんと把握しているのは教皇くらいだし、建築士の人も顔が分からなければそんな似ている像は造れない筈……。

「設計図は教皇さんが自分で引いたらしいですよ。」

私も見せて貰いましたけど、出来上がり予想図はアンリ様にそっくりの素晴らしい出来でした！

あの人、絵も描けるんですね」

「確かに、あの絵の出来は中々だったな」

要らんとところで余計な才能発揮するな。

今すぐやめさせたいけど、見たところ既に邪神像建築は戻れないくらいまで進捗が進んでいる。

あれだけの建築物となると最早国家事業であり、途中で止めたりしたら様々な部分に影響が出ることは避けられない。

「完成したら神殿と同じくらいの高さになるそうです。

きつと、隣の王国からでも見えたりするんじゃないでしょうか」

決めた、屋敷を建てる場所はなるべくここから遠い場所にしよう。そして隠れて住もう。

今度こそ普通の人として生きていけると思っていたけれど、やっぱり私には波乱万丈な運命が待っているようだ。

それでも、かつて邪神になってしまった時だって、みんなと一緒に笑って過ごすために頑張ろうと思えた。

だったら、人間に戻れた今だって同じように頑張れる筈だ。

いずれもう一人の私のところに還る時が来たら、精一杯人としての人生を満喫したと言えるように、

もう邪神じゃない、普通のアンリとして歩いていこう。

「ところで、それは何だ？」

「経典のオリジナル、間違えて持って来ちゃってた」

<元邪神アンリ>

フォルテラ王国と神聖アンリ教国の国境付近に屋敷を建てさせ、  
テナヤリリと共に暮らす。

なお、屋敷は存在を知るものからは「黒薔薇邸」と呼ばれている  
が、設計を教皇に任せたせいで、とんでもない広さの豪邸となつて  
いる。

時折厄介事が起こることはあるものの、概ね望んでいた平穏な生  
活を送ることが出来ている。

なお、分離した際にダンジョンマスターの権限を持つて来てしま  
っていることで『神としての自分』が困るのだが、まだ気付いてい  
ない。

巨大邪神像のせいで顔が知れ渡ってしまったため、最近では仮面を  
愛用している。

「何故だろう、注目されてる気がする」

<元使徒テナ>

人族に戻ったアンリに仕え、身の回りの世話を続ける。

ずっと会うことを躊躇していた自身を奴隷商人に売った家族とも  
対面を果たし、和解した。

黒薔薇邸に居住を移してからしばらく後に、一人の青年と出逢い  
騒動に巻き込まれる。

「アンリ様、お茶が入りましたよ」

<元生贄リリ>

アンリの屋敷にて共に暮らす。

最近、姉代わりのテナに倣って家事を覚え始めた。

慣れたのか、アンリの魔眼と目を合わせても逃げずに居られるようになった。

「アンリ様、テナお姉ちゃん、ご飯出来た」

<魔炎姫レオノーラ「ロマリエル」>

神聖アンリ教国との国交樹立への貢献を功績として、若くして魔王の座を譲り受ける。

両国の懸け橋となり、本来敵対種族である筈の人族からも慕われる。

なお、人形を片時も離さず持ち続けているため「人形姫」や「実は人形の方が本体」などの異名を持つ。

「違うと言ってるだろう!?!」

<教皇ハーヴィン>

今日もはっちゃけ布教中。

完成した巨大邪神像にご満悦の様子。

最近では信徒への配布用の小型邪神像の大量生産を目論んでいる。

「フッフッフ、草の根アンリ様計画は順調ですね」

< 聖剣の勇者アーク >

< 護剣ジオ >

< 魔炎フレイ >

< 清風ウイデイ >

聖剣をアンリから返して貰う為、屋敷の建築で散々扱き使われる。なお、アークが開放されないと身動きが取れないため、パーティーメンバーも巻き添えで働かされた。

魔王討伐の旅はアークがその気をなくしてしまったため頓挫した。

「も、もう大工仕事は嫌だ……」

「まったくだぜ」

「ほんつと扱き使ってくれちゃって」

「凄い人でしたね……」

< 聖槍の勇者ライオネル >

< 聖弓の勇者オーレイン >

アークと同様、聖槍や聖弓の返還と引き換えにアンリに屋敷の建築をさせられる。

共に作業する中で愛が芽生え……なんてことも無く、ライオネルが一方的にオーレインを口説き続けている。

「なあ、そろそろ俺達付き合わねえ？」

「いい加減しつこいですよ、ライオネル」

< 魔王エリゴール＝ロマリエル >

娘であるレオノーラに魔王位を受け渡し、気儘な冒険者暮らしに。ダンジョン「邪神の聖域」に挑戦を繰り返している。

何気に攻略出来なかったことが悔しかったようだ。

「むう、今日こそは行けると思ったのだが」

< 烈風騎レナルヴェエ >

< 血氷将ヴェイクト >

四天王として、新たな魔王であるレオノーラに仕える。

「先代陛下はご無事だろうか」

「あの方なら何があってもそう滅多なことにはなりませんよ」

< 剛地鬼イジド >

十円ハゲも治って職場復帰。

「俺はハゲじゃねえ……っ！」

< 邪神アンリ >

邪神殿最上階にて、世界の管理を続けている。  
時折、人としての自分の様子を観察している。

「あの仮面、格好いい……」

< 光神ソファイア >

< 闇神アンバル >

勝負が終わった後も、何故か邪神殿に留まり続けている。

その意図は不明だが、そのおかげもあって邪神アンリの寂しさは和らいでいる。

「悪いことは言いません、やめときなさい」  
「まったくだ、趣味悪いぞ」

<黒龍ヴァドニール>  
「こい」を覚えた。

「グルルル……」

<邪神の鎧アンリルアーマー>

一号は相変わらず20階層でボス稼業に励んでいる。  
新たに召喚された二号は黒薔薇邸の番鎧として活躍中。  
なお、二号は一号と異なり女性用鎧をベースにしている。

「……………」  
「……………」

<死を超越せし皇インペリアル・デス>

ダンジョンの30階層はあまりに攻略者が来ないため、普段は邪神殿上層階で邪神アンリの側近をしている。

テナが居なくなったことにより家事を行う者が居らず様々な面で居住の危機であったが、数百年の経験を持つ彼の存在で危機は回避された。

必要も無いのに食事をしたがる三柱のための料理も彼が行っている。



テナが居なくなつたためにアンリルアーマーに搭乗出来るのは邪神アンリと彼だけになってしまったが、代わりにアンリルアーマーに搭乗した上で黒龍ヴアドニールを乗騎とする最終形態アンリル・デスライダーを編み出した。なお、生身の方が強いのは言うまでも無い。

「貴女様に永久の忠誠を」

<邪神？>

今日も「狭間」で揺蕩っている。

時折、邪神殿を突然訪れて邪神アンリ達に絡んでは蹴り出される。

「さて、次は何で遊ぼうか」

## 20：普通のアンリ（後書き）

以上をもちまして、邪神アベレージ本編完結となります。

この後少し間を置いてから番外編などを投稿するつもりではありませんが、

アンリの物語「は」これにて終了です。

途中、展開について色々ご意見も頂戴しましたが、

何とか完結まで漕ぎ付けられたことはひとえに応援して下さいました皆様のおかげです。

ご読了、そして応援本当にありがとうございました。

なお、今後の予定についての詳細は活動報告をご参照頂きたいと思いますが、少しだけここで宣伝しておきます。

光神と闇神、そしてちよつとマイペースな邪神が治める世界。

その世界の最大勢力を誇る聖光教は、権威を失いつつあった。

焦る上層部は権威回復の象徴として、勇者召喚の儀式を強行する。

しかし、もっとマイペースな邪神の介入によって、召喚された青年には厄介なスキルが付与されていた。

騒動を起こし追われる身となる青年は、一人の少女と出逢い、共に理不尽へと立ち向かう。

「邪神アベレージ」の世界で贈る新たな物語  
O n o u c h i C o m i n g S

## 外伝01：ある宗教の転落模様（前書き）

以前お伝えしていた通り、後篇の外伝を投稿開始致します。  
前篇の時ほど数は多くならない予定です。

なお、書き溜めゼロのため不定期投稿になると思います。（なるべく定期的に更新出来るよう努力はしますが）

まずはジャブとして、とある宗教のざまあ……じゃなかった、因果  
応報な転落模様です。

裏側（本編）を考えなければ、一見結構シリアス風味。

## 外伝01：ある宗教の転落模様

「邪神を信奉する国家樹立じゃと……」  
「なんと……」

ルクシリア法国の上層部が集まる会議場は荒れていました。

原因となったのは先日彼らが討伐のために聖光騎士団の派遣を決定した相手が、国家樹立の宣言を各国に通達したことです。

尤も、議題が明らかになつた時点で会議が荒れることは目に見えていたため、さして驚くべきことはありません。

会議場は四角く机が配置され、それぞれ南北東西に分かれてルクシリア法国の重鎮達が座っています。

入口から一番奥に当たる北側には法国の国事を統括する法王庁の枢機卿と大司教二名。

東側には聖光教の教義を司る聖典省の枢機卿と大司教二名。

西側には各国との外交を含めた教区の管理を行う教区省の枢機卿と大司教二名。

最後に南側には聖職者の育成などを司る修道省の枢機卿と大司教二名。

そして法王庁の重鎮の背後、部屋の一番奥に置かれた御座には当代の法王が座しています。

計十三人がこのルクシリア法国の上層部であり、また人族領の最大宗教勢力である聖光教の上層部でもあります。

各人はそれぞれ従者を後ろに立たせており、かく言う私もその一人、修道省の大司教の従者としてこの場に居ることを許された身です。尤も、私の場合は本来この場に同席すべき者が「偶然にも」体

調を崩したために代理としての参加なのですが。

「ふざけるな、そのようなこと認められるものか!」

「そもそも、邪神などと言う存在自体がまず疑わしい!」

怒鳴り声を上げたのは聖典省の者達でした。

聖光教の教義を司る彼らにとってみれば「邪神国家樹立」というのが受け入れ難いというのは理解出来ます。

しかし、「邪神」の存在が疑わしいというのはどういうことでしょうか……と、以前の私であれば疑問に思ったかも知れませんが。

元々「邪神」とは彼ら聖典省が声高に存在を提唱していたものなのですから、存在が疑わしいという言葉はそれまでの彼らの主張と矛盾します。

しかし、裏事情を知れば、彼らがそのように考える理由はすぐに分かりました。

まさか、「邪神」という存在に対する聖光教の主張がでっぴり上げによるものだったとは。

架空の対立存在を設けて教義に組み込むことで信徒達の恐怖を煽り結果的に聖光教への依存を高める……彼ら　と言っても、実行したのは数代前の話になりますが　の狙いはそんなところでしょうか。

当然、この場に集う上層部の者達にとってはそれが共通認識であったため、実際には実在した「邪神」の存在を今更簡単には受け入れられないでしょう。

「聖光騎士団の先行部隊として軍を進めたフォルテラ王国からは、

本物の邪神を目撃したと報告が来ておりますが……」

「馬鹿馬鹿しい、単なる見間違えか敗走したことに對する言い訳だろつ。」

「寄付金を値切ろつなどという不信心者達の言うことだ、信じるに値せん」

「この中では最年少　それでも壮年ですが　の大司教がフォルテラ王国からの報告書を見ながら言いますが、教区省の枢機卿に切つて捨てられました。」

尤も、言つた側も報告を信じていたわけではないらしく、発言を否定されたことに對して不満そうな様子は見られませんでした。

「まあ、この際邪神とやらが本物であろうと偽物であろうと関係なからつ。」

我らのするべきことは何も変わらぬのじゃからな」

「然り然り、邪神などを信奉する国家と言つ時点では我らに對する…

…否、人族領全てに對する敵對宣言と言えよう」

修道省の枢機卿の言葉に、法王庁の枢機卿も同調しました。そしてそれは、この場に座す全ての者も同意見のようです。

無論、背後に座す法王も含めて、です。

「聖女神様にお仕えする下僕として、斯様な宣言を認めるわけにはいかぬ。」

「当然のこととは思つが、異論はないようじゃな」

老齡の法王が御座から立ち上がり、重鎮達を見回しながら言いました。

「それでは、法王猊下……」

「私の名で宣言の否定を表明しなさい。

また、各国にも我らに同調するように呼び掛けなさい」  
「は、そのように」

法王の勅命を法王庁の枢機卿が受け、会議は終わりました。

「フォルテラ王国は何を考えている!？」

先の法王の声明に対するフォルテラ王国の対応を受けて、急遽、臨時会議が召集されました。

元々この会議は年に一回程度定期的に開催されるものであり、このような短期間で二回も緊急召集されること自体が極めて異例です。しかし、状況を考えればその対応も当然と言えるでしょう。

フォルテラ王国はルクシリア法国の呼び掛けを拒否して邪神国家樹立宣言に対して中立の立場を取っただけでなく、現聖光教上層部つまりはこの会議場に集った者達の不正を訴えて新たに派閥を形成し敵対の構えを取りました。

聖光教の総本山であるルクシリア法国に対して反対勢力がこれまでに皆無であったわけではないですが、一つの国家が丸ごと対立姿勢を見せたのは有史以来初めてのことです。

勿論、それが単に聖光教を否定するものであれば、聖光教を国教とする各国とも反目しフォルテラ王国は孤立することになったでしょう。

しかし、王国は聖光教自体を否定するのではなく、現上層部の腐敗を訴えた上に女神の教えの忠実であることを主軸とした新たな派閥 オリジン派を立ち上げました。



それは、彼らにとって単なる敵対よりも遙かに脅威でした。

「オリジン派だと……我らの教義を否定するとは、戯けたことを」  
「大方、先の聖光騎士団の派遣に関しての反発といったところだろうな」

教義を司る聖典省の枢機卿はその報告にあからさまに顔を顰めています。彼らからすれば、自分達の顔に泥を塗られたようなものですから、それも無理はないでしょう。

教区省の枢機卿も不機嫌そうですが、それは別の理由によるものでした。

「それで、各国に対する影響はどうだ？」

「抑えに動いては居るが、かなり動揺が広がっている。」

あまり派手に抑圧すると逆効果になりかねんから、慎重にならざるを得ない」

「それもやむ無しか……ええい！ 忌々しい！」

教区省の者達の頭を悩ませているのは、フォルテラ王国によって暴露された聖光教上層部の不正の情報に対する情報統制でした。横行する贈収賄や職権濫用から始まり教義に関するでっち上げまで、彼らが長年行ってきた悪事が一挙に表沙汰となり、信徒達からの疑惑を抑え込むのに東奔西走しているのです。

無論、それらが根も葉もない噂であれば抑え込むことはそれほど難しくはなかったでしょう。しかし、大半が真実であり各国も暗黙の了解として周知のことであつたため、情報統制は容易ではありませんでした。

国土も小さく人口も少ないルクシリア法国が各国よりも優位に立っているのは、聖光教の総本山と言う絶対の権威があつたためです。逆に言えば、その権威が揺らげばあつと言う間に優位性を失うこと

になりかねません。

「今はとにかく他の各国がフォルテラ王国の作る派閥に取り込まれないよう、働き掛けるしかないな」

「そうじゃな。各国の教会派に工作させるとしよう。」

フォルテラ王国に対する直接の対処は後回しとなるが、そこは仕方なからう。

派閥が広まってしまつては手が付けられなくなるからの」

権威が利権を生み、利権が権威を生む。長年に渡つて彼らが伸ばしてきた根は各国の中にも深く根差しており、その人脈を駆使しての工作は非常に高い効果を発揮するでしょう。

当然、王国側もそれは理解しているでしょうから、それを抑えに掛かる筈です。当分は水面下での熾烈な勢力争いが続くことが予想されます。

しかし、動員出来る工作員の数からしても法国側の方が有利と言わざるを得ません。

何か根本から覆すような事態が発生しない限り、王国側が優位に立つことは難しいでしょう。

それを理解しているからこそ、不機嫌ではありながらもこの場に集つた法国の重鎮達は比較的余裕のある態度でした。

「バ、バカな……聖女神様が何故……？」

先の会議から暫く経つたある日、事態は急変しました。

聖女神ソフィアによる全人族に対する啓示という異例の事態に、一夜にして各国の情勢が一変しました。

啓示の内容はこれまで人族に知らされていなかった闇神の存在と、これまで知らされてきたものとは様相の異なる「邪神」の存在、そしてそれらの神々との三つ巴の勢力争いのために、人族によるダンジョン攻略が必要なことなどでした。

啓示を受けたのが極一部の者であれば虚言として片付けられたかも知れませんが、全人族に対して齎されたこれを嘘だと断じることが、聖光教の上層部も含めて誰にも出来ませんでした。

そして、それは同時にルクシリア法国が窮地に立たされたこととも意味します。

他ならぬ信仰対象である聖女神によって、これまで主張してきた教義が一部とはいえ否定され、またその否定内容がフォルテラ王国による暴露と合致しているのです。

主張の一部が肯定されれば、当然他の主張についても正しいと考えるのが自然な流れです。他の主張……すなわち、聖光教上層部の不正についてもです。おそらく全ての信徒達が思ったことでしょう、王国の主張が正しいのではないかと。

「まずいのう、このままでは……」

「早急に何らかの手を打たねばなるまい」

「しかし、手を打つと言ってもどうするのじゃ。」

この状況で王国に対して強硬手段に出るのはおそらく逆効果になるじゃろう。

問題の国に対する工作も禁じられておるしの」

「それは……」

法王庁の枢機卿の言葉に、他の者達も黙り込みました。確かに彼の言う通り、この状況下で下手に聖光騎士団の派遣などを宣言した

ところで疑惑は逆に強まるだけでしょう。

「邪神国家」に対する攻撃や工作で疑惑や不満の矛先を逸らすという選択肢も、他ならぬ聖女神からの命により禁じられています。

「やむをえまい、邪神に関するフォルテラ王国の主張については、教義の誤りを認めるしかないじゃろうな」

会議場が沈黙に包まれる中、法王庁の席の後ろから声が投げ掛けられました。

「猥下、しかしそれは……」

「聖女神様によって王国の主張が肯定されてしまった以上、ここで強硬に反論するわけにはいかぬ。

無論、他の主張については否定し、少しでも損害を減らすようにせねばならぬ」

それは、これまで人族領を裏から支配してきた聖光教が妥協し、一部とはいえ実質的な敗北を認めた瞬間でした。

王国側はこの機を逃さずここぞとばかりに責め立ててくることでしょう。

長きに渡って権威を保ってきたルクシリア法国に、冬の時代が訪れました。

「報告は以上になります」

「御苦勞様でした。」

ふっふっふ、聖女神の啓示はこちらの有利に働きましたね。

彼ら聖光教が派閥争いにかまけている間に、我が国は国力の増強を図るとしましょう。

それが、アンリ様の意にも適いますからね」

「御意に」

「さあ、これから忙しくなりますよ。

布教活動にも力を入れなくてはいけません。

例のモノの建造も進めなくては」

外伝01：ある宗教の転落模様（後書き）

活動報告の方ではお伝えしましたが、ご覧になっていない方も多いと思いますのでこちらでも御連絡させて頂きます。

<1. なるうコン最終選考通過>

おかげ様で第三回なるうコンの最終選考を通過し、書籍化に王手が掛かりました。

<http://www.wtrpgg.com/novel/>

ここまで来れたのも読んで下さっている皆様のおかげです。ありがとうございます。

上記サイトトップページにて受賞作21作品が列挙されていますので、ご興味がおありの方は是非ご覧下さい。

<2. Twitter始めました？>

実際には結構前からアカウントだけ登録してはいたので、「始めた」は不正確です。

重要なことは活動報告でもお伝えするつもりですが、それ未満のこととはこちらで咳くかも知れません。

まったり進行ですのでツイート少なめです。（使いこなせてないだけという噂もあります）

アカウント：@yunakiki\_kitaseno

<3・童話パロディ>

童話パロディ「本当はとても邪神な童話集」を非開示設定で投稿しております。

非開示設定のためマイページには直接表示されませんので、ご興味がおありの方はシリーズの方からご覧下さい。

外伝02：ある経典のパンデミック（前書き）

今回は三人称にしてみました。



## 外伝02：ある経典のパンデミック

「これが問題の書物か」

とある国の一室で、数人の者達が集まり机の上に置かれた一冊の黒い装丁の本を覗き込むようにして観察していた。

「は、決してお手を触れぬようにご注意ください、陛下」  
「分かつておる」

陛下と呼ばれたのはその国の国王であり、その場に集った他の者も国政において重要な位置を占める者ばかりだ。

それだけの者達がこうして集まっていること自体、事態が並々ならぬことを意味している。

「黒の経典、か。  
厄介なものをばら撒いてくれたものだ」

彼らの視線の先にある本は黒の経典と呼ばれる書物だ。

尤も、黒の経典とは目の前のこの一冊のみを指すわけではない。

「確認出来ているだけで、既に百冊以上が国内に持ち込まれていま  
す。」

未確認のものも含めれば、おそらくは数百冊に達するかと……」

報告をしているのはこの国の宮廷魔導士を統括する男であり、魔導研究所の所長でもある有能な男だ。

彼はそう言いながら、黒の経典の表紙をめくった。

「お、おい！？ 触れて大丈夫なのか！？」

所長の行動に対して重臣達が慌てるが、所長は諦めたような声で答えた。

「私は既に一度触れてしまっていますので……」

言われてみれば、所長は先程から右足を庇うかのようにびっこを引いている。それに気付いた重臣達は痛ましそうに彼を見るのだった。

「こちらをご覧下さい」

表紙をめくった裏側には、この書物の注意事項が記載されている。その注意事項によると、この書物は呪いの書物であり、渡されて触れてしまった者には不幸が訪れると記されている。不幸を回避したければ、書物の内容を書き写して別の誰かに渡すことが必要であり、写本をするまでは延々と不幸が続く。そして、呪いは書き写された書物にも発現するのだ。

黒の経典……それは邪神によって記されたとされる最凶最悪の呪いの書だった。とある国より広まったその書物は、今現在各国で猛威を振るっていた。

「不幸を回避したければ書き写せ、か。

これでは広まっていくのは当然だな」

「はい」

当然、黒の経典を渡されてしまった者は不幸を避けるため、経典を書き写して別の誰かに押し付けるだろう。それをやめると言うのはずつと不幸に襲われていると言うのと同義であり、まず受け入れられるものではない。仮に禁止したところで、反発を生むだけだ。

「解説は無理なのか？」

「聖光教の大司教でも無理でした。籠められた呪いが強力過ぎます」

尤も、籠められた呪いや仕組みの凶悪さに比して、訪れる不幸は拍子抜けするほど軽いものであり、そのギャップに研究者達は首を傾げている。もたらされる不幸はランダムであり、その時によって異なるが、いずれも嫌がらせ以上のものではない。所長がびっこを引いているのも、右足の小指を柵にぶつけるといふ呪いの影響であり、別に重傷ではない。

しかし、だからと言って無視出来るかと言えば、それもまた難しい。

所長にしても、最初は他の誰かに被害を広げるつもりはなかったが、右足の小指を三度連続で柵にぶつけた辺りで屈服し、写本を行って副所長に押し付けた。この行為により、現在、副所長の所長に対する忠誠度は大分下がっている。

「止められぬ、か」

「止めることは難しいでしょう。しかし、被害を誘導することならば出来ます」

「やむをえん、その方向で国内の被害を減らすしかあるまい」

経典を写本し誰かに押し付けることを止めることは難しい。しかし、押し付ける先を指定することは不可能ではない。そうやって被害を国外へと流してしまえば、根本解決にはならなくても取り敢え

「この国は救われる。」

「隣国との関係悪化が予想されますが……」

「無論、表向きそんなことは口外せん。」

国外に出る行商などに渡し、自主的に持って行かせるようにするのだ」

「なるほど、逆に隣国から持ち込まれないようにも注意が必要ですな」

「ああ、早急に手配を進めよ」

「は、承知致しました」

国王の命を受け、重臣達が動き出す。

これによって、この国における黒の經典の被害は減少方向へと向かうだろう。

勿論、押し付けられた国は別の国に押し付けるだろうから、順繰りに被害は国を渡っていく。その結果、不幸にも最後になってしまった国は押し付ける先が存在しないため、国の中でお互いに押し付け合うしかなくなる。

「今の各国の情勢を考えれば、それが何処の国になるかは明らかだがな」

「陛下？ 何か仰いましたか？」

「いやなに、法国との付き合い方を見直すべき時期かと考えていただけだ」

発端である国の流通経路上、近い程に被害は早く、遠ざかる程に遅くなる。ならば、彼の国と最も強い敵対関係にある国が、最後に回る対象となるだろうことは想像に難くない。

それが何処の国であるかは、誰もが共通認識として持っていた。

各国が黒の経典を恐れて対策を行っている中、逆に経典に対して大いに親しみを持つている国が一国だけ存在する。

神聖アンリ教国、邪神アンリを崇拜する者達が集まって建国された新興国家だ。現時点では未だ街と言うべき規模の小国でしかないが、日増しにその勢力を増している。

教国にとって、邪神アンリが書き記したと言われている黒の経典はまさに「経典」だ。国民の誰もが一冊は所持し、積極的に写本を行って国外へと布教を行うことが美德とされる。勿論、一国民には国外への輸出ルートなど無いため、一度国家が集約しまとめて送る形だが。

なお、国民達も最初の一度は呪われてしまうわけだが、それについては神の試練であると認識されている。

そんな教国に、この度新たに神殿に併設する形で二つの建物が建造された。

一つは孤児院、親を失った子供達を引き取り育てる施設だ。各国も孤児対策は行っているが不十分な感否めず、何処の国でも行き場を無くした子供達は出ている。そんな彼らをこの施設に集め、十分な食事と暖かい寝床、そして綿密な教育を与えるのがこの施設の役目だ。

孤児院に入った子供達には、読み書きや数学などと共に、教国が崇める邪神アンリ 教国では「邪」神とは認識されていないが如何に素晴らしい存在であるかを幼い内から教え込まれる。

邪神アンリへの信仰心が強く教育の行き届いた彼らは、教国における将来のエリート候補でもある。

もう一つの施設は写本堂、黒の経典の写本を行うための建物だ。建物の中には写本に必要な机と椅子に紙とペンが整然と並んでおり、奥には写し終えた紙を書籍の形へと製本する役割を担う者が待機している。

ここは同時に写本された経典を集める場所でもあり、堂内で書き写されたものだけではなく、国内のあらゆるところから書き写された経典が集まってくる。

写本堂に納めた経典の冊数は集計され、毎月その冊数が貼り出される。

見事一位に輝いた者には教皇自らが表彰を行うことになっているのだが、今のところその表彰が行われたことは一度もない。理由は簡単、写本数一位をとある男が独占しているからだ。

「ふむ、今日は調子がいいですね」

写本数一位を譲らぬのは他ならぬ教皇本人である。表彰を行うべき者が一位を獲っている限り、表彰は行われぬ。

現に今も、写本堂の一席に陣取って写本を行っているのだが、何とこの男、左右の手で二冊同時に書き写している。

通常写本する場合は写すべき元の書物と書き写す媒体である紙を並べて、元の書物を黙読しながら書き写していくものだが、この男の場合は既に経典の内容を一言一句違わず暗記しており、記憶から書き起こしているのだ。写本の体裁を整えるために一応経典も置かれてはいるが、基本的に中は見ていない。

暗記していることを抜きにしても左右の手で同時に書くと言うのは器用と言うしかないのだが、この業のせいで彼の写本スピードは常人の倍以上の速さを誇る。

同じことが出来る者が出て来ない限り、ランキング一位は揺るがぬだろう。

写本ばかりしていて国政は大丈夫なのかという疑問はあるが、きちんとそちらも対応しているから性質が悪い。

「きょうこう様ー、いつさつ出来ました」

「ぼくもー」

「わたしもー」

「おお、素晴らしいですね。アンリ様もきつとお喜びでしょう」

そんな教皇に対して、離れた場所で写本に取り組んでいた子供達が自身の成果を自慢げに報告する。

微笑ましい姿に教皇は穏やかな笑みを浮かべ、子供達を褒めた。

「わーい」

「もういつさつ書いてきますー」

「一位とれるかも！」

「ふふ、頑張つて下さいね」

なお、大人用のランキングとは別に子供達のランキングも存在しており、こちらは正常に機能している。孤児院の子供達を中心に、教育の一環として写本を行うようにしているためだ。経典の教えを学ぶとともに、読み書きの勉強にもなるという画期的な仕組みである。

内容的にも人が正しく生きるための道徳について書かれた書物であり、教育に悪いものでもない。

順位に応じて菓子が贈られるため、子供達も皆自主的かつ積極的に参加して写本数を競い合っている。

「ふふふ、やはり写本堂を建造して正解でした。

「これで布教も更に進むでしょう」



## 外伝02：ある經典のパンデミック（後書き）

なお、各国が上手く連携を取っていれば、死刑囚一人を犠牲にする  
ことで、案外アツサリと終息出来たかも知れない事案だったりしま  
す。

外伝03：ある主従のおさんぽ（前書き）

三人称挑戦継続中。

### 外伝03：ある主従のおさんば

魔物　それは一定以上の魔力を持った生物の総称であるとされている。

しかし、実のところこの定義は正確ではない。一つは魔力を持っていても人族及び魔族のことは魔物とは呼称しないこと、そしてもう一つはゴーレムやアンデッドなどといった生物以外の存在も一般的には魔物に分類されていることだ。

人族あるいは魔族にとって危害を与えられる恐れのあるものは全て「魔物」と呼ばれている、というのが最も実態に即している。

尤も、危害が与えられる恐れがあると言っても、街や村の近くに出没する一部の魔物が身近な脅威として存在するものの、その他の大多数の魔物と言うのは一般人にとって馴染みが深いものではない。ゴーレムやアンデッドなどはダンジョンや遺跡といった特定の場所にしか出沒せず、その他の強力な魔物は人里から離れた地を縄張りとして滅多に外に出てくることはないからだ。勿論、それらの魔物達が人里を避けたというわけではなく、むしろ逆にそれらの縄張りを避けて人里が築かれているといった方が正しい。

一部の冒険者を除けば、魔物と聞いてイメージするのはゴブリンやコボルト、せいぜいがオークぐらいといったものであるし、生まれた村や街で一生を過ごす一般人にしてみれば、それすら話に聞く程度で実際に目にすることは稀である。

彼らにとって強力な魔物などというのは、口伝で伝えられるような伝説やおとぎ話の中のみ存在するものである。

勿論、そういった存在が世界に居ることは彼らも理解はしているのだらう。

しかし、それぞれの抱く「自分の世界」の中には決して登場して  
くることはない者達なのだから、それは最早存在しないも同然と言  
える。

故に……

「ド、ド、ド、ドラゴンだー！ー！ーっ！？」

「逃げる、逃げるんじゃー！！」

「いやああああー！ー！ーっ！ー！！」

街の上空をドラゴンが飛んだりすれば、パニックになるのは当然  
である。

発端はその日の朝に遡る。

時の頃は朝食後、邪神殿に居座り続けている光神ソフィアの前で奇妙な光景が繰り広げられていた。

それは邪神アンリが料理をしている姿……それはよい。

テナが人族の方のアンリと共に神殿を出てから、彼女が料理をする光景は珍しいものではない。元々、技術的な意味で料理が出来なかつたわけではなく、短刀の呪いで包丁などを持たなかつただけなのだから、呪いを克服している今の彼女が料理をすることを阻むものは無い。

なお、「出来る」「ことと」「上手い」ことは全く別であるが、彼女の名誉のためにこれ以上は語らないこととする。

ならば一体何が奇妙なのかと言えば、アンリが作った料理　どうやらサンドウィッチのようだ　をバスケットへと詰めていることだ。

そもそも、朝食は既に食べた後であるので、彼女が作っているのは昼食の筈だ。朝食を食べ終えた直後にも関わらず昼食の準備を行い、かつそれをバスケットへと詰めている。

ここから想像出来るのは……

「あの……アンリ？　そんな物を用意して、何処かに出掛けるつもりなのですか？」

まさか、という思いを抱きつつもソフィアがアンリへと尋ねた。

彼女がそんな風に信じられないものを見るような目をするのも無理はない。なにせ目の前の黒髪無表情の新人神族は、ソフィアが知る限りここ一年以上一度も外出したことがないのだ。完全に引き籠もりである。

そんな彼女が外出の準備としか思えない行動をしているのだから、これがどれだけの異常事態であるかは語るまでもない。

「うん、ちょっと出掛けてくる。夕方には帰るから。  
お昼はサンドウィッチ置いておくから、食べて」

そう言われて彼女の視線の先を見ると、バスケットとは別に皿にサンドウィッチが盛られている。量的には二人分と言ったところだ。おそらくは、ソフィアとアンバールの二人分ということなのだろう。アンリもそうだが、ソフィアもアンバールも神族であり、生きる為の活力は食物からではなく信仰から得られる。

彼女らにとって、食事というのは生きる為に必須の行為ではなく娯楽以上のものではないが、人族としての習慣が残っているアンリは勿論、ソフィアとアンバールもこの神殿に住みついてからというもの、ほとんど毎日三食摂るのが習慣となっていた。

「それは有難いのですが、一体何処に行くのですか？」

「決めてない、おさんぼだから」  
「なるほど」

目的のある外出ではないというアンリの回答だったが、そんな目的を定めない散歩でも引き籠もり続けているよりは健全だろうと、とソフィアも納得を見せた。

地上のあらゆるものを恐怖のどん底に突き落とす邪神が気まぐれに徘徊するのは傍迷惑極まりないが、彼女も自身の魔眼やオーラのことは熟知している筈だし何とか対処するだろうと言っのがソフィアの考えだった。

それがとんでもなく甘い考えだったということに彼女が気付いたのは、アンリの次の台詞を聞いてからだ。そして、その時には全てが手遅れだった。

「じゃ、行ってくる。ヴニのおさんぽ」

「……は？　ちょ、ちよつと待ちなさい!？」

予期せぬ言葉に硬直したソフィアが我に返って止めるよりも早く、アンリはサンドウィッチの入ったバスケットと、その横に置かれていた数倍の大きさの籠に触れると、転移で姿を消した。

「散歩って……貴女ではなく黒龍ヴァドニールの、ですか？」

誰も居なくなった部屋に、ソフィアの呟きがぼつりと響いた。

「……あの黒龍を外に出す気なのですか？」

呆然としたまま呟く言葉に、返事をする者は居ない。

こうして、人族の守護神である筈の彼女が悲劇を制止する最後の機会を見逃してしまったことで、世界最強最悪のペットが野へと放

たれてしまったのだった。

澄み切った蒼い空を切り裂くように、全長二十メートルの巨軀が舞っていた。

その羽ばたきは力強く、爆発的な推進力を以って凄まじい速さを生み出していた。

彼が飛んでいるのが遙か高空だったから良かったものの、これが地上に近い低空であれば生じる風圧であらゆるものが吹き飛んでいたことだろう。

黒龍ヴァドニール。

世界に災厄を齎すと謳われし最悪のドラゴンは、久方振りの空を満喫していた。

ダンジョンのボスとして召喚されてからというもの、一度も外に出ることが出来ず、彼の基準で言えば狭苦しい部屋に押し込められていたのだ。その解放感は一際だろう。

「グオオオオオオーッ!!!」

心なしか上げる咆哮も、自由を喜ぶ歓喜の唄のように聞こえる。

尤も、今の彼が自由かと言うと、当然そんなことはない。

彼がこの世で最も恐れる主が今まさに彼の背中の上に居るのだから、自由とは程遠いというのが実際のところだ。



召喚された当初は主の気配に怯え、恐怖故に屈服して仰向けになつて腹を見せた彼だが、その後の躑けによつて日増しに馴染み、今では主が姿を見せたとしても以前のように壁際まで逃げるようなこととはしなくなつた。

それでも、恐怖が完全に無くなつたかと言えば、そんなことはない。

主の放つ気配により齎される本能的な恐怖は、そう簡単に拭いさることは出来なかつた。

知能こそ高くない黒龍だが、背に乗つた主人の機嫌を損ねることがどれだけ危険かを本能的に悟っている。

故に彼は、自由を謳歌しながらも最高の乗り心地を提供すべく慎重に飛ぶのだった。

そんな黒龍の恐怖故の気配りが背中に乗る主に届いていたかと言つと、結論から言つと全くの無駄だった。

「さ、寒い……」

黒龍の背の上で、黒いローブを着た少女は寒さに震えて、落ちないように必死にしがみ付いていた。

如何に彼が不用意に揺らさないように気を付けていたとしても、その高さや速さの時点で乗り心地は最悪だった。

高空である時点で気温はかなり低く、それに加えて黒龍の飛ぶスピードによつて生み出される強烈な風圧に晒されているのだから、無理もない。

耐久力の高い神族だからまだ耐えられているが、これが人族であつたら凍死したり凍傷になつていても不思議ではなかつた。

また、広い黒龍の背中では馬などと違って跨ると言つたことは出

来ず、鱗にしがみ付くことしか出来ないため、手を滑らせれば地面に真つ逆さまだ。

「や、やめとけばよかった……」

今更ながらに散歩を考えたことを後悔するも、後の祭りだった。気持ちの良い空の旅を予想していたのだが、現実は厳しい。ドラゴンライダーへの道は険しかった。

なお、実際には寒さや風などどうにでも出来るだけの力が彼女にはあるのだが、悲しいかな神族として未熟なアンリはこういった場面で権能を使うという発想が中々出て来ないのだった。

「早く何処かの平原に着いて……」

予定では、何処か広い平原でランチと洒落込むつもりだった。

自分の分はサンドウィッチを用意してきたし、黒龍の昼食もちゃんと籠に入れて持ってきた……どちらも持っていられずには今はアイテムボックスの中だが。

尤も、今の彼女の頭の中は昼食のことなどどうでもよく、とにかく地上に降りたいということだけで一杯だった。

そのため、彼女達が飛んでる下の方でどんな騒ぎが起きているかなどということに気を向けるだけの余裕は無い。

今まさに、ドラゴンを見掛けた街の住民が大パニックを起こしていることなど、知る由もない。

「あ……」

吹き付ける風で目を開けているのも大変な状態だが、狭い視界の中に広い草原が見えた時、アンリは神の救いに感謝した。自分が神

族であるにもかかわらず。

しがみ付いていた黒龍の背を叩き、彼に目的の場所に降りるよう指示を出す。

「あそこ、あそこに降りて」

「ゲル？」

知能の低い黒龍は当然彼女の言葉は分からなかったが、それでもアンリの意図を理解したらしく、草原に向かって着陸すべく高度と速度を下げ始めた。

着地に向かって段々寒さと風が収まってきたことで、アンリはホッと安堵する。

彼女が帰りに同じだけ苦行を味わう必要があることに気付いたのは、サンドウィッチを平らげた後のことだった。

ついでに、帰ってからはソフィアによるお説教という別の苦行が待っていることなど、この時の彼女は予想だにできなかった。

## 外伝04：ある勇者達の労働

邪神殿の二階、とある部屋の前に六人の男女が集まっていた。

男性と女性がそれぞれ三名ずつのその集団は、ある意味ではこの場所に最も相応しくないとと言える者達だった。

「ええと、ここでいいのかな？」

「そうですね。聖女神様からのお言葉からすると、ここで間違いないかと」

「それにしても、何だっけ聖女神様が邪神の神殿に行けなんて言っ  
て来たんだろっねえ」

「さあな。とは言え、アークが聖剣を取り戻す為に必要と言われたら、来ないわけにもいかないさ」

「俺も聖槍を取り戻さないといけないしな」

「私事です。聖弓が手元にないなんて、勇者の資格がないと言われても仕方ないですし」

集まっていたのは聖剣の勇者アークのパーティと聖槍の勇者ライオネル、聖弓の勇者オーレインの六名だった。尤も、現在の彼らはダンジョン「邪神の聖域」の攻略に失敗した際にそれぞれの武具を奪われてしまっているため、これらの称号はいささか皮肉なものとなっていた。

勇者の象徴であり力の源である聖なる武具　光神ソフィアの加護を受けたそれらの武具は所有者を選ぶ。人が武具を選ぶのではなく、武具が人を選び自らの所有者として認めるのだ。

そして武具に所有者として認められた者は間接的に光神ソフィアに選ばれた存在となり、勇者の称号を得ることになる。アーク、ライオネル、オーレインの三名も、そうして勇者となった者達だった。

それゆえ、聖なる武具あつての勇者であり、勇者であるからには聖なる武具を持っていて然るべきなのだ。オーレインが口にした通り、聖なる武具を奪われるなどと言うのは勇者として致命的な失態であり、罵倒されても文句は言えない。

「呼んでも戻つて来ないなんて……一体聖弓は今どうなっているのでしょうか？」

「確かに、普通なら呼べばすぐ手元に戻つて来る筈だからなあ」

不安そうに告げるオーレインに、青髪の青年ライオネルが同調する。

聖なる武具は所有者を選ぶため、他の者では使いこなすことは決して出来ない上、仮に手元に無かつたとしても所有者が呼べば飛んで戻ってくる。

それを知っている勇者達は、ダンジョン攻略失敗後に意識を取り戻して聖なる武具を失つたことを知ってから、幾度となく武具を呼び戻そうと試みた。しかし、聖なる武具は戻つて来なかつた。

オーレインなどはアーク達から制止されるまでその薄紫の髪を振り乱しながら涙目になって何度も呼び続けたのだが、効果は無かつた。

「きつと大丈夫だ。聖女神様がここに来れば聖剣を取り戻せると教えて下さつたんだ。

それなら、聖剣は無事な筈だ」

「だといいいのですが……」

金髪の青年アークが励ますが、オーレインはまだ不安なのか俯いている。元々、気弱だった少女が聖弓に選ばれたために勇者の使命を果たそうと気を張っていたのだ。肝心の聖弓を失ってしまった反動で精神的に不安定になっているのだろう。

「大丈夫。聖剣も聖槍も聖弓も、壊れたりしてない」

そんなアーク達に、後ろから声が掛けられた。

てつきり部屋の中から誰かが出てくるものと思つてそちらにばかり注意を向けていたため、彼らは驚いてバツと振り返る。

するとそこには、薔薇の装飾が施された漆黒のドレスを身に纏つた黒髪の少女が立っていた。

彼女の黒い瞳を見た瞬間、アーク達の身に戦慄が走る。

血の気が音を立てて引き、全身が総毛立つ。喉がカラカラに乾き、歯がカチカチと音を立てる。手足が意識から離れて勝手に震える頃になつて、ようやく思い出したかのように全身から冷や汗が吹き出した。

勝てない……例え聖剣が手元にあつてもこの少女には絶対に勝てない。

彼らがこれまで出会つた中で最強と呼べる敵は、まさに今居る場所の地下深くであるダンジョンの三十階層に待ち受けていたインペリアル・デスだが、今こうして目の前に立つ少女から感じる絶望的な力の差は彼の敵よりも更に上だった。

本能と精神と頭脳……その全てが訴える恐怖に、清廉にして屈強な筈の彼らの心は一瞬で押し折れる。しかし、それは決して彼らの精神が弱いというわけではない。もしもこれが精神の弱い者であれば、彼女と真つ向から目を合わせてしまった瞬間に逃走していたことだろう。この場に留まつていられること自体、彼らが強者であることの証だ。

そんな彼らが取つた行動、それはその場で両膝と両掌、そして頭

を床に押し付けると言う行動だった。それは、勇者の伝説に伝えられし最大限の謝辞を示す姿勢　土下座だ。

「……あ、ごめん」

最近周りが扱いに慣れて上手く目を逸らしてくれるが故に自分の魔眼のことを半ば忘れていた少女は、目の前に繰り広げられる土下座祭りを前に思わず呟いた。

視線を合わせないように逸らしながら身を起こすように伝え、自分の魔眼のことを注意事項として告げた黒い少女　アンリとアーク達がまともに会話が出来るようになったのは、アンリがアーク達の前に姿を見せてからしばらく経ってからだった。

邪神の縁者だとアンリが告げた時には一悶着あったが、冒険者カードを見せることで人族であることを確認したアーク達はそれ以上のことは聞いて来なかった。

通常、邪神の縁者などと言われれば勇者である彼らにしてみれば放置できるような事柄ではないのだが、光神からの指示で訪れた場所で出会った人物であるため、迂闊なことが出来なかったということが理由の一つとして挙げられる。

しかしそれ以上に、彼らにとってもっと重要な事実をアンリが告げた為にそれどころではなくなったと言うことが大きい。

「それじゃ、聖剣は今君が持つてるのか!？」

「聖槍もか!」

「聖弓も!？」

アンリから聖なる武具の行方を聞いたアーク達は、思わず驚きの声を上げた。

「頼む、返してくれ！」

アークがアンリの手を両手で掴み、必死に訴えかける。普通ならここで目と目を合わせてジッと見つめ合うところだが、二人ともお互いに視線を合わせないようにしているため、傍から見ると滑稽な光景が展開されていた。

聖なる武具を失って最も取り乱していたのはオーレインだったが、内心ではアークの方が不安が大きかったのだろう。それと言うのも、オーレインやライオネルがソロで活動しているのに対して、アークはパーティを組んでいるということが大きな要因となっている。オーレイン達にとっては突き詰めれば個人の問題に過ぎないが、アークにとってはパーティメンバーにも迷惑を掛けているのだから、それも無理がないことだろう。

「返してもいいけど、条件付き」

「おいおい、何だよ条件って」

アンリの言葉にジオが不服そうな言葉を漏らす。

彼らの感覚からすれば、勇者の使命は人族を護るためにあるのだから、非協力的な対応自体が信じられないところだが、アンリには関係が無い。

「……言ってくれ、俺に出来ることなら何でもする！」

「……私です！」

「仕方ねえ、俺も腹を括るか。言ってくれ」



悲壮な表情で覚悟を決める三人の勇者に、アンリは一言で聖なる  
武具を返す条件を告げた。

「家建てるの手伝って」

「は？」

聞き間違えかと思っただけで聞き返す六人だが、アンリの答えは変わら  
ない。

三度聞いてようやく本気だと理解した勇者達に、アンリが事情を  
簡単に説明する。

元々神殿に住んでいたアンリが外に出る為に家を建てようとしてい  
ること、邪神から受け取った聖なる武具を返す代価として、その家  
の建築を手伝って欲しいことなどだ。

「ええと、つまり大工仕事ってことか？」

悪いがそんなことやったことないから、大したことは出来ねえぞ  
？」

「本職の人もちゃんと雇われてる。力仕事とか簡単な仕事だけでい  
い」

ライオネルが疑問を述べるが、アンリにとっては想定内の質問で  
あったようで、頷きながら返される。

「勇者が人足仕事ねえ……………」

「ちよっとイメージが……………」

「いや、構わない！ 別に悪いことじゃないし、それくらいでいいならお安い御用だ」

フレイやウイディは難色を示すが、アークはそれを振り切るように了承を告げる。邪神の縁者という少女からどんなことを要求されるかと戦々恐々としていた彼にとってみれば、随分と拍子抜けな事件だった。

困っている人を見れば助けたいと思う彼にとってみれば、頼まれれば聖剣のことがなくても手伝ってよい程度の仕事に感じられたのだ。

「ま、仕方ねえか。力仕事だったら俺にも出来そうだしな」

「え？ ちよつと待ってくれ、ジオ。」

聖剣を取り戻すためなんだから、働くのは俺だけで十分だろう？」

「水臭いこと言うなよ。」

どのみち、聖剣を取り戻すまでこの地を動けないだし、手伝って早く終わるならそっちの方がいいだろ？」

「まあ、そうだね。」

力仕事だと私やウイディはあまり役に立たないかも知れないけど、他に手伝えることもあるだろうし。

「ねえ、ウイディ？」

「勿論です、私達もお手伝いします！」

「アーク様だけに働かせたりなんてしません」

「みんな……」

パーティの絆を再確認するアーク達の姿に、オーレインやライオネルは少し羨ましそうな顔をしてその光景を見詰めていた。

なお、アンリは追加の人手ゲットと密かに内心でガッツポーズを取っていた。

「ま、そういうことらしい。

俺も了解だ」

「私もです。 これでも一応鍛えてますし、力仕事だって出来ます  
」！」

ライオネルやオーレインも承諾し、六名全員がアンリの家を建てる手伝いをするのを呑んだ。

「ありがとう。

その部屋に建築に携わる人が集まっているから、後はその指示に従って。

もう設計もそろそろ終わってる筈」

「ああ、分かった」

ここでようやく、この場所が指定された理由がアーク達にも理解出来た。

アンリが立ち去って行くのを見届けたアーク達は気合を入れると、目の前の扉を開けた。

そして閉じた。

「おい、何だ今の戦場は!？」

一瞬だけ見えた光景に、ジオが焦った言葉を漏らす。  
そう、そこは戦場だった。

部屋の中央に鎮座する屋敷の模型を囲うように何人もの者達が議論を交わし、辺りには書き捨てられた設計図が山となって積み重ねられている。

怒号が飛び交う中を慌ただしく走り回る下働きの者達の姿に、何が自分達の未来の姿が重なり、アーク達の背筋に戦慄が走った。

そして、それは現実のものとなる。

アーク達が反射的に閉じた扉がバツと開き、中から豪華な司祭服を纏った金髪の青年が姿を現したのだ。

「貴方達がアンリ様の仰っていた手伝いの人達ですね!？」

フッフ、待っていましたよ!」

青年は端正な顔立ちをしているが、それを台無しにするかのよう  
に目の周りに隈が出来ている。おそらくは連日の徹夜でハイになっ  
ているのである。テンションにより、彼は啞然としたままのアーク  
達に一方的にまくし立てる。

「今、丁度人手が欲しかったところなのです!

さあさあさあ、中に入って下さい!」

そう言うと、その青年 教皇ハーヴィンは歴戦の勇者である彼  
らの目にすら留まらない素早さで彼らの後ろへと回り込み、アーク

達を部屋の中へと押し込み始めた。

「ちよ、待ってくれ!?!」

「や、やめろ!」

「ひい!?!」

「じよ、冗談じゃないよ!?!」

「う、嘘だろ、オイ……!」

「いやあああああー!?!」

事ここに至つてようやく事態が単なる大工仕事の手伝いでは済まないことを理解したアーク達が慌てて逃げようとするが、彼はそんな哀れな生贄達の様子には構わず強引に部屋の中へ押し込むと、後ろ手に扉を閉めた。

なお、アンリの知らないところで建築対象は「家」から「邸宅」に格上げされており、その分彼らの拘束期間も長くなっているのだが、最早後の祭りだった。

## 外伝05：ある従者の里帰り

「生まれ故郷に行きたい？」

テナがアンリにそう告げてきたのは、黒薔薇邸での生活が落ち着いてからしばらく経ってからのことだった。

「はい。ずっと決心が付きませんでしたけど、やっぱり一度家族には会いたいんです」

彼女がアンリの元に来た時にもそのような話があったが、その時には心の整理が付いていないということの後回しになっていたことだ。奴隷として売られた側として複雑な思いを抱くことは当然であったが、時間を置くことで整理を付けることが出来たと言うことだろう。

そして、そうであるならアンリの答えは一つだった。

「分かった、こっちは大丈夫だから行ってきて良いよ」

家事全般を統括するテナが居ないと色々と困ることは多いが、短期間であれば何とかかなるだろうとアンリは快く了承した。アンリ自身も家事が出来ないわけではないし、レオノーラも居る。幼いリリも最近は結構家事を手伝ってくれているため、問題ないという判断だ。

そう考えて送り出そうとしたアンリに対して、テナから予想外の答えが返ってきた。

「あの……出来ればアンリ様のことも家族に紹介したいのですが、

ダメでしょうか」

「……………え？」

おそらく、この場に他の者が居ればそれはやめると止めてくれたのだろうが、幸か不幸かこの場には二人以外の者は居なかった。

リーメルの街から馬車で数日のところにある小さな村。たまに行商や聖光教の牧師が訪れる以外にはほとんど人が訪れることがない村に、その日一台の豪華な馬車が訪れた。

物珍しさに注目する村人達の前で馬車の扉が開き、そこから二人の少女が降りてくる。

その内の一人の顔を見た瞬間、様子を窺っていた村人達の輪が一回り距離を置くように広がった。

理由は単純、彼女の顔には目を覆うように黒い鋭角的なデザインが装着されていたためだ。黒一色の妖しい意匠のドレスといい怪しいことこの上なく、村人達が警戒するもの無理はない。

そのあまりのインパクトに、本来であれば村人達の注目を集めた筈の少女には全くと言っていいほど視線が集まらなかった。

「あの……………」

「？……………テナ？ テナじゃないか！？」

おずおずとテナが声を上げると、ようやく村人達はその存在に気付いて驚きの声を上げた。

元々小さな村なので、村人は全て顔見知りだ。みな、以前奴隷と

して売られていった少女のことは覚えている。一人が気付くと次々にテナのことには気が取り囲もうとする。

しかし、その隣に立つ異相の少女に気圧されて近付けず、少し距離を置いて囲む形となった。

「無事だったんだな、テナ……」

「はい、ロイさん」

壮年の男性がテナに声を掛けると、それを皮切りに他の者達もテナに対して声を掛け始めた。

「良かったのう、みんな心配していたんじゃよ」

「ムーアおばあさん……」

杖を突いた老婆が涙を流しながら言うと、テナも目に涙を浮かべた。

「テナお姉ちゃん！」

「エピナ、ごめんね」

リリと同じ年くらいの少女が駆け寄ってきてテナに抱き付くと、テナは穏やかな笑みを浮かべながら彼女の頭を撫でた。

「……………」

「……………」

そして、周囲に沈黙が訪れる。

村人の誰もが、テナとの再会を喜びながらも、その横に立つ少女のことが気になって集中出来なかった。



誰もが押し付け合って切り出せないでいたが、やがて先程の男性  
ロイが恐る恐る尋ねた。

「ところで、その人は？」

再び仮面の少女に視線が集中するが、彼女はその視線に圧される  
こともなく悠然と佇んでいた。

「あ、この方は私のご主人様のアンリ様です」

村人達の間にとよめきが走った。

仮面を着けたアンリとテナの顔をそれぞれ交互に見て、何とも言  
えない複雑な表情を浮かべる。

村人達はテナが奴隷として売られていったことを知っている。

幼いながらも美しい容姿をしているテナのことだ、奴隷として買  
った人物が男性であればその意図は明白であり、村人達も敵意を向  
けたことだろう。

その点、問題の人物は歳若そうな女性であり、テナも好感情を抱  
いているように見える。自分達の身内であるテナがそのような人物  
に買われたことは他に無い程の幸運であり、村人達にとっても歓迎  
すべきことだ。

しかし……

その仮面は一体何だ!?

今、村人達の心は一つになっていた。

年齢といい性別といい、自分達の身内であるテナが買われた相手としておよそ最も安全で幸運であろう人物に思えたが、その身に着けた怪しい仮面だけが気に掛かる。

何故そんな仮面を着けているのか聞きたい、聞きたいがもしかしたら失礼かも知れないと思うと、やはり切り出しにくい。

そもそも、彼女が乗ってきた馬車や着ているドレスを見れば、相応な財力を持つ権力者であることは間違いない。もしも機嫌を損ねれば、このような小さな村など呆気なく潰されてしまつかも知れない……そう考えた村人達は疑問を口に出すことが出来なかった。

実際には彼女 アンリは、この村が所属するフォルテラ王国では単なる一冒険者であるし、神聖アンリ教国においても実質的なコネクションは兎も角、公権力は何一つ有していないのだが、彼らはそのようなことは知る由もない。

結局、村人達がアンリの仮面に言及することは無く、二人はテナの家へと向かった。

村人達と別れたアンリとテナは、一軒の家の前へとやってきた。なお、村人達は今も遠巻きに彼女達の動向を気にしていたのだが、二人はそれには気付いていない。

その家はこじんまりとした木造の家で、建ててから結構な時間が経っているらしくあちらこちらが痛んでいた。

「そこが？」

「はい、私の……家族が住んでる家です」

アンリの問いに、テナは『私の家』とは告げなかった。その表情は複雑そうに眉根を歪めたものとなっている。

扉の前に立ち、ジッと取っ手を眺めるテナ。

「入らないの？」

「……今、開けます」

アンリに穏やかに促され、テナは決意したように手をギュッと握るとおそおすと取っ手へと伸ばした。

しかし、テナが扉を開ける前に横から声が掛けられる。

「……………テナ？」

そこに居たのは、三十台後半くらいの質素な服を着た金髪の女性だった。女性は信じられないという表情を露わにしながら、テナを凝視している。

「お母さん！」

扉を開けることを躊躇っていたが、やはり心の中では会いたい気持ちの方が大きかったのだろう。テナは涙を浮かべながら女性に駆け寄ると、その胸にギュッと抱き付いた。

テナの母親はしばしの間呆然としていたが、やがて現実だと理解出来たのか泣きながらテナを抱き返した。

家の前で繰り広げられた声に気付いた他の家族達も外に出て来て、お互いに目に涙を浮かべながら抱き合って奇跡的な再会を喜びあった後、アンリとテナは家の中に招き入れられた。

テナはテーブルに着いてこれまでの経緯を話せる範囲で話す。奴隷商人に売られて死病で命を落とし掛けたり、奴隷として売られるまでの扱いなどを聞くと、テナの家族達は思わず大声で泣いた。

「テナ……テナ、すまなかつた！ 本当にすまなかつた！」

テナの父親がテーブルに頭を磨り付けるようにして謝るが、テナは静かに首を振った。

「大丈夫だよ、お父さん。あの時私を売らなかつたら、結局みんな飢えて死んじやつたのは分かっているから。それに、そのおかげでアンリ様達と会えたんだから……もういいの」

テナがそう言うと、父親はテーブル越しにテナの手をギュッと握み、額に押し付けて泣いた。

ひとしきり泣いた父親は、今度はアンリに向かって頭を下げ始める。

「貴女がテナを救ってくれたのですね、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

父親に続いて、母親、兄、弟が次々にアンリに感謝を述べながら頭を下げる。

一步引いたところで、お茶をすすりながらポーッと家族の再会の様子を眺めていたアンリは、突然自分に話の矛先が向いたことに戸惑い、焦りを浮かべた。

両手を彼らに向けて、口を開く。

「別に……大したことはしてない」

アンリはそう言って辞そうとするが、テナの家族の感謝の視線は変わらなかった。

しばらくそうやって感謝と遠慮の攻防を繰り返していたが、そのうちふと疑問の声が上がった。

「ねえねえ、どうしてお面を着けてるの？」

「こ、これ！」

村人達が聞けなかったことを、テナの弟が幼い故の無邪気さで聞いたのだ。

母親が慌てて止めようとするが、遅かった。

「どうしてって、それは……」

アンリが仮面を着けている理由は二つ、目を合わせることで発動する魔眼を封じることと、神族としての自分と同じ顔をしていることの影響を怖れたためだ。

しかし、それを説明するには自分のスキルや邪神との関係などにも触れる必要がある。

先程テナの家族にこれまでの経緯を説明した際には、魔導士の家系の生まれでリーメルの街の近くで研究を行っていると誤魔化して

しまっている。

今更、真実を説明するのは困難だ。

「それは……」

「それは？」

焦らすように言葉を止めるアンリ。実際には説明に困っているだけなのだが、傍から見ると溜めを作っているようにしか見えない。

その場に居る全ての人物がアンリの言動に注目している。

先程は息子の無礼を止めようとしていた母親もやはり気にはなっていないらしく、同じく一挙一動を見守っている。

「それは……」

「それは？」

あまりの思わせぶりな様子に、事情を粗方把握している筈のテナまで身を乗り出している。

いよいよ後に引けなくなったアンリは、思い付くままに一言理由を告げた。

「格好いい、から？」

散々気を持たせておきながらのこの答えに、幼い弟以外の全ての者達がガクツと崩れ落ちた。

「良いの？」

もつとゆっくりしてきても良かったのに」

「いえ、大丈夫です。」

あれ以上居るとお別れしづらくなってしまいますし……」

別れを惜しみ、しきりに滞在を勧める家族達と別れ、帰路に着いた馬車の中でアンリはテナに尋ねた。

「それに、今の私の家は……黒薔薇邸ですから」

「……そう、分かった」

そのやり取りを最後に、穏やかな沈黙が馬車の中を満たした。

「あ、あの！ 私もアンリ様の仮面は格好いいと思います！」  
「……うん、ありがとう」



外伝05：ある従者の里帰り（後書き）

感動的な再開シーンの筈なのに悉くマスクドアンリ様がチラついて  
集中出来ません。

外伝06：ある魔王の会食（前書き）

お宅訪問第二弾

（第三弾の予定はありません）

## 外伝06：ある魔王の会食

黒薔薇邸には現在、四人の少女が住んでいる。

館の主人であるアンリ、アンリの眷属であり家事を統括するテナ、幼いながらに家事を手伝うみんなの妹分のリリ、そして居候のレオノーラの四人だ。

このうちアンリとテナ、そしてリリは館の定住者であるが、レオノーラはあくまで一時的に滞在しているに過ぎない。

魔王の娘であり後継者である彼女は、モラトリアム期間でもある旅の終わりの時が来れば、魔族領に戻る定めとなっている。

そもそも、彼女の旅に明確な期日は無いが、いつまでもずるずると続けるわけにはいかない。

彼女が自分自身で立てていた期限設定は「何らかの功績を上げるまで」というものだ。

そして、客観的に見ればそれは既に達成されている目標だ。

隣国の国家建設に関わり、その国家の要人と深い関わりを持つ。加えてその国家は、これまで敵対していたフォルテラ王国の国土を削り、間に挟まるように築かれている。また、その国家を通してこれまででは不可能だった人族領との交易すら行う話が出始めている。

魔王として即位するための功績としては十分過ぎる程だ。

故に、その連絡が来たのは当然の帰結であったと言える。

「国に戻る？」

「ああ、そろそろ戻ってこいという打診があつてな」

レオノーラは本国からの定時連絡で帰還の打診があつたことを、

夕食の場でアンリ達に告げた。

「随分突然の話」

「いや、そうでもない。以前から匂わすような話があった。

私もハッキリと言われるまでは放っておいたのだが、今回は流石にもう引き延ばせそうにない」

「そう……」

それはつまり、レオノーラ自身もまだここに居たいと言っているようなものであり、彼女は少し照れくさそうに顔を赤らめていた。

「それで、いつ戻られるんですか？」

「そうだな、明日には発つつもりだが」

「あ、明日ですか！？」

「ああ、ここから魔族領までそれなりに距離があるしな」

質問に返ってきた返事を聞き、テナが驚愕の声を上げる。確かに、随分と急な話だ。しかし、レオノーラの言う通り、馬車で移動するとしても魔族領まで数日は掛かる。しかも、そこから魔王城までは更に日数を要するのでなるべく早く発つべきだと言うのは理に適っている。

「で、物は相談だが……一度魔族領に来てみないか？」

「？ 私達が？」

「ああ。友人として招待したいのだ。

無論、隣国の重要人物なので国賓として遇する予定だ」

アンリは今のところ神聖アンリ教国の公権力には携わってはいないが、実質的なコネクションを考えれば重要人物というのも強ち間違っていないだろう。

が、それなら本来は国を通して打診すべきことであり、直接誘いを掛けるようなものではない。

結局のところ、友人を家に招いてみたいというのが本音なのだろう。

レオノーラ「ロマリエル……魔王の後継者として生まれた彼女はずっとぼっちだった。

翌日、アンリとレオノーラは邪神殿を訪れていた。

レオノーラはアンリ、テナ、リリの三人共を招くつもりでいたが、幼いリリを魔族領まで連れ回すのは流石によるしくないという話になり、それならばリリの面倒を見るテナも不参加とならざるを得ず、最終的にはアンリだけが同行することになったのだ。

「なあ、アンリ……本気でアレに乗ってく気か？」

「そっちの方が早い」

「それはまあ、そうなんだが。しかしだな……」

二人が邪神殿を訪れたのは、魔王城までの交通手段の確保のためだ。

まともに徒歩や馬車で行けば往復で一月近く掛かることになるが、テナとリリを黒薔薇邸に残している以上はアンリとしてもそこまで時間を掛けるわけにはいかない。

そのため、もっと早い交通手段を選んだのだ。ここにはそれがある。

しかし、その交通手段を聞いたレオノーラの顔は渋いものとなっていた。

本国には今日戻ることは伝えていたが、その交通手段までは連絡出来ていない。何しろ、それについてレオノーラが知ったのは本日もなっからだったからだ。

その日の内に着く手段があると聞かされて、転移魔法か何かを駆使するのだろうと安易に考えてしまったことが裏目に出た。考えてみれば、神族であるアンリならば兎も角、人族のアンリにはそこまです自在に移動するだけの力はなかったのだ。

定時連絡の時間も過ぎてしまっているが、緊急連絡をしてでもそのことを事前に伝えた方が良いのでは……と悩んでいるうちにタイムオーバーとなってしまった。

諦めたレオノーラは、溜息を一つ吐くと儂い願望を呟いた。

「魔族領が大混乱に陥らなければ良いんだが……」

魔族領、魔王城。

魔族領の奥深くに存在するその城は、魔族の頂点に立つ魔王の居城にして魔族の本拠点でもある。

長年、人族と魔族は対立し戦い続けてきたが、その戦いは概ね国境付近で展開され、魔王城まで攻め込まれたことは一度もない。

しかし、だからと言って警戒を疎かにするようなことはない。

魔王城を中心として広範囲に幾層もの警戒網が敷かれ、ひとたび敵軍の影が見えればたちまちのうちに迎撃態勢が整えられるように

なっている。

そしてその日、その警戒網のうち人族領に最も近い地点から緊急の報告が入った。

「陛下！ 大変です！」

「騒々しい、一体何事だ？」

当代魔王であるエリゴール＝ロマリエルの執務室に衛兵が駆けこんできた。

「たった今、国境近くの砦から巨大なドラゴンが魔王城に向けて一直線に飛んでいると報告が入りました！」

「ドラゴン、だと？」

「ハッ！ 禍々しい漆黒の体躯のドラゴンとのことですよ」

報告を聞いた魔王は何かを思い出しそうになり考え込んだ。しかし、その考えが纏まる前に衛兵より問いが投げ掛けられ思考は散ってしまった。

「如何致しましょう？」

「空を飛んでくるのであれば、途中の警戒網も役には立つまい。

城の兵をドラゴンの飛んでくる方角に集めよ！」

それと、レナルヴェ、ヴィクト、イジドの三名も向かわせる。

私もすぐに行く」

「ハッ！ 承知致しました！」

そう言うつと慌ただしく立ち去っていく衛兵を横目に、魔王は装備を整え始めた。

魔王が城の東に姿を見せた時、そこには既に城の衛兵が終結し陣を敷き始めていた。

防衛陣は空から襲ってくるドラゴンに対抗するため、平地に盾を持った前衛を置き、城の防壁内に後衛の魔導士といった兵科を配置する形で構築されている。防御主体の前衛を囷としてドラゴンを引き付け、魔法で集中砲火を浴びせる構えだ。

緊急で集められた形だが兵達は混乱することも無く整然と列を為している。その様は魔族の練度の高さを表していた。

しかし、それも当然だろう。ここに集った者達は少数精鋭の魔族の中でも最精鋭と呼ぶべき者達なのだから。

そして、その直接の指揮を執るのは魔王の側近である四天王だ。

「前衛、盾の準備は！？」

「完了しております、レナルヴェ様！」

「魔導士隊、揃っていますね？」

「ハッ、欠員は居りません！」

前衛を烈風騎レナルヴェが、後衛を血氷将ヴィクトがそれぞれ統率している。一方で、剛地鬼イジドは平地で囷となる前衛を守るため、その土魔法を駆使して追加の防壁を築いていた。

「防壁はどうだ？」

「おお、こっちは終わったぜ」

ヴィクトの問いに対して、ニヤリと笑って返すイジド。

そこに、魔王が近付いてきて問い掛ける。

「防衛の準備は済んでいるか？」

「これは陛下、万事整っております」



それを聞き、魔王は頷くと東の方向を見上げた。レナルヴェ、ヴィクト、イジドの三名もそれに釣られるようにドラゴンが来るであろう方角を見上げた。

「早ければもうそろそろ見える頃かと思われませう」

「まったく、姫殿下が帰って来られるという時に……」

「そう言えば、今日戻って来るんだったな」

「ああ、昨晚連絡があった」

「……………」

「陛下？　どうかされましたか？」

「いや、何かを忘れているような気がしてな」

魔王は先程に続いて何かを思い出しそうになり考え込んでいるが、その思考は再び遮られることになる。しかし、それは同時に彼が考え込んでいることの回答でもあった。

「！？　見えました！」

レナルヴェが急速に近付いてくる黒い巨体を発見し、周囲に告げる。

「あれか……ん？」

「あれは、まさか……」

「あの時の……？」

「あん？　どうしたんだ？」

魔王、レナルヴェ、ヴィクトはその龍の姿に見覚えがあったため、すぐに事情を悟った。彼ら三人はかつてダンジョン「邪神の聖域」で彼の黒龍と対峙している。それと、本日帰国予定というレオノー

ラからの連絡を合わせれば、推測は容易だった。

一方、イジドだけは状況が分からずに混乱している。

「レナルヴェ様！ ヴィクト様！ 迎撃指示をお願いします！」

「ま、待ちなさい！ 撃つてはいけません！」

「は？」

「あれは、あのドラゴンに乗っているのは」

視界に映る黒龍の姿は凄まじいスピードで近付いてくることでもみる内に大きくなり、やがてイジドが懸命に築き上げた土の防壁を軽々と踏み潰しながら地響きを立てて地面へと着地した。

前衛の盾兵は慌てて黒龍の前方に弧を描く配置で陣形を整え直す。しかし、指揮官からの指示が無い為に手が出せずに戸惑っていた。

しかし、そこにヴィクトの叫ぶ声が響き渡った。

「レオノーラ姫殿下です！」

その言葉に応えるように、黒龍の背で死角になっていたところから一人の少女が姿を見せた。

しかし、ヴィクトの言葉に反して、それはレオノーラではなかった。

この場を集ったもの達は、当然ながら一人の例外なく黒龍を注視していた。

それ故に、黒龍の背から姿を見せた少女に視線が集中するのは当然の帰結であったと言える。

魔王が、レナルヴェが、ヴィクトが、イジドが、そして全ての兵達が少女を見た。否、見てしまった。

艶やかな黒髪に妖艶な黒薔薇のドレス、端正な顔立ち、薄い胸部装甲、しかしその全てを上回る印象を放っているのは彼女の瞳だ。黒く澱んだオーラが立ち昇る様すら幻視出来る禍々しきその眼は、彼女が周囲を見回すことでその場に居合わせた全ての者の心臓を恐怖で鷲掴みにする。

魔王城の守護に就く精鋭達であるからこそ、強さを肌で感じるこ  
とが出来た。彼らの中で最強の存在である魔王よりも、圧倒的な威  
圧感を放っている巨躯の黒龍よりも、その少女の齎す絶望は遙かに  
上だった。

そしてそれは、その場の統率者である魔王や彼の側近である四天  
王達も一緒だった。イジドは兎も角として他の者達は目の前の少女  
が来訪することも知っていたし、彼女の持つ魔眼のこともレオノー  
ラからの報告で知っている。知ってはいるが、それでも本能的に齎  
される恐怖感を抑えることが出来なかった。

心の弱い者であれば即座に逃げ出すような威圧感の中、誰一人と  
してその場から逃げなかったことは称賛に値するだろう。

しかし、その心の強さが逆に彼らを追い詰める。逃げてはいけな  
いという理性と、本能的な恐怖感のせめぎ合いに精神がガリガリと  
音を立てて削られていく。

そして、恐怖感に屈服した彼らは自然と同じ姿勢を取るのだった。  
それは両膝と両掌、そして頭の五点を地に付ける、過去から伝えら  
れし最大限の謝辞を示す姿勢。

「お、おいアンリ!? 仮面を着けるのを忘れてるぞ!」

「……………あ」

アンリの持つ悪威の魔眼、それは魔王が土下座する程度の平均的な力を発揮した。

のっけから一悶着あったが、アンリが仮面を着けることで土下座祭りは収束した。

集結していた兵達は解散し、彼女は城内へと迎え入れられ、当初の予定通り魔王との会食に出席することになった。参加者はアンリ、魔王、レオノーラ、それから四天王のレナルヴェとヴィクトだ。

一方そのころ、イジドは荒れ果ててしまった東の平地を元に戻す作業に追われていた。

「ふむ、目を直視しなければそこまで影響は無いのだな」  
「仮面を着けてれば大丈夫」

フルコースのスープを飲みながら、魔王と言葉を交わすアンリ。彼女の着けている仮面は目元のみを覆うタイプであるため、食事をする支障にはならない。外から見ると目の部分も全て隠れていて一見前が見えないデザインに見えるが、内側からは見ることが出来るという優れ物だ。

彼女の魔眼は目を合わせることで効果を発揮する為、この仮面を着けていれば周りの者が土下座したり逃走したりすることはない。

「そうして居ると普通の娘のように見えるな」

「私は普通」

「フツ、元邪神にして教国の重要人物であり、神々とも面識がある人物が『普通の娘』か」

会食は主に魔王とアンリが言葉を交わす形で和やかに進んでいった。

一方そのころ、場外に留め置かれた黒龍ウアドニールはイジドの土地修復作業を手伝い始めた。その巨体を活かし、彼が平らに戻した地面を足で踏み固めていった。

「そう言えば、一つ礼を言っておかねばならんな」

「お礼？」

「うむ、我が娘レオノーラのことだ」

「ちちう……陛下!？」

大人しく会話を横で聞きながら食事を進めていたレオノーラだが、急に話の矛先が自分に向いたことに焦りを浮かべた。

「私はレオノーラに友人を用意してやる事が出来なかった。」

命令して人を付けることは出来ても、それは臣下として。

真の友人とは言えないだろう」

「父上……」

「そなたがレオノーラの友人になってくれたこと、礼を言う」

「別にお礼を言われることじゃない、こちらから頼んだこと」

「フツ、そうか」

元邪神の少女に魔王に魔王姫。

特異な立場にある者達だが、今だけは一組の親娘とその友人の姿がそこにはあった。

一方そのころ、イジドとヴァドニールは協力して何とか東の平地を元の平らな状態へと戻すことに成功した。

なお、アンリの着けている仮面は魔眼を封じる最良の手段であるが、何も良いところばかりではない。加護付与によって強力な効果を有する代わりに、呪いも同時に孕んでいる。

悪鬼の短刀や邪神の黒衣と異なり外すことが出来ないわけではないが、この仮面 開封の黒面は被った者の感情のリミッターを外すという地味だが厄介な効果を有している。端的に言えば、感情を抑えることが難しくなるということだ。それ故に、普段は言わないようなことをポロつと口にしてしまったりすることが発生する。

「私もレオノーラに会うことが出来て良かった。」

これからもずっと一緒に居たいと思う」

「ア、アンリ!？」

「むう、少々行き過ぎなのではないか？」

レオノーラには次期魔王として後継者を産んで貰わねばならぬのだが……」

なお、仮面を被っている間は感情のリミッターが外れている状態のため何も思わないかも知れないが、外した瞬間に冷静に戻るため羞恥心に襲われることになる。

アンリは今晚は魔王城に宿泊する予定だが、しばらくの間ベッドの上で転げ回るだろう。

一方そのころ、イジドとヴァドニールは意気投合して酒盛りを始めていた。

「あの、一つ伺っても宜しいですか？」

「奇遇ですね、レナルヴェエ。私も伺いたいことがあるのですが……」

談笑が途切れたところを見計らって、これまでは控えていたレナルヴェエとヴェイクトがおもむろに話を切り出した。

「ん？ どうした二人揃って？」

レオノーラが首を傾げながら問い掛けると、二人はレオノーラの

胸元へと視線を向ける。

「な、なんだ……？」

二人から露骨に視線を向けられ、反射的に膝の上に置いていたもので胸元を隠そうとするレオノーラ。しかし、彼らの視線は彼女の豊満な胸ではなく、むしろそれを隠す物の方に向いていた。

「何故、ずっと人形を抱えられて居るのですか？」

「って、そうだった！？」

最近ずっと抱えていたから、自然過ぎて忘れてた！

ち、違うんだ……これは私の趣味ではない！ やむにやまれぬ事情が！」

そう、彼らが見ていたのはレオノーラがずっと抱えており、胸元を隠すのに使用した人形だった。彼女は魔族領に帰ってきた時からずっとこの人形を抱えていたため、すれ違う者達は当然それに気付いていたし、気にもなっていたのだが、彼女の身分ゆえに気軽に聞けなかった。

彼女が抱えている人形は、三神の争いの時にも使用されていた呪いのテナ人形だ。うっかり触れてしまつて呪われてしまつて以降、お仕置きとしてそのまま放置されて今に到る。忘れたまま神殿を出てしまった為に、神族としてのアンリに気軽に会えなくなつて解呪出来なくなつてしまつたのだ。

「ふむ、お前には女らしい趣味もさせてやれていなかったが……そのようなものが好みだったのか」



「違います！ 違うんです、父上っ!？」

なお、レオノーラが抱えている呪いのテナ人形は傍から見ても不気味で、どう考えても女子らしい代物には見えない。

「彼女はこの人形がお気に入りで、片時も離さない」

「ふむ、そうか……まあ、娘の趣味に口出しするような野暮なことはすまい」

「だから違つと……!」

と言つたか、アンリ！ 九割方お前のせいじゃないか!？」

なお、人形を抱えた魔王姫の噂は早くも魔族領中に拡散し始めており、收拾をつけることは最早不可能だった。

後に伝えられる人形姫の伝説は、ここから始まった。

## 外伝07：ある教皇の企み

神聖アンリ教国。

フォルテラ王国の一角から独立する形で新たに建国されたその小さな宗教国家には、シンボルとなるものが二つ存在する。

一つは神殿を兼ねているダンジョン「邪神の聖域」。

地上五階層、地下三十一階層からなる巨大な迷宮は、日々冒険者達の命……ではなく、金を奪い続けている。

三神による争いが終結した後も、ダンジョンへの挑戦者が絶えることはなかった。

元より、ダンジョンというのは冒険者達にとって一獲千金のチャンスが眠っている場所だ。そこから得られる宝物は貴重なものが多い上、もしもダンジョンマスターを倒すことが出来れば富と名声が手に入る。

当然、そのリターンに見合ったりリスクがある場所でもあるのだが、こと「邪神の聖域」に関していえば一度も死者を出したことがないという破格の安全度を誇るダンジョンだ。同時に、世界最難関のダンジョンでもあるのだが。

光神と闇神の攻略命令によって一気に知名度が跳ね上がったこともなり、世界中から冒険者達が攻略に挑む為に集まってきた。

当然、神殿の周囲に設けられた宿や商店にとってみれば力モが大いに寄ってきた状況と言える。

観光業を主産業とする神聖アンリ教国は、異常とも言える勢いで成長を続けていた。

そして、もう一つのシンボルは 。

「おお、アンリ様！ 我らが神よ！  
どうか我らの祈りを聞き届けたまえ」

豪華な司祭服を纏った金髪の青年が、跪き熱心に祈っている。  
彼が祈る先にあるのは、この国で崇められている邪神アンリの姿  
だった。

そう、「姿」だ。当人ではない。

邪神アンリの姿を模した彫像に対して、彼は祈っている。

偶像崇拜が禁じられているというわけでもないため、それは別段  
おかしいことではない。しかし、問題は彼が祈っている彫像の大き  
さだった。

五階層まである神殿とほぼ同じ高さをした彫像。

教皇の熱意によって大幅に工期を短縮して築き上げられた、巨大  
アンリ像だ。

ちなみに、言うまでもなくアンリ像に祈っているのは、この像を  
建造した張本人である教皇だ。

彼は毎日朝晩必ずこの像に祈りを捧げ、像が建造されてから一日  
も欠かしたことはない。

なお、巨大アンリ像の周囲には柵が作られ、近付くことは厳重に  
禁じられている。これは、邪神アンリ直々による勅命であり、巨大  
アンリ像の足元にはたとえ教皇ですら近付くことが許されていない。  
巨大アンリ像は黒薔薇のドレスを着たアンリの姿を模しているた  
め、足元から見上げられると色々危険なのだ。

危険なのは、そんな細部まで再現した教皇の執念かも知れないが。

「ふう、アンリ様へ祈りを捧げた朝は清々しいですね。

フフツ、やはりこの像を建造して正解でした」

サムズアップしながら腕で汗をぬぐう教皇。

彼の言うように、この像の評判は教国において非常に高い。元より、信仰心の高い者達の集まりであるため、神像の建造は喜ぶべきものであるし、それを抜きにしても像としての完成度が高かった。完成度が高すぎて、とある少女が素顔を晒して表を歩けなくなつた程に。

「さて、それでは……」

この完成度の高い神像の図面を引いたのは他ならぬ教皇であり、巨大アンリ像の建造が終わつた今、彼の意欲は次なる目標を目指して既に走り始めていた。

「草の根アンリ様計画を次なる段階へ」

「アンリーサーマー……!!」

外から聞こえてきた言葉に、アンリは思わず頭に手を当てた。

爆走しながらここに向かってきている声の主は、考えるまでもなく分かっていた。

「というか、一人しか居ない。」

神族としてのアンリには中々会う機会がないせいか、彼は事ある

ごとにこの黒薔薇邸へと報告にやってくる。

アンリとしては屋敷の建造をもらった手前あまり邪険にするのもどうかと思って追いつ返せず居たのだが、どうやらそれが良くなかったようだ。

「うーらーんーくーだーさーいー！ー！ー！」

その言葉を聞き、アンリは頭痛で頭を抱えた。

彼が報告してくるこの内訳は大まかに分けて三つ、国の状況、布教状況、そしてそれ以外の何かだ。このうち、最後のものが一番厄介事のタネとなることを、彼女は経験で悟っていた。

件の台詞を聞く限り、今日は厄介事のようにだった。

「ご覧下さい、アンリ様！」

「一体なに？」

扉を開け放って登場した教皇は、開口一番でそう告げてきた。

仮面の下で引き攣った表情を浮かべているアンリだが、なるべく声に出さないように努めて冷静に尋ねた。

「ふふふ、とうとう完成したのです！」

草の根アンリ様計画の主力、小型アンリ様像が！

そう言って教皇が差し出してきたのは、掌サイズの彫像だった。

デザインは巨大アンリ像と同じく黒薔薇のドレスを纏ったアンリの姿だが、圧倒的に小型なのに細部まで精緻に作り込まれていて、素晴らしいクオリティを為している。

この世界の好事家であれば結構な高額をはたいてでも、この彫像を欲しがることだろう。

しかし、異世界の知識を持つアンリにとっては、最早フィギュア

にしか見えなかった。

「いかがです？ 素晴らしい出来ではないですか？」

「これ、どうするつもり？」

嬉しそくに感想を求める教皇に、先程以上に引き攣った表情になりながらも尋ねるアンリ。

「勿論、全ての信徒に配布して、いつでも祈りが捧げられるようにするのです。」

ゆくゆくは、これを以って他国への布教も行いたいですね」

嫌な予感が当たったとばかりに首を振りながら、アンリは教皇の暴走を止めに掛かる。

自分を模したフィギュアが数千数万の相手に配られるなど、悪夢ではない。

「認められな……」

「既に、日に百体まで製作出来る準備が整いました。」

信徒全てに行き渡るまで、そう時間は掛からないでしょう」

「量産体制構築済み!？」

予想以上に事態が進んでしまっていることに、アンリは珍しく驚愕の声を上げた。

しかし、教皇はその驚愕の叫びを称賛と受け取ったのか、誇らしげに笑みを浮かべた。

「こうしては居られません。」

更なるデザインの製作に入らねば……! !

それでは、これにて失礼いたします! !」

「ちよ……」

そう言い放つと、教皇は暴風のように立ち去って行った。後に残されたアンリは、諦めの境地で深い溜息を吐いた。

外伝07：ある教皇の企み（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」発売日はいよいよ週明け9月7日です。

書店によっては既に今週末から置いてある所もあるようです。

もしお見掛けの際は、是非ともお手に取って頂きますよう、お願い致します。



## 外伝08：ある不死のバトラー

「……………はあ」

邪神殿の五階層で、神族のアンリは溜息を吐いた。

そしてそのまま、部屋の窓枠にそつと指を這わせる。窓枠をなぞった指を見ると、そこには埃が付いている。ある意味当たり前と言えは当たり前前の結果だが、以前はここまで汚れてはいなかった。

このような結果になっているのは、人族のアンリやテナが邪神殿を去ってしまったことによる。

「これは由々しき事態」

衣食住のうち、「衣」はまだ良い。アンリが着ている黒薔薇のドレスは一定時間で自動的に最適な状態になるため、着た切りになることに目を瞑れば洗濯どころか着替えすらも不要だ。

しかし、「食」と「住」はそうはいかない。

食事は作らなければ食べられないが、アンリの料理スキルはそれほど高くはない。不味くはないが、特筆するほど美味くもないという微妙な味だ。

それでは他の住神であるソフィアとアンバールの二柱はどうかと言えは、こちらはそもそも期待するだけ無駄な話だ。

元々、神族は信仰を糧に生きる存在であり、他の生物がするような食事を必要としない。必要としないのだから、当然作る能力などを保有しているほど酔狂ではない。必要もないのに作る能力を持っているのは、何らかの信念などがある場合しか考え難い。

なら何故食べているのかといわれれば、娯楽以上の意味はない。

当然、娯楽である以上は美味しいものが食べたいのだが、今まで食事を用意してくれていたテナが居なくなってしまったため、彼らの食生活は切ないものとなってしまっている。それなら食べなければとも思うが、一度味わってしまったことによる未練が続いているのだらう。

また、いかに邪神殿とはいえ、掃除をしなければ埃が溜まるし汚れが残る。神族になって呪いを克服したことにより箒を持つことが出来るようになったアンリだが、だからと言って広大な神殿の掃除をする気になるかと言われれば、そつと逃げ出すだらう。

なお、邪神殿の中でアンリ達の居住区と言えるのは地上第五階層と地下三十一階層だが、それだけでもかなりの面積を有している。テナが居た時であっても、彼女一人で掃除が出来るようなものでは到底ない。

ならば、これまではどうしていたか……そこには、この神殿があくまでダンジョンであるということが関連している。ダンジョンマスターのスキル「ダンジョンクリエイト」により、魔力を消費することで状態の回復が行えるのだ。

しかし、「ダンジョンクリエイト」スキルを人族のアンリが誤って持ってしまってしまったため、それが出来なくなってしまったのだ。神族としての「権能」で似たような力を発揮するのは必ずしも不可能ではないが、如何せん「権能」は力が強過ぎて加減が利かないという難点がある。基本的には世界全体に作用する力であるからだ。

「ただいまより、生活環境向上会議を始める」

「まあ、構いませんが……」

「俺が言うのもなんだけどよ、神選ミスじゃねえか？」

会議場の円卓を囲み、三柱によるしょうもない会議が始まった。

「まあ、食事を改善するつてのは賛成だけどな。  
お前の作るのは別に不味くはねえが、取り立てて美味くもねえし  
な」

「それは私も同感です」

自分でも自覚はしているとはいえ、面と向かって自分の料理の腕を否定されれば、当然アンリとしても面白くない。

そのため、二柱に対して反論を投げた。

「ごくつぶしが贅沢言わない。

そんなに言うなら、二人が作ればいい」

「無理だ」「無理です」

その言葉に、ソフィアとアンバーは一瞬にして拒否してきた。アンリとしても、彼らが料理が出来るなどとは最初から微塵も思っていない。言ってみただけだ。そのため、溜息を吐きながら引き下がった。

「で、どうすんだ？

魔族から家事が出来る奴を連れてくることは出来ないこともねえが」

「それはやめておいた方が良いでしょう。

此処に新たに人族や魔族を連れてくるというのも問題になりそうです」

「やっぱり？」

「ええ、この世界の管理者が揃っている特殊な環境ですし……」

ソフィアの言葉に、アンリも納得の声を上げた。

ソフィアとアンバーが邪神殿に居座り続けていることを知って

いるのは、ごく少数の身内だけだ。これが外に漏れた場合、下手をすればこの国を確保しようと他国から攻め込まれることすら考えられる。

「そうすると、元々居る奴で家事が出来るのが居るかって話になるわけだが……」

情報拡散を避けるという意味においては地上三階層以下に居る信徒達も国外の人族や魔族と同様に用いることは出来ないため、動かせる人材は非常に限られてしまう。人族のアンリと共に邪神殿を出た三人を除くと、後は階層ボスクらいしか候補が居ない。

「ヴニ」

「論外だろ」

「あの巨体では……そもそも四足歩行ですし」

人材ですらなかった。

全長二十メートルの黒龍ヴァドニールに料理や掃除が出来る筈もない。

「アンリルアーマー」

「同じだろ」

「無理ですね」

全長五メートルのオリハリコン製リビングアーマーであっても同じだ。人型であるだけ黒龍よりはマシではあるが、やはりサイズから考えれば不可能だろう。

そもそも、自我がないので料理など出来ない。

「……インペリアル・デス」

「……身体の大きさなどは問題なさそうですが」  
「……出来るのか？」

残るは、地下ダンジョンのラスボスである彼ぐらいしか居なかった。

三柱はそれぞれ、最強の不死皇様を思い浮かべる。

サイズは問題ない、人族や魔族とほぼ同じだ。

体型も問題ない、人型だ。

では彼に料理や掃除が出来るかと考えれば、三柱とも首を傾げることが出来なかった。

「取り敢えず、聞いてみる」

そう言うと、アンリはインペリアル・デスを呼び出すことにした。

「それでは、ご賞味あれ」

「……うん」

「……ああ」

「……い、いただきます」

目の前に広がる光景に、三柱は圧倒されていた。

丹精込めて作られた料理の数々を見るからに美味しそうだった。

それ自体は良いことなのだが、見た目骸骨のアンデッドがこれを作ったということに、シヨックが大きい。特に、明らかに料理スキル

で負けていることがわかったアンリは心にグサグサと刺さるものを感じていた。

「美味しい」

「美味しいな」

「美味しいですね」

味の方も見た目の期待を裏切らなかつた。

「恐悦至極に御座います」

熟練の執事のように、洗練された仕草で一礼するインペリアル・デス。

なお、彼はここまでの一切の動作をただただアンリ一柱に向けて行っている。ソフィアとアンバルにも食事を出すことはしたが、あくまで主であるアンリの顔を立てるためでしかない。彼の忠誠と信仰の総ては、アンリただ一柱のためにある。

彼の来歴を考えれば、敵対者に近い光神に対して露骨な攻撃姿勢を見せないだけ、マシというものだろう。

「清掃についてもお任せあれ」

そう言うと、インペリアル・デスは部屋の空いているスペースに對して手を向けた。

「出でよ、我が眷属達」

不死者の皇の喚び出しに応え、数多のアンデッド達が姿を現す。

「さあ、我が眷属達よ。アンリ様のためにこの神殿を隅々まで磨き

上げるのだ」

その言葉を受けて、アンデッド達は何処からともなく箒や雑巾を取り出し、呆気にとられる三柱を余所にバツと散って清掃を開始した。

広大な邪神殿であるが、アンデッド達は数を頼りにした人海戦術で凄まじい速さで掃除を行っていった。

スケルトンが箒で床を掃いたり、レイスが壁を雑巾掛けしたりという光景はあまりにもシユールであつたが、効果については申し分なかった。

一刻もしないうちに第五階層と地下三十一階層の清掃は完了し、新築のようなピカピカの状態まで磨き上げられた。

「如何でしょうか」

誇らしげに成果を報告するインペリアル・デスに、アンリは思わずコクコクと頷くしかなかった。

「これだけではございません。

他にも取次、予定の管理、護衛、財政の管理、何でもこなしてご覧に入れますよう」

「そ、そう……」

何でこの不死皇様はこんなに仕事出来ますアピールをしてくるんだろうか……と内心で首を傾げながらも、アンリは頷いた。

ちなみに、彼がここまで必死な理由は三十階層ボスの役目が暇だからである。

「それじゃ、これからもお願い」

「ハッ！ 全身全霊を以つて、務めさせて頂きます！」

感動に打ち震えながらも態度には示さず、ピシッと音が聞こえてくるような見事な姿勢で彼は深々と頭を下げた。

「三十階層守護」兼「執事」インペリアル・デスが誕生した瞬間である。



外伝08：ある不死のバトラー（後書き）

バトラー不死皇

## 記念SS：自伝「アンリと愉快的仲間達」

「……暇」

思わず、そんな言葉が口を突いて出た。  
しかし、それも仕方ないと思う。とにかくやることがないのだ。

神族として神殿に残った自分から分けて貰った金銭は結構な額があり、当面の間は生活の心配をする必要はない。故に、しばらく働く必要はない。

ダンジョンマスターをやっていた時と異なり、誰かが命を狙ってくることもない。

望んでいた平穩……でないこともたまにはあるけれど、それでも概ね穏やかな日常が続いている。

願ったり叶ったりの状況である筈で、これに対して文句を言うのは間違ってるし贅沢だと思っけれど、それでもやはり暇だった。

あまりに暇なものだから、普段では決してしないようなこと思わず手を伸ばしてしまった。

「そつだ、自伝を書こう」

後から冷静になってみれば、もう少し冷静に考えるべきだったと思う。

着の身着のままどころか一糸纏わぬ生まれたままの姿でこの世界に放り込まれ、冒険者ギルドに登録したり、ダンジョンマスターになったり、邪神になってしまったり、光神や闇神と争ったり、それでいて結局は人に戻ったり、思えば波乱万丈と言っ言葉がこれ以上無いほどピツタリの人生だった……と生涯を振り返るには年齢的にまだ早い気もするけれど、この一年の出来事だけでも十分過ぎるほど濃いものだったと断言出来る。

「……………」

今思い出すと微妙に頭痛がするようなことが多かつたりもするけれど　と言うか、殆どすべてそうだけど　これだけ濃い経験をしてきたのだから、私が自伝を書けばさぞかし内容に富んだ書籍が出来上がるだろう。

そう思って以前経典を書いた時にも使用した執筆道具を引っ張り出してきたのだが、そこでふと忘れていた重大なことを思い出した。

「加護付与、どうしよう?」

以前も道徳的な経典を書き上げようとして取り組んだものの、出来上がったのは世界最凶最悪の呪いの書だった。

原因はこの世界に来てからずっと呪いのように付き纏う加護付与スキル。任意なら一瞬、自動でも一時間程で邪神の加護を付与してしまう強力にして厄介なスキルだ。

生物であれば相手が受け入れなければ発動しないが、執筆道具は非生物であるため一時間触れていたら加護付与が発動してしまう。

道徳本ですら呪いの経典にしてしまう加護だ、私の自伝に付与されたらどんなことになるのか想像も付かない。想像も付かないが、少なくともろくなことにならないことだけは断言出来る。

前回の反省を活かすためにも、加護付与が発動しないように気を付けて執筆しなければならない。

「……むずかしい」

そう思って、両手が紙面に触れないように気を付けてペンを走らせようとしたのだが、これが中々に難しい。

紙を押さえる左手やペンを固定するためについている右手の小指側の側面、普段無意識に紙に触れているそれらを宙に浮かせた状態で字を書くのは想像以上に苦行だった。嘘だと思っなら、試してみるとよい。

どうしても手がプルプルと震えてしまい、ミミズがのたくったような文字になってしまう。

しかし、ここで諦めたら「呪いの書再び！」となるのが目に見えるため、何度も何度も書き直しになりながらも何とか文字を書き連ねていく。

「何をやってるんだ、お前は……」

プルプル震えながらも真剣に紙面に立ち向かう様子に、たまたま部屋を覗きこんだレオノーラが呆れたような声を投げ掛けてきたが、気にしないことにしておく。

私自身も何をやってるんだと思わなくもないが、ここまで来たら諦めると負けのように感じて後には引けない。

「あたらしいあそび？」

違う。真剣な執筆活動だよ、リリ。傍から見ると罰ゲームか何かに見えるかも知れないが、そこに突っ込んではいけない。

「あまり無理なさらないで下さいね、アンリ様」

テナの優しさが心に沁みて、紙面が滲んで見えなくなった。

そんな皆の温かい<sup>暖かい</sup>声援を受けて、私の自伝は何とか完成した。  
タイトルは

記念SS：自伝「アンリと愉快な仲間達」（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」発売記念ショートショートでした。

本日2015年9月7日、宝島社様よりいよいよ発売となります。

皆様からご評価頂けた結果であり、感謝しております。

書店などで見掛けられましたら、是非ともお手にとって頂ければと思います。

なお、もう一つお知らせがあります。

本話と同時刻に本作のスピンオフにして続篇に当たる新作を投稿開始致しました。

折角なので、この（個人的な）記念日に投稿日を合わせました。

タイトルは「召喚アトランダム」

こちらも併せて、よろしくお願い致します。

「召喚アトランダム」：<http://ncode.syosetu.com/n3048cv/>

北瀬野ゆなき

余談ですが、アンリさんはふるふる震えながら必死に執筆しましたが、実際には一時間に一度休憩を取って紙から手を放せば加護付与は発動しません。

## 記念SS…まんぷくアンリさん

「……………んう……………」

各地から流れ込んでくる信仰に、神族としてのアンリは僅かに目を細めた。

神族にとって信仰とは栄養分のようなものであり、満ち足りていれば人族における満腹感に近い感覚が得られる。

逆に、信仰が足りなくなっただけの場合は激しい飢餓感に襲われる上に、食物を摂取しても満たされないため、地獄の苦しみを味わうことになるわけだが。

もともと、「恐怖」の権能を持つアンリが得られる信仰はかなりの量を保っていたが、ここ最近は更に流れ込む信仰に拍車がかかっていた。

理由は、人族のアンリが書いた自伝だ。

彼女が自身の来歴の一部を記した自伝は教皇経由で広められ、それを通してアンリのことのことが広く知られたため、流れ込む信仰の量が増えたのだった。

「人は満腹になれば幸福になる。それは人族ならぬ神族も同じだった。

いつになく浮かれた感じでふらりふらりと舞うように神殿の廊下を歩くアンリは、前方に人影があるのを見付けた。

「これはアンリ様。



……？ 何やらご機嫌がよろしいようで」

人影は邪神殿にてアンリの執事を務めるインペリアル・デスだった。

本来、地下ダンジョンの第三十階層のボスを担う彼であるが、ここまで到達する侵入者が皆無であることと、現在の邪神殿に家事が出来るものが他に居ないという理由から、緊急時を除いてアンリの傍に仕えることとなったのだった。

完璧な姿勢で礼をする不死皇だが、そこでアンリの雰囲気は普段とは異なることに気付き、疑問を述べてきた。

アンリはそれを受けて頷くと、自身の機嫌が良い理由を説明する。

「人族の私を書いた本のおかげで、信仰が増えた」

「ほう、それは素晴らしい。」

心よりお祝い申し上げます」

「ありがとうございます」

アンリに絶対的な忠誠と信仰を抱くインペリアル・デスにとって、アンリの喜びは自身の喜びである。

表情など存在しないインペリアル・デスだが、その紅い眼光からは心からの喜びが伝わってきた。それを感じ取ったアンリも、朗らかに礼を述べる。

アンリはインペリアル・デスと別れると、相変わらずふらりふらりと舞うような歩き方で自室へと戻った。

「ふむ……」

そのアンリの後ろ姿を見ながら、バトラー不死皇は何かを考え始めた。

「ふう……」

自室に下がったアンリは、漆黒の天蓋ベッドに身を投げ出すと満  
足げな溜息を吐いた。

しばらくそうして横になっていたが、やがて仰向けになったまま  
枕の横へと手を伸ばし、そこに置いてあった一冊の書籍を掲げて見  
詰めた。

それは、人族のアンリが書き上げた件の自伝くだんだった。

教皇経由で出版した自伝だが、人族のアンリは神族のアンリにも  
見本を一冊くれたため、大切に身近に置いてあるのだった。

人族のアンリと神族のアンリは、元を辿れば同一人物だ。

つまり、この自伝は人族のアンリの自伝であると同時に、神族で  
ある彼女の自伝でもあるということになる。

アンリは心地よい満腹感に満たされながら、仰向けになったまま  
自伝を開いて思い出を振り返るのだった。

## 記念SS：まんぶくアンリさん（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」重版記念ショートショートでした。

先日9月7日に発売した書籍版「邪神アベレージ」ですが、重版出来のご連絡を頂きました。

これも一重に応援して下さいている皆様のおかげです。

本当にありがとうございます。

まだ読まれていない方々も、これを機にお手に取って頂ければ幸いです。

「邪神アベレージ」特設ページ

[http://www.wtrpgg.com/novel/tr  
easure/takarajima/average/aver  
age.html](http://www.wtrpgg.com/novel/tr<br/>easure/takarajima/average/aver<br/>age.html)

ちなみに、売れ行き次第では代わりに「はらぺこアンリさん」を書くつもりだったのは内緒です。

記念SS：異伝「クリスマス禁止令」(前書き)

時系列は三神戦争(笑)の最中です。

## 記念SS：異伝「クリスマス禁止令」

クリスマス、それは元の世界におけるキリスト教の宗教祭である。本来はイエス<sup>キリスト</sup>の降誕を祝う日であった筈だが、何故か聖ニコラウスの逸話を起源とするサンタクロースがそこに混ざって、プレゼントを贈る日となっている。

まあ、そこまでであれば別に良い。

問題なのは、そんな敵かな宗教儀式である筈のクリスマスが、何故か不純異性交遊を推奨する日となっていることだ。

本当に何故そんなことになっているのか私にもサツパリなのだが、クリスマスと言えば恋人達が熱い夜を過ごす日と言うのが一般的なイメージだろう。

そして同時に、街全体がそんな雰囲気に含まれる中、そんな相手が居ない者にとっては肩身の狭い日となる。

たとえ恋人が居なかったとしても仲の良いグループなどがあればパーティなどを開いて充実した日に出来るのだろうが、私のような半ば孤立した人間にとってはそれも夢のまた夢。

煌びやかなイルミネーションから背を向けて、そそくさと家に帰る惨めな日　それがクリスマスだ。

尤も、それらは全て元の世界の話。

今私が居る世界にはキリスト教も存在しないので、クリスマスという日自体が存在する筈がない。

だから、元の世界の鬱憤を晴らす軽い冗談のつもりで夕食の場で言ってしまったのだ。

「この世界において、クリスマスは禁止とする」

その瞬間、空気が凍り付いた。

「？」

思わぬ反応に首を傾げる。

てつきり「クリスマスって何だ？」と言った質問が来ると思ったのだが。

中でもソフィアとアンバールの態度は顕著で、あからさまな怒気を漂わせながらゆらりと立ち上がった。

「良い度胸ですね……」

「ああ、まったくくたぜ……」

二柱は凄まじい魔力を放ちながら、私を睨み付けてきた。

「私の生誕祭を潰そうとするとは！」

「俺の生誕祭を潰そうなんてな！」

あ、被った。何だかピシツという音が鳴ったように聞こえた。

ソフィアとアンバールは相手の言葉を聞き、私を睨むのを止めてお互いに睨み合った。

「……………今、何と言いました？」  
「……………今、何だった？」

おどろおどろしい声でお互いに問い掛ける二柱。  
緊張感は加速度的に増していき、やがて破裂する。

「クリスマスは私の生誕祭だと言いました」  
「ふざけんな、俺の生誕祭だろうが」  
「私の生誕祭ですよ、しゃしゃり出て来ないでください！」  
「図々しいのはそっちだ、引っ込んでろ！」  
「なんですって!?!」  
「あぁん!?!」

ヒートアップして互いに口論を飛ばす二柱。  
今のところ手は出ていないが、それも時間の問題に思える。

取り敢えず矛先が私から逸れたことに安堵し、事の原因を探るために他の人達に聞いてみることにした。

「クリスマスって、何の日？」  
「？」  
「ええと……………」  
「閻神様の生誕祭だな」  
「え?」

リリは何のことが分からず首を傾げていたが、テナとレオノーラの間でも意見が違つようだ。レオノーラの回答に、テナは意表を突かれたように驚きを露わにしている。

「テナの知ってるクリスマスは違うの？」

「はい、聖女神ソフィアさんの生誕祭です」

テナは今でこそ使徒族だが元々人族だったことを考えると、人族はソフィアの生誕祭としていて、魔族はアンバールの生誕祭と認識していると言うことのようにだ。

しかし、そもそも神族に生誕とかつてあるのだろうか？

ソフィアとアンバールは創造神から別たれて生まれた存在の筈だ。そう言う意味では、二柱の生まれた日が一緒でも可笑しくないのかも知れない。

しかし、仮にそうだとして何故彼らの生誕祭が「クリスマス」なのか分からない。

考えても分からないので、もう直接二柱に聞いてみることにした。

「創造神から別れた日がクリスマス？」

「いいえ、違います」

「と言うか、日付なんざ覚えちゃいねえ」

違っらしい。

もう、わけが分からない。

「なら、何故生誕祭なの？」

「お前の世界から来た奴が、『神様の誕生日』だと言ったからだ」

アンバールの回答で、全てが察せられてしまった。

この世界には過去に私と同じ世界から召喚されて勇者として活躍した者達が居ると、以前レオノーラから聞いた。所謂、召喚勇者とかわれている者達だ。



召喚勇者はこの世界に喚ばれた際に何らかの力を与えられ、その強力な力を以って英雄として振る舞う。それこそ、物語にでも登場する「勇者」のように。

そんな立場になれば、さぞかし異性からもモテたことだろう。で、イチャイチャするためのイベントの一環として「クリスマス」をこの世界に習慣として広めた、と……。

よけいなことをッ！

で、この世界で「神様」と言えばソフィアかアンバルだから、人族と魔族でそれぞれ彼らの生誕祭としたわけか。当神達も満更ではなかったようだが。

アンバルの言葉にあった「神様の誕生日」と言うのが素で間違えているのか、この世界に合わせて変えたのかは分からないけれど。

しかし、そうだとすると肝心なイベント内容が心配だ。

元の世界のそれと同じく、「恋人達の恋人達による恋人達のための日」になってるのではなからうか。

嫌な予感がしたので、再び聞いてみることにする。

「クリスマスって何する日？」

「男性が女性に衣装を贈る日だな。」

赤と白の特徴的な服で裾が短くて……ええと、『みにすかさんたこす』だったか

「はい、それで女性の方がそれを受け取って着たら、二人は恋人同士になるんです」

どうしよう、予想以上にヘンテコな日になってる。

サンタクロースや贈り物の辺りに片鱗は残つてると言えば残っているが、裾の短さや受け取って着替えたなら恋人同士と言う辺りにピンク色な期待が見え隠れする。

どうやら、過去の召喚勇者達が自身の欲望に走って色々な風習を混ぜ込んだらしい。わざとなのか結果的にそうだったのかは分からない。十中八九、前者だと思っけど。

と言うか、イベント内容に全く絡んでいないのだが、ソフィアやアンバールの生誕は何処に行った。それで良いのか二柱共。

しかし、どうしたものか。

先程は冗談半分でクリスマスを禁止すると言ったが、むしろ正常に戻すべきなのではないかという気がしてきた。主に私の精神的安定のために。

よし、決めた。

私が影響力を及ぼせるのはこの国だけだけど、せめてここだけはまともにクリスマスを祝うようにしよう。

そうと決まれば、教皇に何て指示を出すかを決めなければ。

まず一点目、お祝いの名目については神様の生誕祭という現状のままでもいい。ソフィアやアンバールを無駄に煽るのは避けたいし、この世界で預言者とか救世主とか言っても誰も分らないだろう。

そして二点目、贈り物については採用としよう。それ自体は別段悪いことではないし、やはりクリスマスと言えばプレゼントだろう。

次に三点目、サンタクロースに関しては敢えて採用しない。いや、イメージ的にはこれが無いという思いもあるのだが、過去の召喚勇者のせいで蔓延してしまっているミニスカサンタ衣装の風習を排除したい。

最後に四点目、これが何よりも大事なのだが、当日はみんなで集まって大々的に祝うこととする。二人きりの甘い夜も、逆に独り身の寂しい夜も無しだ。決して、私の都合というわけではない。

この国においてクリスマスとは、「みんなで集まって神様の生誕を祝しながら贈り物を贈る日」だ。私が今そう決めた。

邪神殿の大広間の中央には篝火が焚かれ、大釜が乗せられている。大釜で煮立てられた怪しげな液体からは薄いピンクの煙が立ち昇り、人々を高揚させる効果を為していた。

国中の者達が集ったこの空間には、その人の多さからか異様な熱気が立ち込めていた。

いつぞやの焼き直しのような光景。

端的に言えば、サバト再び。

かつてのように教皇がサツと手を挙げて宣言を行った。

「それではこれより、アンリ様の生誕を祝し生贄を捧ぐ儀を始めます！」

ぞろぞろと戻ってきた。

記念SS：異伝「クリスマス禁止令」（後書き）

なお、生贄は鶏肉なのでご安心ください。

## 記念SS：謎伝「明けてまして同文化交流」

「それではこれより、新年を祝し生贄を捧ぐ儀を始めます！」  
「それはもういい」

「明けてましておめでとう」  
「新年、おめでとうございませう。アンリ様」  
「……おめでとうございませう」  
「新年おめでとう」

食堂にてテナとリリ、それからレオノーラと新年の挨拶を交わし合った。

今日は私がこの世界に来て初めて新年を迎える日だ。

「ところで、この世界だと新年のお祝いって何をやるの？」  
「そうですね……まず皆でオセチを食べます」  
「オセチ料理？ あるの？」

テナの口から出てきた懐かしい言葉に、俄然期待してしまう。  
普段食べているような料理も美味しいことは美味しいのだけど、  
偶には和食が食べたくなるのだ。

里芋の煮物食べたい。

「はい、ちゃんと用意してますよ。

ちよつと待つててくださいね」

「お手伝い、する」

「ありがとう、リリ」

テナはリリと一緒に厨房へと一度下がると、やがて二人で何層にもなった箱を運んできた。

それをテーブルに置き、蓋を開けて各層をバラして並べてゆく。

「さあ、どうぞ」

箱の中にはステーキやサーモンなど彩鮮やかな料理の数々がぎっしりと詰め込まれていた。

うん、ご馳走だ。ご馳走なんだけど……私が知ってるおせち料理と違う。

これは、元の世界で言う洋食を箱に詰め込んだだけではないのか。

「オセチは大昔の勇者様が発案したとされる由緒正しい新年の料理なんです」

「ああ、それで……」

クリスマスの際にもあった、過去の召喚勇者の「功績」か。

ご馳走を重箱に詰めるくらいの説明しか出来なかったんだな、多分。

そこまですたなら和食をこの世界で開発して欲しかった……。

まあ、料理は普通に美味しそうですねので別に害は無いからいいか。

「いただきます」

うん、美味しい。

「他に、新年らしいことは？」

「あとは、えつと……」

「オトシダマだな、新年の祝いとして子供などに特別に金を渡すものだ」

ああ、お年玉の風習もあるのか。

私はオセチ料理を食べる手を止めてアイテムボックスから銀貨を数枚取り出すと、テナとリリに渡そうとする。

「ちなみにだが、直接手渡すのではなく目の前から落とすように渡すのがしきたりだ」

それ、多分オヤジギャグが混ざってる。

風習を広めた召喚勇者、一体どんな人が来てたんだろうか……？  
まあ、いいや。敢えてツッコむ必要性も感じられない。風習通りにしよう。

「いつもありがとう」

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

私は銀貨をテナとリリの目の前まで持って行って、放した。

重力に従って落下する銀貨は、二人が反射的に差し出した両掌上に到着する。



「私には？」

「レオノーラはもう子供じゃない」

何が悲しくて自分よりも大きな相手にお年玉をあげなきゃならぬのか。いや、年齢的には私の方がいつこ上だけだ。

それはさておき……と私は横に目を向けた。

先程から和気藹々と新年を祝っている横で会話に参加せずにいるソフィアとアンバールの方に、だ。

二人は私が起きた時から既にお酒を飲み交わしていた。

「朝っぱらからお酒？」

この駄目人間共め……あ、人族じゃなかったか。

「いいんだよ、新年なんだから」

「新年には神族にお酒を捧げる風習になっているのです。

だから、私達がお酒を飲むのは神族としての義務なのです」

確かにお神酒を奉納するということはあるけれど、二柱はそれを口実に飲みたいだけにしか見えない。

まあ、今はそれは置いておこう。

「……………スッ」

「？」

「何だこの手は？」

勿論、決まっている。

「オトシダマ」

プリーズ。

神族初心者の方はベテランの二柱から貰う権利がある筈だ。

「阿呆か、何で俺らがお前にオトシダマなんてやらなきゃならねえんだ」

「まったくです」

「可愛い後輩に偶には先輩らしいところを見せてもバチは当たらないと思う」

「そう言うことは、もう少し可愛げを持ってから言いやがれ」

痛い、差し出した掌を上からパシンと叩かれた。

「大体にして、神族はお金なんて持ちませんよ」

「ああ、手前くらいだ。金稼ぎなんか精を出している神族は」

確かに、彼らのような生粋の神族であればお金は必要ない。衣食住など無くても問題ないし、買い物をするような場面がないからだ。必要ないのだから持ってもいないというのは道理だ。

つまり、彼らは一文無しだ。

「びんぼーにん」

「それはそれで腹が立つな、オイ」

まあいいや、最初から二柱にはそこまで期待していなかったから駄目元だったし。

もうこの酔っ払い達は放っておこう。

私は二柱からお年玉を徴収することを諦めてテナ達のもとに戻った。

「他に何かある？」

「後はネンガジョーか？」

離れている相手に近況の報告書を送るものだ。

私もつい先程魔族領に報告書を送ってきた」

それ、本当に年賀状？

何かニュアンスが違う気がする。

「何でこのタイミングでそんなものを？」

「いや、何故かは知らんが、昔ながらの風習で報告書は新年のタイミングで送ることになっているのだ。

年一回だと足りん部分もあるので、私は普段も定期的に送っているのだがな」

「新年の報告書を送る」じゃなくて「報告書は新年に送る」か。

これ、もしかして報告書を面倒くさがった例の人が、年賀状の風習を持ち出して年一回にしようと思っただけなのではないだろうか。

少なくとも、私は特に報告書など送る相手が居ないから、この風習は放っておこう。

「後はハツモウデですね。

別に今日じゃなくても新年の早い内なら良いのですが、新年に教会に参拝することをそう呼ぶそうです」

初詣か……そう言えば、私も元の世界に居た時は元日に神社へ行ってお賽銭投げておみくじ引いたな。

なお、おみくじの結果については黙秘する。

でも、参拝と言っても

「ここが神殿」

そして、私が神様。

誰に参れと？

「あはは。そ、そうですね」

そのことを言うと、テナもそれに気付いたのか苦笑した。

が、次の瞬間真面目な顔になってリリに何やら小声で耳打ちし始めた。

「?????」

何だろうと思って首を傾げていると、二人は胸の前で手を組んで目を閉じた。

……もしかして、私今お参りされてる？

どうしよう、信徒とかが遠くでやってる分については良かったけど、目の前でやられると凄くこそばゆい。

ちなみに、レオノーラはお酒を飲んでるアンバールに向かってお祈りしている。

私は恥ずかしさを誤魔化すように、二人の頭を撫でた。

「今年もよろしく」

「はい、よろしくお願いします。！」  
「よろしくおねがいします。」

ところで、初詣があるなら三柱がこんなところに居て良かったの  
だろうか。

記念SS：謎伝「明けてまして同文化交流」(後書き)

明けてましておめでとーいになります。

記念SS：他伝「崇高なる我が神」

「……………」

ダンジョン「邪神の聖域」の第三十階層に据えられた玉座で、無言のまま考え事をしている者が居た。

彼の名はインペリアル・デス。邪神アンリによって召喚され、加護を与えられ、この地の守護を任された最強のアンデッドだ。

その力は並みの魔物のそれとは比較にならない程に強く、光神や闇神をして神族の領域に到達していると言わしめるほどのもの。勇者や魔王と言った世界最強クラスの者達をも凌駕する彼に敵う者など、この世界を管理する三柱くらいのものだろうか。

そんな絶大な力を持つ彼が悩んでいること、それは彼が忠誠を誓った主が先日話していた言葉に起因する。

『人族の私が書いた本のおかげで、信仰が増えた』

彼の主である邪神アンリが珍しくも嬉しそうな態度を露わにしながら語った言葉だ。

なるほど、信仰と言うものが彼女ら神族にとって重要な意味合いを持つことは理解できる。

それが増えて主が喜ぶことも、我が身の喜びと同義だ。

しかし、同時に思う。

それを知った今、自身は何もしなくて良いのか、と。

「……………」

このようなことを自問する時点で、答えは最早彼自身の中では出ているのだろう。

無論、良い筈がない。

主のために出来ることがあるのならば、全身全霊を以って為すべきだ。

ならばそう、やるべきことは一つ。

幸いにして、人族の主が記した書物は主の為した偉業のほんの一部でしかないと聞く。まだまだ、語れる部分は大いに存在するのだ。その部分を記して書物とすれば、更に主の信仰を増すことが出来るだろう。

それは、主の更なる喜びに繋がる。

故に……

「余が続きを書こう」

こうして、「三十階層守護」兼「執事」インペリアル・デスが新たに「作家」業に乗り出した。

インペリアル・デスはまず執筆のための準備を整えることにした。玉座の前に置かれた巨大なテーブルに紙とペンといった執筆道具、それから参考図書として件の人族の主が書き記したという本だ。



まず彼は、その本を読んでどのような内容や書き方をすれば良いのかを学ぶこととした。あまりにも内容が異なると、読む者に違和感を与えてしまいかねないため、なるべく合わせた方が良く考えたのだ。

黙々と読み進め、三時間程で読了して本を置く。

「ふむ、理解した」

内容は勿論、書き方の癖なども全て把握したインペリアル・デスは早速執筆に取り掛かる。

永い時を存在し続けて様々な経験を積んできた彼にしてみれば、一冊の書物を作成するなど造作もないことだ。

プロットを頭の中で組み立て、章立てを構築し、あつと言つ間に大まかな構成を確定する。

絵やデザインはそれを専門とする者に任せるつもりでいるため、ひとまずは文章を作り上げることに専念する。

アンデッドであるインペリアル・デスには疲労と言う概念が無いため、何時間であろうとも一定の執筆スピードを保つたまま書き進められる。食事や睡眠の時間も彼には必要ない。

勿論、執事としての業務を疎かにするわけにはいかないため、その時間については手を止めざるを得ないが、それ以外の時間は全て執筆に充てるのが可能なのだ。それにより、普通の人族が書くよりも数倍は効率良く執筆が進められる。

空き時間を使って一気に書き上げたインペリアル・デスは、三度読み返して誤字脱字のチェックを終えて満足気に頷いた。

「フツ、これならばきつとアンリ様にもご満足頂けるに違いない」

しかし、そこまで考えて彼はふと考え込んだ。

「ふむ……」

これで出来上がった書籍を主である邪神アンリに見せるのは容易い。しかし、どうせならば結果を出してからのサプライズにした方が主を喜ばせられるのではないか、そう考えたのだ。

密かに本を出版して広め、その信仰を主に贈る……それは中々に気の利いた捧げものではないか。

「そうと決まれば……」

同じく邪神アンリに忠誠を誓う者……教皇にコンタクトを取り、出版の手筈を整えよう。そう決意したインペリアル・デスは玉座を立ち上がり、ダンジョンの外へと向かった。

「なんと、それは素晴らしいお考えです！」

「ふむ、であれば協力して貰えるか？」

「勿論です！」

邪神殿三階層の一室にお忍びで訪れたインペリアル・デスの提案を、教皇は諸手を挙げて賛成した。

インペリアル・デスの外見は骸骨であり、そんな相手が訪ねてきたら普通であれば卒倒しても不思議ではないのだが、彼は一切気に

した様子を見せない。

邪神アンリを信仰する者であれば門戸を閉じる必要はないということかも知れないが、それにしても肝が据わり過ぎである。

「絵やデザインについては、経典の作成でノウハウがありますので、こちらにお任せください。」

流通についても、既にルートがありますので使えるでしょう」

「それは重畳」

「ああ、そうだ。良いことを思い付きました。」

折角ですから、経典をセットに付けるのは如何でしょうか？」

「ふむ、それは良いかも知れん」

こうして、一人と一体の狂信者の手により邪神アンリを謳った二冊目の書が世の中に放たれた。

記念SS：他伝「崇高なる我が神」（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」第二巻発売記念ショートショートでした。

第二巻は2016年2月8日、発売となります。

既に早いところでは店頭に並んでいるようです。

もし見掛けられましたら、是非ともお手にとって頂ければ幸いです。取り敢えず、後書き（のような何か）を是非見て欲しいです。

<http://blog.konorano.jp/archives/51988876.html>

なお、もう一つお知らせがあります。

【WEB版完結まで発刊記念】を祝して、別途新作を投稿開始しました。

こちらも併せて、よろしくお願い致します。

「麗人の秘密」：<http://ncode.syosetu.com/n6722cz/>

北瀬野ゆなき

## 01：危険な邪神像（前書き）

5月25日に予定されている3巻発売に先立ちまして、Webへの掲載を行います。

詳細につきましては、4月26日の活動報告をご覧ください。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/556653/blogkey/1400855/>

## 01：危険な邪神像

それはまだ黒薔薇邸の建設が途中だった頃の話。

ある日、私は教皇に呼ばれて邪神殿の隣へとやってきた。

邪神殿の隣……そこには、建設中だった巨大像が存在する。五階建ての神殿と同じくらいの高さがある、私の姿を模した像だ。

今は全体に布が掛けられていて中が見えないが、一度取り払われればその威容が下手をすれば近隣の街からも見える恐れがある。

……余計なことを。

「それでは、アンリ様。建造した像を御覧ください」

像に掛けられた巨大な布の端を掴みながら、豪華な司祭服を纏った教皇が私へと告げてきた。

今日彼に呼ばれたのは、完成した像を一番最初に見てほしいと言われたためだ。

本当であれば呼ばれるべきなのは神族の「私」のような気もするけど、流石に仮にも神族をこの場に呼ぶわけにはいかないため、私が代役ということなのだろう。

本当は逃げたかったのだけど、家を建てて貰っている恩がある以

上は無碍には出来ず、やむなく出席することとした。

「さあ、布を外します！」

我らが神の御姿に世界がひれ伏す瞬間です！」

ひれ伏さないから。

思わず口に出さずに突っ込むが、教皇はドヤ顔のまま布を掴んだ手を勢いよく引いた。

白い布が空を舞い、巨大な像が白日の下に晒される。

高さ一メートル程の台座の上に、巨大な銅像の姿があった。

銅像は教国が崇める神の姿　イコール、私の姿　を忠実に再現し、その造形は執念すら感じさせる程の緻密さが見て取れる。

今も私が纏っている黒死薔薇のドレスを着た姿を描いているのだが、ドレスの皺一つまで再現されているのではないかと思う程のリアルな仕上がりだった。

……物凄く恥ずかしい。仮面を着けておいて良かった。

「如何ですか、アンリ様！？」

教皇がキラキラした目で私に感想を求めてくる。

この像の図面を引いたのは彼であるという話だし気になるのは分かるが、そんな勢いで来られても困る。

私は思わず自分の顔が引き攣るのを感じるが、少なくとも銅像の出来としては非の打ちどころがないものであるのは確かだ。

正直、こんなところに無駄な才能を発揮してないで、もっと別のところに注力してほしいと思う程に。

国政は国政できちんと運営しているから性質が悪いのだけだ。

まあ、良く出来ているとは思っているのでそう答えてあげよう……と口を開き掛けたところで、私はハタとあることに気付いた。

「？ アンリ様？ どうかされましたか？」

「ちよつと気になることが」

「？」

教皇が不思議そうに問い掛けてくるが、私はそれを横に置いて銅像へと近付いた。

気になったのは、銅像 邪神像って呼ぼうかな のドレスについてだ。といっても、別にドレスの造型におかしい部分があったわけではない。

むしろ、逆だ。

邪神像のドレスがあまりにも実物を忠実に再現しているから気になったのだ。

私が纏っている黒死薔薇のドレスは、ノースリーブの漆黒のロングドレスで、胸元に薔薇の意匠が施されている。

元々は普通のドレスだったのだが、加護付与によって黒く染まってしまった。

勿論、それに伴って防御力や耐性といった性能面でも破格の性能になっているのだが、もう一つ変わったことがある。

危険なのだ、デザインが。

ドレスのスカート部分にかなり深いスリットが入っていて、脚が見えてしまっている。うっかりすると、下着まで見えてしまいかね



ない。

その下着もまた、加護付与によって危険なデザインになってしまっている。

具体的には、本来隠すべき部分が隠れてないという危険さだ。断じて人に見られるわけにはいかない。

で、翻って問題の邪神像。

ドレスは実物を忠実に再現しており、深いスリットも健在だ。

銅像なので生足と言って良いかは疑問だが、脚もばっちり見えている。

そこまでは、まあいい。

いや、あまり良くないけれど、今は置いておく。

問題は、そこより上だ。

まさか今私が穿いている下着まで忠実に再現しているとは思わない。もしも再現されていた場合、何処でそれを見たのかとか色々問題がある。が、この凝りようから言って普通の下着くらいは再現していそうだ。

不安半分好奇心半分で私は邪神像の足元まで行くと、上を見上げた。

こうしてみると、やはり大きい。

像自体の大きさに比例してドレスのスリットも大きくなっているため、そこから中に入れてしまう程だ。

いや、入らないけど。

ただ、中に入らなくても、すぐ傍まで行けばスカートの中を覗き込むことは出来る。

……うわ。

スリットの中を覗き込むように見上げた私の視界に映ったのは、内部までしっかりと造り込まれたスカートの中。そして、今私が穿いているもの程ではないにせよ、かなり際どいデザインの下着だった。

一体どういう思惑で、私の姿をした邪神像にこの下着を穿かせようと思ったのか、教皇を小一時間程問い詰めた。

いや、答えられても反応に迷うことになるのが目に見えているので、やっぱり聞きたくない。

それにしても、今は人払いがされていて他に人が居ないから良いけど、これを多くの人が見ることになるの？

それはちよつと……いや、かなり恥ずかしい。

これはあくまで銅像だから、別に私のスカートの中を見られるわけではない。

それは分かってる。

分かっているのだけど、ここまで精巧にかたどられていると、まるで自分のスカートの中を大勢の人に晒しているような気分になってしまう。

「何か気になる点でもございましたか？」

「……………」

改めて聞いてきた教皇に、私は思わずジト目を向けた。

しかし、彼は相変わらず魔眼に怯むこともなく、また私の恨めしい視線の意図を察することもなく、不思議そうに首を傾げてた。

この助平。

とはいうものの、彼が私に対して女性に対する視線を向けてきているとは欠片も思わない。

自分で言うのもなんだけど、彼の中の私は最早そついう次元の存在ではないことは、これまでの言動からも理解出来ている。

ある意味、男性としては最も安心出来る存在であると言えるだろう。

しかし、そうすると本当にどうしてこんなデザインになったんだろう。答えを聞くのが怖いけど、やっぱり聞いてしまおうか。

「どうして、こんな下着にしたの？」

「は？ 下着……ですか？」

回りくどいことを止めて私が直球でそう尋ねると、教皇はきょとんとした表情になり、答えてきた。

「流石にアンリ様にモデルをやって頂くわけにもいきませんでしたので……」

モデルなんて勘弁だし、仮にやるとしてもスカートの中まで覗かせるようなつもりはないよ。

「なので仕方なく、ご友人のレオノーラ様にどのようなデザインにすべきか相談致しました」

レオノーラー……！？

なんてことをしてくれたんだ。

いや、確かに私が穿いている下着は危険なデザインで、彼女はそ

れを知っている。そう考えると、まだ控えめにしてくれとは言えなくもないかも知れないが、そもそも好き好んでこんなものを穿いているわけではないことも知っているだろうに。

もしかすると、呪いのテナ人形の解呪を忘れてたことに対する意趣返し……？

いや、確かにあれは悪いことをしたと思っでは居るけど。

「下着のデザインに何か問題でもございましたか？」

「……見られると恥ずかしい」

「はぁ……」

抗議したつもりだが、教皇から返ってきたのは生返事で、どうも伝わっている感じがしない。

「何も恥ずべきことはないと思考致しますが、一体何が問題なのでしょうか」

真剣な表情を見る限り、どうやら本気で言っているらしい。

やはり私は女性として見られていないようだ。

しかし、ここは断固たる意志を示さねば、作り物とはいえ大勢の人に下着を披露する羞恥責めを味わわされてしまう。

ただ、作ってしまった銅像は削ることは出来ても増やすことは出来ないだろうから、今から下着を露出度の低いデザインに変更したり、覗かれないようにスリットを塞ぐことは難しいだろう。

なので、せめてもの対応として、至近距離から覗かれないように対処をしてほしい。

「あまり近くに人を寄せないでほしい」

「！？ 成程、確かにアンリ様は高みに居られる御方。余人をあまり近寄らせるのはよろしくありませんね」

そう言いつつもりじゃないんだけど、まあこの際どうでもいい。

「像の周りに柵を作って、足元に近付けないようにして」

「かしこまりました、すぐに作業に取り掛からせます」

「お願い」

私がそう頼むと、教皇は恭しく頷いた後、慌ただしく立ち去っていった。

取り敢えず、像の周りに柵があれば真下から覗かれることもない。それなら、まだマシだろう。

一応、頼んだからには作業を見届けた方が良くかな。

## 02：邪神像起動！

カンカンカンと釘を打ちつける音が鳴り響く。

等間隔に立てられた杭の上に、横倒しになつた棒を固定されてゆく。

それは、邪神像の周囲を囲むように柵を設けるための作業だ。

「おい、その杭はもう少し右に寄せてくれ」

「これくらいか？」

「そっちは左だ」

「お前から見て右かよ!？」

私は大工さん達が作業している様子を、邪神像の足元に座つて眺めていた。

一応、お願いして作業して貰うからには見届けるべきだと思つたためだ。

最初は邪神像の台座に腰掛けていたのだが、微妙に高さがあつて足が地面に着かず落ち着かないのでこちらに移動した。

銅像のつま先が高さから腰を掛けるのに丁度いい感じだった。

本当は何か手伝つた方が良いのかも知れないけれど、生憎と私は大工仕事なんてやったことがないので戦力外だし、教皇からも見ていただけの良いと言われてしまったため、こうして監督業に勤しんでいる。

そう、監督業だ。

決して暇だからばーっとしているわけではない。

見ているだけで指示も何もすることはないけれど。

これで周囲に柵が設けられれば、少なくとも真下から像のスカートの中を覗き込まれるようなことは無くなる。それならまだ、拝まれることくらいは我慢しよう。

本当は恥ずかしいから像を作られること自体嫌なんだけど、出来上がってしまったているものに今更文句を言っても仕方ない。

「ふー、これで九割くらいは完成したか？」

「そうだな、あともう少しだ」

「よし、残りは一気に仕上げちまおう」

「おう」

それにしても、良い天気。

陽射しも暖かく風も穏やかで、ポカポカした陽気に思わず眠気が……と、危ない危ない。意識が飛ぶところだった。

人に仕事をさせながら寝こけてたら、流石に輦蹙ものだろう。

いや、文句は言われないかも知れないけれど、私自身が罪悪感を覚えてしまう。

しかし、こんなお昼寝日和で寝るなどというのは、正直拷問に近い。響き渡る金づちの音が単調で、また眠気を誘う。

幸いにして仮面で顔が隠れてるからちよつとくらい寝ていても気付かれないのではないか、そんな誘惑が私を襲う。

私は自身の内から沸き上がってくる眠気と必死の戦いを繰り広げるのだった。

『邪神像に加護を付与しました』

！？

何処からか聞こえてきた言葉に、眠気が一気に醒めた。

……まずい、やってしまった。

触れたまま一時間が経過したことにより、加護付与スキルが発動してしまったのだ。

頭上を仰ぐように見上げると、巨大な邪神像を包み込むように闇が集まるのが見えた。

闇が像の足元まで包み込む前に、私は取り敢えず台座の端の方に退避する。

「？ おい、なんだアレ……？」

「うん？ って、おいおい」

「アンリ様の像に何か黒いものが……」

「あれは一体……？」

不穏な様子に気付いたのか、周囲で柵を作っていた人達も作業の手を止めて何事かとこちらを見ている。

その場に居る者達全ての視線が集まる中、邪神像を覆う闇が薄く



なつてゆく。

闇が晴れた時、そこにあつたのは先程までとそれほど変わっていない邪神像の姿だった。違いと言えば、単に色が黒く染まつたくらいだろうか。

後は、よく見ると額にテナの額にあるのと同じ、「S」の字を横に倒したような印が浮き出ていた。しかし、全体としては劇的な変化というには程遠い。

いや、油断は出来ない。

これまでの加護付与のパターンから考えれば、視界に映るだけで見えるものの身を恐怖に竦ませるような効果や瘴気を撒き散らすような効果があつても不思議ではない。

そう考えた私は、邪神像に注目していた周囲の人達に目を向ける。しかし、驚いて固まってはいるものの特に異常は見受けられない。

杞憂だつたか……と安堵した次の瞬間、突然周囲が暗くなった。

「……………?」

しかし、よく見ると暗くなったのは私の周囲だけで少し離れた場所には普通に太陽の光が射し込んでいる。

「……………?」

不思議に思つて上を見ると、巨大な金属の塊が私目掛けてゆっくりと振り下ろされ……って、うわ!?

私は慌てて転がるように横に逃れ、間一髪のところまで振り下ろされる巨大な金属の塊の下から抜け出る。

その直後、その金属塊……邪神像の右足は台座の上に大きな音を立てて落着した。台座には踏みしめられた邪神像の足元から蜘蛛の巣状の罅が広がり、その圧倒的な質量を物語る。

危ない危ない。危うく、ぺちゃんこにされるところだった。

しかし、事態はそれでは終わらない。

今度は左足が上がり、台座の外の地面へと振り下ろされる。金属で出来た台座ですら罅を入れる程の質量だ。地面は足の形に凹み、地響きが周囲を揺らす。

「……………うそ？」

台座の上で尻餅を突いて呆然としていた私だが、位置が離れて全体像が視界に入ることによってようやく事態を理解することが出来た。

あの巨大な邪神像が突如として歩きだし、台座の上から外へと踏み出してしまったのだ。

理由は考えるまでもない。先程私が加護付与してしまった影響だろう。

見るものを恐怖させるとか瘴気を放つと言ったレベルの話では済まなかった。幾らなんでもこれは非常識過ぎる。

しかも、動きだした邪神像は二歩歩み出ただけでは止まらずに、更に前方に向かって足を運んでゆく。

「に、逃げる！」

「一体何がどうなってるんだ!？」

「いいから走れ、踏み潰されるぞ！」

「うわーーーー!？」

硬直していた周囲の人達も事態を呑み込めたのか、慌てて邪神像の進行方向から逃げ出す。

その数秒後、周囲に築かれていた柵の一角が邪神像によって踏み砕かれた。

とはいえ、別に狙って踏み潰したというわけではなく、真っ直ぐ前に向かった結果、たまたま被害にあっただけのようだ。

先程私も危うく踏まれそうになったが、それも単に私が邪神像の正面に立っていたからというだけの話なのだろう。

動きだした邪神像は見たところ色は変わったものの金属は金属のまま、関節部分がどうなっていて歩くことが出来ているのか、その辺りの原理については不明だ。

しかし、重要なのはそこではない。

五階建ての神殿と同じような高さの巨大な像が歩いている、そこが一番の問題だ。

しかも、その歩みは止まることなく次第に遠ざかってゆく。

このままでは何れ教国から外に出てしまうことだろう。そうなってしまったら、どれだけ大問題になるか想像が付かない。

でも、それを止めたくても止める手段がない。

「おお！？ アンリ様！ 何処へ行かれるのですか！？」

何処にも行かない。

そもそも、それは私じゃない。

遠ざかってゆく邪神像に向かって意味不明なことを叫ぶ教皇の頭をしばき倒したくなっただが、我慢して彼に近付いて袖を引く。

「アンリ様？」

教皇が振り返って私の方を向くと、首を傾げる。

しかし、今はつべこべ話している余裕はない。  
私は端的に要求だけを口にした。

「お願い、あの像を誰か人に追い掛けさせて」  
「かしこまりました」

邪神像が何処に向かって何を引き起こすのか、今後対策を考えるためにもそれらの情報が必要だ。

見失って所在が分からなくなってしまったら、対処が遥かに難しくなってしまうだろう。

動きだした邪神像の様子に興奮気味だった教皇だが、私の真剣な声に息を吞んで態度を改める。

私が焦っていることを理解してくれたようだ。

そして、邪神像の動向を探るために、手早く近くに居た者に追い掛けさせることを手配してくれた。

「数人で神像の後を追わせましたので、直に情報が入って来るでしょう。」

「どうかアンリ様は神殿でお待ちください」

「ありがとうございます」

私は教皇に礼を言いながらも、既に頭部くらいしか見えない程遠くに行ってしまった邪神像を、不安で一杯な気持ちで見詰めた。

これからどうなるんだろう……。

先行きの暗さに頭を抱えなくなる衝動に駆られながらも、今の私は歩き去ってゆく邪神像を見続ける以外に出来ることは無かった。

### 03・蹂躪される世界（前書き）

評価ポイントを入れてくださった方々、ありがとうございます。 m

「」 m

### 03：蹂躪される世界

あれから三日、各国は突然の邪神像の襲来で大混乱に陥っていた。

何しろ、神殿と同じくらいの高さをした像が好き勝手に動きまわっているのだ。

事情を知らない人が見たら恐慌状態に陥っても不思議ではない。

それに、たとえ事情を知っていても脅威であることには変わりない。

『東の王国で城壁が踏み潰されました！』

教皇に手配して貰った追手からは次々と続報が送られてくる。

その情報を邪神殿三階層の会議室で聞いていた私は、次々に飛び込んでくる凶報に肩身が狭くなり、身を縮こまらせるしかなかった。

広めの部屋には中央に大きなテーブルが置かれ、その上に教国を中心に据えた大陸の地図が広げられている。

もつとも、実際この国は大陸のほぼ中央に位置するわけだけど。

地図の上に報告を受けて邪神像の動向が次々に書き込まれてゆく。それによると、邪神像は教国を出発点としてまず北東に進んでいったようだ。

幸いにして、今のところ城壁を掠める程度で済んでおり、街を直撃するような被害は出ていないようだ。

人的被害が出ていないことには、心の底からホッとした。

『北の山脈を通過していきました!』

その後、邪神像は弧を描くようにして教国からみて北側に位置する山脈へと向かったらしい。

山々に生えている樹を薙ぎ倒しながら、山脈を横断してゆく邪神像。自然破壊極まりないが、他国に被害を出していないだけマシと考えるべきだろうか。

少なくとも、人家がないところを歩いてくれた方が、私としては安心出来る。

比較的少ない被害で済んでいるのは、邪神像がコースを選んで歩いているためなのか単なる偶然なのかは分からないけれど、今後大きな被害を生み出す恐れがある以上は早く止めなくてはならない。

『神像は魔族領の方に向かいました!』

……まずい。

邪神像はその大きさを除けば私に瓜二つの姿をしている。私のことを知る者が見れば、関連性は一発でバレるだろう。

魔族領には、以前私と共に暮らしていた人物が居る。目撃されたらおそろく……。

私の予想を裏付けるかのように目の前に突然黒い光が起ると、その中に映像が映し出された。

通信魔法のチャンネルが開かれたのだ。

私は次に来る衝撃に備えて、両手で耳をしつかりと塞いだ。

「アンリ様？」

部屋の中に居るテナを始めとする私以外の人達が、私の突然の行動に不思議そうな表情になる。

耳を押さえた方が良いと思うよ？

『じりりりりりーッ！』

通信魔法の光を中心に放たれた怒声で、室内の空気がビリビリと震えた。

部屋の中に居た人達は突然の大声に耳を押さえて蹲る。幸いにして私は予め耳を塞いでいたため、被害は最小限で済んだけど。

最初はピントがずれていた映像も、次第に鮮明になってゆく。

そこに映っていたのは予想通りの人物だった。以前この教国で暮らし、魔族領へと帰ったレオノーラだ。

まさか、別れからそう時をおかずに映像越しとはいえ、こんな再会が待っているとは思わなかった。

『あの像はお前の仕業だろう、アンリ！ お前は一体何をやってるんだ！？』

レオノーラは教国で銅像が建造されていたことを知っているし、私の姿も知っているから、邪神像を見ればすぐに私が関わっていると推測出来ただろう。



実際、邪神像が動いているのは私が加護付与してしまったせいなので、彼女の推測は概ね正しい。

しかし、私が何かを企んでるように思われては困る。

「確かに原因ではあるけれど、私の意志じゃない。あれは不可抗力」

そこだけは主張しておこう。わざとじゃなかった。

そう告げて真っ直ぐに彼女の目を見詰める。

こうして、レオノーラと目を合わせるのはかなり久し振りだ。映像越しであるおかげで魔眼の効果が発揮されないから出来ることである。

しばらくそうして無言のまま見詰め合っていたが、彼女は私の性格も知ってるし、私が故意にやったわけではないことは信じてくれたようだ。

ただ、故意ではないということはイコール私の意志で動いているわけではないということ、それは幾ら私に訴えかけても止まらないということでもある。

レオノーラは先行きの不安に頭を抱えながら溜息を吐いた。

「魔族領の被害状況は？」

「幸い、城や街に被害は出ていない。

巢を踏み荒らしたらしく、本来出没しないような場所で魔物が暴れることはあったが、すぐに鎮静化した。

ただ……」

ただ、何？

思わせぶりに言葉を切るレオノーラに、私は思わず息を吞んで彼女の言葉の続きを待った。

『あれだけ巨大なものが徘徊していれば、当然目に付く。

国の至る所でパニックが起こって大変なことになってる』

それは、ごめんなさい。

『昨晚、寝に入ったところを叩き起こされてな。

以降ずっと国内の騒動の片付けに追われてるんだ』

よく見ると、彼女の目の周りには隈がハッキリと浮かんでいる。

寝に入ったことを叩き起こされたと言っていたし、おそらく殆ど徹夜なのだろう。

ほんと、ごめんなさい。

なお、私はこの三日間も普通に睡眠はとっているが、これはいざという時にちゃんと行動出来るようにするためだ。

『それで、何故あんなことになってるんだ？』

私はレオノーラの質問に、これまでの経緯を掻い摘んで説明する。

邪神像が完成して、その姿を教皇に見せられたこと。

その像のデザイン上、至近距離から見上げられると教育上よろしくない光景が見えてしまったため、急遽周囲に柵を作って貰うことにしたこと。

その作業を依頼者として監督している時に誤って加護を付与してしまい、邪神像が歩きだしたこと。

話すうちにレオノーラの目が段々とジト目になってきた気がするが、きつと気のせいだろう。

一連の流れは改めて振り返ってみても、こうなることは避けられなかったという事実がよく分かる。

「避けられない悲劇だった」

『どこがだー!』

怒られた。

『柵を作るところまでは良いとして、

お前が誤って加護を付与したことはないだろうか!』

流星に付き合いの長い彼女にはバレてしまった。

しかし敢えて言い訳をさせて貰うと、あのポカポカした陽気の中で居眠りしてしまうのは仕方のないことだと思っ。

全ては太陽のせいだ。

『何か変なことを考えているだろう』

脳筋の彼女がいつになく鋭い。

「何のこと？」

それより、もし分かるなら教えてほしい。

あの像は魔族領をどんなルートで移動してるの？」

ちよつとわざとらし過ぎる話題の逸らし方だったが、今一番気になっ  
ていることでもあるので真剣な問い掛けだ。

移動し続けている邪神像が次に何処に向かったのか。それは重要な情報だ。

レオノーラもそれは同意だったのか、真剣な表情になる。

『像の侵攻ルートは北東部からだった。』

そこから魔族領の北部を半円を描くように移動している。

最新の情報がないが、おそらく現在地は魔族領の中央より少し北  
辺りだろう。

このまま進めば、明日の頃は人族領の方に向かう筈だ。

そうだな、ちょうどお前の居る教国に戻るような形になりそうだ』

つまり、教国から大陸北部を逆時計回りで楕円を描くようにして  
一周してきたことになるわけか。

随分移動速度が速いけれど、あれだけの大きさならゆつくりと歩  
いているだけでも進みが早いのも頷ける。何せ歩幅が違う。

いずれにせよ、邪神像がこの場所に戻って来るのなら絶好のチャ  
ンスだ。なんとか止める方法を考えなければ。

『それでは、一旦切るぞ?』

言いたいことと知りたいことが済んだのか、レオノーラは通信の終了を告げてきた。

怒られたけれど、彼女の齎してくれた情報は現状を打破するのに役立つ貴重なものだった。

「うん、分かった。

連絡、ありがとう。

何か続報があったら教えてほしい。

こつちからも情報があったら連絡する」

『ああ』

レオノーラはそう言うと、通信魔法を解除した。

さて、まずは状況を整理しよう。

そうして、部屋の中央のテーブルに広げられた地図に、レオノーラから貰った情報を書き込もうと思って椅子から立ち上がった私の視界が唐突に真っ暗になった。

暗転した視界に戸惑った次の瞬間、私は全く別の部屋に居た。

その部屋は先程まで居た会議室より面積としては少し狭いくらいの広さで、代わりに高さはこちらの方が高かった。

部屋の中央には台が、前方には裁判所で見るとような大きな机が三つ置かれている。私はいつの間にか、中央の台の上に立っていた。

三つの机にはそれぞれ人が座っており、私から向かって右側には全身甲冑を着た金髪の女性、左側には紅いマントを羽織った薄緑の長髪の男性、そして中央には今私が着ているのと全く同じ黒薔薇の意匠が施されたドレスを纏った黒髪の少女が座っている。

机がかなり大きく高さもあるため、必然的に上から見下ろされるような構図となる。

威圧的で、見下ろされるこちらとしてはかなり居心地が悪い。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

部屋の中には私を含めて四名が存在するが、誰も口を開くことなく緊迫感のある沈黙が周囲に満ちていた。

しばらく沈黙の時間が続いた後、中央の席に座る少女が徐に口を開いた。

「これより、査問会を始める」

## 04・三柱査問会

査問会。

それは組織内において不正や重大なミスを犯した者を呼び出し、問い質す場のことだ。

その場で当事者から事情聴取を行い、その上で懲罰を課すために行われる。

しかし、それはあくまで組織内にしか意味を為さないものであり、組織に属さない者にとっては無関係であるとも言える。

その点、私はこの世界では精々冒険者ギルドに登録しているくらいで、それ以外の組織には無縁であるため、査問を受けるような筋合いはない

という常識的な反論が無意味なことは、この場集った査問官達を見て瞬時に理解出来た。

前方右手に座る金髪の女性は光神ソフィア、左手には薄緑の長髪の男性は闇神アンバル、そして中央に座る黒いドレスの少女は邪神アンリ……この世界を管理する管理者三柱のお出ました。

この場はさしずめ、この世界に属する者に対する査問といったところだろうか。

それにしても、自分に査問されるなどという経験をしたのは、おそらくこの世界で私が初めてだろうな。

中央に座る少女 位置的にこの場の責任者っぽい は、先日別たれた神族の「私」だ。

まさかこんな再会になるとは思わなかったけど。

強引過ぎる呼び出しだったけれど、おそらくここは邪神殿の四階層か五階層なのだろう。

私の知らない部屋だから、新たに創ったのかも知れない。

査問すると言われている対象は、タイミングから考えても一つしか思い当たらない。

徘徊している邪神像のことに間違いない。

まあ、相手は別たれたとはいえ自分だし、残りの二柱も顔見知りだ。

そんな酷いことはされないだろう。

そんな甘い考えを脳裏に浮かべた私に向かって、目の前の「私」から冷や水のような言葉が掛けられる。

「……………正座」

「え？」

投げ掛けられた言葉の意味が頭に入って来ず、私は思わず首を傾げた。

神族の私はジト目を強めると、再び同じ言葉を口にす。

「……………正座」

「……………」

「……………正座」

このままだと話が進まなそうということと、若干気圧された部分があつて、私は仕方なくその場で正座する。

固い木製の台が脚に痛い。



それにしても、なんで査問で正座しなきゃいけないのだろう。そもそも、彼ら神族は現在または過去の事であれば「情報閲覧」の力で見通すことが出来るのだから、改めて事情聴取などする必要がない。

ならば何故この場に呼ばれたのかと考えて、これがお説教の流れであることに気付いた私は冷や汗を掻いた。

「呼ばれた理由は分かっていますね？」

「まったく、めんどくせえことしやがって」

ソフィアやアンバーが苛立ちも露わに左右から話し掛けてきた。私はそんな彼らに向かって頷いてみせる。

「分かってる、邪神像のことでしょ？」

「ええ、その通りです」

「魔族からも色々と訴えが上がってきてるんでな」

「なんであんなことしたの？」

一瞬、「情報閲覧」で確認すれば良いのではと思ったが、すぐに理解が追い付いた。

おそらく彼らが把握出来たのは私が加護を付与してしまった邪神像が動き回っているという事実だけで、意図や思考までは読み取れなかったのだろう。

ならば、心行くまで説明しよう。

そして、わざとではなかったことを理解してほしい。

私はレオノーラにしたように、邪神像が動き回る邪神像に進化し

てしまった経緯の説明を始めた。

一通りの説明を終えると、そこには頭を抱えるソフィア、アンバールの姿があった。

「頭が痛いです」

「俺もだぜ」

神族が頭痛を覚えるというのも凄い話だ。快拳と言っても良いかも知れない。

その一方で、「私」の方は納得したようにうんうんと頷いている。

「お昼寝は仕方ない」

「んなわけないでしょう!」

「んなわけあるか!」

「おおおう?」

私も大いに同意出来る眩きだったが、左右から厳しい突っ込みが入って神族の「私」はたじろいだ。

「まあ、今はこれくらいにしておこうぜ」

「そうですね。まだ色々と言いたいことはありますが、今はそれよりも事態の収拾が優先でしょう」

「……………ほっ」

矛を収めたソフィアとアンバールに、「私」があらさまに安堵の表情を浮かべた。

対処というのは、徘徊している邪神像のことだろうか。

彼ら神族が対処をしてくれるのなら、事態を収めるのは簡単だろう。

「無関係な顔してやがるが、手前えがやるんだからな」  
「は？」

私の方に向けて告げられたアンバールの言葉の意味が理解出来ず、私は思わず間抜けな声を上げてしまった。

「貴女の不始末なので、貴女が片付けるのが筋でしょう」  
「それはそうかも知れないけど……」

それを言われると弱い。確かにやらかしたのは私だ。

「でも、それぞれの担当種族から陳情が上がってるんじゃないの？」  
先程アンバールが、魔族から訴えが上がっていると言ったように、人族からもソフィアに訴えが出ていることだろう。彼らとしてもそれは無視出来ない筈だ。

「まあな。だから人員くらいは貸してやるさ」  
「そうですね、私も手配しておきます」

どうも、彼らは直接手を下すつもりはなさそうだ。  
力は貸してくれるけれど、肝心な部分は自分でやれということらしい。

これくらいの事態では、まだまだ手段を選ばず対処する程のものではないということなのかな。

「そう言えば、一つ聞きたいことがあったんだけど……」

「？」

「あん？」

「何でしょう？」

査問会を行った部屋から場所を変えて、テーブルを囲んでお茶を飲みながら雑談を行う。

その中で、私は彼らに会ったら聞こうと思っていたことがあったことを思い出した。

「今更かも知れないけれど、テナの額にある印について何か知らない？」

聞きながら、テーブルの上を指でなぞるように印の形を再現する。テナの額にある「S」の字を横に倒したような印だ。

「ああ、眷属印か」

「眷属印？」

アンバールの口から発せられた聞き慣れない言葉に、私は聞き返した。

「読んで字の如く、眷属になった者に付される印のことですよ。その形状は、加護を与えた主によって異なります」

ソフィアが解説してくれるが、それでもピンと来ない。

それだと、インペリアル・デスにも印があってもおかしくないはずだが、彼にそんなものがあつた記憶はない。

私がそれを問うと、彼らは頷いた。

「眷属になった者に付される印とは言いましたが、全ての眷属に眷属印が付されるわけではありません」

「最初の眷属だったり特に繋がりが強かったりする場合に付くことが多いな。」

言っちまえば、筆頭みたいなもんだ」

成程、つまりテナが私の筆頭眷属だったというわけか。

強さで言えばインペリアル・デスの方が圧倒的に上なのだが、身近という意味ではテナが筆頭といつても不思議ではない。

しかし、それならどうして邪神像にも付いているのだろうか。

「邪神像に同じマークが付いてたんだけど……」

「何!？」

「なんですって!？」

「ふん」

私の呟きに、アンバーとソフィアが過剰に反応した。神族の「私」は気のない風だ。

「アレ、手前えの眷属なのか」

「そもそも生物ですらないのに、一体何故眷属になってるのですか？」

そんなの知らない。なってしまったものは仕方ないだろう。

「さっきの話だと一人にしか付かないものなんじゃないの？」

「私と別れたせい？」

「だろうな。神族から人族に戻ったことで、初期化されたんじゃないかねか？」

確かに、種族が巻き戻るようなことがあれば、「最初の眷属」というものも初期化されても不思議ではないのかも知れない。

そうすると、あの邪神像が今の私の「最初の眷属」ということになるのだろうか。

「まあ、そんならますます手前えで片付けろや」

「そうですね。自身の眷属なら責任を持って貰わないと」

「……分かった」

言い負かされるような形になってしまったけれど、私に責任があるというのも事実なので、やむなしと言わざるを得ないようだ。

そこまで話していて、ふと気付いたことがあり、私は呟いた。

「ステータス」

<ステータス>

名前：アンリ

種族：人族

性別：女

年齢：18

職業：魔導士

レベル：1

称号：戦慄の邪人、ダンジョンマスター、変人

魔力値：3031504

スキル：邪神オーラ（Lv.5）

悪威の魔眼（Lv.5）

加護付与（Lv.7）

状態異常耐性（Lv.6）

闇魔法（Lv.6）

アイテムボックス（Lv.4）

ダンジョンクリエイト（Lv.7）

装備：災厄の扇

黒死薔薇のドレス

墮落のベビードール

淫魔のスキヤンティ

闇のパンプス

眷属：戦慄の邪神像 「NEW」

テナ

あ、やっぱり。

眷属に邪神像が追加される。

先程までの話で予想出来た結果だったが、裏付けが出来たことになる。

私は更に、眷属欄の「戦慄の邪神像」に意識を集中させる。

<戦慄の邪神像>

邪神アンの姿を模した巨大な像。

あまりにも精巧に彼の邪神の姿を模したが故に魂が宿り、像でありながら動きだしたと言い伝えられている。

特別な能力は無いが、その巨体とそれに付随する圧倒的なパワーを有し、

更には非生物的な外見からは想像出来ない程の知能を持ち合わせている。

一度動きだした邪神像は人の手で止められる存在ではなく、国家存亡すら齎しかねない。

テナの場合は詳細なステータスが表示されたのだけど、邪神像は生物でないからか説明文だけしか見えなかった。

しかし、知りたかったのは彼の像の保有スキルなので、特別な能力がないことさえ分かれば、それで十分だ。

精巧過ぎたせいで魂が宿ったとか説明が適当過ぎる気もするけど、今更か。

私は少し呆れながらも、三柱とのお茶会を辞した。



## 05：選抜メンバー

三柱による査問会から生還した私は、召喚されるまで居た邪神殿三階層の会議室に自分の足で帰ってきた。

予想した通りあの部屋は邪神殿の四階層に設けられた部屋だったため、階段を下りればすぐだ。

私をあの部屋まで運んだ方法は分からないけれど、何かしらの権能を使ったのだろう。

しかし、テナを始めとする周囲に居た人達から見たら忽然と消えた形になっていたため、私が戻った時には大騒ぎが起こっていた。

「アンリ様!？」

「ご無事だったんですね。」

「突然消えてしまったので、何処に行かれたのかと……」

姿を見せた私に、テナが涙目になりながら縋り付いてきた。

心配掛けて、ごめん。

全部彼らが悪い。

「ちょっと、上に呼ばれてて」

「上って……」

私が天井を指差しながらそう答えると、テナは指の先を追って天井を見上げた後、首を傾げた。

「神像を止めるための人員を貸してくれることになった。」

「集まり次第対策会議を始めるから」

「ええと、はい。分かりました」

まだ理解が追いついていない様子だが、テナは私の説明に納得してくれた。

「ところで、人員つてどなたが来られるのですか？」

「ええと……」

そういえば、私も聞いてないから分からない。  
何人来るかも分からない。

ソフィアとアンバーがそれぞれ派遣することは確定しているの  
で、最低でも二名になる筈だが、それで全員だろうか。

それに、あまり悠長にはしてられないのだけど、一体いつ来るの  
だろう？

彼らだつて時間に余裕がないことくらいは分かっている筈なので、  
そんなに遅くなることはないと思いたい。

「あの……」

そんなことを考えていたところに、横合いから遠慮がちな声が掛  
けられた。私がそちらを向くと、そこには薄紫の髪をした少女の姿  
があつた。見習い大工のオーレインだ」

「違います！ 私は見習い大工じゃありません！ 勇者です、勇者  
！ 聖弓の勇者、オーレインです！」

しまった、つい声に出してしまっていた。

大工と評したことに對して、オーレインは顔を真っ赤にして憤り  
の声を上げている。

しかし、今の彼女は勇者の証である聖なる武具 聖弓も持って

ないし、従事している仕事も大工仕事だから見習い大工と呼ぶのが  
適当だと思う。

聖弓は私が持っていたりするけれど。

それにしても、彼女を始めとした勇者達は私の屋敷の建築に従事  
している筈だ。

それなのに、何故此処に居るのだろうか？  
事と次第によっては減給ものだ。

「なんでここに居るの？ サボリ？」

私がそう尋ねると、オーレインは首を横に振った。

「サボりじゃありません。

聖女神様に此処に行くように言われたんです」

ソフィアに言われて此処に？

それはやっぱり……。

「やっぱりサボリか」

「どうしてそうなるんですか！？」

いや、だって……雇用主は私だし。

他の人 人じゃなくて神族だけど  の指示で仕事を放り出し  
たら、それはサボリ以外の何物でもないだろう。

まあ、彼女達正勇者がソフィアの命令を拒める筈もないし、タイ  
ミングから考えれば先程話していた邪神像対策の人員として派遣さ  
れたのだと分かるから本気で咎めるつもりはないのだけど。

でも、反応が良くて面白いから、ちょっとだけからかってみよう。

「雇用主である私以外の指示で持ち場を離れたのだから、サボりであることに変わりはない。」

光神の命令があつたとしても、それは同じ」

「え？ あ、それは……」

「聖弓を返す代価として働いて貰っていた筈なのに、その仕事を投げ出すというのなら……」

「そ、そんな!？」

私の言葉に、オーレインはサツと青褪める。

このままでは聖弓を返して貰えなくなると思ったのか、彼女は半ばパニックになりながら弁解を始めた。

「ま、待ってください！

持ち場に戻りますから！

だから、聖弓は ツ！」

慌てて身を翻して立ち去ろうとするオーレインの姿に、私はちょっと焦りを覚える。

からかい過ぎたかも知れない。引き留めないと本気で帰ってしま  
いそうだ。

……ソフィアからの命令はよいのだろうか？

「ちょっと待

「すぐに戻りま ふぎゃっ!？」

慌てて止めようとした私の声を聞きもせず部屋の外に向かって駆け出したオーレインだが、彼女が部屋の外に出ることはなかった。

部屋を出ようとした彼女の上空に魔力で構築された陣が浮かび上がり、そこから落下した何か彼女を押し潰したのだ。

「な、何だ！？ 何が起こった！？」

オーレインの上に尻餅を突く形で彼女を踏み潰したのは、物ではなく人だった。

しかも見覚えがある姿と声……先日魔族領で別れた筈のレオノーラだ。

床に落下した彼女の後を追うように、呪いのテナ人形が落下してきてレオノーラの頭に乗った。

先日別れたと言っても、ついさっきまで通信していた相手でもあるので、あまり久し振りの感じはしない。

「アンリ？ 何故魔族領に……？」

辺りを見回して私の姿に気付いたレオノーラが、そんな質問をしてきた。

どうやら、此処が教国であることにまだ気付いていないらしい。

「さっき振り、レオノーラ。」

それと、ここは魔族領じゃなくて教国の神殿だから  
「は？」

私の言葉に、彼女は理解が追いつかなかったのか大きな口を開けて固まった。

「取り敢えず……」

「取り敢えず？」

首を傾げて聞き返してくるレオノーラに、私は彼女の下に指を差しながら告げた。

「そろそろどいてあげたら？」

「え？ ……うわ!？」

自身のお尻に潰されて目を回しているオーレインのことに初めて気付いたレオノーラは、慌てて立ち上がり介抱を始めた。

「ひどい目に遭いました」

数分後、レオノーラの介抱の甲斐あってオーレインはなんとか復活した。

腰を押さえながら涙目になってる状態だけど、一応復活と言っていい筈だ。

「その、すまなかった」

「え？ いえ、貴女のせいじゃ……」

申し訳なさそうに頭を下げるレオノーラに、オーレインも慌てて止めに入る。

実際、レオノーラは此処に落とされただけで不可抗力なので、彼

女のせいではない。

彼女を落とした者が悪い。そして、それをやったのは十中八九アンバーだろ。

ソフィアがオーレインを派遣してきたように、アンバーが派遣してきた人員がレオノーラというわけだ。

大分横着で荒っぽい派遣の仕方だったけど。

ただ、派遣されてきたのが彼女というのは、正直ありがたい。私としても、気心知れている相手だとやり易い。

「レオノーラ、状況は分かってる？」

「いや、何の予告も無く此処に送り込まれたから、なにがなんだかさっぱりだ」

説明無しかい。手抜きにも程がある。

まあ、怠惰なアンバーにそんなことを期待するだけ無駄か。

仕方ないので、私は彼女に状況を説明した。

と言っても、邪神像のことはレオノーラも知っている話なので、話す内容はそう多くはない。

三柱にあれを止めるように指示されたことと、そのための人員が派遣されること、それから彼女がその人員に指名されたであろうことだけだ。

「成程な、私としても協力するのはやぶさかではない。闇神様のご命令なら尚更だ。

……出来れば、飛ばす前に説明してほしかったが」「  
「そういうことだったのですね」

ようやく得心したと頷くレオノーラの横で、一緒になって説明を

聞いていたオーレインも同じように頷いていた。

彼女はソフィアから説明されて此処に来たんじゃなかったのかな。

「光神から説明は無かったの？」

「え？ いえ、聖女神様からは此処に向かうようにと言われただけで、

それ以上は行った先で聞くようにというお話でした」

そっちもか。

兎も角、レオノーラとオーレインの二人がソフィアとアンバーの派遣した人員なら、このメンバーで邪神像を攻略しなければなら  
ない。

私は改めて二人の方を向くと、声を掛けることにした。

「大変だと思うけれど、力を貸し……」

「アンリ様！」

私の声を遮って、横から声が掛けられた。ふと見ると、そこには走り込んできた金髪の青年、はっちゃけ教皇の姿が。

「何？」

「アンリ様の命により、アンリ様の手伝いを仰せつかりました」

「????？」

一体何を言ってるんだろう、彼は？

「どござ、何なりとご命令ください」

よく分からないけれど、手伝ってくれるならいいか。



「テナ」

「はい、アンリ様」

「お茶をお願い」

「分かりました」

さあ、対策会議を始めよう。

## 06：対策会議

「それでは、対策会議を始めます」

「はい、わかりました」

「ああ」

「お任せください」

「ええと、私も此処に居て良いのでしょうか？」

私の宣言に、対策メンバー達がそれぞれに返事を返してくる。

テナはこの場の良心と呼んでも過言ではないので、是非とも居てほしい。

「ただ、始める前に……」

「「「「「？」」」」」」

「まずは自己紹介から」

この場に集まったメンバーはお互いに良く知らない人も居るので、まずはそれぞれ自己紹介を行って相手のプロフィールを把握するところから始めたい。

「時計回りに名前と役職、それから得意な武器やスキルを話して」

そう言うと、私は円卓で私から見て左側に座っている薄紫色の髪の少女へと仮面越しに目を向けた。

「わ、私からですか!？」

えーと、オーレインです。

聖女神様より聖弓を授かり、勇者をやっています。

聖女神様からのご命令で協力させて頂きます。  
得意なのは弓術で、あと光魔法も使えます」

「現在は聖弓をなくして転職活動中の見習い大工」

情報が不足していたようなので、私の方で横から補足してあげた。

「しません！

転職なんかしません！

というか、せめてこの作戦の間だけでも聖弓返してください！  
じゃないと私、戦えないですよ……」

確かに、聖弓がないと彼女の戦闘能力は半減どころの騒ぎではな  
いだろう。

私はアイテムボックスから聖弓を取り出す。

その瞬間、オーレインの視線が私の手元に釘付けになった。

試しに聖弓を持つ手を左右に動かしてみると、ピッタリ追隨する  
ように彼女の視線も動く。

ちよつと楽しい。

「返しても逃げたりしない？」

「も、勿論です！

勇者たるもの一度交わした約束を反故にしたりしません！」

「でも、ちよつとくらいは逃げちやいたいと思っただ？」

「ちよつとだけ……って、違います！

そんなこと思ってますん！

惑わさないください！」

屋敷の建設工事は結構大変みたいだし、逃げたくなくても無理は  
ないと思う。

どちらにせよ、彼女の戦闘能力も必要だし聖弓は返しておこう。

「はい」

「ああ、ありがとうございます！」

私が手に持った聖弓を差し出すと、オーレインはバツと奪い取るようにそれを取り、二度と離すものかと言わんばかりに抱き抱えた。まるで、我が子を守る獣のような様相だ。

これ、事件が解決した後にもう一度取り上げるのやり辛いな……。

私はしばらく彼女を生温かい目で見詰めてから、次の人物へと視線を向けた。

二人目は見知った仲の紅い甲冑ドレスを纏った魔族の少女だ。

「次は私か。」

私の名はレオノーラ＝ロマリエル、当代魔王陛下の娘にあたる。

闇神様の手で送り込まれた。得意なのは格闘と火魔法、闇魔法だな」

「お気に入りの人形を常に抱えていることから、付いた二つ名が『人形姫』」

彼女が膝上に抱えている人形について、気になっている人も居るみたいだから私から補足してあげよう。

「お気に入りじゃないし、好きで抱えているわけでもない！  
というか、いい加減外してくれ！」

神族の「私」なら兎も角、私にそれは外せない。

「もしかして、エリゴールさんの娘さんですか？」

レオノーラの自己紹介の中で気になるところがあったのか、オーレインが質問を挙げてくる。

「む？ ああ、そうだが……成程。」

そう言えば、陛下やレナルヴェ達がダンジョン攻略に挑んだ時のメンバーだったな

「はい、その節はお世話になりました。」

エリゴールさんはお元気ですか？」

確かに、オーレインは先日の三神戦争でレオノーラの父親であるおじ様と一緒にダンジョン攻略に挑んだ仲だ。

本来であれば、勇者と魔王は不倶戴天の敵同士なのだが、あの時結構交流を深めていたから最早魔族に対する敵意はないようだ。

ただ、それとは別にレオノーラの身体の一部に対して親の仇を見るような視線を向けているのを注意した方が良いだろうか。

和やかな会話とのギャップが半端ない。

ちなみに、オーレイン自身はかなりスレンダーな体型をしており、私と同じ派閥に属している。

「元氣過ぎて困ってるくらいだ。」

件のダンジョンが攻略出来なかったことが相当口惜しかったらしく、

王位を私に譲ってダンジョン攻略に再挑戦したいと言い出してな。必死に止めているところだ」

「あ、あはは……」

おじ様、意外と負けず嫌いだったのか。

しかし、今レオノーラがここに居るということは、おじ様を止める人が居なくなってしまうことを意味する。

早く戻らないと、彼女が帰った時には讓位が決定していたりするかも……。

このことをレオノーラに告げるべきか迷ったけれど、今は邪神像攻略に集中してほしいので敢えて黙っておくことにした。

私は三人目の方へと視線を向ける。豪奢な法衣を身に纏った金髪の青年は私の視線を受け取ると、恭しく頷いた。

「私の名はハーヴィン、我らが神アンリ様の忠実な下僕です。

恐れ多くも、この神聖アンリ教国の教皇を任せて頂いております。この度は、アンリ様のご意志を受け参戦させて頂くことになりました。

得意としているのは杖による近接戦闘です。

魔法は使えないのですが、アンリ様のご加護があれば何も怖いものはありません」

そこまで一息で言いきると、何故か彼は私の方へとジッと視線を向けてきた。

キラキラと輝く瞳は何かを期待しているようだ。

もしかして、オーレインやレオノーラの自己紹介の時にやったように、私が補足することを期待しているのだろうか。

えーと、何を言えば良いだろう……。

「時々暴走するから要注意」

「こんなので良いのかと思いながら補足すると、はっちゃけ教皇は嬉しそうに頷いた。こんなのでいいのか。」

「あ、あの、ハーヴィンさん？ 今教皇って……」

オーレインが彼の自己紹介を聞いて信じられないような顔をしながらおずおずと聞いてきた。

はて？

彼女ははっちゃけ教皇のもとでこき使われ……いや、監督のもと大工仕事に従事している筈だが、今更何か疑問があるのだろうか。

「そう言えば、貴女達にはお伝えしてませんでしたね。」

いかにも、この神聖アンリ教国の教皇を務めております」

言っただけだったのか。

オーレインの顔が盛大に引き攣る。これまで普通に話していた相手が国家元首だと聞かされれば、驚くのも無理はない。

そもそも、仮にも国家元首が一軒の屋敷の建築に従事しているとは普通は思わない。言われなければ気付けないのも当然だ。

私はちょっと彼女に同情しつつも、その辺の折り合いはそれぞれで付けて貰うしかないと考えて放置することにした。

「あ、あとアンリ様って……」

オーレインが私の方にチラリと視線を向けながら教皇に問い掛けた。

事情を知らない彼女にとっては確かに意味が分からないだろう。

彼女達に屋敷の建設を依頼した時にも説明を端折ったため、それも無理はない。

邪神と呼ばれる神と私が同一にして別なる存在など、想像するのは難しい筈だ。

彼は神族の「私」も私も同じように呼ぶので、私自身も時々混乱する時がある。

仕方ないので、フォローしておこう。

「名前が同じだからややこしいかも知れないけれど、

この国で祀られてる神様からの命令を受けたという意味」

「あ、そうだったんですね」

納得してくれたようなので、次に行くことにした。

四人目は勿論、私の従者である金髪の少女。

「あ、はい。テナと言います。

アンリ様の従者をしています。

戦ったりするのは得意ではないのですが、レオノーラさんに教えて貰った闇魔法は使えます」

「最近、派閥転向の兆しあり」

「はい？」

私が補足するも、テナは意味が分からなかったようで首を傾げている。

しかし、オーレインは私が向けた視線で何のことだか気付いたらしく、信じられないものを見る目でテナの胸元を凝視していた。

使徒族であったときに成長が止まっていたことの反動か急成長している彼女の胸部は、現時点で既に年上である筈のオーレインを追



い抜いているようにも見える。

いや、確実にテナの方が大きい。

レオノーラのように化け物クラスというわけではないが、まだまだ発展途上ということを考えれば脅威だ。

私？

聞かないで。

「あ、あの……？」

「ハッ！？ す、すみません！ 何でもありません」

彼女のあから様過ぎる視線に気付いたのかテナが戸惑いの声を上げると、オーレインはハッ和我に返って謝罪する。

どうも、彼女のコンプレックスも結構根が深そうだ。

「最後に対策委員長の私。

名前はアンリ。

私も戦うのは得意ではないけれど、闇魔法は使える」

得意ではないという以前に、一度も戦った経験がないわけだけど。

「役職は？」

む、そこに突っ込んでくるか。何て言って良いか分からなくて教えて省いたのに。

しかし、今の私の役職と言われても答えに困る。公的な役職はないし、肩書きや身分なんかも曖昧だ。

仕方ない、正直に言おう。

「……職業、無職」

周囲の目線が生温かくなった。

さて、自己紹介も終わったことだし、今度こそ会議を始めよう。

私は中央の円卓の上に地図を広げた。

地図上には邪神像の進路を示す赤い線が記されている。

それは、中央に位置する教国から出発し、楢円を描く形で大陸の北西部まで伸びていた。

「神像は現在、魔族領に居る。

そこからこちらに向かっていて、おそらく明日の昼頃にこの国に戻ってくる」

私の言葉を受けて、教皇が懐から取り出した掌くらいの大きさの人形を、邪神像の所在地と思われる地点に置いた。

……その人形について、ちょっと後で話しがあるから。

どうして、私の姿を模した人形が用意されてるのか、そして何故それがさも当然のように懐から出てくるのか、小一時間程問い詰めた。

「この国に戻ってくる明日がチャンス。

「なんとしても、そこで神像を止めたい」  
「ちよつと良いか？」

私がそこまで言うと、レオノーラが軽く手を挙げながら発言の許可を求めてきた。

「なに？ レオノーラ」

「止めるというのは、具体的にどうするつもりだ？  
破壊するということだと考えて良いか？」

「それは……」

「反対です！ アンリ様の神像を破壊するなど、とんでもない！」

レオノーラの問いに答えを返そうとした私の言葉を遮る形で、彼女の左隣から反対の声が上がった。

「そんなことを言ってる場合ではないだろう！」

「しかしですね……」

破壊すべきと主張するレオノーラと断固反対の教皇との間で言い争いが始まってしまった。

オーレインもレオノーラに賛成で、テナは中立のようだ。

今思っただけで、この会議のメンバーって脳筋比率高い気がする。

レオノーラは勿論として、オーレインも先日のダンジョン攻略の様子を見る限りではそっち派だ。

教皇はこれを脳筋と称するのが正しいか疑問はあるけれど、物事を深く考えないという点では似たようなものだ。

この中では、テナだけが頼りだ。

「アンリ、お前はどうかなんだ!？」

「アンリ様のご意見は如何ですか!？」

ステレオで詰め寄らないでほしい。

取り敢えず、私の意見としては……。

「作戦は捕獲優先」

「む……」

「おお、流石はアンリ様!」

レオノーラが不満そうな表情になり、教皇は喜色満面という様相だ。

「何故だ？ まさかお前まで破壊するのが嫌だからとは言わないだろうな？」

「そんなつもりはない。もっと単純な理由」

「単純な理由、ですか？」

首を傾げながら問い掛けてくるテナに、私は頷いて答えた。

「どうやって壊すの？」

あれだけ巨大な金属の塊、人の手で破壊出来るとは到底思えない。それに、ただの銅像だったのならまだしも、加護付与によって謎の金属へと変貌している。

どれだけの防御力があるかも不明だが、少なくとも元の状態より脆くなっているとは思えない。

私がそう言うと、レオノーラもオーレインも私の言いたいことが理解出来たのか、唸りを上げた。

「それは……。そうだ、ダンジョンのボスをやっているあの黒龍をまた借りてくるというのはどうだ？」

成程、巨大な敵には巨大なものをぶつけるといふ発想は正しい。でも、生憎とそれはなしと言わざるを得ない。

「却下。破壊出来るかも知れないけれど、周辺各国が焦土と化しそう」

ヴニなら高空からブレスで一方向的に攻撃出来るかも知れないけれど、周囲への被害も大きくなってしまふ。

邪神像も巨大に見合う耐久力があることを考えると、倒しきるまでにどれくらいの被害が出るか想像も出来ない。

「それもそうか」

「でも、それだと捕獲も同じくらい難しいのではないですか？」

それを言われると、少し弱い。

確かに、破壊するのも難しい程に巨大な邪神像を捕獲するというのも、なかなか難題だ。

「捕獲……落とし穴とかで捕まえたりする感じでしょうか」

私の横に座っているテナが、提案をしてくれる。

落とし穴か、シンプルだけこの場合は一番適切かも知れない。

「準備の時間も限られてる以上、それくらいしかないな」

「問題は明日までに巨大な落とし穴を用意出来るかですが……」

「それについてはお任せください。」

信徒達を総動員すれば、なんとか出来るでしょう」

時間がないことを考えれば、少々強引に人海戦術で押しきるしかない。

それを考えれば、信徒を総動員するという教皇の提案は最適だ。

「お願い。それと、もしも失敗した場合は捕獲を諦めてなんとか破壊する方向で」

「破壊は難しいという話ではなかったのか？」

確かにさっきはそういう話だったけれど、第一案が失敗した場合の次善の策としては持つておく必要があるだろう。

「完全に破壊するのは無理かも知れないけれど、足とかに傷を付けて動きを鈍くすることが出来れば少しでも被害が減らせる」

「成程、そうですね」

「ふむ、決まりだな。それで良いか？」

私の発言を受けて、レオノーラが先程強行に邪神像の破壊に反対していた教皇に対して問い掛ける。

「むう、アンリ様が仰るなら仕方ないですね」

私が提案したということと、あくまで捕獲失敗の場合の第二案とということで、彼も渋々ながら了承してくれた。

「それでは、各自準備を始めて」

「ああ」

「分かりました」

「お任せください」

「はい、アンリ様」

## 07:トラップ

「来ました、神像です！」

テナの声に顔を上げると、確かに数日前に見た巨大な邪神像の姿が見えた。それは次第に大きくなっており、こちらに向かって来ているのが見て取れる。

「軌道は大丈夫？」

私は隣に立って同じように邪神像を仰ぎ見ているレオノーラへと尋ねる。

私達は邪神像対策として落とし穴に追い込む作戦を採ることにしたが、その実態は正直「追い込む」と言えるようなものではなかった。なにしろ、相手は動いているとはいえ生物ではない像なので、獣を罠に追い込むように追い立てるわけでもなければ、気を引いて誘導しているわけでもないからだ。

言ってしまうえば、邪神像の通るであろうルートに落とし穴を掘り、勝手に掛かるのを待つというだけの話である。当然、邪神像の歩く方向が逸れれば無駄な穴を掘っただけで終わってしまうので、その軌道は非常に重要だ。

レオノーラは暫く思索していたが、やがて自信を持って頷いた。

「ああ、大丈夫だ。このまま行けば、間違いなく罠を仕掛けた付近を通る」

よかった。逸れてたらどうしようとして内心冷や汗ものだった。

「そう。急いで彼の方に伝えてくれる？」

「あ、はい。分かりました！」

横に居たオーレインに罫の設営の指揮を取っている教皇への連絡を頼むと、彼女は頷いて向かってくる邪神像とは反対側に当たる、落とし穴を掘った場所へと向かって駆けていった。

「ところで、アンリ様。一つ伺ってもよろしいですか？」

「何？」

走ってゆくオーレインの背中を見ていた私にテナが質問をしてきた。

「もし、あの神像が落とし穴に落ちたとして、その後はどうするのですか？」

そう言えば、落とし穴に落として捕獲するということだけ決まっていたけれど、それ以外のことは曖昧なままだった。

その前に、穴に落ちたからといって捕獲したと言えるかが問題だ。折角落としても出て来られてしまっただけは意味がない。

そもそも、いくら信徒を総動員したからといって一晩で掘れる穴の大きさには限界がある。あの巨大な邪神像の全身がすっぽり入るような深い穴が掘られているわけではない。せいぜい、太腿の辺りまでが埋まる程度だ。

地魔法が使える人が居なければ、それすら到底間に合わなかっただろう。

自分の身体で想像してみれば分かるが、腿の辺りまである障害物を避けるにはかなり大きく足を持ち上げるか、腕を使って身体自体



を持ち上げなければ越すことは出来ない。前に向かって歩くだけの邪神像であれば、腿の辺りまで埋まってしまうばなかなか抜け出せないと思う。

けれど、それだって絶対とは言い切れない。進み続ける邪神像とぶつかることで、穴が崩れてしまうこともあり得る。

「取り敢えず、抜け出せないように埋める」

なので、まずは抜け出せないように埋め立ててしまおう。そうすれば、流石に動けなくなる筈だ。

邪神像の外見は私にそっくりなので、その絵図を想像すると複雑な気分だけど。

「ふむ、その後は？」

「あまり深く考えてないけれど、動いてる原理を究明して止めるとか……」

そもそも、本当にどういう原理で動いているんだろう、あの神像。金属の塊で関節すらないのに歩いているのが全くもって謎だ。その辺が分かれば、もしかしたら穏便な止め方も分かるかも知れない。

正直、望み薄だけど。

「究明できなかつたら？」

「破壊するしかないと思う」

レオノーラの質問に、私は即答する。止め方が分からないのなら、もうそれしかないからだ。

「アンリ様……」

テナが心配そうな顔をしているのは、邪神像が私と同じ姿だからだろうか。

確かに、自分と同じ姿の像が無残に壊されるというのは気分が悪い話ではないけれど、この場合はやむを得ないだろう。それに、流石にそこまで感情移入しているわけではないから大丈夫だ。

「まあ、そうだな。そうするしかないだろう。あの教皇は反対するかも知れないが」

「そこは説得する」

「そうしてくれ。……と、そろそろ此処も危険だな」

会話をしている間に、邪神像は大分近付いて来ていた。既に全身が視界に入るくらいの位置に居る。

このまま此処に居ると踏み潰されかねないので、私達も下がることにする。

落とし穴の近くに隠れて、邪神像が穴に落ちるのを見届けなければならぬ。それに、もしも邪神像が穴に落ちなかった場合は、戦いを仕掛ける必要もある。

念には念を入れて切り札も用意したけれど、出来れば使いたくない。

最後にもう一度向かってくる邪神像の方向を見ると、邪神像は辺りを見回しながらゆっくりと歩いていった。

「あれ？」

今、何か違和感があったような……。

「アンリ様？」

「おい、どうした？ そろそろ行かないと拙いぞ」

「あ、うん」

テナとレオノーラに急かされて、私は先程覚えた違和感を気にしながらも彼女達と一緒に後方へと引いた

用意した落とし穴はかなり雑な作りだ。まあ、これだけ巨大な上に一晩での突貫工事なのだから仕方ない。徹夜で、しかも街の外での夜間の作業にも関わらずここまでやってくれたのだから、働いてくれた信徒の人達には感謝するしかない。

巨大な縦穴の上に切り倒した樹を数本横倒しにしているだけの状態なので、見ればすぐに落とし穴があると分かってしまう。

いや、それも邪神像サイズの人が見たらという話で、人族のサイズからすると溝の上に樹の橋が掛けられているようにしか見えない。ハッキリ言つて、機械的に前に歩くだけの邪神像でなければ絶対に引っ掛かることのなさそうな罠だ。

「上手くいくでしょうか？」

落とし穴の近くにあった藪の中で身を潜めて邪神像が罠に掛かるのを待つ中で、オーレインが私に向かって聞いてきた。

非生物の邪神像相手に隠れる意味は正直ないかも知れないけれど、気分的な問題である。

「上手くいって貰わなければ困る」

先程述べた通り機械的に前に歩くだけの邪神像でなければ絶対に引つ掛かることのなさそうな罫だけど、逆に言えば機械的に前に歩くだけの邪神像であれば掛かるだろう。

大丈夫、大丈夫な筈だ。

ただ、そこまで考えた私は先程覚えた違和感のことがどうしても引つ掛かっていた。

「来たぞ」

レオノーラの声に穴の方を見ると、邪神像が間近に迫っていた。もうあと数歩だけ前に進めば、落とし穴に落ちるくらいの位置に居る。

辺りを見回しながらゆっくりと歩く邪神像は　　ッ!?

辺りを見回しながら!?

意志などない筈の邪神像が?

そう言えば、先程見た時も周囲を見回している仕草をしていた。違和感を覚えたのはそのせいだったんだ。

最初歩きだした時には周囲の状況も把握していないままに真っ直ぐ前に歩いているようにしか見えなかったけれど、加護を付与されただけで寝惚けているような状態だったのか、それともその後で行動するうちに知恵を付けたのか。

そう言えば、ステータスから見た邪神像の説明にも気になる記述があった。

『非生物的な外見からは想像出来ない程の知能をも持ち合わせている』

他のところに気を取られて流してしまっていたけれど、確かに「知能」があると書いてあった。

まずい、邪神像に知能があるとすると前提から崩れてしまう。

「アンリ様！ 神像の様子が……」

私の懸念を裏付けるかのように、真っ直ぐ進んで落とし穴に落ちると思われていた神像は、穴の直前で立ち止まって目の前の仕掛けを観察している。立ち止まった場所といい、明らかに落とし穴に氣付いて警戒していると分かった。

失敗だ。

更に、先程のテナの声を聞き付けたのか、ギギッと首がこちらを向いた。

目も見えなければ耳も聞こえない筈なのに、一体どういう原理なんだろう。まあ、今はそんなどうでもよいことを考えている暇はない。落とし穴に落とすという第一案は、最早実行不可能だろう。

「第一案を破棄、第二案に移行する」

「ああ」

「分かりました」

「やむを得ません」

私が宣言すると、レオノーラ、オーレイン、教皇の三人は藪から飛び出して邪神像へと立ち向かった。第二案 邪神像の破壊を決定するためだ。

勿論、彼らだけに戦わせて私は観戦というわけにもいかない。その選択肢には少し心惹かれるところはあるけれど。

ただ、根っからの戦闘者である彼女達と違って、私やテナは戦闘経験自体が殆どない。そんな状態であるの巨大な邪神像に立ち向かえというのは酷なことであるという点については理解してほしい。

「テナ」

「は、はい！ 分かりました！」

緊張するテナの様子を見て何か声を掛けてあげたいと思うけれど、正直私の方が緊張しているのだ。実際のところ、彼女は経験者であるのに対して、私の方は未経験なのだから。

しかし、事ここに至った以上はそんなことを言っても始まらない。

そう考えた私は、テナと共に用意した切り札の方へと急ぎ足で向かった。

私達が身を潜めていた藪の後方、そこに巨大な漆黒の甲冑が片膝を突いていた。ダンジョン「邪神の聖域」二十階層フロアボス邪神の鎧アンリルアーマーだ。片方は。

そう、そこに鎮座していたのは二体の漆黒の甲冑だ。何れもオリハルコンに私の加護付与を乗せた強力な漆黒のリビングアーマー。但し、片方が男性用の甲冑であるのに対して、もう片方は女性用の甲冑という違いがある。

前者が先程述べたフロアボス、後者は今回新たに用意したものだ。

このアンリルアーマーは自動で外敵を排除する魔物でもあるのだが、同時に搭乗者が乗り込んで操縦する戦う鎧ともなり得る。

とはいえ、誰でも動かせるというものではない。搭乗者の資格があるのは邪神に連なる者のみ。この世界で現在資格を有していると思われるのは私とテナ、それからインペリアル・デスと神族の「私」だけだ。

眷属という意味では、今日の前に居る邪神像も該当するかも知れないが、どう考えてもサイズの乗れないから除外する。

かつて、オーレイン達がダンジョンに挑戦して来た時も、テナにこのアンリルアーマーに搭乗して障害となつて貰った。その時は、一時は魔王のおじ様や四天王、勇者三人という大人げないドリームパーティを窮地に陥る程の成果を上げた。

また、生身でなく周囲を覆われているというだけで、私やテナのような生粋の戦闘者でないものであつても大分戦闘に対する抵抗は薄れるという利点がある。逆に、日常的に戦いを行っている者にとつてはむしろやり辛いかも知れないけど。

「行こう」

「はい！」

テナが以前も使用した男性型のアンリルアーマー、改めアンリルアーマー番号に搭乗するのを見届け、私も新たに創ったアンリルアーマー番号に搭乗した。

私とテナが搭乗した二体のアンリルアーマーが駆け付けた時、まだ戦いは始まっておらず、お互いに睨み合ってる状態が続いていた。

いや、よく見たら睨んでいるのは主にレオノーラとオーレインだけだった。邪神像の表情はよく分からない、教皇は背を向けているのでよく分からない。

「おまたせ。状況は？」

「やっと来たか。見ての通りだ。仕掛けて来ないので、お前達が合流するまでは手出しを控えていた」

アンリルアーマー式号で横に並んでレオノーラに尋ねると、彼女は邪神像の方へと警戒を傾けたまま答えてきた。ロボットとは異なるので、集音と発声は自前の魔法でやらないといけない。

なお、陣形は杖を構えた教皇が最前列、中列に徒手のレオノーラ、後列に聖弓を携えたオーレインといった形だ。徒手のレオノーラが中列に居るのは、彼女が魔法も使えるためだ。

彼女の片手を占有していた人形は流石に邪魔なので、一時的に私のアイテムボックスへと放り込んでおいた。抜け出してくるのも時間の問題だと思っけれど。

そしてその横に、二体のアンリルアーマーが就く。私が左でテナが右だ。

人族や魔族と比べると巨大なアンリルアーマーだが、邪神像の大きさは更にその上をゆく。アンリルアーマーの背丈はせいぜい邪神



像の膝くらいまでなので、見上げるような形になる。

「倒し切れるとは思えないけれど、せめて動きを鈍らせるように足を集中的に狙って」

「ああ、分かった」

「任せてください！」

「はい、アンリ様」

「……………」

あれ？

最前列の教皇から返事が無かった。珍しいこともあるものだ。集中していて聞こえなかったのだろうか。

私が疑問に思っただけの方を見ると、何故かブルブルと震えている。そんな風には見えなかったけれど、もしかして戦闘を怖れているのだろうか。もしそうだとしたら、こんなことに巻き込んでしまつて申し訳ないと思う。

「わ、私は……………」

いつものはっちゃけた雰囲気が消え去って震えながら何かを呟いている彼の姿に、私の中の罪悪感が膨れ上がる。その姿はとても戦えるようには見えない。このまま戦闘に入れば、真つ先に大怪我を負つたり命を落としてしまいそうだ。

幸いにも邪神像はまだ動きを見せない。今の内に戦闘から外れて貰った方がいい。

そう考えた私が教皇に話し掛けようとした時、彼は杖を持ったまま苦惱するように頭を抱えてしまった。

「やはり、私には出来ません！ アンリ様に攻撃を仕掛けるなどッ！」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

心配した私が莫迦だった。私やレオノーラ達だけでなく、心なしか邪神像すら啞然としている気がする。

どちらにしても戦力にはなりそうにない。

私はそう見切りを付け、アンリルアーマーの手を伸ばして彼の後襟を摘んだ。

「？ アンリ様？」

首を捻って怪訝な視線を向けてきたが、私はそれを一言で切り捨てる。

「退場」

「ほわあああああーっ！？」

前を向いたまま肩越しに後方の先程まで私達が潜んでいた藪の方へポイントと投げ捨てると、彼はドゥプラー効果と共に退場していった。

「おいおい」

「む、無茶しますね」

「戦えないなら邪魔」

実際、戦えないならこの場に居るのは危険なだけだ。

というかむしろ、彼の場合下手をすると邪神像に味方しそうな勢いだったし。

流石に私がこちらに居る以上はそんなことはないと思いたいところだけど、言い切れない部分が恐ろしい。

「ま、まあ気を取り直していくぞ」

そのレオノーラの声に反応したのか、それとも教皇を後ろに放り投げたことに反応したのか、どちらかは定かではないけど、動きを止めてこちらを見ていた邪神像が前に手を伸ばしながら近付いてきた。

「気を付けてください！」

後方から戦場を俯瞰していたオーレインが警告を発し、私達は瞬時に気持ち切り換えて邪神像の攻撃に備えた。

私が操縦するアンリルアーマーが右手に、テナが操縦するアンリルアーマーが左手に、それぞれ持った大盾を併せるように掲げて邪神像の手を受け止める。

金属同士がぶつかる甲高い音と共に、恐ろしい程の重圧がアンリルアーマーの盾を通して伝わってきた。流石に巨大なだけあって、重量も力も凄まじい。

「ア、アンリ様！」

「耐えて！」

悲鳴に近い声を上げるテナにそう短く告げる。

実際このままでいけば押し切られるのは時間の問題だが、残りの

二人がきつと動いてくれる筈。

「ハッ！」

そんな私の希望に答えるかのように、後方から幾本もの光の矢が飛んできた。オーレインの聖弓による援護射撃だ。

光の矢は全て邪神像の頭部へと着弾する。しかし、ダメージを与えたような感じはなかった。

「効きませんか」

どうやら、彼女の矢では邪神像の防御力を貫くことができないようだ。

これが生物であれば目などの急所を狙うという手段が取れるのだが、全身金属の邪神像相手ではそれも難しい。

しかし、これでいい。

ダメージはないものの攻撃を受けてそちらに注意を割いた分、他が疎かになった。盾越しに感じる重圧が心なしか軽くなったような気がするし、何よりも足元に踏み込んだ彼女に反応出来ていない。

「喰らえ！」

本命であるレオノーラが拳に闇魔法の威力を乗せた渾身の一撃を邪神像の右足に叩き付けた。鐘を鳴らすような音が辺りに鳴り響き、邪神像は一瞬バランスを崩してたたらを踏むように後退した。

「痛っ！」

邪神像に一撃を加えたレオノーラだが、顔を歪めて先程攻撃に使った手を押さえた。邪神像を攻撃したことで拳を痛めてしまったら

しい。

全身金属の相手を殴れば、それも当然だと思う。

先程のレオノーラの攻撃は大きなダメージとはなっていないが、少なくとも邪神像が体勢を崩した以上はダメージがゼロということはない筈だ。

あれを繰り返し返せば邪神像を歩行不可能な状態まで追い詰めることが出来るかも知れないが、レオノーラの様子を見ている限りそれは難しそうだ。

「すまん、そう何度もやれそうにない」

「無理しないでください、レオノーラさん」

何度も何も、これ以上彼女に素手で戦わせるのはなしだ。テナの言う通り、無理はしないでほしい。

でもそうすると、攻め手が……と思ったところで、私はある物の存在に気付いた。

そうだ、あれなら……。

咄嗟に、アイテムボックスから目的のものを取り出すように念じる。

私のアイテムボックスは私自身の影なのでこの場合は何処に出現するかと思っただが、アンリルアーマーの影からニョキッと飛び出てきた。好都合だ。

私は影から突き出たそれをアンリルアーマーの二本の指で摘まむと、レオノーラの方へ向かって投げた。

「レオノーラ、これを」

「!?!? こ、これは父上の!?!?」

レオノーラは私が投げたそれを見事に両手で掴み、自らの手中にある物に驚いた表情を浮かべた。

そう。私が取り出したのは、彼女の父親である魔王のおじ様がダンジョン攻略の際に使っていた魔剣だ。

アーク達の聖なる武具と同様に、彼らがダンジョン攻略に失敗した時にペナルティとして回収していたものである。

聖剣、聖槍、聖弓についてはそれらを勇者達に返却するための対価を神族の「私」から譲り受けて持っていたものだけど、魔剣は返すように頼まれて同時に渡されていただけで、本当はさっさと返しておかなければいけなかったものだったりする。魔族領を訪問した時におじ様に返せばよかったのだけど、すっかり忘れてしまっていた。

拳士であるレオノーラが何処まで使いこなせるかは分からないけれど、この魔剣は魔王の血脈に受け継がれている剣だと聞く。次期魔王であるレオノーラなら、適性としては十分な筈だ。

剣を受け取ったレオノーラは、それを両手に持って構えた。その姿は凛々しく、姫騎士という呼び名が相応しい。

「いけそう?」

「……任せておけ」

頼もしい言葉に私は微笑むと、再びアンリルアーマーを邪神像へと向けた。

魔剣を振るうレオノーラの攻撃は最初の素手の時よりも強力で、邪神像に対して確実にダメージを与えている。私やテナも隙を見て防御から攻撃に回り、四人掛かりで邪神像の足に集中攻撃を加えていた。

陣形は適切だったし、戦術も嵌まっていた。にも拘らず、敗北の魔の手はゆっくりと私達の足元に忍び寄ってきていた。

「はあ……はあ……」

「ま、まだ……まだ斃れないのですか？」

敗因は、巨大な邪神像の耐久力を測り間違えていたことだ。

勿論、耐久力が高いことは外見や素材からも容易に想像出来ていたため、倒し切れるとは最初から思っていなかったのだが、歩行不可能な状態まで持っていくぐらいであれば可能な範囲だと思っていた。

しかし、相手は想像以上にタフだった。高い耐久力に加えて、疲労することもなかったため戦闘開始時点と殆ど変わらない動きを見せている。

その一方で、私達の方はそうはいかない。

アンリルアーマーに搭乗している私やテナはまだいい。魔力を使用してはいるが、そこまで消耗してはいない。

問題なのは、レオノーラとオーレインの二人だ。

最前線で大剣を振るうレオノーラは目に見えて消耗しており、肩で息をしている。慣れない武器に一瞬の油断さえ許されない戦況は、彼女の体力をみるみるうちに奪っていった。最早ほぼ気力のみだけ

で立っている状態だ。

また、オーレインについても消耗が激しい。

彼女の場合は使用している武器に原因がある。彼女の代名詞でもある聖弓は光の魔力を矢にして放つことが出来るというもので、弓兵でありながら矢の残数を気にせずには戦うことが出来る。

しかし、当然ながら一矢放つごとに魔力を消費しているため、雨あられと撃ち続ければあっと言う間に魔力が尽きてしまう。勇者として戦ってきた彼女ならその辺りのペース配分も普段から行えている筈なのだが、邪神像が想像以上に強力だったために牽制にも全力を注ぐ必要があり、手が抜けなかったのだ。

「あ……」

疲労が足に來たのか、邪神像に向かって攻撃を仕掛けようとしていたレオノーラが足を纏れさせてバランスを崩した。咄嗟に手に持っていた魔剣を地面に突き刺してなんとか転倒を免れるが、それはこの状況下で致命的な隙となってしまう。

「し、しま ツ!？」

「レオノーラ!」

「レオノーラさん!」

「逃げてください!」

レオノーラの消耗を見て予測していたのか、はたまた偶然か、邪神像はその隙を逃すことなく彼女に向かって右手を伸ばし、その身を掴み上げた。

邪神像は巨大な分、手の大きさもとても大きい。レオノーラは全身をすっぽりと邪神像の手に片手で握られて、首から上だけが見えている状態だ。このまま握り潰されれば、彼女の身は一瞬にして肉





がら叫ぶ。勿論、その声が聞き入れられることはない。

それにしても、何故あの邪神像はあんなセクハラをレオノーラにしてるんだらう？

あの像に性欲があるとはとても思わないし、仮にあったとしてもあの外見で変な行動をするのはやめてほしい。

ひとしきりレオノーラの胸をつつき回した邪神像は、今度はその掌を自らの胸部に当てた。当然ながらモデルがモデルだけに、揺れることはない。

いや、待った。金属だから誰がモデルだったとしても揺れる筈がない。揺れないのは決して私のせいじゃない。

あと、純粋なバストサイズで言えば邪神像はレオノーラのそれを遙かに上回る。数メートル単位だ。

しかし、そんな慰めは届かなかったようで、邪神像は掴んでいたレオノーラを投げ出して、大地に両手と膝を突いた。

落ち込む気持ちは少し分かるが、これは好機。これ以上戦いを続けても敗色が濃厚である以上、今の内に逃げるのが正しい選択だ。

私は空中に投げ出されたレオノーラを抱きとめると、地面に落ちていた魔剣を回収しながらテナへと指示を出した。

「撤退する、テナはオーレインを抱えて走って」

「は、はい！ 分かりました！」

こうして、邪神像との一度目の接敵は私達の敗走という形で幕を閉じた。

## 09：対策会議、再び

邪神像との戦いから逃走して街に戻ってから一日経った。対策の練り直しとか色々やることはあるけれど、まずは取り敢えず……。

「お仕置き」

「ああああ、申し訳ございません！」

敵前で戦意喪失をやらかしてくれた教皇にお仕置きするが、どうにも効いているようには見えない。正座して貰って上に座ってみただけ。

ちなみに、私とテナはそれぞれレオノーラとオーレインを抱えて戦場から撤退したけれど、彼のことは後ろに放り投げたまま忘れていた。

後からひよっこり戻ってきた時に初めて気付いて「しまった」と思ったけれど、後の祭りだった。

幸いにも当人は置き去りにされたことを特に気にしていないみたいだけど、ちよっと気まずい。それもあって、あまり強く責められないというのが実情だ。

まあ、それだけでなくも私の姿をしているから攻撃出来ないと言われてしまうと、照れくさい部分もあって追及し難い。

「じゃれあってないで、そろそろ会議を始めないか？」

教皇の上に座ってた私に、椅子に座っているレオノーラからジト目と共に呆れたような声が投げ掛けられた。じゃれあってるわけで

はないのに。

まあ、お仕置きも効果がないようだし、いつまでもこうしているわけにもいかない。

私は立ち上がると椅子へと座り直した。

「お仕置き、終わり」

「そ、そんな……」

何故残念そうな表情をするのか。

「早く座って」

私が促すと、教皇はがっくりと肩を落として席に着いた。

「まずは反省会から」

「そうだな」

「反省会、ですか」

「えーと……」

「何を反省すれば良いでしょうか？」

貴方は全部反省して。

まあ、教皇のことはひとまず置いておいて、一番の反省点は邪神像に知能が付いていることを事前に見抜けなかったことだろう。そ

のせいで、落とし穴作戦は無駄に終わってしまった。

「神像があんなに頭が良くなってるとは思わなかった」

「確かに。てつきりゴーレムのようなものだと思っていたんだが、少々見込みが甘かったみたいだ」

「知能というか、感情のようなものもあるみたいでしたね」

「そうですね。最後は何だか落ち込んだじゃってましたし……」

テナの言葉にその時の経緯を思い出した私は、思わず原因になったレオノーラの方に目を遣った。私の左隣に座っているオーレインも、私と同じように邪神像すら落ち込ませたレオノーラの「武器」をギリギリした眼で見詰めている。

「な、なんだ!？」

「確かにあれは」

「凶器ですね」

「あ、あはは……」

ちなみに、テナは私やオーレインと違って睨み付けるようなことはせず、苦笑している。これが持てる者と持たざる者の格差か。

「あと反省点としては、思ったよりも耐久力があつたこと」

こちらも完全に想定外だった。仮に戦闘になったとして、倒しきえることは出来なくても歩けなくするくらいは出来ると思っていたのだが、四人掛かりであれだけ攻撃してもあそこまでダメージが与えられないとは思わなかった。

教皇が初っ端から戦線離脱していたこともあるが、仮に彼が戦列に居たままだつたとしてもおそらく結果は変わらなかっただろう。

「まったくだ。あそこまで硬いとは思わなかった」

レオノーラが手をさすりながら述べる。邪神像との戦いで痛めた彼女の拳は既に魔法で治癒されているが、あの時の痛みを思い出しているのだろう。

「私も牽制が精一杯でしたし」

「それは仕方ないですよ」

オーレインが自分の戦果を卑下するようなことを言ったのを、テナが慰撫している。実際、彼女の牽制には大分助けられたし、私としてもテナに同感だ。

「神の像に相応しい耐久力と言ってよいでしょう。素晴らしい、流石はアンリ様」

何故か誇らしげに喜んでるこの人、殴っていいかな。

いや、なんだか悦びそうだからやめておこう。

「しかし、問題はこれからどうするかだ。ハッキリ言って、このままでは何度挑んでも同じ結果に終わりそうだ」

「それは……そうですね。少なくとも、戦力を増強しない限り勝てないでしょう」

確かに二人の言う通りだと思うけれど、生半可な戦力では増強しても役に立ちそうにない。例えば、騎士団とかが居たところで、あつと言つ間に全滅させられるところしか想像できない。

生半可でない戦力にも伝手はある。アンリルアーマーを借りてきたみたいに、神族の「私」からヴニヤインペリアル・デスを借りてくるという手段だ。けれど、それをやると周囲への被害が大きくな

ってしまいかねない。ダンジョンの中なら兎も角、地上で怪獣大決戦はまずい。

八方ふさがりだ。

「打つ手なし、か」

「参りましたね」

「どうしましょう」

「困ったものです」

私もそうだけど、レオノーラ達も良い案が思い付かないようだ。みんな溜息を吐いている。困ったと言いながら全く困ったように見えない教皇以外は。

「取り敢えず、あの子の神像の動向について教えて」

「かしこまりました」

このまま悩んでいても良い案が出そうにないので、私は情報を整理するために先日の敗走後の邪神像の動向を教皇に尋ねた。

教皇は恭しく頷くと、円卓の中央の地図に印を書き加えながら解説する。

「先日の落とし穴を掘った場所が此処です。神像はその後暫くしてから東の方向へと向かいました」

東…… 人族領側か。

「しかし、進みは遅いようです。最初にこの国から東に歩いていった時と比べると、およそ三分の一程度の早さで進んでおります」

彼は地図に邪神像が歩いたとされる軌道を書き加える。

確かに、これまでと比べると格段に襲い上に、なんだか軌道が右に行ったり左に行ったりとよたついているようにも見える。

「この前の戦闘のダメージか？」

レオノーラが疑問を上げる。もしも先の戦闘で足に与えたダメージによって邪神像の歩みが鈍くなっているのであれば、敗走したとは言え一定の戦果を上げたと言えるだろう。彼女も手を痛めてまで戦った甲斐があるというものだ。

しかし、そんなレオノーラの希望は一言で切って捨てられる。

「いえ、歩く速さ自体は変わっていないため、それはないでしょう」  
「？ 歩く速さ自体が変わっていないのに、どうして進みが遅くなるのですか？」

妙な答えを返してきた彼に、テナが首を傾げながら問い掛けた。

「それが……どうも時折寝っ転がったり、何かに気を取られてフラフラとそちらの方に歩いて行ったりしてまして、歩いている時間自体が短くなっているのです」

成程、確かにそれなら歩くスピード自体が変わらなくても進行速度は遅くなる。要するに、サボりがちになつてるということだ。

「なんか、最初に聞いた話と比べて随分と人らしい行動をするようになってますね」

確かに、周囲のものなど認識せずに前進するだけだった最初の時に比べて、急速に人染みた行動を取るようになってる。



「人らしいというか……」  
「テナ？」

何か気付いたことがあるようなテナの呟きに私は問い掛けてみた。何処に突破口があるかは分からないから、今は何でもいいから情報がほしい。

「いえ、その、アンリ様らしいなって」

「ガン！？」

テナにそんな風に思われてたのか、私。

心外な。私はそんなに怠惰じゃない……と言いたいけれど、テナ達は私が一年くらい外出せずに引き籠ったことを知っているので、下手に反論出来ない。迂闊に反論すると藪蛇になりかねない。

「……成程、そっくりだな」

「……あ、あはは」

何故かレオノーラが私にジト目を向けてくる。テナはそんな彼女の呟きを受けて苦笑している。

「成程！」

何故か私の胸の辺りを見ながら物凄い納得しているオーレイン。何を想像したかは大体分かるけれど、一つだけ言っておく。貴女には言われたくない。

「ふむ、アンリ様の像とアンリ様……何か繋がりがあるのかも知れませんね」

繋がり、か。

確かに、認めたくはないけれど邪神像の行動は私の行動パターンから何か影響を受けているとしか思えない。外見は私そっくりだし、加護も付与してしまっただからその辺りの影響……あ。

「どうした？ 何か気付いたことがあったのか？」

「ちょっと待って」

レオノーラが問い掛けてくるが、先に頭の中を整理させて貰うことにする。彼女達は察してくれたのか、ジッと黙って私の次の言葉を待っている。

繋がりという言葉で一つ思い出したことがある。邪神像の額に浮かび上がった眷属印だ。もしかして、あれが何かの影響を及ぼしているのだろうか。

「テナ」

「は、はい？」

私はテナに推測したことを伝え、眷属印の影響に心当たりがないかを聞いてみた。

「ええと、ハッキリとしたことは言えないのですけど……ただ、アンリ様の考えられていることが何となく分かったりすることはあると思います」

元々気の利く性格だというのが大きいと思うけれど、かゆいところに手が届くお世話をしてくれていたのは、その辺りも関係しているのだろうか。

いずれにしても、眷属印によって何か繋がりのようなものがあるのは確かなようだ。だとすると、邪神像の行動パターンが私に近くなってきたことも、それが影響している可能性は十分にある。テナよりも影響が遥かに強いように見えるけれど、元々自我のあるテナと非生物だった邪神像では影響に差があってもおかしくはない。むしろ、差がない方がおかしい。

私が推論を伝えると、レオノーラ達は深く頷いた。

「成程、ありそうな話だな」

「そうですね。確証を得るのは難しいですけど」

「この印にそんな効果があったんですね」

「ふむふむ……こんな感じでしょうか……」

取り敢えず、爪で自分の額に同じ印を刻み付けたとしても何の効果もないから、教皇は無駄なことはやめるように。

「それで、もしそうだとすると何か突破口になり得るか？」

「行動パターンが分かれば、対策もしやすくなるのでは？」

「しかし、行動パターンと言っても戦闘時の行動パターンではないだろう。アンリが怠惰なようにあの像が怠惰だとして、戦う上で何か役に立つのか？」

待つて、さり気なく批難されてる気がする。

「確かに、戦闘に直接役立てるのは難しいかも知れませんが」

「あ、でも……」

「テナ、何か思い付いたの？」

「はい。アンリ様の好きな物とかがあったら、あの像を誘導する」とも出来るんじゃないかなって」

「それだ！」

え？

テナの言葉を聞いた瞬間に、レオノーラが叫んだ。何か良い案が浮かんだのだろうか。

「アンの好きな物で釣って罠に誘い込むんだ」

「罠ですか。また落とし穴……いえ、既に一度使っているのと同じ罠では避けられてしまうかもしれませんね。何かもっと別の罠を用意した方が良いでしょう」

「そうだな。流石にあんな風に剥き出しの落とし穴では幾ら誘導しても引っかけりそうにない。もっと隠匿性があり、かつあの像を封じ込めることが出来るだけの罠が必要だ」

「封じ込めるなら、封印の結界などが最適ですね。光魔法の領域なので、聖弓を通して聖女神様にお伺いを立ててみます」

「そうしてくれ」

レオノーラとオーレインの間でとんとん拍子に話が進んでゆくが、私やテナ、そして教皇は置いてけぼり状態だ。

「封印の結界に追い込むのは分かったけれど、一体何で誘き寄せつつもりなの？」

私が質問すると、レオノーラは自信満々の様子で答えた。

しかし、私はレオノーラが述べた作戦内容に不安を覚えた。果たして、そんな物である邪神像が釣られるのだろうか。

「そんな物で上手くいくの？」

「大丈夫だ、必ず上手くいく」

私としては上手くいっても複雑なのだけだ。

「……分かりました、ありがとうございます！」

聖弓に耳を当てて誰かと話をしていたオーレインが声を上げた。おそらく、ソフィアからの啓示を受けていたのだろう。

「何か分かった？」

「はい。聖女神様があの像にも通じる封印魔法を授けてくれるそうです。ただ、確実に期すためには触媒として使うため聖弓だけでなく聖剣、聖槍の三振りが揃っていた方が良さそうです」

ソフィアが通じると言い切ったのであれば、多分大丈夫だろう。仮にも光神だし。

「聖なる武具は全部此处にあるから、大丈夫」

「よし、それじゃ罫に関してはそれで大丈夫だな。後は誘き寄せるための物か」

「そちらは私の方で手配しましょう。材質的に完全に再現することは難しいかも知れませんが、外見上似せることは出来ると思います」  
「それで十分だろう。それでは手配は任せた」

こうして、邪神像対策の第二作戦が開始された。

……どうでもいいけど、私が対策委員長だった筈なのに、いつの間にかレオノーラが仕切り役になってるな。

## 10：大切なもの

お金が全てじゃないとか、お金で買えない物だってあるという言葉  
葉を聞くことがある。そのことについて、私は特段異論を持ち合わ  
せてはいない。

命とか、健康とか、大切な人との絆とか、お金では買えない大切  
なものは幾らだってある。それは間違いのない事実だと思う。

しかし、同時にこうも思う。

それが全てじゃないし買えない物があるかも知れないけれど、お  
金が必要であることに変わりはない、と。

命は買えないけれど、お金がないと食べる物にも困って死んでし  
まう。

健康は買えないけれど、健康的な生活を送るためにもお金は必要  
だ。

大切な人との絆は買えないけれど、借金のかたに引き離されてし  
まったらどうするのか。

お金以外にも大切なものがあるとしても、だからってお金を大切  
にしない理由にはならない。

そう、私はお金の大切さを正しく把握しているだけなのだ。ソフ  
イアやアンバー、それにレオノーラ達は私のことをまるで守銭奴  
か何かのように思っている節が見受けられるけど、そのことについ  
ては断固として抗議したい。

私は別にお金を貯めることを楽しんでるわけではないし、使う  
時にはちゃんと使う。出し惜しみをするようなことはない。

それは勿論、少ないよりは多い方が良いと思ってはいるけど、そんなのは私だけの話ではない筈だ。

ダンジョンで脱落した冒険者からお金や武器を巻き上げた？

他のダンジョンなら命を落としているだろうところをそれだけの代価で生き長らえているのだから、優しいと言われてもおおかないと思う。

ダンジョンへの挑戦者から入場料を取った？

王族とか貴族とかが好き勝手に関所を作って通行料を取ったりするのとくらべれば、自分の敷地に入場料を設けて何がいけないのか。

国を訪れる冒険者達からお金を巻き上げるために商売を推奨した？

外貨獲得のための国家戦略だ。

思うに、レオノーラ達はお金に対する感覚がズレているのだ。とはいえ、それも無理のないことだろうと思う。ソフィアやアンバールは神族でお金なんて持たないし使うこともない。レオノーラもあれで王族だから、お金に困るようなことはなかっただろう。

オーレインについてはよく分からないけれど、教皇は元々貴族の出身みたいだし。私に同意してくれるのはテナやりりだけかも知れない。

いずれにしても、私は人並みにお金の大切さを知っているだけであり、そこに何も恥じるようなことは存在しない。

だから……。

邪神像が嬉々として金貨を拾いながら畏がある方に誘き寄せられていくのは私のせいではないし、それを見たレオノーラ達の目が呆れた感じで私に向けられていることには遺憾の意を表明したい。

「これが例のもの？」

「はい、神像にお供えする金貨です」

教皇から差し出されたのは彼の言う通り金貨だ。但し、そのサイズが通常の金貨とは大きく異なる。なにしろ、私の胴回りと同じくらいの大きさだ。勿論、普通に流通している物ではなく、今回の作戦のために作って貰ったものだ。

贖金？

いや、この世界の法律なんて詳しく知らないけれど、こんなサイズが違うものを見間違える人は居ないだろうし、贖金には当たらないだろう。

あまりの大きさに片手ではとても持てそうにないので両手で受け取ったが、ずっしりと重い。

「重い」



「いや、軽いくらいだろう。全て金で作られていたらこんなものではない筈だ」

それもそうか。

レオノーラの言った通り、この特大金貨は全て金で出来ているわけではない。そんなことをしていたら、お金が幾らあつたつて足りなくなる。鉄製で形を作った上に金の薄膜で覆っているだけ、要するに金メッキだ。

突貫で作って貰ったものだし、この世界は技術的にもそこまで進んでいるわけではないため、多少加工が雑な作りになっているのは仕方ないだろう。それに、このサイズだからこそ細かい部分が雑に見えて気になるけれど、本物の金貨のサイズに換算して考えれば誤差の範囲となるだろうから、相手を考えればその点についてはそこまで気にすることはない。

ただ、そもそもの話なのだが……。

「本当にこれであの像を誘き寄せられると思うの？」

レオノーラの発案は、この作り物の特大金貨で邪神像を封印魔法の陣まで誘き寄せるといったものだ。

丁度、元々邪神像が立っていた台座が陣を描くのに広さも材質も、そして元々邪神像が存在した場所ということで魔法に関する適性としても適当だという話だったため、そこを決行場所に選んだ。

但し、台座があるのは邪神殿のすぐ横であり教国の街の中心に近いため、住人の皆には作戦決行中、邪神殿に一時的に避難して貰った。

邪神像は人族領をフラフラと巡りながらまたこの国に近付いてきているそうなので、適当な位置から台座までの間にこの特大金貨を

等間隔に配置して、罨に掛かるのを待つことになる。

しかし、それもこれも邪神像がこの特大金貨に興味を持つことが大前提だ。無視されてしまえば全く意味がないし、仮に興味を惹くことが出来たとしても罨に気付かれてしまえば失敗に終わる。

正直、これで上手くいくというレオノーラの自信が理解出来ない。

「あの像の行動パターンがお前に準拠しているなら、上手くいくだろう」

「どうして？」

「どうしてって、もしもお前が道に落ちている金貨を見掛けたとしたら、絶対に拾うだろう？」

失礼な。

いくら私だって、道に落ちている金貨を拾ったりなんか……。

「そんなこと……」

「ないと言いつけるか？」

ない……こともないかも知れない。気になって手に取るのは確かだ。

っと、いやいや待ってほしい。うっかりレオノーラに丸め込まれるところだった。そんなのは誰だって同じ筈だ。誰だって道に金貨が落ちていたら拾うだろう。私だけがそんな風に見られるのは納得がいかない。

「言いつれないけれど、それは私だけじゃない。他の人だって、道に金貨が落ちてたら拾う筈」

「そうか？ まあ、それでも別に問題ないだろう。どちらにしてもお前が拾うなら神像も拾う筈だ」

なんか騙されている気がする。

「どのみち作戦は進めてしまっているから、もう引き返せない。上手くいくことを信じて金貨を設置するぞ」

「……分かった」

確かに、最早ここまで来たら今更グチグチ言っても仕方ない。他に良い作戦があるわけでもないし。

ちなみに、特大金貨の設置は私とレオノーラと教皇が担当だ。オレーンは封印魔法の陣を敷いており、テナもその補助に就いている。

それにしても、この金貨重い。三人で手分けをして作業しているとはいえ、とんだ重労働だ。

「重い」

「文句言っていないで、急げ。神像が此処に来る前に設置しないといけないのだぞ」

「分かってる」

私はひいこら言いながら特大金貨を抱えて等間隔に設置していった。そして、全部設置して終わってからあることに気付いた。

もしかして、手で持って運ぶのではなくアイテムボックスに入れて運べばそれで済んだ話だったのでは？

……。

……。

……気付かなかったことにしておこう。

「アンリさん！」

「アンリ様」  
「ん？」

声を掛けられたのでそちらを見ると、オーレインとテナが駆けてくるところが見えた。どうやら、封印魔法の陣は設置し終えたらしい。

「そちらは終わったの？」

「はい、魔法陣は敷き終わりました」

「いつでも大丈夫です」

「よし、準備は万全だな」

レオノーラの言う通り、これで準備は全て完了した。あとは邪神像の襲来を待つだけだ。

私達は邪神像が来るまでの間、その場で小休止することにした。

「そう言えば、封印魔法の封印って具体的にどうなるの？」

封印魔法で邪神像を封印するという話は聞いたけれど、魔法の詳細はオーレインしか知らないため、聞いてみることにした。

封印と聞いて通常イメージするのは、石碑のようなものに閉じ込めたり、石化したりするものとかだろうか。

「そうですね。光の力で邪なる者の活力を奪う結界のようなものをイメージして頂けると良いと思います。上手くゆけば、あの像も元のただの銅像に戻ると聖女神様は仰ってました」

オーレインがソフィアから授けられたという封印魔法について、その概要を教えてくれた。

活力を奪う結界か。おっかない。

……ん？ 結界？

その言葉に引つ掛かる部分があった私は、一年以上前にあったことを思い出した。

あれは確かこの世界に来た翌日、私が短刀とローブの呪いを解いて貰おうとリーメルの街の教会を訪れようとした時のことだ。教会の周囲を守る目に見えない何かに弾かれ顔面を強打した上に、ちよつとついたら破壊してしまった。

あの教会を覆っていた何かが結界の類이었다とすると、光の力で封印される「邪なる者」のカテゴリに私も含まれてしまっている恐れが……いや、間違いなく含まれている気がする。

よし、魔法陣の中には絶対に入らないようにしよう。  
元々入る気は無かったけれど。

「テナも封印魔法の魔法陣の中に入らないようにして」  
「え？ あ、はい。分かりました」

邪神もどきの私は勿論だが、その眷属であるテナもカテゴリとしては同じようなものの筈だ。危うきには近寄らないようにしておくのが安全のためだろう。

「来たな、予定通りだ」

全ての準備を終えて小休止していると、レオノーラが遠くの見ながら告げた。そちらを見ると、確かにあの邪神像の姿が見える。

これで都合三度目の邂逅だ。そして願わくはこれを最後としたい。

「隠れるぞ」

「了解」

邪神像には知能があることが分かっているため、私達が姿を見せたら警戒して罫に掛からない恐れがある。そのため、私達五人は近くの木立の中へと身を潜めて様子を窺うことにした。

邪神像はフラフラと歩いている。別によたついているというわけでもないのだが、なんだか頼りない感じで最初の頃の機械的な歩みとは雲泥の差だ。

私、傍から見たらあんな歩き方をしてるのかな。

私達が見守る中、ゆっくりと近付いてきた邪神像は一番手前に設置した特大金貨に気付いたのか、硬直した。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

固唾を呑んで動向を見守っていると、邪神像は何だかキョロキョロし始めた。

？ 一体何をしてるんだろう？

首を傾げる私達の前で、邪神像は周囲を見回しながらジリジリと特大金貨に近付いていき……サツと素早く金貨を拾い上げた。

それは、そこはかとなく後ろめたさを感じさせる動きだった。

「アンリ、お前……」

「私じゃない」

レオノーラのジト目が痛い。

「拾うのは予定通りですけど、あの動きはちょっと……」

「だから、あれは私じゃない」

最近知り合ったばかりだというのに、オーレインの中で私の印象が大分下がっているのを感じる。

「アンリ様……」

「お願いだから話を聞いて」

まさかテナまでそちらに回るとは。

「アンリ様が金貨を御所望でしたら、幾らでもご用意致しますが」「それは……」

かなり心惹かれるけれど、それをやったら人としてダメになりそうだから泣く泣く辞退させて貰う。もう既に大分ダメだと言わないうように。

私達がそんな寸劇をやっている間に、邪神像は次の場所に設置さ

れた特大金貨に気付いたのか、先程と同じように周囲を気にしながらジリジリと移動して拾い上げた。そして、そこまで進むと更に次の特大金貨が見える。

そうやって次々に特大金貨を拾い集めながら移動してゆく邪神像。最初こそ辺りの様子を窺っていたが、途中からは周囲には目もくれずに金貨を拾うことに集中していた。

「と、まずいな。このまま先に行かれてしまったら封印魔法を発動出来ないぞ。先回りしないと」

「そうですね、急ぎましょう」

封印魔法は自動で発動するわけではなく、対象が魔法陣の中に居る状態で術者であるオーレインが任意で発動させる必要があるそうだ。故に、邪神像が魔法陣に辿り着く前に待ち構えている必要がある。

折角魔法陣まで誘き寄せることが出来たとしても、封印魔法を発動させる前に外に逃げられてしまつては意味がない。

邪神像は金貨を拾いながら進んでいるため一見そのスピードはそこまで早くないように見えるのだが、サイズが大きいために実際にはかなりの早さだ。

「走るぞ！」

レオノーラの促しを受けて、私達は慌てて台座のある場所へと向かって駆け出した。

今更かも知れないけれど、もう少し決行場所に近い場所で待機していた方が良かったんじゃないかな。そうすればこんな風に慌てて走る必要はなかったのに。

引き籠もりをこんな風に走らせないでほしい。



「なんとか先に着けそうですね」  
「そうでなければ困る」

幸いにして特大金貨は直線ではなく回り道をするように設置している。回り道をしている邪神像よりも直線で目的地に向かう私達の方が先に着けそうだった。

邪神像はまだ少し離れたところに居るが、目的の台座が見えてきた。

「よし、間に合ったぞ！」

「早く、配置に着いてください！」

先日まで邪神像が立っていた台座の上には、円形の魔法陣が書き込まれていた。その円周上に正三角形を描くように聖剣、聖槍、聖弓を配置する手筈になっている。光神ソフィアの加護を受けた聖なる武具は強い光の力を宿しているため、封印魔法の触媒として最適という話だ。

レオノーラ、教皇、そしてオーレインの三名がそれぞれ聖なる武具を一つずつ持ち、掲げる役目を負い、私とテナは近くに置いておいたアンリルアーマーに搭乗して邪神像が魔法陣から外に出ようとした時に足止めを行うことになる。

しかし、姿を見られたら畏に気付かれてしまう恐れがあるので、邪神像が魔法陣の上の金貨を拾うまではジッと身を潜めておく必要がある。

そして私達が準備を終えて隠れたのとはほぼ同時に、特大金貨の山を抱えた邪神像が姿を見せた。

## 11：封印

左腕を身体に沿うように曲げてその上に拾い集めた沢山の特大金貨を抱えた邪神像は、一つ、また一つと特大金貨を拾いながら封印の魔法陣へと近付いてくる。

私達五人は魔法陣の中に入った邪神像を一斉に囲むため、それぞれ離れた位置に待機していた。

私自身は、アンリルアーマー弐号に搭乗し、邪神像の進行方向から見れば右手にある家の陰に身を低くして隠れていた。

残り五枚。

魔法陣を挟んで丁度反対側に、テナが私と同じようにアンリルアーマー壹号に搭乗して待機しているのが見える。生身ではないため当然その表情を見ることは出来ないのだが、きっと緊張に息を潜めているだろう。

残り四枚。

私から見て左手近くにはレオノーラが聖剣を持って身を隠している。思えば、本来魔王と戦うための武器である聖なる武具を魔王の娘にして次期魔王のレオノーラが持っているというのは皮肉な話だ。

残り三枚。

左奥には、教皇が聖槍を持って立っている。って、なんで堂々と立っているの！？ 隠れないとダメでしょうが。

私が慌てて手で隠れるように合図を送ると、彼は渋々と身を隠した。

残り二枚。

右手側、邪神像の進行方向の先には今回の作戦で最も重要な任を担うオーレインが彼女の代名詞とも言える聖弓を持って隠れている。このメンバーの中で光魔法が使えるのは彼女だけであり、ソフィアから封印魔法を授けられたのも彼女。当然、封印魔法の術者は彼女が担当する。

残り一枚。

魔法陣の外側に設置した特大金貨を全て回収した邪神像が、かつて立っていた台座へと登った。最後に残った一枚は当然、円形に敷かれた魔法陣の中央だ。

魔法陣を見た時に畏に気付かれてしまうのではないかという点が心配だったのだが、金貨に目が眩んでいるのか単にそれが何か分かっていないのか、邪神像は特に警戒した様子も見せずに最後の特大金貨へと近付いてゆく。

後は邪神像が最後の金貨を拾ったら囲んでオーレインが封印魔法を発動させれば、全てが決着する。しかし、これはタイミングが非常に重要だ。

もしも飛び出すタイミングが早ければ、邪神像が魔法陣の中央に来る前に異変に気付いてしまい、逃げられてしまう恐れがある。かと言ってタイミングが遅ければ、封印魔法を発動する前に魔法陣の外に出てしまいかも知れない。

この非常に重要なタイミングを計る役目は私が担うことになっている。アンリルアーマーの右手を上げて、その瞬間を待つ。

邪神像が魔法陣の中心に向かって歩いてゆく……まだ早い。

ほぼ中心に着いた……あと少し。

最後の特大金貨を拾うために手を伸ばした……今！

私がアンリルアーマーの右手を振り下ろすと、オーレイン、レオノーラ、教皇がそれぞれ身を潜めていた場所から飛び出した。彼女達は魔法陣の円周上の予め決められた位置に立ち、聖なる武器を高く掲げる。

それと同時に、私とテナも魔法陣の近くギリギリの場所まで走り、邪神像がどう動いても対処出来るように身構えた。

「？」

金貨に気を取られていた邪神像も此処に来て異変に気が付いたのか、困惑した様子で周囲を取り囲んだ私達を見回した。しかし、まだ畏には気付いていない様子で、その場から移動しようとする気配はない。

それならそれで、好都合だ。

私が操縦するアンリルアーマーの顔をオーレインに向けると、彼女もしつかりと頷いて構える。

「いきますー！」

オーレインが詠唱を開始すると、台座の上に描かれた魔法陣が光を放ち、陣の円周に沿うように半透明の光の壁が出現した。

光の壁の中に居るのは邪神像のみ。オーレイン、レオノーラ、教皇が円周上に立ち、私とテナが搭乗するアンリルアーマーは壁の外側だ。

「！？」

邪神像は事態に理解が追いついていない。その表情は像であるが故に分からないが、私には驚愕している様子が何となく分かった。

もしもこの時、邪神像が素早く事態を把握していれば、封印魔法の要となっているオーレイン達 正確には彼女達が掲げている聖なる武具 を排除してこの場から逃れることが出来たかも知れない。

しかし、彼女は反応出来なかった。

如何に私の行動パターンが影響を及ぼしているとはいえ、つい最近意志を持ったばかりであり不測の事態に対する判断力が圧倒的に欠けていたのだろう。

そして、その反応の遅れが致命的となった。

封印魔法が邪神像の活力を奪い、その動きを鈍らせる。

初動が遅れたことで力を失い動けなくなった邪神像はその場から動くことが出来なくなった。如何なる重圧を受けているのか、蹲りそうになりながら必死に抗おうとしている様子が見て取れる。

そんな状態なのに、抱えた特大金貨を落とさずしつかり持ち続けているのはある意味感心だけだ。

しかし、封印魔法を行う側である私達も余裕があるわけではない。

「お、重いな」

「これはきついですね」

「ぐ……うう……」

邪神像の力は強大で、封印魔法との見えないせめぎ合いが展開される。気を抜けば魔法が解けてしまいそうな危うい状態のようだ。

聖なる武具を掲げている三人は邪神像による反発の影響を受けているのか、必死に重圧に耐えていた。特に、術者であるオーレインは負荷が大きいらしく、脂汗を流し呻きながら必死に魔法を維持し続けている。

しばらくの間、目に見えない激闘が続いていたが、次第にその天秤は私達の方に傾いてきた。

邪神像はいよいよ耐えられなくなったのか、あれほど大事に抱えていた特大金貨すら取り落として苦しげにもがく。

「いけるぞ、もう少しだ！」

「は、はい！」

レオノーラの激励に、汗を流しながらもオーレインが答えた。

「申し訳ございません、アンリ様……」

その一方で、教皇はもがき苦しむ邪神像を見ながらさめざめと泣いている。なんだか彼だけ随分と余裕があるな。

あと、それは私じゃない。

邪神像は動きを鈍らせながらもなんとか魔法陣の上から逃れようとしていたが、ついに立っていることも出来なくなったのか、両膝を台座に突いて動かなくなった。

逃れようとしていた方向が丁度私が待ち構えている方向だったため、もしも陣の外に出そうになったら私が止めなければいけないとアンリルアーマーを身構えさせていたが、どうやらその心配はなさそうだった。

動きが取れなくなった邪神像は、私のすぐ目の前で座り込んでいく。時折もがくような動きを見せてはいるが、それも次第に小さくなっていった。

それはまるで、断末魔を迎えているかのように見えた。

私はいつの間にか、搭乗しているアンリルアーマー越しに見える邪神像の様子に目を奪われてしまっていた。

突然降り掛かった災厄からなんとか逃れようともがき、けれど逃れられずに弱ってゆくその姿に、感じるものが無かったと言えば嘘

になる。

このまま、封印してしまつて本当に良いのだろうか……。

例えば、邪神像は別に悪意を以つて何かを為したわけではなかった。

周辺各国に混乱を齎したかも知れないが、それは結果であつて意図的だったわけではない。私の過失によつて加護を付与され、意志を植え付けられ、周囲のこともろくに理解出来ぬままに彷徨つていただけだ。前回私達が落とす穴を仕掛けて攻撃した際だつて、散発的に反撃をしてきたに過ぎない。

「……………あ」

私が自身を見ていることに気付いたのか、へたり込んだ邪神像もこちらをジッと見詰めてきた。

それはまるで私に向かつて助けを求めているようでもあり、あるいは別れを告げているようでもあつた。

「ッ！」

私は内から湧き上がる何かに居ても立つても居られなくなり、搭乗していたアンリルアーマーから外に出る。

「アンリ、何を!?」

頭の中では分かっている。

邪神像は既に人族領にも魔族領にも混乱を齎し、広くその存在と脅威を認識されてしまつている。

ここで助けることは不要な重荷を背負うことになり、下手をすれば



教国にも迷惑を掛けることになりかねない。いや、間違いなく迷惑を掛けてしまうことだろう。

このまま封印してしまうのが賢い選択だ。それは重々承知している。

それでも、私はどうしてもこのまま邪神像を封印するのが正しいことだとは思えなくなってしまった。

私は半ば衝動的に、私と邪神像の間に存在する封印魔法による光の壁に手を伸ばす。勿論それは、封印魔法が邪なる者を封じるものである以上、かなり危険な行為だ。下手をすれば、私まで封印されてしまう恐れすらある。

しかし、私は何となく直感的にこの封印魔法をそれほどの脅威ではないと感じていた。こうして間近に居ても、怖さを感じない。リールの街の教会に張られていた結界よりは強力かも知れないけれど、それでも私が封印されるようなものではない。

それを裏付けるように、私の指が触れたところを中心に光の壁の表面に空間ごと罅が入ってゆく。反発して私を弾こうとする力を感じはするものの、やはりそれほど大きな衝撃は存在しない。

私は目の前の封印魔法の脅威度を警戒には値しないものと判断し、思い切って右手を薙ぎ払うように振るった。

あっと言う間に罅が光の壁全体に広がり、僅かなタイムラグの後に風船が割れるように弾け飛んだ。

散り散りになった光は火の粉のように舞いながら消えてゆく。それはまるで無数の蛍が飛んでいるかのような、儂くも幻想的な光景だった。

光の壁が消え去ると同時に、台座の上に敷かれて光っていた魔法陣も掻き消える。

そして私は、魔法陣の消えた台座の上で、へたり込むように座ったまま硬直している邪神像と真っ直ぐに向き合った。

「アンリ様!？」

「そこから離れる!」

「早く逃げてください!」

封印魔法が消えたことで、私と邪神像の間を遮る物は無くなった。加えて今の私は、アンリルアーマーからも降りてしまったため生身の状態だ。もしも邪神像がその気であれば、容易く潰されてしまうことだろう。

そのことを心配してくれたのかテナ達が悲鳴のような声を上げたが、私はそれを手で制した。目の前のこの邪神像は決して私を害することはないと、何故だかそう信じる事が出来たのだ。

私は前に一歩進み出て、邪神像を見上げる。座り込んでいるものの、その顔はまだ結構な高さにある。

ジツと見詰め合ったまま、私は諭すように語り掛けた。

「私の言葉が伝わっていたら、右手を挙げて」

それは一つの賭けだった。もしも邪神像が私の言葉を理解することが出来なければ、どうしようもない。

しかし一方で私は自分の言葉が伝わると半ば確信していた。こうして真っ直ぐ向き合うことで、改めて私とこの像の間には特別な？ かりがあるのを感じていたのだ。それはおそらく、像の額に浮き上がった眷属印が関係しているのだろう。

たとえば言語自体は理解出来なかったとしても、額の眷属印による繋がりがあればきつと意志は伝わる筈。そう思って告げた言葉に従

い、邪神像は右手を挙げた。

「なっ!？」

「っ、通じたのか!？」

レオノーラ達が驚愕の表情を浮かべる。

実際、これまでのやり取りでは意志疎通が出来そうな気配など無かったのだから、それも無理はない。私だって、自分の行動パターンが反映されているという事実が無ければ、意志が通じるなどは考えなかつただろう。

「もしも私の話を聞いて周囲に迷惑を掛けないことを約束出来るなら、私達はこれ以上貴女を傷付けない。理解出来たら右手を挙げて」

邪神像は暫く私の方をジッと見ていたが、やがて再び右手を挙げた。

「……………」

レオノーラ達も最早言葉を出すのをやめて、固唾を呑んで私と邪神像のやり取りを見守っていた。

「自衛以外で人を傷付けないこと」

邪神像は躊躇うことなく手を挙げた。どうやら、これは抵抗なく受け入れられる条件だったようだ。

「決められた場所に居て、勝手にそこから外に出ないこと」

今度は暫く反応しなかったが、やがておずおずと手を挙げた。渋

々と受け入れたのが見て取れる反応だったので、此処は今後何かフオーすることを考慮した方が良くも知れない。

「私が指示をしたら従うこと」

すぐに手が上がった。三つ目の条件は、特段問題なく受け入れられるようだ。

「最後に、スカートの中を覗かれないように気を付けること」

手が拳がらない。といっても別に受け入れられないという感じではなく、意味が良く分かっていないようで首を傾げている。

「隠して」

私が自身のドレスのスカートを押さえながら告げると、漸く意味が理解出来たらしく右手が拳がった。

よかった、これで穩便に決着させることが出来る。

私は肩の荷を降ろすようにふう、と溜息を吐いた。

と、そんな私の肩がツンツンと突かれる。

私は何事かと思つてそちらを振り向く。

するとそこには……満面の笑みを浮かべたレオノーラとオーレインが立っていた。しかし全く目が笑っていないのが怖い。気のせいか額に青筋が浮かび上がっているようにも見える。

そして、二人は笑顔のまま一言放った。

「正座」

## 12：後始末

「大体お前はいつもいつも行動が突飛過ぎるんだ。少しは周りで見ている私達の身にもなれ！」

「私達があんなに必死に封印魔法を展開してたのに、全部無駄になっってしまったじゃないですか!？」

「もしもその像が暴れていたら、一体どうするつもりだったんだ!？」

「それはまあ、封印なんてせずに収められるならその方が良いのは分かりますが、私達の苦労はどうなるんですか？」

邪神像の台座の上でそのまま正座させられた私は、レオノーラとオーレインによって左右から同時にお説教を喰らっていた。

確かに、今回の件に関しては私が悪い。眷属印による繋がりの影響が、かなり衝動的に動いてしまった部分がある。

一つ間違えれば大惨事に繋がっていたかも知れないし、邪神像の対策のために一緒に動いていた彼女達からしたら裏切り行為だと責められても仕方ない。

だから、彼女達が怒るのは理解出来る

出来るのだが……ダブルでお説教は勘弁してほしい。私は聖徳太子ではないのだ。左右から同時に話し掛けられると、聞き分けられない。

「聞いているのか、アンリ！」

「聞いているんですか、アンリさん！」

「聞いている」

聞いてはいる。いや、耳に入ってはいる。だから、一人ずつ話してほしい。

ちなみに、お説教する側に回っているのはレオノーラとオーレインの二人だけだ。残りの二人は何をしているのかというと、テナも教皇も私に付き合っただけで横で正座してくれている。

彼女達が正座する必要は何もないのだけど、教皇が

「アンリ様だけに苦行を負わせるわけにはいきません！」

と言っただけで正座をし始め、それを聞いたテナが

「それなら、私も正座します」

と言っただけで、三人で並んで正座している。

二人とも正座は二度目だが、まだ慣れてない様子で結構辛そうだ。かくいう私もそろそろ足が辛い。

私達の後ろには件の邪神像が居る訳だが、何を考えたのか私達の真似をするように正座している。当事者の一人（？）だし、正しい姿かも知れない。この巨大な邪神像がちょこんと正座していると何だかわいらしく思えてくる。

私の姿を模しているの、そんなことを言うと自画自賛になってしまいそうだけど。

「……………」

「……………」

「ん？」

なんだか強い視線を感じたので邪神像を眺めていた視線を外してそちらを向くと、笑顔を二割増しにしたレオノーラとオーレインが

無言で私を睨んでいた。

あ、まずい。余所見がバレてしまったようだ。二人とも輝かばかりの笑顔のまま、滅茶苦茶怒った雰囲気醸し出している。

一応言い訳をさせて貰うと、魔眼の影響を避けるために二人とも目を合わせようとしないから、ついつい他に目を向けてしまうのだ。

「どうやら、反省が足りないようだな」  
「みたいですね。どうします？」

目の前で交わされる不穏なやり取りに、私は思わずおずおずと右手を挙げながら言葉を挟もうとした。

「弁解の余地は……？」  
「ない」  
「ありません」

しかし、一言で斬って捨てられてしまった。  
その上、レオノーラが左手を、オーレインが右手を伸ばして、それぞれ私の頬をギュッと掴んで引っ張ってきた。

「い、いはいいい！」

痛い痛い！  
暴力反対！

「アンリ様にあまりご無体な真似は……」  
「お前は黙っている」  
「その、それくらいにしては……」  
「テナさんも黙っててくださいね？」

横で正座している教皇とテナが見かねて諫めに入ってくれたが、怒れる二人は聞く耳を持たない。

「これで余所見は出来ないだろう。さて、それでは最初からだな」  
「仕方ないですね。余所見をして聞いていなかったアンリさんが悪いのですから」

そして悪夢の時間が始まった。

あれから約二時間、この鬼二人は本気で私の頬を抓ったままお説教を続けた。その上、私が少しでも余所見をしようとしたら、ギョツと強く引つ張るのだ。

「まあ、こんなところにしておくか」

「そうですね。手が疲れましたし、喋り続けていたせいで喉も渴きました」

「……………」

ここで余計な口を挟むと更にもう一ラウンドという羽目になりかねないので、私は黙ってジツと嵐が過ぎ去るのを待った。

ずっと摘ままれたままだった頬が漸く放され、私は両手で頬をさすった。

いたひ。



鏡がないから見られないけれど、きっとこれでもかと言わんばかりに真っ赤になっているだろう。

おまけに、足は完全に痺れていてジンジンとした刺激が伝わってくる。いきなり動かすともんでもない目に遭うので少しずつ動かして血行を戻さないと……。

なお、頬は兎も角として足の方はテナや教皇も似たような状態だ。

「それで、実際のところこの像はどうするつもりなんだ？」

ジリジリと足を動かして痺れを取ろうとしている私にレオノーラが問い掛けてきた。

「まずは、名前を決めようと思う」

「は？ 名前？」

ずっと邪神像と呼んできたけれど、意志があるならそんな物に対するような呼び方は相応しくないのではと思ったのだ。それと、代名詞も「それ」とかは気後れしてしまう。

「どんな名前になさるのですか？」

うーん。咄嗟の思い付きだったので、特に良い名前の案がない。

しかしその時、視界に先程まで私が搭乗していたアンリルアーマーの姿が映った。

これだ。

私は痺れる足をなんとか堪えながら立ち上がると、未だに正座したままの邪神像に対して先程のように語り掛けた。

「これから、貴女の名前はアンリルキーパー。教国の守護神アンリ

ルキーパー。どう？」

む？ 反応が芳しくない。邪神像だけでなく、テナ達もだ。

物に対する呼び方が相応しくないといったわりに、まるで役職名のような名前だからだろうか。流石にこの姿の邪神像にジヨセフィー又とかシャルロットとか付けるのは、それはそれで痛々しい感じになりかねないからこの辺が許容範囲かと思ったのだけど。

しかし、安心してほしい。腹案はある。

「略称はアキ」

『ア』ンリル『キ』ーパーの頭一文字ずつを繋げて、アキだ。安直かも知れないが、これなら物や役職名ではないと言えるだろう。

今度は納得したらしく、邪神像 改めアキは右手を挙げた。気に入ってくれたようだ。

「アキ様ですか。良いお名前だと思いますが、教国の守護神とは？」

まだ足の痺れと戦っている様子の教皇が聞いてきた。

「このまま此处で神像として立って貰って、いざという時には防衛戦力になって貰う」

防衛戦力と言っても、このサイズの動く像が立っているだけで警戒して襲われないと思うので、抑止力としての効果の方が高いかも知れない。

現在のこの国は殆ど戦力と呼べるものが存在しないため攻め込まれた場合のことを懸念していたが、アキがその任に就いてくれるのであれば安心出来る。

「成程、良い案です。そうして頂けると、こちらも助かります。必要でしたら、防衛費から幾らか予算を割いておきます」

「派遣料金については別途相談で」

「かしこまりました」

私の眷属を派遣するのだから、その派遣料は私が受け取るのが正しい流れだ。そして、必要に応じてその派遣料の中から当事者に給料を支払うことになる。

尤も、アキに関しては食事とかお金の掛かることはない筈なのでお給料は要らないだろう。

但し、普通の銅像と違って意志があるため労働条件を決める必要がある。お給料は無しでも休憩や休暇くらいはあげても良いかも知れない。

嬉々として特大金貨を集めていた様子を見ると、お金がほしいと言い出す恐れも微妙にありそうだけれど、その時は交渉するしかない。

とその時、足の痺れから復活したテナがおずおずと手を挙げて私に問い掛けてきた。

「あの、アンリ様？」

「なに？」

「その、アキ……さんなんですけど、ここに立って貰うとしても他の国から苦情が来たりしないでしょうか」

「それは……」

確かに、それは私も考えながらも後回しにしていた事柄だ。

アキは人族領や魔族領の広い範囲を歩き回っており、建物を壊したりなどの被害を出してしまっている。それでなくても、各国に混乱を与えたことは間違いない、このまま教国に安置すると言ったら文句を言ってくる恐れはある。人的被害を出していないのがせめても

の救いだ。

しかし、一度助けると決めたと以上、それについては私が責任を持って謝罪や賠償を粘り強く続けて認めて貰うしかない。

……なけなしの所持金がすっからかんになりかねないけど。

私は様子を窺うようにレオノーラに視線を向けた。

「うちの国は特に賠償などを求めるつもりはない。混乱は起きたが、実際に何かの被害が出ているわけではないしな」

よかった、取り敢えず魔族領の方は問題ないようだ。これで人族領の方だけに専念出来る。

私は教皇の方へと向かい、一つの依頼を出した。

「各国に対して、連絡をお願い。今回の顛末と、アキ……教国の守護神アンリルキーパーを今後も教国に置こうと思っていること、それから誠意は金銭で対応する用意があることを伝えて」

「かしこまりました、ただちに対応致します」

教皇も足の痺れから脱したらしく、立ち上がって一礼すると隣の邪神殿の方へと立ち去っていった。

「大丈夫なのか？」

「お金のこと？」

「ああ、国家間の賠償だぞ。幾ら先日ので得た金があると言っても、個人で支払うのは厳しい額になるのではないか」

「そうだけど、ケジメは付けないと」

そう、アキが此処に居れるようにするためには、ケジメを付ける必要がある。多少の金銭の支払いは認めなければならぬだろう。

……多少では済まないかも知れないけれど、これは彼女を眷属に

した私の責任だ。たとえ借金生活になったとしても、逃げるわけにはいかない。

### 13：戦慄の結末

悲壮な覚悟を決めてから暫くが経ち、私達は教皇に呼ばれて彼の執務室を訪れた。

部屋には私と教皇以外に、テナ、リリ、レオノーラの姿がある。オーレインに関してはアキの対策が完了したので、大工仕事に戻ることになった。流石に、聖弓をもう一度取り上げることはしていない。

本来ならばレオノーラも国に戻らなければならぬ筈なのだが、事後が完全に落ち着いてから戻ることにして、暫くこちらに滞在するそうだ。

「各国からの回答があったの？」

「はい、距離によって多少の前後がありましたが、回答が来そうな国に関しては概ね出揃ったと言ってよいでしょう」

「回答が来そうな国？」

来ないところもあるのだろうか？

「聖光教の総本山であるルクシリア王国とその影響が強い国は門前払いに遭いましたので、回答はありません。アンリ様からのお達しだというのに不遜な対応ですが……」

成程、聖光教の本家　フォルテラ王国が立ち上げたオリジン派が居るため、元々あった方を本家と呼ぶことにしていた　の方は教国の存在自体を認めていない。話も聞きたくないということだろう。

「それはそのままです」  
「かしこまりました」

良い状態かと言われると疑問だが、どのみちあの辺の国と仲良くするのは難しいだろう。今回に関しては抗議もして来ないことを好都合だと考えるようにしよう。

「それで、他の国からは？」

誠意は金銭で示すと伝えたから、幾ら払えという請求が集まっている筈だ。果たして、どれほどの額の請求が来ているのか。高まる緊張感で私の背中に冷たい汗が流れた。

しかし、彼は横に置いてある大きな袋を持ち上げ、執務机の上に置いた。重たげな袋だが、中から金属のぶつかり合う音がした。どうやら、大量のお金が入っているようだ。

私は袋の口を開いてみるが、予想通り金貨が詰まっているのが見えた。

「????？」

何、このお金？

何かの予算か何かだろうか。しかし、何故彼がこのお金を私に見せたのが良く分からない。自慢？

「これは各国から回答と一緒に送られてきたものになります。尤も、ごく一部ですが」

???? 請求書ではなくお金が送られてきた？

一体どうということだろう？

もしかして、災害の被害にあった国に送る義援金とかかな。各国

にも被害を出してしまっているだろうに、その賠償を請求するどころかこちらの被害を心配してくれるとは。世の中捨てたものじゃない。

「回答の文面はそれぞれ異なりますが、趣旨としては同じような内容でした」

「どんな内容？」

「そうですね。要約すると……望みのお金は払うから襲わないでください、といったところでしょうか」

「は？」

思わず開いた口が塞がらなくなった。意味が分からない。

つまりこのお金は襲われないように支払ったものということなのか。誰だ、義援金なんて言ったのは。

しかし、「望みの」とはどういうことだろうか。まるで私達がお金を要求したと言わんばかりの口振りに見える。

「ああ、ひよつとしてお前が言った『誠意を金銭で対応する用意がある』というのを、『金銭で誠意を示せ』という意味に捉えられたのではないか？ それに、アキが各国を練り歩いたのも強請りのためのデモンストレーションだと思われるのかも知れんな」

何故、そうなる！？

もしもレオノーラの推測が正しければ 実際に此処にお金がある以上正しそうだけど 私は巨大な像を操作して各国を襲った上で、本腰を入れて襲撃されなくなればお金を払えと脅迫した悪の黒幕か何かだと思われることになる。

素直に謝罪して賠償金を払うつもりだったのに、この扱いは流石に酷くないだろうか。



「それで、どう致しましょう?。」

教皇の問い掛けに、私はしばらく悩んだ。

選択肢としては、このお金を各国に返して改めて謝罪するか、このまま勘違いして貰うかの二択といったところだろう。

ケジメと言う意味では前者を採るべきなのだろうが、私が出たれているイメージを考えると混乱が悪化しそうな気がする。下手をすれば、誠意が足りないと思われたと想像されて、自棄になって反発される恐れもある。

その点ではやはり後者を選ぶべきだろうか。アキを教国の外に出さないようにしていれば、丸く収まる筈だ。汚名を被ることになるが、それはやむを得ない。今更だし。

「各国に受け入れた旨を回答して」

そう、これがこれ以上の騒動を起こさないために一番良い筈だ。

決して、お金に目が眩んだわけではない。

各国から渡されたお金については一度国庫に回して、その何割かを防衛費としてアキの派遣料として貰うこととした。

気が付くと、私は先日三柱から査問会を受けた部屋に立っていた。先日と同じように私は部屋の中央の台の上に立っており、前方の机にはソフィアとアンバー、そして神族の「私」が座っていた。

「それでは、報告会を始める」

神族の「私」の宣言が為される。

しかし、報告会と言っても……。

「つつても、状況は大体分かってんだけどな」

「ええ、事の顛末は見届けさせて頂きました」

そう、彼ら神族は「情報閲覧」の力でこの世界の出来事を見通すことが出来るのだから、改めて報告するようなことはあまりない。にもかかわらず、こうやって二度目の呼び出しをされた理由。もしかして、アキを倒したり封印したりせずに教国の守護神役に据えたことに対してのお説教だろうか？

しかし、彼らの様子を見てもそれほど厳しい雰囲気は感じない。

「心配すんな、別に咎め立てするために呼んだわけじゃねえ」

「人族領や魔族領を脅かしている巨大な像をなんとかするようには言いましたが、倒せとか封印しろと言ったわけではないですからね。みだりに周囲の土地を徘徊するようなことが無ければ、見事解決したと言っただけでしょう」

「おつかれ」

三柱からの承認を得られて、私はホッと胸を撫で下ろした。もしも、破壊しろとか封印しろと言われたらどうしようかと思っただころだ。

しかし、話はここでは終わらなかった。

「但し、だ。それもあの像……アンリルキーパーだったか？ あれが今後同じようなことを引き起こさないつつうことが前提だ」

「今日ここにきて貰ったのは、そのことについて確認するためです」

成程、確かに破壊や封印をせずに事を収めた以上、同じことが起こらないようにというのは当然の要求だろう。

私としてもアキをしつかりと管理して国外に迷惑は掛けないようにはするつもりなので、そのことに異存はない。

しかし、一体どうやってそれを証明すれば良いのか。

「どうすれば証明になる？」

結局、私がきちんと管理するつもりだという口約束しか出来ない。それも、アキが私の指示を聞くということが前提だが、それについては保証がない。

「まあ、あの像が言うことを聞くかに関しては信用するしかねえな。眷属印がある以上は、多分余程のことがねえ限りは大丈夫だろうよ」「貴女がきちんと管理するということについても、誓って貰えれば信じることにします。こちらのアンリが後見となるということですので」

「うん」

ソフィアが中央に座る神族の「私」の方を顎で指しながら、そう告げてきた。神族の「私」もそれには納得していたのか、頷く。

「どうやら、フォローしてくれたようだ。素直に有難い。」

「分かった。他の国に迷惑を掛けないようにきちんと管理する。これで大丈夫？」

「まあ、いいだろ」

「はい、それで構いません」

「これにて一件落着」

先程はぬか喜びだったが、今度こそ大丈夫だと再び胸を撫で下ろした。

数日経ったある日、私は散歩がてらアキの働きぶりを見てみよう  
と神殿の近くまでやってきた。

一連の騒動の後に再度作り直された柵の前に、大勢の信者達が集  
まっている。大人も老人も子供達も、男性も女性も、みんな熱心に  
祈っており、私は思わず自分が場違いなように思えてしまった。

こっそりの紛れ込んで見上げてみると、仮面越しにペタンとお尻  
を地面についた俗に言う女の子座りをした像の姿が見えた。どうや  
ら、下着を見えないように隠してと頼んだ結果、この格好に落ち着  
いたらしい。

ちなみに、昼間に立つてることもあれば、私はその現場を見たこ  
とは無いが夜になると横になって寝ているという噂もある。

周囲に気付かれないように小さく手を振ると、私のことを認識し  
ていたらしく手を振り返してきた。

拜んでいた信者の人達は動き出したアキに怯えるでもなく、むしろ  
大興奮の様相だ。どうやら、神像が動くこと自体は既に受け入れ  
られているらしい。この国の人達も大概凶太い。

上手くやってくれているらしいアキの姿に満足した私は来た方へ  
と戻るべく、晴れた空の下を歩き出した。

柵の辺りに設けられていた書錢箱は見なかったことにする。

### 13：戦慄の結末（後書き）

以上、平均的な日常編（？）でした。

なお、今回掲載分を収録した3巻は5月25日発売予定です。早い場所では、明日くらいから店頭に並んでいるかも知れません。

今回掲載分を計算に入れても、3巻は1巻や2巻に比べると書き下ろしの比率は高めになります。（おそらく3割程。視点改稿分も含めると5割近く）

WEB版をご覧頂いた方にもきつと楽しんで頂けると思いますので、是非よろしくお願い致します。

また、3巻発売記念として新連載開始します。

「乾坤一擲パイルバンカー」  
<http://ncode.syosetu.com/n1310dh/>

尖った性能の武具を手に入ってしまった青年のお話。ファンタジーコメディ。

ストック切れるまで毎日投稿。

## アンリ様のダイエット（前書き）

【祝】主人公続投！

WEB版からタイトル、主人公、視点を変更し全面改稿した続編、「邪神アトランダム 平均的邪神娘と召喚勇者」が10月24日に出版されることになりました。  
上で主人公続投と述べた通り、アンリさん主人公に改稿しての刊行となります。

お知らせを兼ねまして、「1年経過したからそろそろOK」と許可を頂けましたので、

書籍版1巻発売時に一部の店舗で特典として付いていたSSを投稿致します。

## アンリ様のダイエット

それは、不幸な出来事だった。悲劇と言っても良い。

『お腹だつてこの通り……ぷにっ……あ……』

大丈夫だと思つてお腹のお肉を軽く摘まんでみて、うっかり摘まむことが出来てしまった時の絶望感。これに匹敵するものがあるとしたら、トイレで紙が無いことに気付いた時くらいではないだろうか。

この世界に来てからそんなに贅沢な生活はしていない筈なので大丈夫だと油断していたけれど、やはり運動不足は祟るということなのだろう。確かに最近、運動らしい運動は全くしていない。それどころか、テナが来てからはダンジョンから一步も外に出ない生活を送っている。

これでは太……じゃなかった、ちょこつとだけふくよかになつてしまうのも無理はあるまい。

そして、気付いてしまった以上、対策を講じないわけにはいかない。これでも私も一応乙女の端くれなのだ。

『ゆつたりとしたローブを着ていれば、誰にも気付かれないと思つ』

頭の中で悪魔が囁くが、私は努めてこれを無視する。

誰かに気付かれるとか気付かれないとか、そういう話ではない。

これは乙女としてのプライドの問題なのだ。

『でも、運動するの面倒くさい』



それは確かに……って、いけないいけない。  
誘惑に負けてはダメだ。私は鉄の意志を以ってダイエットを敢行  
することに決めた。

さて、ダイエットを敢行するに当たって採るべき具体的な方法に  
ついてだが、これには二つの方法があると思う。

そもそも人が太……じゃなかった、ちょこつとだけふくよかにな  
ってしまうのは、摂取カロリーが消費カロリーを上回るからだ。余  
ったカロリーが忌まわしきお肉となってくっ付くのだ。

なので、ダイエットの方法は大まかに分ければ次の何れかになる。  
消費カロリーを増やすか、あるいは摂取カロリーを減らすかだ。

### 「運動は無理」

前者に関しては二秒で断念する。元々私はあまり運動する人間で  
はないのだ。いくら痩せたいからといって、いきなり運動を始める  
というのは無理がある。

それ以前に、ダンジョンに隠れ住んでいる今の生活状況で出来る  
運動など殆ど存在しないという根本的な問題がある。

よって、この方針は不採用とする。決して、運動するのが面倒だ  
からというわけではないことだけは断言しておく。

ならば後者はどうか。

食事によつて摂取するカロリーを減らすのは、運動に比べればまだ可能に思える。

別に断食のような無茶な食事制限をする気はない。野菜中心のメニューに変えたり、炭水化物を減らすようにする程度だ。  
うん、これなら十分に実行可能な範囲という気がする。

「アンリ様？ お食事出来ましたよ」

「分かった、今行く」

考えごとをしている間に食事の時間になっていたらしく、テナに呼ばれた。洗面所で手を洗って食堂に向かうと、食卓には既に夕食が並べられていた。

「ッ!？」

私はそのメニューを見て硬直した。

基本的にテナは素朴な家庭料理が得意なので、普段のメニューはシチューなどであることが多いのだが、今日に限って何故か特大のステーキが中央に鎮座していたのだ。

よりによって、何故このタイミングでステーキ……。

私は引き攣りそうになる表情を何とか抑えて、テナに問い掛けた。

「今日は随分とメニューが豪華なようだけど……」

「はい！ アンリ様、最近何か悩まれているようなので、元気になるってほしいと思ったんです。だからちょっと奮発して、お肉たっぷりメニューにしてみました」

彼女の気遣いは嬉しい、とても嬉しいけれど、今の私には嬉しそくに小首を傾げるテナが可愛らしい悪魔に見えた。

その「最近の悩みの種」であつたお腹のお肉を更に増量してくれ

そんなメニューに、私は内心で滝汗を流した。

「あの、どうかされましたか？」

硬直して食事に手を出そうとしない私の態度に不安を覚えたのか、テナがおずおずと聞いてきた。

ここでこのメニューを食べてしまえば、更にお肉が増える結末は目に見えている。心苦しいが、ここは断固として……

「その……ご迷惑でしたか？」

「豪華な食事にびっくりしていただけ。いただきます」

無理でした。

上目遣いで涙目になったテナの顔を見たら、ダイエット中だから要らないとか外道なことは絶対に言えない。

そもそも、ダイエットをしようとしていることをテナに面と向かって説明するのは、ちょこつとふくよかになってしまったことを認めるようなものなので、出来れば避けて、もっとさりげなく要望を出したい。

うん、ダイエットは明日からしよう。

一日くらいでそんなに変わるものでもないし、明日から気を付ければ良いだろう。

なお、お肉の結果については黙秘させてもらうことにする。

ただ、一つだけ言えることがあるとしたら……私が喜んだと思っ

て、テナが肉料理をメインにするようになったことは大きな誤算だったということだ。

お願い、もう許して……。

この世界に放り込まれて色々と苦勞する羽目になったけれど、当然ながらそれだけではなく良かったことも存在する。

その中の一つに、世の女性達を絶望の底に突き落とす悪魔の機械がこの世界には存在しないということが挙げられると思う。そう、体重計という悪魔の機械が、この世界には存在しないのだ。

何だそんなことか、などという人は悪魔の機械の餌食になって絶望するといい。

兎も角、体重計が存在しないため、多少の増減については計測する方法がない。

少しくらい体重が増えてしまったからといって、計測が出来ない以上は誤差の範囲だ。

だから気にしない気にしない。

ぶにつぶにつ……ダメだ、やっぱり気になる。

後日、私は結局恥を忍んでテナにダイエット食を用意してもらったように頼み、ダイエットに取り組むのだった。

## アンリ様のダイエット（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」1巻の特典シリーズ第1弾でした。

なお、この時の特典SSは4種類書きました。（こんなに書いたのはこの時だけです）

邪神アトランダムが発売日が4週目なので、週1本ずつだと丁度良い感じ。

そんなペースで投稿していきたいと思います。

## テナとカルチャーギャップ（前書き）

書籍版「邪神アベレージ」1巻の特典シリーズ第2弾です。  
時系列としては前篇09と10の間になります。

## テナとカルチャーギャップ

アンリの眷属となって共に暮らすようになったテナだが、その生活の出だしは必ずしも順調なものではなかった。その原因は、アンリが整えたダンジョンの生活環境が、この世界の基準で言えば常識極まりないことだ。

そもそも、一般的な思考を持つ者であれば住処がダンジョンという時点で色々おかしいと思うだろう。そんな生活を送っている者が仮に他にも居るとしたら、人里離れて研究に打ち込む世捨て人に近い魔導士や、何らかの事情で逃亡生活を送っている者くらいのもんだ。

テナにとつては何もかもが初めてのことであり、色々と疑問を抱いては驚愕するということを繰り返していた。

まず、最初に彼女が気にしたのは、地下深くにありながら異常に明るいうダンジョンの各部屋だった。

まるで、普通に屋外に居るような明るさなのだから、不思議に思うのも無理は無い。テナが周囲を見回して光源に目を向けると、そこには小型の太陽が浮かんでいた。

「あの、何故ダンジョンの中にお日様があるのでしょうか？」

「無いと生活リズムが崩れる。あと、太陽の光が無いと作物が育たないし」

問題はそこではない。テナが聞き取ったのは目的ではなく、何故そんなことが出来ているのかだ。

尤も、「ダンジョンクリエイト」スキルの力とアンリの異世界の知識・発想が組み合わさって実現された話であり、原理を聞かれたとしても用意したアンリ自身にも答えられないのだが。

しかし、アンリの答えの中で別に気になることがあったテナは、疑似太陽よりもそちらの方に気を取られた。

「え？ 作物、ですか？」

アンリの言葉だけを聞くと、まるでダンジョン内で作物を育てているかのように聞こえる。ダンジョンと作物、繋げて考え難いそれらの言葉にテナは疑問の声を上げた。

それを聞いたアンリは、テナを屋内菜園へと案内することにした。

それは、かなり広めの部屋だった。それこそ、テナの育った村の小さい家なら、その部屋に何軒か入ってしまうほどの大きさだ。

その部屋を幾つかの区画に分けて、果物や野菜が植えられている。

「ダ、ダンジョンの中に畑が……」

「そのうち収穫出来ると思う」

ビニールハウスも存在しない世界で屋内に畑を作るといふ所業、村で畑の世話をしていたテナにとっては全く想像出来ないことであり驚愕で固まっているのだが、アンリにとってはそれほど意外な発想ではないため、それに気付かない。



ただ、果物や野菜を植えたのはアンリが自分自身で行ったが、屋内菜園の区画自体はダンジョンクリエイトの機能の内である。やる者が居ないだけで、機能としては最初からこの世界に存在していたものなのだ。

続いて二人は、屋内菜園から最も近い台所へと足を向けた。収穫した野菜をすぐに調理出来るよう、屋内菜園と台所は隣接している。

「す、凄いお台所ですね！」

「そう？　好きに使っていいよ」

テナからすれば王宮の厨房かと思うような設備が整っている

テナは王宮の厨房など見たことがないため、あくまで想像の中のものだ。が、アンリからすれば現代のシステムキッチンと比べれば大分見劣りするため、凄いことだと理解していない。

二つの世界の文明格差が大きいことは頭では理解しているものの、実感が中々追い付かないのだ。

その後、アンリはテナを風呂へと案内する。

扉を開くと浴場の浴槽には既にお湯が張られていた。

「お風呂はそこ、いつでも入れるから」

「い、いつでも入れるのですか……？」

そもそも、個人の住居に風呂があるということ自体がこの世界においては非常識だ。

特に、テナのような田舎の村出身だと、身を清めるのは基本的に井戸の水や川や泉などであり、風呂自体を見たことがないということも珍しくない。実際、テナ自身も見るのは初めてだ。

そんな彼女でも、話に聞いていた風呂と比較して目の前の風呂が規格外であることは理解出来た。

風呂を案内し終えた後、アンリはテナに倉庫を案内した。

「あの、倉庫に食糧が全然ないみたいなのですけど」

「傷まないようにアイテムボックスにしまっているから、後で出すよ」

「ア、アイテムボックス!？」

ちなみに、「アイテムボックス」スキル自体はユニークスキルではないので、この世界でアンリしか持つていない能力というわけではない。わけではないが、かなりレアな部類に含まれる。

どうやら住居だけではなく、主人も規格外だということを今更ながらに実感して、テナは引き攣った笑みを浮かべた。

驚愕というのは非常に体力と精神力を消耗する感情だ。

見るもの見るもの全てに驚いていたテナは、住居の見学が終わる頃には疲労でぐったりとしていた。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫です！ 必ず慣れてみせます」

つまり、現時点では大丈夫ではなかった。

心配して問い掛けたアンリに対して、何とも先行きが不安になる回答を返すテナ。

アンリの方も案内の途中からテナの反応を見て、自身と彼女の間で生活環境についての基準にかなり大きなギャップがあることには気付いたのだが、気付いたからといって何も出来ることはなかった。テナの基準に合わせて生活レベルを落とすという選択肢も、当然却下だ。

「最初は慣れないかも知れないけど、分からないことがあったら聞いて」

「わ、分かりました！」

なお、その後数日でテナがある程度は慣れたのは人族の適用力の高さゆえか、それとも彼女が色々と諦めただけか、それは彼女自身にしか分からない。

**教えてレオノーラ先生！（前書き）**

書籍版「邪神アベレージ」1巻の特典シリーズ第3弾です。  
時系列としては前篇17の中になります。

教えてレオノーラ先生！

アンリとテナに対して闇魔法の講義を行うことになったレオノーラ。

彼女は白衣を翻して即席の教壇に立ち、生徒であるアンリとテナを振り返った。なお、教鞭は持っているが、眼鏡は掛けていない。

「さて、闇魔法を教えてほしいという話だったが……そもそもこのことを確認しておきたい。お前達、魔法自体は使えるのか？」

その質問に、アンリとテナは共に首を振って返した。元々一般人だった二人は魔法などとは無縁だった。

「なるほど、それではまずは魔法の基本からだな。魔法がどうやって発動するのかについて説明しよう」

そう言うと、レオノーラは壁に貼られた大きな紙に二つの単語を書き記した。

「魔法を発動させるのに必要なものは基本的に二つ、魔力とイメージだ」

「スキルは？」

アンリの質問に、レオノーラは「ふむ」と頷く。

この世界の一部の者達はスキルというものを持ち、そのなかには魔法のスキルも存在する。そのことを知っているアンリは、それも魔法の発動に必要なものなのではないかと疑問に思ったのだ。

「光魔法や闇魔法といった『本来使用者が限定される魔法』を他の者が使用するような特殊な場合を除けば、必須ではない。火魔法や水魔法であれば、スキルが無くても発動自体は出来る」

光魔法は人族、闇魔法は魔族しか使用できないと言われていたが、中には生まれ付きや特殊な事情で、本来使えない筈の者の中でそれらを使用出来る者も存在する。

そうだった者達は例外なく、対象の魔法スキルを保持している。アンリやテナも、そのうちの一人だ。

「火魔法や水魔法のスキルは無いの？」

「いや、あるぞ。それらのスキルは無くても発動出来るが、保持している者の方が発動はスムーズだし威力も高くなる」  
「なるほど」

レオノーラの回答に、アンリは納得して頷いた。

「但し、弊害もあるのだがな。魔法系のスキルを持っている場合、他の系統の魔法は逆に発動が困難になる。使えないわけではないが使いにくくなるから、スキル保持者は大抵の場合その系統に特化するのが一般的だ。お前達は闇魔法スキルを保持しているという話だから、闇魔法に特化させた方が良さだろう」

例えば、火魔法のスキルを保持している場合、魔力の操作も魔法のイメージもスキルが補助してくれるため、火魔法は発動が容易になる。しかし、自動的に火魔法に向けた操作やイメージをしてしまうことになるため、水魔法は逆に発動が阻害されてしまうのだ。

「あの、私も聞いて良いですか？」

「ああ」

今度はテナがおずおずと手を挙げて、質問を出してきた。

「魔法を使う時って呪文の詠唱とかも要るのではないですか？」

「確かに、一般的には呪文の詠唱を必要とすると言われてる。しかし、実は必須というわけではなく、魔法を発動させ易くするため儀式のようなものなのだ。魔力が足りてイメージがしっかりと固まっていれば、無詠唱で発動することも詠唱を部分的に省略することも可能だ」

「なるほど、分かりました」

そこまで話すと、レオノーラは一つ咳払いを打ち、話を元に戻した。

「さて、ここからは実践を交えていくぞ。まずは魔力の操作からだな。二人とも、足を肩幅に開いて右手を前に出して掌を上に向ける」

「うん」

「分かりました」

レオノーラの指示に従い、アンリとテナは指定された格好を取る。

「指を軽く曲げて掌の中央に意識を集中しろ。全身を駆け巡る力の流れを徐々にそちらに寄せていくイメージだ」

素直に魔力を操作しようとしている二人を見て、レオノーラはウンウンと頷きながら腕を組んで過去を思い起こすかのように目を閉じる。

「最初は流れを意識出来ないかも知れないが、繰り返し行うことで魔力を操作出来るようになる。個人差はあるが早ければ数時間で…」

…」

「出来た」

「私も出来ました」

「早過ぎるだらうっ!？」

あっさりとなした二人に対して、レオノーラのツツコミが走る。

「ま、まあいい……それが魔力を集中する感覚だ。そうして魔法の発動に必要な量や密度の魔力を集め、イメージを描きながら詠唱するのだ。さっき言った通り、使いこなせば無詠唱でも発動出来るがな。折角だから、そのまま初級魔法を試してみるとしよう」

かつて自分が習った時には数時間掛かった魔力の操作を数分で習得されたことに対してシヨックを受けながらも、レオノーラは気持ちを切り換えて次のステップへと進む。

二人に対して口頭で闇弾を放つ魔法の呪文を教えた。

「魔力を集めた右手を壁に向けて、闇の塊をイメージしろ。魔力とイメージを維持しながら、今教えた呪文を詠唱するのだ。慣れるまでは詠唱に意識を取られて魔力やイメージの維持が難しいかも知れないが、何度も反復して訓練することによって発動出来るようになる筈だ」

次の瞬間、二人の手から人の頭よりも大きな闇の塊が打ち出され、壁に当たって大穴を開けた。

「あ、出た」

「私事です」

「だから早過ぎるだらうっ!？」



再びレオノーラのツツコミが走る。習得が異常に早いこともそうだが、発動した魔法の威力が自身のものよりも強大であることに、レオノーラは内心で滝のような汗を掻いていた。なお、二人の魔法がここまでスムーズなのは、言うまでもないが闇魔法スキルの恩恵である。

「で、ではこの魔法はどうだ？」  
「出来た」

何となく焦って、より難しい魔法を教えて「これはどうだ」と問い掛けるレオノーラだが、二人はあっさりと課題をこなしてゆく。

「こっちは!？」  
「あ、これも出来ました」

とうとう、彼女自身の使用出来る闇魔法全てを収得されてしまい、内心で打ちひしがれながらも、最後の課題を出すレオノーラ。

「こ、これは無理だろう!？ 無理だと言ってくれ！」  
「ん、使えるみたい」  
「私は何とかという感じですけど……」

未だ彼女自身も発動が出来ない最高難易度の闇魔法を教えるも、無情にもあっさりと発動されてしまった。  
流石にテナの方はギリギリのようだったが、何の慰めにもならなかった。

講義を開始してから三時間後、そこにはプライドを押し折られて落ち込むレオノーラの姿があった。

## 不死王様の退屈しのぎ（前書き）

WEB版からタイトル、主人公、視点を変更し全面改稿した続編、「邪神アトランダム 平均的邪神娘と召喚勇者」いよいよ発売です。既に今日か明日くらいには店頭に並び始めていると思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

## 不死王様の退屈しのぎ

「……退屈だ」

ダンジョン「邪神の聖域」の十階層で、玉座に座る者が思わずと  
いった形で呟いた。しかし、人語を話していてもソレは人族ではな  
い。

蒼きローブを身に纏い王冠を被ったソレは骸骨の異形　ダンジ  
ョンマスターであるアンリによって召喚され、十階層のボスを任さ  
れたノーライフキングだ。

彼がそのようなことを呟いた理由は単純で、人が来なくてひたす  
らに暇だからだ。

アンリから命じられた階層守護の任務に、彼は一切不服を抱いて  
いない。しかし、侵入者が彼の居る場所まで到達出来ないでいる現  
在、彼の出番は皆無である。

アンデッドであるが故に肉体的な疲労などとは無縁の彼ではある  
が、退屈ばかりは如何ともし難いものがあった。

「ふむ、何か無聊の慰めがほしいところであるが……」

そう言いながら彼は部屋を見渡すが、この部屋にある物は今彼が  
座っている玉座くらいであり、それ以外の物は何一つ存在しない。

どこからどう見ても、退屈を紛らわせることが出来るような物は  
無さそうだった。

「むう。盤の一つもあれば……ぬ？」

生前に嗜んでいた盤遊びのことを思い浮かべながら唸るノーライフキングだが、その時、彼の脳裏にひらめきが走った。彼に脳は無  
いが。

「余は　王だ。数多の眷属を束ねし不死者の王」

ノーライフキングはおもむろに玉座から立ち上がり、前方に広がる部屋に向けて手を翳すと、厳かに告げた。

「出でよ、我が眷属達」

王たる彼の召喚に応え、様々なアンデッド達がその場に現出する。スケルトン、ゾンビ、レイス、デューラハン……等々。

ノーライフキングはそれらの姿を見て、満足そうに頷くと指示を出した。

「両陣営に分かれて配置につけ」

王の号令に従い、アンデッド達は各々左右に分かれて対峙する。同種のアンデッドが均等に二分されるように、だ。部屋を正方形に刻んで区切って見れば、それはさながら盤遊びの盤面のようだった。

「よし、では始めよ。先手は白からだ」

否、盤遊びそのものだった。

「飽いたな」

しばらくしてから、ノーライフキングは再び呟いた。

盤遊びを模して戦わせていた眷属達は既に還している。

眷属のアンデッド達を種類毎に駒割りして盤遊びを模してはみたものの、対戦相手が居ないのだから面白い筈がない。

なお、眷属達には駒の動きに合わせて本気で攻撃させ合っていたが、基本的に彼らは不死のアンデッドであるため時間をおけば自己修復するので問題はない。

「さて、次は何をするか」

新たな退屈しのぎを模索するがやはり部屋の中には何も無いため、結局のところ眷属達を呼び出すくらいしか彼の採り得る選択肢はない。

ノーライフキングは再び玉座から立ち上がり、前方に広がる部屋に向けて手を翳すと、厳かに告げた。

「出でよ、我が眷属達」

王たる彼の召喚に応え、再びアンデッド達がその場に現出する。

「今度は音楽だ」

先程のような遊技の場合、意志の薄弱な眷属達は彼の指示に従って動くのみなので、彼自身が双方の陣営を動かす羽目になってしま

う。

当然両陣営を動かすことになるため、一人遊びの域を出ないし、

詰まらない。

そのため、今度は分かっても愉しめるものを選んだのだった。音楽であれば、音という結果を愉しむものであり、それが自身の操作の結果であっても詰まらないということはないだろう。

しかし、そもそも楽器が無かった。これでは演奏が出来ない。

仕方がないので、眷属達は骨を鳴らしたり叫び声を上げたりして音を鳴らした。しかし、そんなものは当然ながら不協和音の域を出ない単なる騒音だった。

「ええい、やめよ!」

とても音楽として愉しめるものではなかった為、ノーライフキングは苛立ちながら眷属達を止め、還した。

ノーライフキングは三度玉座から立ち上がり、前方に広がる部屋に向けて手を翳すと、厳かに告げた。

「出でよ、我が眷属達」

王の召喚に応え、再びアンデッド達がその場に現出する。しかし気のせいか、意志が薄弱の筈の彼らも嫌気が差しているように見えた。

「今度は舞踊だ」

楽器が無かったために音楽は失敗だったが、舞踊、つまりはダンスであれば特に道具は必要ない。これならばきっと愉しむことが出来るだろう。

「……………」

「どうした？ 早く舞ってみせよ」

すぐには動かなかった眷属達だが、ノーライフキングが促すと渋々といった感じで舞い始めた。

「……………」

眷属達が舞い始めてすぐに、ノーライフキングは自身の失策を悟った。バツクミュージックが無いダンスはダンスに見えなかったのだ。

これが熟練のダンサーであればその動きだけで魅了することも可能だったかも知れないが、眷属のアンデッド達は当然ながらダンスの素養など持ち合わせていない。ただひたすらに、カクカクと手足を振りながら行ったり来たりを繰り返しているだけだ。

最早何かの儀式にしか見えなかった。

「……………」  
「もうよい」

その後もノーライフキングは何度も眷属を召喚して色々と退屈しのぎを試した。その結果……。

「出でよ、我が眷属達」

しかし何も現れなかった。どうやらストライキのようだ。



不死王様の退屈しのぎ（後書き）

書籍版「邪神アベレージ」1巻の特典シリーズ第4弾でした。

1巻の特典は以上になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0537cm/>

---

邪神アベレージ

2016年10月22日19時48分発行